

ふんき所々にもつくして、たほへになしてきぬ布な
どかひて其まうけす。

えろのもの 要物、空穂あて宮、宮見たまひて、
いひしらすはしきものをも説きて、とむればあ
り、かへせばなし、物のきもつななる、えろのもの
也、なほとめしむる世もつ、わらひ給ふ、林葉

えかち 何事をも心得かほにする事也、枕草子、
にくき物、なんでも事なき人のすゝらに、えかち物
くだりひたる、林葉

えちのききなきしりあね ねまがのさね
きき釣舟のあねもなす(一本の海もあな
し)顯昭云、この歌り、かのえちのききせり朗詠
に庚申の題に入れたる、えちのききもあなつ、かり
にみすなほのきも、獵のかさかさを獲てつらなり、
世俗にもえちのきかりりする、えちの、かならずし
も、えちのききを云也、それをえちの、不獲時
なあつて云也、そのあねのあなつてゆへ、えちの
のあなつてゆへ、あひかまひつたよめる也、
あしへ心えて、去るなきをよむ人の僻事也、袖

えちのき 源桐葉、またある時、えちのき馬道の
戸をひいて、こなたかなた心をあはせて、はしたな
め、わらひ給ふ時、たほかり、

えすや 得爲哉也、萬十、たもわすれたにもえす
や、えすやもえせし、かかすこは也、

○えきろのすい 驛路の鈴也禁秘抄に或ハ六角或ハ八角と見ゆ日本
紀及令にハ杜荀鶴か詩に驛路、鈴聲夜過山とみゆ○世に稱する所
のものは西土の虎撐也といハり鹿島神宮に藏す物の實形也

○えくに 倭名抄伊勢の郷名に兄國あり弟國に對す飯野郡也
えくち 津、國にあり神崎と並ハり江口の義江口の西土の書にも見ゆ江
口の遊女妙に西行か宿を借たる事あり、

○えこ 日本紀に長子をやめり兄子の義也○偏私をいふの依估の音なり
えこせぬといふ俗語もよめたのむなき意なるべし

○えさらぬ 源氏にみゆ不得去の義なり

○えしも 敢しもの義をも助けの辭也伊勢物語に人をいへしも忘れぬ
と見えたり

えしれぬ 不得知の義東鑑にえさらぬと見えたる俗語也えしれぬ口を
きく得ぬれぬ事をいふなり

○えぞ 毛人鳥をいハり明人輿地の圖説に野作と書せるの音をえりえ
ぞの千鳥といふ毛人鳥に沿たる多くの小鳥を指ていハり毛人の宋書に
見え續日本紀に蝦蟇と見え蝦蟇ハ唐書に見えたり兩山墨談には交易
國をいハり○えぞ松ハ槍に似たる一種の木にして蝦夷の外になき物な
りといハり今槍に代用ハ江戶大坂に多し○えぞにしきハ蚌蝦也といハり
金錢をもちたからといふ○えぞより日本人を指てあもといふ沙門の音
にや○周廻凡そ八百里といふ男ハ總身毛生て熊の如し女の色白く共に
耳がねをせり今津輕南部にも蝦夷人あり是往古よりといハり日本紀に

えせ せせものなといふ、えせせの云に同じ意
歟、をこなと云にも似たり、假名未考、されどもま
つごころに人たり、類名義經記、吉野合戦の
所、六人の郎等みなうたれけれ、忠信たゞ一
人になりて、なかなかせせかたうと有つる、足に
まきて、わらかりつるに云云、

えせ 枕草子、むかししえせものも皆すきをかし
こそありけれ、同、たひをさなく、まめをかた、えせせ
いはひなど見てゐたらん人の云云、○えせせや
枕草子、○えせせや 無明抄下、○えせせや上
同上、○えせせや 枕草子、○えせせたる虫

四季物語、林葉

えせれんか 建武間古記、二條河原落書口遊
の中に、このころ都にはあるもの云云、尾羽打ゆ
かむえせ小鷹、こひらたれもすれども、鳥さるこ
とにあらはなし云云、京鎌倉をこまきせて、一座
そらめえせ連歌、在々所々の歌連歌、點者に
ならぬ人そなき、

えた 連枝、榮花淺緑、此どの御えた
にづゆかり給はぬ人なく、

えたくひもちて 萬十六、白ききの枝啄持て飛
かけるみゆ、源、水鳥をものつかひなはなれ
すあそひつゝほそき枝をもくひてとひちかか云
云、

えたさし 源野分、たなしき花のえたさしがた同
云、

書せる如し○文字なし繩を結び木に刻して記とす又醫業なし死すれハ山
に埋む其人の秘藏せし物ハ一所に埋み家の焼きて残る家内の者ハ別に
住也其妻三年の内かむりものし慎む又再嫁せず凡て易産にて直に海に
入て血のさわぐ事なし生兒も海にあらひて虫けつ事あらすを日本人よ
りえぞをあひの國といふ日本と唐山との間の義也えぞといハり蝦夷人よ
もなきかたなどいふて怒るもなきといふ事也家の鹽がまの如く入
口まかりて外より内ハ見え晴天に獵船を出す時ハ濱邊ハ小屋を造り妻
子どもに居を男少く女多く一夫に七八婦あるに至る長壽の地なり衣
服ハ木、皮熊、皮狐、皮等を用う家内にて色情をいふといハり他人來
居るときに色欲の事などいハり甚怒りて七ツの償物を出す其物の鎗大刀矢
筒煙草米餅衣服也人家に入ハり二度いたゞきて禮をなすやいくるしかれ
とよれといふ息災なかといふ挨拶也父子夫婦兄弟の間次第分差ありと
そ

えぞあらぬ 不得知の義なり頼朝卿の歌に毛人にかけてよめりえぞ過ぬ
も同じ新後撰集に定家卿 えぞ過ぬ是や鈴鹿の關ならんふりすてかたさ
花の陰かな此歌よりえぞ標と名づけて今に傳ハり

○えた 草木の枝をいふ小枝下枝折枝など歌により菅蕨に柯もよめり
○物にえといふもの 一えた二えたなどいハるハ伊勢物語にこぼくの捧物を
木の枝につけていハり今も長櫃なながえたなどいハるも此遺なり○弓に幾
枝といふ事三代實錄に見えたり長刀に一えたといふも同じ○股も訓同じ
人の四肢ハ樹の枝に同じ古事記にハ枝、字を用たり 一枝をえらといふ

東屋、たなじ枝さしなごのいそんなるこそ、都土産、それを木萩とも申也、これの枝さしなごも云云、
 えたち 日神武、役(註)、同欽明、課、萬十六、えたち
 はたらかなれもなからかた、
 えだなきき 散木、山家集、野にたてる枝なき木にもたどりけり後の世をらぬ人のことなり、
 えたり 得在也、萬二、われのもちすみこえたり、
 えたりやれう 今昔廿七、ヒタト抱付テ音ヲ高ク
 舉テ、得タリヤ、オウトニテ云々、
 えつく 信云、三代實錄四九、賜姓滋水朝臣、
 貫右京一條、貫之つかさむとあり、信云、
 役着(註)の義歟、又家ついでて、あつかひ、
 の反意、
 えつゝみ 續古事談、御まへにて、物くひて、えつゝみはんといはれければ、帝われはさる物くわすと仰られける、えつゝみわらき物にさある、類聚雜要抄、宇治平等院御幸御膳云云、窪坏物二坏、唐音(註)、同書、五節殿上饗云云、窪坏物二種、海月(註)、
 えつば 明月記嘉祿三年六月廿三日云云、後開頭中將可申事山、有庶幾之氣、仍頭辨讓之、右府選參給之間、内府召之、昇小板敷、欲昇長押、日煥懸膝長押候、源卿等咲盡、えな 胞衣を納て歸る時、其役人笑ひて歸る事、

かでさくら花八十あまりの春にあふき此歌の天資中雲南の役に新豊縣の男戦ひを恐れて自ら大石をもて己か臂を打折て古郷に歸り六十年をたくり八十八まで命をたもちし事をいへり
 えだあふき 枕草紙に見ゆ木の枝などを扇に代用をいふ成へし
 えだがき 類聚雜要大體に枝柄と見ゆ枝をつけて客に出す也、
 えだがみ 儀式帳に枝神と見え貞觀符に裔神とも見ゆ所謂末社也、
 えだぢやく 枝籍と書り別籍小籍といふ者也上古後院崩後本宮、人をもて被寄、内堅所大舍人の名也或ハ四所の窮者といひ四所の巡籍と號す魚魯愚抄に見ゆ○内堅所、籍按書殿、籍大舍人、籍進物所、籍謂之四所、籍
 えだぢ 神武紀に役をよめり役發の義音をもて訓せる也萬葉集に宮木ひく泉のそまにたつ民とみゆ今いふ人足なり
 えだつめ 盛衰記に馬の事にいへり枝爪なるへし或ハ枝ハ肢也今腕爪といふ
 えだのはな 親王を申奉る也といへり、
 えだのひかり 燈をいふといへり九枝燈などの意成へし、
 えだぶね 供舟をいふ本船に對して小船をいへり、
 えたり 萬葉集に得有と書りてあ反た也古事記に吾者得、伊豆志袁發賣と見え集に 吾のもや安見兒えたり皆人の得難にすてふす見見えたり、
 えたりやな 盛衰記に見ゆ得たりや唯々の義成へしなへの應ふる詞也、

産所記殿中日々記等に見えたり、公家にも此
 事有天子の御胞衣の稻荷山賀茂山吉田山
 此三所へ納る也、人のふまぬ所に納めて、三聲
 笑て立歸るとし、公家の有識の人申たりき、貞一
 えならず 拾遺集、はしねはふらうへいこそつれ
 なけれきたりえならずたもふころを、保憲女集、
 ささしかのさからみふせる秋萩の露のえならぬもの
 にそ有ける、
 えならぬ いひらるることならぬをいふ、えもいはれぬといふに同し、うえの得を訓り、不得言と書へし、徒然上、あるしの竹のあみ戸のつちより、え若き男の云云稻葉の露にそ使つ、わけゆへに、
 笛をえならず、吹すといたり、類名
 えに 後撰集、ふみかよはずはかりにて、年経侍ける人につかはしける、水鳥のはかなき跡に年を経てかよふばかりのえにこそ有けれ、伊物、秋かけていひしなからもあらなくに木の葉ふりしくえにこそ有けれ、
 えにし 金柳集、なかれゆく木の葉のよとむえにしあれの暮の後も秋の久しき、
 えの 類姓(註)薩摩の郡名なり、神代紀、天津彦火瓊杵尊崩、因葬筑紫日向可愛、(註)可愛此云埃、諸陵式、日向埃(註)山陵、天津彦々火瓊々杵尊在日向國無陵戸、松下氏廟號記、今薩摩國類姓郡也、古事記傳云、和名

えたをつらぬる 連理、枝也近江、國獻、木連理の事、和銅中にみゆ古事記の序に連、柯とも見ゆ又ちぎりのふかき事にいへり○連理樹の同木或ハ異木の根つつかれて枝の合なるをいふ又幹枝合抱の木あり又一木にて枝葉の分れたるもあり伊勢阿濃郡草生村に一枝の板の木一枝の椎の木と次第したるもあり、
 えだをならさす 西京雜記に太平、世則風不鳴條雨不破塊と見えたり千載集に 吹風も木々の枝葉をならさねと山ハ久しき聲をきこゆる、
 ○えつり 顯宗紀に盧種をよめり枝釣の義成へし今ハ多く竹を用ゆ○延喜式に蓋下棧料と見えたり壁にもいふ語也和名抄に棧を瓦のえつりといへり新撰字鏡に榎をよみ粉を屋のえつりといへり
 ○えて 得手の義得手勝手得手手に捧得手手に帆をいふめり○えて忘るゝえて腹立るなど人の氣象にいふり敢ての義なるへし文に不得而知などいふりあがへり
 えてんらく 越天樂と書り一本に天を殿に作ると和名抄にみゆ、
 ○えと 干支をいふ兄弟の義なり干支ハ幹枝の義兄弟の如くなれり日本紀にも干支をいふかみだといふとみゆをえとといふ詞ハ十干の陰陽をハ剛日と柔日をもていへり甲を木の兄乙を木の弟といふ類也十二支ハいふとみゆいふ是なり
 えと 江戸ハ武藏國也鎌倉將軍の時江戸能範あり、
 えとがひ 馬の藥飼にいへり甲乙飼と書り、

抄娃字の紀伊の伊字などの例にて、エの音の韻
 「紀伊をそへたるのみなり、今國人のえいと云、それ
 も王を長く引て呼ぶなり文字のまゝに類娃
 とかき、或ハ江居とかけり和名抄に、江乃とあ
 る乃字ハ削るべし、城下の北十二里許、千人
 番所の有る所也、」
 えのみ 萬十六、吾かこの板の實とりはむ百千鳥
 ちののこれと若そあまめ、
 えのさしにけり 萬三、枝ハ刺にけり、
 えび 漢名蝦、續詞花集、大中臣能宣朝臣、人
 のたほえびを尋たるに、なきほどにて、あるまゝに十
 九あるとて世の人の海のたきなどいふれどまた
 はたぢにもたらさそける海道記、海老ハなみに
 ねよき、海老ハ汀にたよふ、とちにて老て腰かま
 る、汝はあるや、生涯うかへるのち、今いへば
 我ハあらず、幻中の一瞬の身、砂石集五、又
 東三連歌シケルニ、アし句三價所、雜任毛赤裳ヲ
 ゴキルト云句ニ、大海老カラキシケル中ニキテ、○
 小海老 安東郡専常沙汰文、無干魚之時
 者、小海老四五具用之、○小蝦 今かはえ
 び云、雍州府志、淀川之所産、其形小而
 其鬚至長、湯煮一洲、則其色如朱、兩脚屈
 蟠如老翁之倚杖、土人稱杖蝦(ツツエビ)
 えび 古板節用、鎗(ツツエビ)、信按、鎗の誤なり、今海
 老鏡と云もの也、

抄娃字の紀伊の伊字などの例にて、エの音の韻
 「紀伊をそへたるのみなり、今國人のえいと云、それ
 も王を長く引て呼ぶなり文字のまゝに類娃
 とかき、或ハ江居とかけり和名抄に、江乃とあ
 る乃字ハ削るべし、城下の北十二里許、千人
 番所の有る所也、」
 えのみ 萬十六、吾かこの板の實とりはむ百千鳥
 ちののこれと若そあまめ、
 えのさしにけり 萬三、枝ハ刺にけり、
 えび 漢名蝦、續詞花集、大中臣能宣朝臣、人
 のたほえびを尋たるに、なきほどにて、あるまゝに十
 九あるとて世の人の海のたきなどいふれどまた
 はたぢにもたらさそける海道記、海老ハなみに
 ねよき、海老ハ汀にたよふ、とちにて老て腰かま
 る、汝はあるや、生涯うかへるのち、今いへば
 我ハあらず、幻中の一瞬の身、砂石集五、又
 東三連歌シケルニ、アし句三價所、雜任毛赤裳ヲ
 ゴキルト云句ニ、大海老カラキシケル中ニキテ、○
 小海老 安東郡専常沙汰文、無干魚之時
 者、小海老四五具用之、○小蝦 今かはえ
 び云、雍州府志、淀川之所産、其形小而
 其鬚至長、湯煮一洲、則其色如朱、兩脚屈
 蟠如老翁之倚杖、土人稱杖蝦(ツツエビ)
 えび 古板節用、鎗(ツツエビ)、信按、鎗の誤なり、今海
 老鏡と云もの也、

○えな 胞衣をいへり對馬にていへりと云そ○隋書に琉球國婦人
 産乳必食子衣と今此事なきが混泥衣と云へり○藏むるに方を擇ぶ
 は崔行功小兒方に凡胎衣宜藏于天德月德吉方深埋緊築令兒
 長壽と見えたり
 えならぬ 深き意とほむる意と二の義ありと云へりえを江の義にほむる
 意とすれはえならぬ深き也不得己の意もあり反え也出雲風土記
 に止屋を轉して鹽治といふ事見たり
 ○えにあらふにしき 蜀江の錦をいふ魚鱗もて洗らぶと云へり、
 えにし 縁の音也し助語錢をせにと云か如し歌に多く情縁に云へり
 説にゆえ反えにしてゆえにしの義ゆえ縁也と云へり○伊勢物語にかぢ
 人のわたれとめれぬえにし又木の葉ありと云えにせよめる昔縁に江を兼て
 云ふなり

えのきたけ 椶に生する草也○柿栗柳樺等も同じく食ふへし、
 ○えのしま 江島也相摸國也世に辨財天といふ○江島太郎は北條
 泰時也、
 えのはる 覆葉井と書り大和國豐浦寺にあり鴨長明 ふりにける豊ら
 の寺のえのはるに猶あら玉を殘すつさかけ、神樂歌をまゝてよめり
 ○えの 雑語に牛をいへり、
 えはしと 雄略紀に女郎をよめり韓語成へし、
 えはら 吉方の義日吉をいへりか如し吉方ハ西土の書にも見えたり
 又兄方と書て陽干の方を歳徳のある所とするより出たりと云へり

えびかつら 源初音、御くしなども、いたくさかり
 過にけり、もろしきかたにあらねど、えびかつらして
 つつみ給ふへき、神代紀、伊弉諾曾投黒鬚、
 此即化成蒲萄(ツツミ)
 えびす 蝦夷の轉なり、それよりいで、京に遠き
 海裔及外國をいふ、又轉じて外寇をもいふ、景
 行紀、至蝦夷境、靈異下、蝦夷衣比須、盛衰
 三十四、遠國のえびすと云へり、なきけをり、禮
 義を辨るぞかし、唐物語、此時にえびすの王なり
 つつものまゝりて申さく、三千人まゝさふらひあひ
 給へる女御后、いづれにても一人給らんと申に、
 徒然草上、えびすは弓ひくすべからず、類名、寇
 [エビ]○又俗間に商神をもいふ、風折えはし狩衣
 指貫を着て、棘鬘魚を釣上たる像を居き、これ
 を祭る、盛衰記九、彼岳に夷三郎殿と申神を
 奉祀、岩殿と名附たりとある神なるべし、語
 えびすうた 萬一のねめ、日本紀、萬葉などい、
 くまたかなもなかりし世のまひすうた、○えびす心
 伊物、さるえびす心をみて、いかにせん、○え
 びすめきたる人 源東屋、えびすめきたる人をのみ
 みならひて、○えびすかけ 新六、わかごのわくの
 郡のえびすかけにもかくにもひきちがいつ、林葉
 えびすぐさ 本草決明、言塵集、けちめ草、延
 喜典藥式、諸國進年料雜藥、駿河國決明子
 五升、

○えび 蝦をいふ式に蛤をよめり字書に蝦蟹、距也と見えたり倭名抄に俗
 用海老二字と見えたり伊勢えびハ龍蝦也むかしより賀壽饗宴の席正
 月の蓬萊盤中に必ず此物あるハ海老の名によりて祝壽の物と云る也○
 神代紀に蒲陶をえびと云り蔓草の類あるもの蝦に似たる也和名抄には
 えびかつらといへり源氏にも見ゆ神代に云へり野蒲陶也陶弘景も蒲陶
 即是江南、嬰與といへり美濃近江の深山に多しと云ふものハ紫葛にて
 よく似て大宛の種と異れり○新撰字鏡に木防己を神えびと訓せり○
 燕尾江次第に見え細燕尾山槐記に見ゆ倭名抄に櫻俗ニ云燕尾と云へり
 垂櫻ハ江次第に見え巻櫻ハ西宮記に見ゆ裝束略抄に巻櫻垂櫻を音
 に唱ふ武官弓箭を帶する日ハ巻櫻也と見ゆ物に櫻まてとあるハ文官の
 着服の人も櫻をまていへり○天野氏云櫻ハ冠の緒也脚をよむハ交脚
 幞頭を見ゆと云へり○俗に東髪のをえびと云ふも燕尾の義也○うづ
 ほ物語にちびさ子の深き雪を分て足手えびのやうにてはしと云ふ書り
 今もいふ事也○海老名の古姓也東鑑に見ゆ
 えび 車えびハ青蝦也あらえび白蝦也江府にて芝蝦と稱する類成へし芝
 の江より出なつえびハ梅蝦也あまの糠蝦也くえびハ泥蝦也川えびハ草
 蝦の類也杖つきえびハ淀川の名産也龍蝦の甲をかへたる時をえびと云
 へりてんぼつえびハ大脚蝦也さしえびハ對蝦也ほしたるなつり○本草桂
 海志などに石蝦あり本邦にたまふあれども手足首尾全き物ハなし又皆伊
 勢えびなすといへり○葡萄の品に水精葡萄馬乳葡萄の二種あり江戸と
 云ふハ紫葡萄也三角草と云ふハ瑣々葡萄也、

えびすころも 小島口號殿上の御遊などに
あらで、めなれぬえびす衣のうへ人どもの、同、朝
衣の人になくて、えびすころもかものすがた、めつ
らしき事也、

えびすきむらう 盛衰記九硫黄島にぞ渡ける
云云、一の離山あり、峰高くして谷深し、其名
を懸岳と云、彼岳に、夷三郎殿と申神を奉
祀、岩殿と名付たり、東鑑四十三、今度始而於
西御門(鶴岡)脇、被勸請三郎大明神也、同
四十八、夷社とある、是なり、

えびすのみよりいたすさ みちのくのえびすの
身よりいたすさのころもなれや逢はぬこひかな、
顯照云、たこのえびすの、わがこ人の子とためんと
するに、ちがが血と子の血を合せ、我子なれ
ば親子のちびとにあひぬ、こ人の子なれば血ひ
とにたすらすく入り、あつこちなれやあはすさ
つとめる也、袖中

えびのこがなく 東語帶をえびといふ歟、萬廿、
わがせこをいへし入らしてつしつみえびのこがな
くあはにかもあせ、
えびのか 源末補、えびのかいとなつかし、同初
子、えびからの香のまがへる、いざせん也、花鳥引
香字抄云、採旂樹葉皮、春飾爲香故云、
葉皮〔註〕
えびら 今昔廿九、夫ハ竹蠶簿箭十許差タルヲ

横負子云云、蠶簿ハ和名抄蠶絲具に、簿音薄、
和名衣比良、養蠶器、施於其上、今作蠶者
也、新ハ帖、わきも子がこものえびらのかざたほみ
あまたあめつるものくはら、とあるものにて、今
昔ハそれを籠にかりたる也、
えほし 古の烏帽子ハ、今の世のえほしの如くこ
はくぬかたむ事無之、古のえほしつうすくやん
らかにて、つかやうにも折らるゝ也、續世雜物語
に、昔ハえほしはくぬ事もなからしむるなり、し
此比こそ、えびをほしきらめえほし折り、つう
つりて侍るめれ云々、又大的の昔に、射手の出
粧を記したる條に、立えほしを左へかざたりとあ
り又かよ小町といふ條に、立えほしをかざたりか
りきぬの袖をうちかひてとあり、皆是えほしのや
はらかなるゆへに、立えほしも時によりの、かざた
りてかざりしなり、○新野問答に、野宮宰相定
基卿云、烏帽子のむと帽子にて、もはらかなる入
候、昔ハ絹を用たるも候、今ハ紙を漆にてかた
め申候、古きハやうらかに候へば、自由になり候
云云、建保職人歌合八番、烏帽子師の歌に、
我宿のえほし絹は、かかせぬる夜すくなき月の
比かな、○貞丈云、えほし絹と、烏帽子を作る
絹也、絹にて袋、如夕縫テ、ウレンヌナリ、えほしにさ
びと云事あり、えほしのまはの事也、大さび横さび
柳さびなど色々あり、古ハえほしをよらかに作

えびす 日本紀に夷をよめり靈異記に蝦夷と見ゆえみしと普通せり出羽
にてえびすといふ○徒然草に法師ハ兵の道なだてえびすの弓ひくすべからず
と書るありえびすをいふ成へし源氏にも常陸かむすめなれハ弓引あたり
にならひこと見たり○夷、字ハ説文に本字夸也ハ大从弓東方ノ人也
といへり又南蠻ハ虫北狄ハ大西羌ハ羊惟東夷ハ大从弓俗仁
而壽と見ゆ我邦もとより大弓を執りし事神代よりの事也又南亞墨利
加の内ノ智加ハ長人國也其國の矢ハ六七尺也といへり日本の異ノ方に
あたる國也と云○西ノ宮蛭子の御前を世に夷三郎と稱せるハ諸冊二尊
の第三子にして海外に放たれたまひしより稱する成へし吉野拾遺にもえび
すの事を蛭子と書り仲のえびすと稱するハ西ノ宮の事を古き文にたまハの
沖といへる故なるへしつ綱の稱もまたこに起れり風土記に號其海濱
曰御前濱とみゆ拾玉集に 西ノ海に風こころせよ西ノ宮東方にのみ
やえびすさくらふ○泉州堺のえびす島ハ寛文中に始て築出す海中にえび
すの石像ありしよりの名也○夷祭ハ十月廿日に商家に祭る京師にて祇
園の冠者殿に參詣す此を誓文拂といへり○人家に大ここと同じく祭る
者ハ事代主也といへり大和の飛鳥の社傳是也、
えびすがけ 新千載集に 我こそく奥のこほりのえびすかげともかくとも
引ちかへつ、今もえびを膳などいふ事のある意に也、
えびすがみ 本草にいふ閃刀紙是也裁製に洩たるも夷の法令に入さ
るに譬ふるなりといふ

えびすころも 小島のまきびに見ゆ戎衣の義也えびすかたとも見えた
り、
えびぞめ 蒲荷染と書り令義解に蒲荷染者紫色之最淺者也とみゆ織
えびの名目抄に經ハ赤緯ハ紫也といふ、
えびてふ 正字通に魚鱗と見ゆ芝田録に鱗必以魚者取其目不瞑守
夜之義と云、
えびのか 源氏に見ゆ巴抄に採梅相樹、葉皮春飾之爲香故曰葉
皮香と見え或ハ衣被、香とみゆされと倭名抄に、衰衣、香と書り活本
作裏
えびのはたふね 式に蛤、蛸槽と見えたり御手水の器を置本地の物なり
といへり新撰字鏡に蛤をかつたをよめれと字書其義をし
えひめ 皇極紀に長女を訓せり兄姫の義也
えびら 倭名抄養蠶具に簿一名籠をよめり重蒙頤韻に籠をよむ祝して
可愛枚といふにや俊賴の歌に桑のえびらとよめり○箭室にえびらといふも
のも簿に象りたるなり左傳に房と見えたり太平記に平胡錄の籠とも見え
たり○平家物語にたか藤といへるハ竹籠なるハし逆頼といふ物殊に古き
制也と職人歌合にさかづらかなくて柳えびらにするといへりさかづらの小
葛にも又花籠角籠等あり築紫えびらの籠えびら也薩摩えびらの籠えびら
也○梶原生田の森の戦に咲亂れたる梅、枝を籠にそへて挿たるを平家の
きんたちハ花籠とて優なりとほめたる事盛衰紀に見ゆ○えびら腰といふ俗
語も箭室を佩たる所をいふ也○梅品に名くるハ忠度最後の時服に結付

えびす 日本紀に夷をよめり靈異記に蝦夷と見ゆえみしと普通せり出羽
にてえびすといふ○徒然草に法師ハ兵の道なだてえびすの弓ひくすべからず
と書るありえびすをいふ成へし源氏にも常陸かむすめなれハ弓引あたり
にならひこと見たり○夷、字ハ説文に本字夸也ハ大从弓東方ノ人也
といへり又南蠻ハ虫北狄ハ大西羌ハ羊惟東夷ハ大从弓俗仁
而壽と見ゆ我邦もとより大弓を執りし事神代よりの事也又南亞墨利
加の内ノ智加ハ長人國也其國の矢ハ六七尺也といへり日本の異ノ方に
あたる國也と云○西ノ宮蛭子の御前を世に夷三郎と稱せるハ諸冊二尊
の第三子にして海外に放たれたまひしより稱する成へし吉野拾遺にもえび
すの事を蛭子と書り仲のえびすと稱するハ西ノ宮の事を古き文にたまハの
沖といへる故なるへしつ綱の稱もまたこに起れり風土記に號其海濱
曰御前濱とみゆ拾玉集に 西ノ海に風こころせよ西ノ宮東方にのみ
やえびすさくらふ○泉州堺のえびす島ハ寛文中に始て築出す海中にえび
すの石像ありしよりの名也○夷祭ハ十月廿日に商家に祭る京師にて祇
園の冠者殿に參詣す此を誓文拂といへり○人家に大ここと同じく祭る
者ハ事代主也といへり大和の飛鳥の社傳是也、
えびすがけ 新千載集に 我こそく奥のこほりのえびすかげともかくとも
引ちかへつ、今もえびを膳などいふ事のある意に也、
えびすがみ 本草にいふ閃刀紙是也裁製に洩たるも夷の法令に入さ
るに譬ふるなりといふ

水臣津野命、詔、八雲立出雲國者、狹布之稚國在哉、初國小所作故將作、繼、詔而考、余志羅紀乃三埜矣、國之餘有耶、見者國之餘有、詔而云云、國々來々引來、繼國者、三穗之埜也、持引綱者、夜見島是也、固堅立加志者、有、伯耆國大神岳是也、今者國引訖、詔而意、宇杜爾御杖、衝立而意、惠登、詔故云、意、宇、鈴屋翁、此條を解れたるに、玉勝間十六、八束、水臣津野命、古事記に於美豆奴神とありて、須佐之男大神の四世の御孫にて、深淵水夜禮、花神の御子にて、大國主大神の御祖、父神也、狹布之稚國、稚の寫し誤なるへし云々、故云、意、宇、意、惠、の事に勞、苦きを休息の時、のこるなり、さて、惠、の宇、延の約りたる音にて、上に宇を帶る故に、たのつから後に、意、宇、と、なれるなるへし、風土記、意、宇、川、源、出、郡、家、正、南、一、十八、里、熊、野、山、北、流、東、折、入、于、海、
たうなからぬ、源、野、舟、右、近、同、じ、やうにむつましく、覺、ひ、た、る、若、き、人、の、心、を、ま、も、た、ら、な、ら、ぬ、を、語、ら、ひ、て、い、み、じ、う、わ、り、な、き、事、同、し、心、に、も、て、か、入、し、給、入、と、い、ひ、け、り、同、東、原、(守、サ、マ、ウ、あ、る、と、た、う、な、く、人、の、た、も、は、ん、所、も、あ、ら、ぬ、人、に、て、い、ひ、ち、ら、し、ぬ、た、り、同、行、幸、ま、け、は、か、れ、ぬ、た、り、は、ら、也、と、い、は、し、な、け、の、給、入、は、云、々、あ、ら、ま、た、か、い、ひ、し、て、い、を、ま、い、て、い、へ、ん、な、く、い、ち、出、給、と、ぞ、

明日記に出せり寶永西のしにもありしとぞ其春の童謡にいさ春駒引つれて袖引つれて今まいる伊勢參りとうたひけりとぞ六十余年を経て明和八年卯の春より道者例には多く五月には一日六七萬に及ぶ寶永の年には七歳已上十五歳已下の者也と梅園か書に記しぬれど明和の年にはふ兒あか兒まてを懐抱してまいりぬ種々神異千萬の奇瑞の説り擧て數ふへからず是を誠に天の御蔭日の御蔭にて萬民を撫育まします神慮のほどもまた殊に崇むへきにあらざるされど慶安の翌年には將軍薨御の事凶賊正雪か事武藏安房の烈風の事甚雨のことありき寶永の翌年には伊勢外宮大火翌々年には大地震の變ありき明和の翌年には長崎の津波京都の大風江戸大火又洪水の禍ありければ慎を天か下に示させ賜ものにして是を我國の不測(測歟)の神教也けらし神蹟に鐵祭などの不詳(詳歟)の事たり委しく各條の下に述べ又ゆけまゝの修考ふへし、
たかし、萬葉集にみてつからたかしたまひとてふはかし、反き置の義也
たかひち、大河内をいへり伊勢國飯高郡也城ハ北島中納言具教卿築きたまふ永祿十一年信長公七萬餘騎にて攻めくみ五十餘日な過て信長公より和睦の談しありて於茶筵丸を養子とし二十萬石を大河内の城に相副て進せらる元龜二年嫁娶の義整り茶筵丸を北島三助信雄とぞ申ける○姓にはたほことと呼り、
たかぶら、三節會の内侍典侍などのかぶる物也といへり
たかみ、神代紀に龍をよめり大神の義畏みていふなるへし字書に龍龍也神也と見ゆ豊後風土記に令汲泉水有蛇龍謂於箇美と見え常陸

たかし、字鏡、偉慶也悅也歌也幸也福也於也、加志又字禮志、源、帝、木、か、た、た、か、し、く、打、た、ほ、さ、き、わ、か、か、か、に、て、同、か、た、か、た、に、て、い、か、く、思、ひ、の、外、に、た、か、し、か、ら、ら、ん、同、々、頭、た、か、し、け、な、る、ま、ふ、ら、ひ、わ、ら、○同、乙、女、た、か、し、か、に、け、し、き、は、み、同、杖、廿、大、將、の、た、か、し、か、に、わ、ら、し、か、な、る、○同、た、の、つ、か、ら、か、し、し、ま、り、も、た、か、す、同、こ、い、な、さ、た、た、た、か、す、ま、も、の、に、し、な、し、て、
たかみ、龍也、雨雲の神也、日神代、伊弉諾尊、坂、朝、斬、阿、遇、突、智、爲、三、段、一、段、首、爲、高、龍、又云、爲、神、號、曰、開、龍、神
たき、沖也、日神代、たきいも、へ、に、い、よ、れ、た、も、た、わ、こ、い、あ、た、い、ぬ、か、も、ま、は、ま、し、た、り、ま、よ、萬、三、わ、た、つ、み、の、外、に、持、行、て、は、な、つ、と、も、つ、れ、も、そ、こ、れ、か、く、ま、か、へ、ら、ま、し、同、一、あ、み、の、海、た、き、い、舟、に、い、か、り、た、る、し、同、三、八、雲、立、つ、も、の、子、ら、り、な、れ、や、よ、し、野、の、川、の、奥、に、な、つ、ら、同、三、か、の、み、に、あ、り、け、る、も、の、を、猪、名、川、の、た、き、を、か、め、て、わ、か、た、も、い、し、
たきぐち、榮花のの果、こがねのすぢをたきぐちにせせ給り、空穂羅い、ち、ち、ち、の、た、き、ぐ、ち、の、衣、箱、に、
たきぐち、源、横、曾、此、君、く、た、く、な、ま、給、ひ、て、い、た、み、な、し、給、入、ら、ぬ、の、た、か、た、た、か、し、○た、か、あ、か、す、同、野、舟、く、つ、ら、た、し、い、よ、も、し、こ、に、た、あ、か、し、
たきぐち、同、若、菜、上、た、か、も、の、い、ひ、し、ひ、し、

風土記に新治郡驛家名曰大神於箇美所以然稱者、大蛇在と見えたり萬葉集に、我聞のたかみにいひてあらあめし雪のたけて彼所にちりけん神代卷に龍と見ゆ山嶽に雲を起し雨を絶す神靈をいふ也○式大和宇陀郡室生龍穴、神社あり西土にも所々龍祠あり詩に銅鼓祭龍雲塞廣なども見えたり梵にハ八龍王及大集經に五龍王日藏經に十三龍王大雲經にハ一百八十五龍王の名あり○たかみか、嶽信濃小縣ノ郡にあり是はち住むべし
たき、氣又息をよめり意をたの假名に用ゐたれつと通なるへし又たはくきの義にも我をいきたきその風には鳥のたきなる川など皆息といひたり○奥をいふ古事記に見ゆ昔の轉せるにや信濃の山中には今も奥といふ事をたかみといふ○海のたきり日本紀に瀨、字古事記に澳字を用ゐたり奥の義也澳、字ハ龍龍に見えたり沖をよむも深也と注せるをめて也川にもたきとよめる事萬葉集古今集に見えたり○たきの八島の隱岐の小島をいふり續後撰集に伊豆の海も奥の小島と見え千載集に薩摩かた澳の小島とも見えたり○隱岐、國ハ北海山陰道の澳中にある國也神代紀に億伎三子、洲をいへり知夫島前國府如子なり入り○野のたきハ郊をいふ奥の義也遠きをいへり○萬葉集に己をたきといふるハ韻會に起也といへたり
たきあけ、起揚の義也、鞍耕録に古器識、居外而凸歎居内而凹と見えたり、
たきぐちのき、臨時祭式に凡祈年月次神今食新嘗祭、料置座、木と

物おきものなど、藏人所より給はり給へり、○たきまふ、建保歌合、置まふ影をかたしく袖の月霜のまくらに秋風そよぶ、

見ゆ置座に造る料の木をいふ也四座置入座置の木の長など木工寮式に見えたり其木の中臣被に天津金木といふ是也實ハ置座に作る料の楮をいひ

云云、あり置の義すべしなほあるべし、日本紀に安在處の字などをたきまふなり、

たきつみ 伊勢に與玉、社あり猿田彦、大神を與玉、神とも申すを奉祠すと云ふ石壇ばかりにて社なし古事記に阿那詞に坐時の三、御魂の事をいへれり是によりたる名なるハ二見の立石の邊に與玉石あり

たき

たぐりからむ 置帖也、萬十、さつゆのたが
まへをみまはせ折のみならしとてたがもがらむ
同十一、たぐりなるにすかたたがもがらむのたが
かたがたなるにすかた

たきり 願也、萬十、あまをねはらへりてのたが
みまひしか入るるをみまひてみまひてみまひ
たぐりたるにみまひてみまひてみまひてみまひ
大君の大みまひにみまひてみまひてみまひて
りてみまひてみまひてみまひてみまひてみまひ
もがらむにみまひてみまひてみまひてみまひ

たきりなるをみる 探願、願を古訓にたきりて文
選等の點に見ゆ、但し萬葉集等の書にみ見え
ず、儒家の古訓なるにみ見え、奥にみ見え
語也、是をたがりと訓もその意同し、周易の上
繫辭傳に、探願、索隱と出たり、莊子にも願龍
の願玉をみまひてみまひてみまひてみまひて
の下の事なり、類名

たぐり 後拾遺上、はる〜とる人の願路にた
ぐりたるにみまひてみまひてみまひてみまひ
たぐり 奥處也、萬因處、晉萬、墓所と書
るにみまひてみまひてみまひてみまひてみまひ
山にみまひてみまひてみまひてみまひてみまひ
時の天雲のたぐりたるをみまひてみまひてみまひ
かたがたなる山路を、同十三、なるにみまひてみまひ

隠し題にて小野小町かよめる歌端書作りと一條とせしなり

たきび 古今集物、名に見えたり倭名鈔に熾又新撰字鏡に熾をよめる
起火の義也菅家萬葉にたきびのみちりり靈異記に熾をよめる小野小
町かたがたのて身をよめるもよめる菅家萬葉集に 人をたがふ心のたき
り身をよめる煙たつて見えぬものから四聲字苑に熾熾、熱炭、新火也と
す意也

たきおみ 東鑑に御置文と見えたり今いふ書置也、
たきおるし 萬葉集にたしてゐる難波菅笠置古しと見えたり諺にも菅笠
の一年物とす

たきめ 澳の布也にたきめかりかねたといふ川によせたり○日本紀に老
姫の名にいふ置目と書り今いふ見置の意也○高野山の請文に大師の
置目又彼寺之置目相定な見えし今たきてとす如し
たきもの 源氏にたき物のつくまを見ゆ置物、机也今も床の置物なとす入り
たきり 願、字をよめる幽深難見也と注せりたきり奥也るの助語古歌に
たきりたるにみまひてみまひてみまひてみまひ

たきり 隠伎縁どかり縁書にて畫具に用うてし入隠岐國の産を佳
とせしに奈良の大佛の腹中これをもて埋たりといふ今東大寺の寶藏
にあり、
たぐり 置をよめりかきくけにてはたらけり日本紀に在、字施、字をよ
又處又著又安もよめり又史記の奇貨可居の居とよめり○日本紀に除
をよめり放も同じ萬葉集に吾をたきて人のあらし伊勢物語に君をたき

たぐり 十六夜日記、子もみたぐりたるにみまひて

たぐり 源少女、たぐりたるにみまひてみまひ
もみたるにみまひてみまひてみまひてみまひ

たぐり 奥柳也、萬十八、大伴のたぐり神たぐ
のたぐりたるにみまひてみまひてみまひてみまひ

たぐり 同ニ、かじつたのたぐりたるにみまひてみまひ
をみまひてみまひてみまひてみまひてみまひ

たぐり 奥床也、萬十三、たぐりたるにみまひてみまひ
はみまひてみまひてみまひてみまひてみまひ

たぐり 置幣也、萬三、みまひてみまひてみまひてみまひ
あかたぐりたるにみまひてみまひてみまひてみまひ

たぐり 源若菜上、此國のたぐりの部に、人も
かたがたなる、かき山ありける、宇治拾遺、肥前
の國にたぐりたるにみまひてみまひてみまひてみまひ

てあたし心をたぐりて是也或ハ棄、捐の意にもよめり○日本紀に厩懐をこ
たぐりたるにみまひてみまひてみまひてみまひ

たぐり 書籍にみまひてみまひてみまひてみまひ
たぐり 宇治拾遺に信濃のたぐりて書り奥郡とす入源平盛衰記に
も信濃の奥郡とす今も河中高島郡をたぐりたるにみまひ

たぐり 萬葉集に見ゆすりたる詞也師古が説に奥内室中隱奥之所也と
ふ奥ハ萬葉集に見ゆすりたる詞也師古が説に奥内室中隱奥之所也と
入り今内子を奥方と稱するも此義にたぐりたるにみまひ

たぐり 萬葉集に見ゆ奥放の義也
たぐり 書籍にみまひてみまひてみまひてみまひ
たぐり 宇治拾遺に信濃のたぐりて書り奥郡とす入源平盛衰記に
も信濃の奥郡とす今も河中高島郡をたぐりたるにみまひ

たぐり 奥島ハ天竺より出る島の絹布とす、
たぐり 物語に見ゆ憶、字の義也念也思也と注せり俗に畏疾を憶病とす
ノ新猿樂記に臆病と書すむねのたぐりたるにみまひ

たぐり 源氏にたぐりたるにみまひてみまひてみまひてみまひ
すれハ憶病もよ

たぐり 天智紀に丘巒を訓せり萬葉集に奥城奥柳に作る其義也神

しものを、同五、たぐれるてなかにひそすひみそのふのうめのはなにもならましもの

たけ 信云、古事記、日子國意都都命の意、都都を日本紀、姥の字を用たり、姥ハ老女の稱にて、婿と同字也、姓氏録も紀と同し、

たけかす 動也、榮花根命、さみにもえたかかせ給はず重之百首、草のはもたかかめ夏のてる日にもたもふなかにつかせそ吹らし、

たけく 動、つとむたなむ、わらうあまの通ひ也、この假名をさす、さき見入む、たけらかすの意也、發起たを用ぬれ、それならひつ、源重之集、またたせし君、あし高蜘蛛の手ひとつ落たるが、二三日まじつた、ま、かたの雲のはたてのたひか風を命に思ふなる、類名

たけこごめ 信云、著聞十八、法性寺殿云々、たけこごめをまゐるよし候て、御口のほごにあて、にきりたかせ給ひけれ、御うのまめにはら、とちりか、りける、源太府集、侍中納言まて、たものつかはすとて、歌云云返し、こごめよりまろつの人をひたひくりたもてを君をたけこごめなる、たこす 贈來、送越、たひりこすなり、たこせぬらふ、いひ教あるなり、拾玉集、旅衣つひにほらんたり、わかれし袖をたもひたせよ、類名

たこせ 萬十八、あま玉のほつとひを手にむすひたこせもあまのむかしもあるか、同十九、紅のやし

にそめてたこせたるものすそをほりてめれぬ、たこたり 枕、身にむむこたな、思ふ人の云云、たこたりたるせうそ、えたるもつれし、

たこたりふみ 紀略、延長八年二月二日、渤海存問使裴璆進、意狀、梅窓筆記、戰傳宣章、宣旨返給意狀於外記、狀權右中辨光繼朝臣進、意狀事、仰宣、徵、將來返賜、右宣旨可、被下知之狀如件、文保二年十月六日、春宮太夫判、無明抄上、われあしく心えたりけるぞ、たこたりまじつたもてたる也、林葉

たこたる 懈怠、たつの意有り、物習ふたのたゆむをもく、それハ心のゆるみにて、行廢の意なり、またそれよりして、一轉して病の愈るをもく、なり、これハたゆるむ意よりいふなり、前漢書、外戚傳、是歲孝王薨、有一男、嗣爲王、時未滿歲、有背病、太后目養視、數觸、解、注、解音解、類名

たこなひ 舉動也、日允齋紀、わかせこかへんきよひなり、かたのくものたこなひかたわてきよしも、たこめく、ひめく、同し、動を訓めり、たこめし或ハたこく、なごり、徒然草、世にたたり傳ふるこご、敵ハあくなき、たけく、皆そのこごなり云々、また我もまじつからず、思ひながら、人のいひしま、島のほたて、あてつ、その人のそらこたたりあらず、類名

ハ又離宮をもて稱す六十三代冷泉院より天皇の號なし後世崇徳安徳ハ諡號也天皇と稱し奉る後、字を用ひしハ後一條以後の事也

たくりび 送火也七月十六日京師の風俗なり、たくる 送ハ人をたくる也追來るの義成へし贈ハ物をたくる也倭名鈔に餉をかひたるとさよめり新撰字鏡に餉をさむも同し○後をよめるハ萬葉集にみゆ今口語にたくれ髪をさく入り萬葉集に遣をよめり遲來るの義也後馳後驅なごり殿の義也○人にたくれとさくも後の義むなし、成にし人のあまに残り留まるをさく也

たくる、後をよめり而後之也と注せり、たくると 御黒戸の義禁裡の佛壇の女中こも葉也さく入り、

たけ 古語拾遺に木の名也とさく入り又振其葉之調也さく入り盤戸開の歌にもあまをたけと見え又阿知女作法未の聲にもたけとさく入り卜部家に、槍さく又賢木とす住吉に、萩さく入れと心得かたし○日本紀に姥をたけとさく入り

たける 於字又置字をよめりける反く也、

たけり 奥州にて人の娘をいふ詞也在言に鬼のむすめを呼し事あり御の詠言に○安藝にて人の妻女をも呼り石見にて人の妻女をたけり

たけり、日本紀に抗敷龍象をよめり、

たけし 日本紀に下をよめり韓語なり、

たけしこめ 和名抄に拒杖をよめり今起米の義也といへり本草には炭糕の事も拒杖といへり延喜式に桴梳をよめり神供の雜物の内に見えたりされは今も諸社の祭などに飴桴梳の類を市るも此より出たるを飴は神供に用るハ神武紀に見えたり

たこす 萬葉集に見ゆ今、起の義也發も興も同し炭火などにいふ是也○遊仙窟眞名伊勢物語に遣をよめり送らすの義也萬葉集に入關に染てたこせたる又たこせんあまのさよめり昔家の歌にもたこせよとさく入り、京にせと云或ハ典の字をよめり俗にさく入り尾張にいふと云秋田にの入りと云とせとさく入り事なまかかこく入り○今芝原なまを田畑にするをたこく入り、起すなり新六帖に家の風吹からしたる芝の根たこく入りもなごりたけり

たこすみ 神武紀に秋炭をよめり、

たこそか 嚴字をよめり、

たこたる 怠慢をいふ起垂の義興起感發なきの意なるハし緩もよめり疾の少しく愈るをも心あたれたるなど見えたり

たこたりふみ 宇治拾遺にみゆ意狀をいふ也、

たこなふ 神代紀に行をよめり興し成の義成へし○位高官卑に行を用う○日本紀の歌にものたこなひとよめる類ハ舉動をいふ也○釋教によめるハ修行の義也

たこり 瘡をいふ諸疾とさかひ隔日などに發るより間日瘡と見え俗に越期たりのなごり○俗間に厭術多き中に人麻呂の詠をもて呪厭して其効を得るあり詩話に杜子美が詩を唱て愈るありと見えたりとれと子美が詩に

たこ

たさ〜 この詞古へなし、中世物語などにはほく見えたり、よて假名もつまひらかならざる故に、和字正鑑抄にも、世俗にきたかひてまららざる〜と書り、抄物にもその解なし、た、頗の意なりなるといへれども、たしかならず、今思ふに、これの随分をたさな〜と異名伊勢物語によめるの轉語なり、朗詠集にまた誤りて、たさ〜と點付たり、みな訛誤なれども、それらはよく誤り來れる事なきべし、そのたさな〜と、なななななななな〜と合せて、たさ〜とくへし、また轉てなを略して、たさ〜とくへしなり、それにてもその本の意はたがはず、随分の意にして、たりとせねども、我力のかきり、つとめて及いたらんとくふほの意なれば、我持分相應といふが如し、た、頗の意はななよかなり、或はなな〜となな〜と詞にたがへり、また思ふに、たさ〜は負様〜の略語にて有べし、なに、もせよ、假名のたにまたがふべし、徒然草もて各がれのけしき、そ、秋にたさ〜とくへしにけり、類名

たさ入 抑也、萬計、あたまるたさへの城と曰、天智紀、於筑紫築、大堤時、水名曰水城、同天武紀、筑紫國者元成、邊賊之難也云々、

たさ入 萬計、もまのつひのなを〜とたさ〜へさし云々長歌、和名、刺櫛左之久之、拾遺別、わかれるたさ〜のなを〜としてあへさほ

も三年猶瘧疾一鬼不銷亡隔日搜脂髓増寒抱霜雪徒然階隙地有靦屢鮮粧と見えたり又代醉編に俗言避瘧鬼伏齒隙之地不然必晝易容貌さへり外臺秘要に三十年四十年の瘧を載たり其時節を追て年毎に發るなりなる入し〇ふるひ日一時はかり前に大蒜根を湯に和して足をひたす、

たさ 起也起る反也〇火のたさる火熾をよめり病のたさる病の發をよめり病起と書り本復の事なる也やんとたつとよめり〇口語に人の腹たつたことさふ發起の意也

たさか 式城上郡に忍坂坐生根神社忍坂山口坐神社と云ゆ今生根神は忍坂村にあり山口神は赤尾村にありて天一神と稱す和名抄忍坂に作る萬葉集に云隱來之長谷山青幡之忍坂山云々とみゆ、

たさかへ 倭名抄郷名に刑部を訓せり允恭紀に忍坂大中姫の御名代として刑部を定むと見えたり忍坂と通ふ成へし刑罰の安忍の意あれはかく訓せしにも又推問するよりたし考る意なるべしともいへり又垂仁紀に大刀忍坂色に藏すとも見えたり〇垂仁紀倭名抄にたさかへとも訓せり俗にたさかへともいへり或は忍坂とがけるもあり〇伊勢安濃郡に刑部村ありたさかへと唱ふ神風抄に七段在安東郡一町御筈神田四、押加部三十一坪會興利町と見ゆそより町の八町成へし

たさか 押、字抑、字をよめりたさへともいへり、反ふ也〇徳をたさへるの扣をよめり推支の義成へし〇涙にたさへ日本紀に禁、字をよめり杜詩に江州涙不禁と見えたり〇恭にたさへ約、字也たさへる

たさま〜 たさま〜の轉歟、あま〜の詠か、榮花珠、例にかはりて、あはれにたさま〜かなし、源東風ものつみせ、はよりかにたさま〜に、鈍人同かのものこそ、たさま〜かりけれ、同舟舟、すこしたるか入きこを、思ひよりのけんか、同舟舟、例のはらたち、多んするにかたさま〜し、くろくみしをたさま〜かへとも、たさま〜た見し、林葉

たさへられて 隆信集賀、五位正下ひさ〜たさへられて、あまたの年をたさへりて後、

たさ 信按、西宮記十月旬事之條、應和元年氏々三職之後勸益、中將取、瓶子唱、平、延喜十六年、立唱、平云云、大臣有氣色、立跪御座下、奉勅復木座、この外六條院行幸にも唱平の事あり、政事要略、大嘗祭の條、吏部記を引て、十五日以、白黒酒、賜、群臣、持手受嘗、先白次黒不稱平とある、白黒の酒の、たさしを給ふのみなるによりて、平を稱せざる也、たさあて 月詣集戀、その人ともあらで、みは入りける女のものに、たさあてにつかはしける、

たさいたし 中務日記、もみちかさねのたさいたしみゆ、

たさかへ 忍壁、和名於之加倍、在上下、正鑑抄、天武天皇御子、忍壁皇子を刑壁とも書

たさへ 今、俗侯家の行列に殿を訓てたさへといふ紀効新書に押後、兵を見えたり〇類聚雜要に器物に面佐倍といふ事見えたり

たさへもの 酒宴の後押物をと出る又食籠を座敷に置いて押物の代とさる事ありとぞ、

たさらぎ 姓にたさ大佛をよめりといひ義詳ならず、

たさし 上古の名に忍とくへるもの多し〇〇の轉成へし〇〇の押、も書せられ押照押勝などの意にたさしなつたさするをたさ成へし海篇掌珠に忍、恕也と見え又心能、於事、也と見ゆ〇日本紀に機をよめり古事記に押、字を用たり〇倭名抄に鼠營を訓するも同じ拾遺集物名たさしあゆ

たさし 足音高しはひなとたさし〜とみゆ日中行事に鬼の間の通りの障子をたさしとみゆひひつすたさし〜とみゆ〇新撰六帖祝題に、もちながら平をさなるたさのきよくにらぬ御代の久しきつ、夫木集に平をひしとある

たさし 平をさなるたさのきよくにらぬ御代の久しきつ、夫木集に平をひしとある

たさし 梨語曰依、大乘開文之法治病之人許、鹽酒、但同座之次不得唱平、と帝王編年記に見ゆ江次第勸益の儀にも見えたり平ら々々安らけの義と上壽の意に聞ゆたさしをたさしとみゆし、今も俗にひらたさしとみゆ

たれ、たしかもたさかべもたなし名歟、楫取魚彦云、伊勢又遠江刑部攝津忍壁皆於佐加部の訓なり、たしかべと有るの誤なり、
たしこき 本草玄參、今こまきと云、古語拾遺、以天、押草押之、延喜典藥式、中宮臘月御藥、玄參一兩、藻鹽草、玄參たしこき、
たしこきみ 金葉雜、大路に子を捨て侍りける、
たしこきみにかきつけ侍りける歌、

たしこきのは 強言、索性法師家集、天曆のみかりせ給ひて、河内國にもすませたまはまかり歸りなむと云ひしを、なまさせ給ひて、索性がむをなま、よこみりつけさせ給ひて、旅に出たしこきのはたしこきかよよの思入心くたけぬ、
今按、このたしこきのはたしこき、萬葉集三に、あひこきと有るが如く、推して名付給ひたるたしこきなり、
たしこき強言なり、類名

たしこむる つみこむる意なり、人などを勘當して、逐こむるをもつら、龍居の意なり、それより時を得ずして、世に數まへられぬをいひ、また心のせまき人の、えものをもいひ出ぬをいふ事有り、拾玉集 見わたせの奥津浪間の舟なからたしこめてけるあき霞かな、

たしこめ 夫木抄八、くらき夜にともす螢のむねの火をたしこめたる玉かぞを見る、
たしこりて 推疑、人のたほくるこみたる也、榮

といふ語あり或の呼平とも見ゆ又押平といふ語ありたしと平を意かよへり今の唱平と音をよへり枕草紙にいへるの飯高、郡を忍飯高、國といへる是也○神宮大祭の直會の時に長官以下杯をすすむといふ唱平と相似たり大祭すすむといふ座せよといふ事也今中山傳信録に引禮官唱平身世子衆官皆平身といひ平伏の意也○源氏玉璽の巻に見たる初瀬の僧を指り御師の義浮屠氏祈禱するもの、稱也今伊勢の神人を通しよふも東鑑に年來御禱師權禰宜光親神主及公卿勅使記に本官、御師と見え詔刀師職などといふ浮屠氏に倣へるもの也檀那の稱に對していふありし御湯殿の記にかものまた久しもの如く御しにたるとも見ゆ西土に師巫といへるも師の男も巫は女もなれり伊勢御師の稱も相似たり

たしあゆ 土佐日記延喜式などに見えたりあゆの年魚をかけるより年の始に用るものなりといへり江次第にも元日押結一杯など見えたり○大諸禮に押物何合などいへるも押結の類なるべし、

たしあけかた 押開方の義天の戸の縁よりいへるものと天磐窟の故事に據れる也○池にすむたしあけかたをよめる押の縁なきをいふかまたかへり別路をたしあけかたの真木の戸もをむむといふけたれり同意なるべし

たしきた 中古より書院にたしきたの粧といふことあり室町家中比に歌の會式を書るに彼は押板の本尊には人丸の繪像と見ゆ今の床なるべし天正本の太平記に書院と云云机板に二三義(土義歟)之か草書等也といへり今云書院床の事と見え侍る、

たしいたし 衣にいへり胡曹抄に押出と見ゆ杜草紙に小はしとみのみすよりたし出したる(ほ)といへり裾を出さずして袖を出すを押出といふ台記に御籠の中央左右より袖を出す江次第に雖立置御几帳不出其裾と見ゆ○晴の時打出也褻の時押出也

たしうり 鎌倉時頼の政に押賣を禁せしと見えたり、
たしなけ 押桶と書り胎衣を入る具にてまげ物に鶴龜をかけりたし押たしなけ 勝の義壓勝の義なり、

たしなる 拗字をよめり押折の義なり、
たしなけ 馬具にいへり押懸と書來れども面尻懸なるべしといへり、
たしがみ 東鑑に押番とかけり今云つけ番也、

たしくみ 金葉集に大路に子を捨て侍りけるたしくみに書付侍る歌と見えたり子を包ある物をいふ成へし大體雜事に大體の時の懸とて両面の普通の輪達のたしくみと見えたり

たしこむる 押籠る義也源氏歌に、いはぬをいふにたしこむるひながら押こめたるいへりしかりけり○人家の押入を伊勢にて押こむといふ押籠る義也○強盜をたしこむといふ

たしたれ 神代紀に押をよめり押垂の義也、
たしづまり 日中行事に見ゆ御寝をいふ也、

たして 日本紀に符をよめり押手の義成へし朱墨を手掌に塗て押して印とするの名也と續日本紀に印をよめり西土にも玉押などいへり○押手の社乃鎌倉にありて門戸に人の手形を押事も此社の故事也といへり○後

花月宴、たしこりて、みなるなみ、林葉
たしこる 榮花音樂、手びきにたてはしますとのはら、たしこらせ給へるに、
たしたち 押立源氏桐壺、くたしたちかざしき所、ものし給ふ御かたにて、くたしたちもあらず、たほしけちて、もてなし給へるなるべし、
たして 信按、仁和大嘗祭の歌に、神代より天のたしての動なきまきしたてし岩屋山かも、鹿島神宮の西六町ばかりに、押手神社あり、鹿島社司の舊記に、光仁天皇寶龜九年、神印を納られし時、大宮司大宗正殿に納れけり、大同二年正月十五日、正殿鳴動して御戸開け、かつ神託ありしによりて、大宮司清持朝廷に奏す、御感ありて、爾今鹿島の神職任符を以て補任し、任符に此印をたすべしとて、任符の案を給ふ、清持歸郷して、別に社を造て、神印を納む、これを押手の社と云ふ、鹿島志に見ゆ、香取神宮にも押手社あり、又山城の加茂にも靈璽の社ありと、雍州府志にあり、
たしては 枕詞、なにはのまき、古事記に、たしてはなはのまきゆ云々、萬葉三、たしては難波、國に云云、これを私記に、難波之碕如推出也といふも、又或人、萬葉に押照、臨照と書しにつきて、天が下に君臨し給ふといふ思入るも、共に誤也、よりに年月にたもひわたらて、漸得たり、

たし

その神武紀に、方難波之碕、會有奔潮太急、因以名浪速國、亦曰浪華、今謂難波、詭也、ある古語に依り、製立、浪急之崎、意にて、たして、浪急なるを、浪急給ひし也、けり、さて、語を、た、於志豆流のたし、たそひ也、そひ反、なれば、約めて、たし、なり、て、る、た、て、る、浪、略、ける、語、なり、な、は、は、り、も、浪、は、の、詭、れる、事、右、の、如、し、今、難、波、わ、た、り、な、ま、く、知、た、る、人、の、語、る、に、西、南、の、風、た、く、吹、さ、さ、り、急、波、大、に、立、て、極、め、て、渡、り、か、た、き、所、也、と、い、ひ、り、冠、
 たして、た、い、め、よ、住、の、え、の、き、し、は、た、た、に、ほ、ひ、て、ゆ、か、す、同、八、大、御、馬、の、た、た、し、と、い、め、
 たしなめ 押靡也、萬一はたす、まのたしな、
 同十七、す、ま、た、し、な、入、又、押、並、萬一、そ、ら、み、
 つもまの國、たしな、入、て、わ、れ、こ、た、れ、
 たしな、入、た、ら、ぬ、押、並、に、て、あ、ら、ぬ、を、略、さ、て、い、
 み、也、普、通、の、た、ら、ぬ、を、略、さ、す、と、い、ふ、事、な、ら、ぬ、ま、
 せ、す、な、ら、ぬ、の、類、ひ、裏、よ、り、ひ、ま、は、す、詞、な、り、源、氏、
 桐、葉、御、か、た、く、の、人、々、世、中、に、た、し、な、入、た、ら、
 ぬ、を、略、さ、す、の、入、り、す、ま、ら、ぬ、を、略、さ、す、の、給、ふ、類、名、
 たしな、り、萬、九、も、た、た、し、な、ひ、た、し、な、り、ち、ま、ら、ぬ、
 み、ゆ、き、の、た、し、ひ、て、今、俗、に、た、た、し、ひ、ぬ、さ、り、と、い、
 同、し、給、
 たし、の、け、ら、る、散、木、い、か、た、し、に、あ、ら、ゆ、川、の

世勅符あり官符あり國符あり省符あり
 たして、難波の枕詞に入り、萬葉集に押照とも忍照とも書り浪華といふもの出たる詞に、萬葉集に超草香山、時とて、直越の此みちして押照もなほのうみや名付けらしも遠く海を見せりたる體成し又家持の歌に、さくら花今さかり也なほの海たし、る色にきこしめすな、また春日山たして、ら、さ、る、此、月、さ、も、よ、り、又、臨、照、を、も、よ、り、史、記、に、臨、照、干、海、と、い、
 意也此枕詞は仁德天皇の御歌に始て見えたれ、應神仁德の二代大隅、宮高津、宮に御世をらしめす、の義成、し、と、い、ふ、の、喜、撰、式、に、
 鹽海を押照とて、さ、さ、ら、る、ら、う、し、ほ、し、の、義、に、を、ら、し、
 たしとる、徒然草にみゆ押探也摩をよめり、
 たしな、入、て、萬、葉、集、に、見、え、たり、押、並、て、の、義、也、等、字、意、た、し、て、め、て、の、義、
 也、た、し、て、い、ふ、の、な、り、な、り、の、力、あ、る、詞、と、な、れ、
 たしな、み、古、今、集、に、薄、た、し、な、み、み、ゆ、押、並、の、義、也、と、い、ふ、と、萬、葉、集、に、草、葉、
 押、靡、茂、樹、押、靡、麻、花、押、靡、と、見、え、た、れ、な、ひ、く、義、成、し、
 たし、ね、晚、稻、を、い、り、遲、稻、の、義、と、い、ひ、反、し、也、た、し、て、同、し、た、て、の、た、し、な、
 め、る、重、ね、詞、也、今、を、し、ね、と、書、な、ら、入、る、あ、ら、し、○、新、勅、撰、集、散、木、集、に、わ、
 田、の、た、し、ね、に、よ、め、る、も、心、得、か、た、し、
 たしはかる、推量の義也今音をもて呼り、
 たしはなつ、神代紀に離又排離又脱離をよめり押放也、
 たしはるし、祝詞式に見ゆ日本紀に排開をたしからしとよめり古事記に波流岐に作る

みをついたし、のけられて過る比かな、
 たしはかりこと、榮花、雙、玉、夢、か、く、よ、た、人、の、も、
 の、い、た、し、は、か、り、こ、と、の、さ、さ、り、の、ほ、か、に、心、つ、ま、な、
 し、
 たしひたすら、後拾遺、
 ろ、り、あ、る、物、を、た、し、ひ、た、す、ら、に、ぬ、る、袖、か、な、源、東、屋、
 た、さ、る、し、き、夢、の、あ、た、る、心、ち、し、て、あ、せ、に、た、し、ひ、た、し、
 て、い、し、給、入、り、
 たしふせて、押伏也、日神功紀、時神亦託、皇、
 后、曰、如、天、津、水、影、押、伏、而、我、所、見、國、何、謂、
 無、國、云、云、萬、一、あ、し、ひ、の、名、に、た、ふ、山、す、け、
 た、し、ふ、せ、て、若、し、む、は、あ、は、す、あ、ら、ぬ、也、
 たしまづき、信按、た、し、ま、い、き、ん、た、し、ま、机、也、
 たしまづ、依、り、か、る、義、也、
 たしちり、ふる、い、の、あ、ら、ぬ、の、さ、さ、り、の、部、に、し、
 る、四、季、物、語、正、月、空、の、け、し、き、と、い、ひ、み、し、り、か、
 り、て、花、田、の、紙、に、た、し、り、い、付、た、ぬ、
 たしわけ、押分也、萬十七、白雲のち入をたしわ、
 け、あ、ま、そ、り、云、々、日、神、武、紀、更、少、進、亦、有、尾、而、
 披、磐、石、而、出、者、天、皇、問、之、對、曰、臣、是、磐、排、
 別、之、子、
 たす、夫木六、あかみとのほまの、色をた、ま、ま、に、
 藤のむらこの咲みちにけり、
 たす、信云、神武紀に天皇を天壓神、注に壓を、
 飢、術、と、い、ふ、言、の、居、わ、り、た、る、方、を、以、て、注、す、る、

たしひたす、源氏に汗にたしひたして、見ゆ押置の義也後撰集に、
 〇、さ、た、も、心、の、あ、る、物、を、た、し、ひ、た、す、ら、に、ぬ、る、袖、か、な、
 たしひらく、神代紀に排をよめり押開の義也、
 たしひろむ、擴、字、を、よ、め、り、推、廣、む、る、意、義、也、〇、た、し、ひ、ら、む、の、排、を、よ、め、り、
 たしへり、持統紀に節儉をよめり、
 たしほる、忍穂井と書り參詣物語に高倉山の西に藤岡山とありそこは、
 天、忍、穂、井、と、て、御、饌、料、の、水、あり、と、見、ゆ、高、倉、山、の、外、宮、の、御、山、也、風、雅、集、に、
 代、々、を、經、て、汲、と、も、つ、し、久、方、の、天、と、あ、ら、う、つ、た、し、ほ、る、の、水、天、忍、石、長、井、
 水、と、も、い、へ、り、即、天、真、名、井、也、天、孫、天、降、り、た、ま、ひ、し、時、天、祖、よ、り、天、降、さ、せ、た、ま、
 へ、る、水、の、政、の、事、康、治、中、臣、壽、詞、伊、勢、神、宮、の、書、等、に、く、し、く、見、え、た、り、〇、
 伊、賀、風、土、記、に、猪、田、里、有、井、忍、穂、井、所、通、也、と、み、ゆ、式、に、も、伊、賀、郡、猪、田、
 神、社、と、あ、り、宗、祇、名、所、類、聚、至、寶、抄、に、住、か、け、は、こ、も、伊、賀、の、神、風、や、伊、
 勢、よ、り、か、よ、天、の、真、名、井、田、今、や、り、木、の、清、水、と、い、ふ、と、〇、息、栖、の、明、神、に、
 も、い、へ、り、長、能、心、あ、る、人、に、見、せ、り、や、常、陸、な、る、息、栖、の、は、ま、の、た、し、ほ、井、の、水、
 たしみつ、神宮秘傳問答に今の代に少兒水にむせふ時にたしみつとて、
 天、上、に、て、神、勅、に、忍、水、と、い、ひ、て、呪、な、入、と、あ、ら、し、事、鎮、座、本、紀、等、に、見、え、た、り、と、
 といひ、
 たしやま、忍山也伊勢鈴鹿郡忍山神社野村にあり又忍山神宮ます倭、
 姫、世、紀、に、味、酒、鈴、鹿、國、奈、具、波、志、忍、山、と、あ、り、て、神、宮、を、造、り、奉、る、事、も、見、え、
 たり又末社に穂積社あり景行紀に穂積氏忍山宿禰と見ゆ日本武尊、
 の、妃、弟、橘、媛、の、父、也、終、國、家、集、に、鈴、鹿、な、る、た、し、の、神、垣、た、し、祈、れ、ふ、る、か、ひ、あ、

たし

たそひ 展風のちち也、榮花衣珠、御展風もた
 たそひに、みまきまをしたり、林葉
 たそひる 押振也、古上、なごめなすひたを
 たそひらひわかたせられた、ひこしらひわかたせれ
 た、萬十四、たそひのちちをたそひるにみまにわか
 せをりてはたそひの戸を、押入ふるお義敷、橋
 たそひしき 花さつしきをいふに似て、そのうちた
 物をあつちあつちがす心有り、物のこはきをたそひ
 かたにあらす、すまじきさういふにも似たる意あ
 り、俗に云たそひその意同し、大鏡八、たほかたそ
 の宮に、心たそまじき人のたほするにや、一品宮
 の御装着に、入道殿より玉をつらぬき岩ほなた
 て、水をやり、そもいはす調せませ給入る、裳唐衣を
 四奉らせ給ひて、中にもさうわめて、思しめさん人
 に賜はせよ、と申せ給入りけるを、さうりともと思ひ
 給ひける、女房の賜はらで、ちがそのなげき病
 つきて、七日といふにせ給ひにけり、くちまてた
 ほしけん罪ちかへ、ましていかにものねたみ心ちか
 しましけん、なごめをあましく、類名
 たそひ 花さつしきの約の語なり、ろしの約りとなれ
 りなり、古今集序、それまろことばは、春の花の
 にほひすくなくして、むなしき名のみ、秋の夜のな
 きをかこたれり、かひり人のみ、にたそひ、かつり歌
 の心にはち思入る、類名
 たそろし 畏也、萬七大海の波りたそろしをかれ

たそひたけ 押竹なりそひひさへの轉也○たそひのくれも同し、
 たそふ 襲をよめり押覆の義成へしたた、反そ也日本紀靈異記に歴もよめ
 りそふ、反す也○日本紀にみたすひと見ゆ御襲也
 たそぶらひ 古事記の歌に見ゆ押觸也といひちひ、反り也板戸につ
 けり萬葉集に屋の戸たそぶらぶら見ゆ戸を開く事なり一記に押也そぶらひ
 四言をつむればし也
 たそへこ 禁中にて節分の夜牛房を土器に入小刀を添出る其小刀の稱
 なり、
 たそらくら 恐をよめりらくら、反る也疑也億度也と注す通鑑胡注に豈、
 恐也といへる史記に豈謂是耶とある、恐らくら謂是耶と同意也とい
 へり懼をよむ、左傳に見ゆ怕、宋詩に多し俗語の体也○たそらくの橋の
 奥州松島にあり
 たそれ 畏懼の類によめり大慮より出たる語成へし俗にそらたそろしなごめ
 へり西域記に嗚阻羅唐言上とくへるも近し新撰字鏡に懼又悸重蒙
 頰韵に恟靈異記に懼をたそるよめり、全浙兵制に怕を譯せり○たそろし
 ともへりるし反り古今集の序にたそろし見たり○尾張人のたそろしき
 事をたそがひといひ飛騨も同じ恐れこつこの意こつ、反り也出羽人のたそ
 ろしといひるし畿内四國加賀も同じ遠江にたそたひ駿河より武藏近國
 にたつかなくつとく、萬葉集に奥かもあらずとよめる如く恐ろしき意なる
 し
 たそれみねそれみも 普通の例恐美恐美毛と見えかしこみかしこみも

たそ神をたむけて船出せりかたに、同、あふみの海
 浪恐風守年はるへなむこくろなしに、みまかし
 こし可讀か、橋
 たたき 愛宕 和名於多木、後紀、延暦二十
 二年八月、幸伊豫親王愛宕庄、諸陵式、愛
 宕墓、贈正一位源氏、清和太上天皇外祖母、
 在、山城國愛宕郡、兆域東二町南一町西一
 町五段北一町五段、守戸一畑又云、後愛宕
 墓、太政大臣贈正一位美濃公藤原朝臣、在、
 山城國愛宕郡、守戸一畑、河海抄、たたき、桓
 武天皇平安城に遷都の時、此地を諸人の葬
 所に定らる、見延喜遷都記、かして珍皇寺云
 寺をたつ、弘法大師の聖跡として、今に東寺の
 一の長者管領也、字類抄、珍皇寺即愛宕寺、
 參議小野篁卿建立、土俗云、此寺者山城國
 國分寺、弘法大師幼少之時、相從慶俊僧都
 久住此寺、名勝志、引寶物集云、珍皇寺北
 にあるを八坂塔と云り、然るを八坂法觀寺
 南邊より、今の六道の邊に至る迄、此寺地なり
 したる、花鳥餘情、たたきといふ所、今の鳥邊野
 なり、細注にたたき、今の六道是也、名勝志六
 道在、五條末北建仁寺異角、今建仁大昌院
 管領、有藥師堂、是珍皇寺本尊、本弘法大
 師開基、而東寺門下也、故于今自大昌院
 修、新正賀儀東寺長者、是依兼、帶珍皇寺

よめり内裡式には恐卒恐美毛とみゆ、
 ○たそ 織田をよめり姓にいへり壽永四年檀浦の敗平、資盛孤兒あり母
 懷に匿し近江津田に至る、越前織田社禰宜養て子とす、織田權大夫親
 實と號す傳へて信長公に至り再び天下の權を執れり○日向國延岡に織
 田明神あり有馬修理、亮直純の家臣織田奎之介の靈也直諫頻にして
 身を害し祟り多きを祭りぬるをそ
 たたい 俗に碗飯をいへり加賀越中武藏に玉に飯をいへり榮花物語増
 鏡などにも見たり江次第に御厨子所供御臺二本といひ雲圖抄に小御
 臺二本と見えたり○唐に盤を臺と稱する事新唐書五行志山谷詩集注
 に見えたり、
 たたき 和名抄に愛宕をよめり山城の郡名なり又郷名にもいへり又たそ
 にも愛宕を用うたとあつと通する例あり、
 たたび 神靈行遊の所をいへり御旅の義なり行宮又行廟といへる義に同し
 行をたびとよむも日本紀に見えたり頓宮もよむし、
 たたやか 穩をよめり續日本紀延喜式にたたひと見えたりかか助語也
 續日本後紀にたたひしく源氏物語にたたさうといへるも同義成へし正統
 記に御心はもたたまくと見ゆ
 ○たち 乳母をいへり御乳の義成へし春宮に御乳の人と稱し禁裡に
 大乳人と稱す○式河内高安、郡恩智神社あり三代實錄に恩智大御
 食津比古恩智大御食津比咩命と見ゆ
 たち 日本紀に嚴賊をいへりたたる也靈異記に慄もよめり○新撰字鏡に

也、
 たぢ 源多親、頭の君にたぢ聞へてゆりてあてた
 りひるに、落之木、北の方くみく心のあて、
 其の「たぢ」み給へるゑんきんは入りける、源多
 親、せんかたなくたぢしたぢ。
 たぢ 墮落、古今、名にめで、なれるばかりをなみ
 なしわれたぢにきこ人にたたるな、後拾遺譜、法
 師の扇をたぢして侍けるなか入すと、和泉式部
 わかなくもわすられにけるあふき哉れたぢらけり
 人もこそ見れ、林葉
 たぢあひ 山家集、たぢぬるつぼの水のひくま
 とたぢあひあつまる落合のはた、
 たぢらる 源紅葉、あぢはたぢしつみたぢらる、
 しみしつみしつみ源澤舟、わたし守るつぼのちらは、
 榊をいしつて、たぢ入りは入りける、
 たぢあふる 源夢浮橋、くさかへま、たぢあふる
 くさかへま、思ひ給へるしを、源玉葉、たぢあ
 ふふる、源蓮生、此姫君の母北のかた、世にたぢあ
 られて、今昔廿一、落ワタル尊、子共、爲方无く不
 合ナル、夫木廿六、あまきかひなのなかに日敷入
 てたぢあふれぬ、き身をくかたせん、類名
 たぢかみ 新六、あまきかひなのなかに日敷入
 てたぢあふれぬ、き身をくかたせん、類名
 たぢかみ 新六、あまきかひなのなかに日敷入
 てたぢあふれぬ、き身をくかたせん、類名
 たぢくち 俗語に、事のはしめてそのまはなるな
 某口(たぢ)云意也、拾遺物名、あし引の山の木

祖父をよめるたぢはちの略なり大父の義漢書、注に大父、祖父と見ゆ
 たぢあひ 川の落合所をいへり夏本紀の注に河水尾分と見たり○姓
 に云の平家物語に見たり、
 たぢいる 靈異記に陥をよめり落没の義也
 たぢらる 落人の義武者も云敗軍の士なり史記鄭當時か傳に賓客
 益落注に落枕散落とみゆ今も見物か落さ參詣か落たなどいふあり、
 たぢかみ 落髮の義源氏に髮のたぢと見え本草に亂髮と見えたり今、人
 髮結らるるを亂髮と稱せり拾遺集に 朝なくけつれつらるる落髮の亂
 れて物をたぢも比かな
 たぢくさ 鷹狩の詞也鳥の鷹に追れて草に落るをいふ也
 たぢくほ たぢくほの草紙あり板書を一段をけつらに住せしをもてたぢ
 くほの姫君とくふし見えたり落窪の義成入し、
 たぢぐりくる 源氏にみゆ落栗色也源語類字抄に濃紅と注せり今の
 黒紅粉也、
 たぢあす 萬葉集にみゆたぢあすひまもたぢあすめる夜不落なと見えたりもれす
 とくあか如し絶まなきをいふ詞也、
 たぢたぢつ 中臣祓に落瀧津速川と見え式に落多支と見え萬葉集に
 落瀧速瀧と見えたりつらと通ず落たぎる也同集に墮多藝知瀧津速川
 と見え落瀧知流水とよめるつ知と利と同韻通也とく入り○深そまの時に
 用らるる落瀧津の模様の服とく入り千載集に 落瀧津八十字治川の
 速き瀧に岩こそなみは千代のかずかも此歌の意也とく入り

のたぢくちの色をしきをあはれ也ける、林葉
 たぢす 不殘の意也、古上、ち見るしまのまぢ
 ちか見るのまぢたぢす、萬九、三川のあぢせ
 もたぢあふれぬ、き身をくかたせん、類名
 同十五、ちかひらして一日もたぢあふれぬ、き身をくかたせん、類名
 ぬ妹を月わたるまで、同一、川くまの八十まぢたぢ
 すまよつたひかへり見しつ、同十七、ぬるまぢたぢ
 つめにみれ、同十二、ひら夜もたぢあすめに見え
 けり、同十五、一夜もたぢあすめに見えぬ、
 たぢつぎ 新六、東路のつぎまら、つぎのたぢつぎに
 人もあめめ君がわりなき、濱松二、若君ぐし奉
 りて里にそたぢつぎにける、
 たぢたぢつ 落瀧、たぢたぢるなり、紀貫之集
 玉ののみみなれ亂れてたぢたぢつ心きまみ夏祓
 すま、
 たぢつる 靖寧紀二、惺然振怖(たぢ)源鮮木、
 かくあなかりにたぢたぢたぢたる人なり、
 たぢはころも 落書露顯序、落葉の衣のかさめ
 るあふれぬ、寒風猶あせきかた、云云、
 たぢあふれ 源橋姫、行末遠き人は、たぢあふれて
 あふれ入つて、夫木廿六、あまきかひなの長ち
 に口かすてたぢあふれぬ、き身をくかたせん、
 たぢあひ 伊物、此女はたぢあひはたぢあひひけれ、
 うちわひてたぢあひらあまきかひなのなかに日敷入
 ぬがましものを、白文十四、右手兼遺穂(たぢ)

たぢつく 落着をいふ音にてもいへり、
 たぢのひと 御乳人也春宮に稱す御乳人の禁裡に稱す、
 たぢは 落葉也源氏に落胤腹を替へるり○落らるるも衣にみたてて
 たり、
 たぢあふし 落伏の義鷹狩に鳥飛のかれて草に落て伏居るをいふ也
 たぢあふる 零落をいふ落魂落薄落葉など同し文集の潦倒翁をたぢあふれた
 るたぢあふるより源氏にたぢあふるといへる略語成入し又あすが行末遠き
 人のたぢあふれぬ、き身をくかたせん、類名
 よめり何によりの言義にも薬師經の十二神將をいふ也
 たぢあひらふ 伊勢物語の歌により列子に拾遺穂と見えたり、
 たぢあま 禁裏にあり東西二間南北十五間竹縁あり、
 たぢあひら 魚の名なるへし大諸禮にみゆ、
 たぢあやう 東國の俗語に貴家の處女をいふ詞也女郎の轉訛といへる阿
 娘の音也娘の尼良切にて娘と通す尊稱なり天子は母后を稱し宮人の皇
 后を稱して娘々といふ俗語には女を尊て大娘とし父母を稱して爺娘とい
 うらるれば阿娘の古く娘の音か如くいふ、
 たぢあふ 源氏に女御も心たぢあたまを見たり今落居る音により心の
 落着をいふ也
 たぢあふん 家居にくさく縁の義也とく入り、
 ○たぢ 古事記にみゆ落をよめり萬葉集にたい一所をくさく縁とく入り○
 鳥の死をたぢらるるといふ降る義也常に飛翔するものなれりかへり魚にあ

拾十六、もな見れり川風たぐく時浪の花
へたぢまのりける、古今巻下、枝よもわたにちの
し花なれりたぢも水のあわごそなれ、

たぢる 怖、壬生忠見集、ある人のもとの男に
かくれるに、なり〜ともなれたぢめる人をいそ
るこのみどついでいかりけり、

たぢるめ 落居、今思ふにこの詞、音訓によして、今
の世にこのたぢがひ有、むかしつひか、有けん、つ
まひらかならず、まじ訓にていふ、騷動して事の
あじまりしを云、音にていふ、事の終り果たせ
へて云、造營の出来終りしを落成といふが如
きの意なり、意をもてむかへしをいふ、今俗にもた
そるしき事、或はあらぬ事きて、むねのあたかり、
あるのせきあひしが、時過てまじまりしを、むねたぢ
つきしなごいふ、すなはちこれなり、明月記、天福
二年九月廿八日、入夜腹痛彌増如痢病、今
日十餘度服高郎香、柳落居、類名

たつ 信云、落葉を云、忠岑集に紅葉たつ、色
々の木の葉たつち山里の錦にめるなき名立
らむ、昔萬葉にも、つちたぢをいふ、但此忠
峰の題に紅葉落とく入る詩題なるをいふ、

たつ 墮落の心、古今歌、名にめて、たれるはか
りそ女郎花わたぢにきと人にかたるな千載群
聞、心あかみな女のしほ〜つかはしければ、たそ
るし木曾のかけちの丸木はしあみ見るたひに落

たつ 源蓬生、ちんじりなまきちなからちかてた
つしをすせの有けれに、同、草木、なら、落ぬ、
き秋のしゆ、安康記、あゆみの小鈴於智瑛岐等、
たつ〜 崎崎上、かこつたもさなななひな
あらん、廿余口たぢつれもな、つかなるをたぢか
あらん、文そあるまゝのまほしければ、いままじ
てな、たしかにいふあつた、たつ〜もあつ、○
御事、ちんじりなまきちのたぢ給ひしをみて、か
くつな、續後撰、藻壁門院御事の後、か
らたぢし侍りけるを、人のたぢらひては入りけるか
ら、いふ、かなしむ、世のたぢをたぢせむ
たぢ、たぢのたぢをたぢせむ、

たつ〜 小島口號、ちんじりなまきち、たつ〜
そまをいひ侍りし、遊糸日記、ちんじりなまほしけれ
たつ〜いふまじりなまきちたしかにいふあつた、たつ〜
もあつ、

たつかみ 古事談僧行、渡守ラミヤ、首オカミ
ト云程ニ、オタル法師之云云、義經記、法師な
れども、つねにがしををたぢれば、たつかみかしらに
たぢたる、今物語、法師のまじり、あましける
かしら、たつかみたぢひ、林葉

かぢるゝか如し○精進にたぢるゝか詞土佐日記に見たり墮落の義
也○出家の世にたぢるゝか古今集に我たぢにきと人にかたるなとよみ拾遺
集にたぢたりけりと人もそ見れを見たり○風のたつち伊勢にて、落來
る意にひ石見にて、落て止む意に〜り○枕詞に島の八十島墜事無と
見たり、瀧も、意也隊も墜也と見ゆ隊伍の時の音たい也

たつ 日本紀に懼をよめり假字の佛足石の歌に見ゆたぢる也ぢる、反つ也
新撰字鏡に忙怖又意をよめり俗にたつ〜と云ふ詞小島のまじり見え
たり

たつ〜け 追つけなりつけ反て追てに同じ信濃越後にて、たつ〜けいふ
り

たつて 追手の義追捕の事也通鑑東記に追兵とも見たり
○たぢ 大門をよむ事萬葉集に明大門とみゆ小門にむかへたる名也○音
をよみ萬葉集に聲もよめり又驚のたぢとよみ古今集も鹿に音のさめけき
ぢよめり〜と云ふ聲の有情非情にわたれとたぢの非情にかきるやうになれ
り〜り老千口義に天地間音也大者莫大於風霆と見たり○弟
もよめり○幼兒を威すにたぢと云ふ楚人虎を於菟と云ふに据成入し○
猫をたぢ〜呼も同義也

たぢる 禁裡女中のこと葉に御雲隠を云
たぢるゝと 倭名鈔に弟をよめり劣人の義年の劣れる義也たぢ〜と云ふた
ぢるゝの略也○〜と云ふたぢるゝと云ふひし事業式部日記後拾遺集に見
ゆ

たぢるぢ 舒明紀に叔父をよめり和名抄に季父をよみ新撰字鏡に阿叔を
訓せり、

たぢがひ 和名抄に領をよめり靈異記に願新撰字鏡に頸又膺をよみ全
漸兵制に地闊を譯す音のつがひの義成入し○俗に口をきくを領を鼓と
いふり○長笛賦に寒態振領とも見え清少納言もよみ事くさむなと
たぢがひなるも皆落ぬ〜と云ふり○たぢがひで蠅逐と云ふ諺あり賈子新書
に願指而如意と云ふ○たぢがひのたぢがひの領車踏と云ふり○
ちんじりなまきちの義也、

たぢきたあけ 御齋峠とかけり伊賀國にあり多羅尾近きあたり也、
たぢるゝに 山城の郡名なりとも墮國といひしを今弟國といふ古事記に
見えて圓野比賣の故事なり今又この訓と有り、

たぢけ 戲を〜り驚氣の義成入し源氏にたぢけたる人こそた、世のもてな
しにたぢがひ見たり或は放膽者なたぢけと云ふり演義文に興笑など
見たり○關東にたぢたぢと云ふたぢけなまきちいひけるもくぢ

たぢるゝ 季子をよみ延喜式に弟子と見たり、
たぢるゝせ 徳女ともた福女ともた多福と云ふことせり御前なり尾州記に
有女人容貌太注に俗語徳と志と見たり源氏にきもがと云ふも此面
貌の如くなるをいふと豊下の義也鉦女命の神像と云ふ何に据たるに
ちんじりなまきち○上野には風をた福と云ふ、

たぢるゝのち 又川ひたり餅をよみ十二月朔日に餅をくふ中國九
州にたぢるゝと云ふ、

給ひしなき、玉かつら、たはたごゝとあるは、少武の妻にて、玉かつらをうまひを名のりせたる故にいへる也と花鳥に云、狭衣一上、車まじよせたるは、五十ばかりなれたるの、まよゝしからぬまじたる、此たごゝの乳母を云、林葉

たごゝひ 今物語、待賢門院の堀川、上四門院の兵衛たごゝひなりけり、

たごなみ 音信るものも、無をたごなみものもなしなど云、徒然草、神無月の比、栗栖野とて所を過て、ある山里にたごぬ人事はべりしに、はるかなる谷の細道をみわけて、心ほそく住なしたる處あり、木の葉にうづもるゝかけひのしつくならて、露たごなみものなし、齋宮家集、うすらひにたごたる冬の驚いたごなみ春の風をこえて、

たごね 弟子也、空堀菊丸かくて后の宮の賀正月廿七日に出くるたごねになつてかまひつれ、同職開、大將殿に、廿七日とてきか、たごねになんさかの院に御賀まゐらんとし給ひける、

たごのこもり 榮花音楽、かゝる海にたごねたごねたごほしめて、たごのこもりぬ、
たごひめきみ 榮花初花、たごひめきみたごひつはかりにてたごひませり、日本紀異傳、てりにてるかほりたごをたごまてにひかりとほれるきみかたごひめ、積松三、源帥とてきこえしか、御たご姫きみをたごて座らひ奉り玉ひしなりけり、

たごひをたごめ 弟姫也、今俗にも、兄弟をさしてたごひをたごめ、この遺言か、日顯宗紀、弟日奴（たごひ）是也、萬一、あられつゝあられまじはらすみのたごひをたごめたごあかあかも、
たごらじまけじ 榮花月夜、たごらじまけじとてたごあかあか、

たごりのかひ 秀峽、かひの山はたごなり、峽字をよめり、たごりの峽にて、高からずひまゝ所の峽をいふ、峽の山をたごめと書たる字にて、山二の問をくゞ、甲斐國もこの字なり、藤原元真集、春霞たごめとてしる、小倉山たごめのかひに雪も見えぬ、
たごりのひと 無名抄下、手をならふもたごりの人のたごりの、まなひをす、

たごろ 六帖、我せこをけさかゝとて出ればおは雪たごる庭たごる、
たごろき 鶯也、萬國華のあひつくるしかりけりたごろきかたごるへたごるにたごるわつ、
たごろく 源東屋、大トにならんはくらく

たごらんなるそめまりたごろくしき事、車にまひる同帯木、日にみいぬ花の顔ならたごろたごろくしき事、同帯木、戸をちをらわしあへる、老たるしたちの聲に、あれたたごらたごろくしき事、同帯木、戸をちをらわしあへる、宮人みしき大事に、御さのたごらたご

甲斐のあらね信濃のみさかあり北に美濃尾張の山ともの上より加賀の白山見ゆ乾に多度山鈴鹿の三ツ子山西に布引山阿坂山又伊賀の國の山ともの其名もあらす南に朝熊山志摩の國のかた也といへるまたかろ三面の海原なれば眺望限りあられすとていへり○音無川の紀伊熊野本宮にあり又吉野山にあり又若狹遠敷明神の前にあり元亨釋書に見ゆ又信州蓼科山にあり○音無瀧の山城愛宕、郡にあり歌に小野山の上より落るるとあり○音無里の拾遺集に見ゆ

たごなみ 日本紀に響又喧響をよみ古事記に響をよめりたごなみも見ゆ源氏にもきめの音なみといへり音なみの義なり兼家の歌にかけひの水の音なみもなしと見えたり

たごにきく 高しの濱のあた浪の歌に金葉集に堀川院の御時飽書合によめると見ゆ飽書合に内にて殿上の人々歌よむと聞ゆるに宮つか人の人々のもてにけさうの歌よめてちれと仰ことにて云々上に音にきく高してそれのあたなるてふ名高き人といふ心なるへしあた浪の波ても響なき波をいふそれにあた人にそへたりとていへり○高しの濱の和泉の國なり○紀伊の紀伊守重經妹也仍紀伊と號す家の倍臣にいふなりとていへり

たごの 音羽さかけり音羽山音羽川音羽瀧の山城也散木集に ひまの山其大嶽はかくれねと猶水吞は流れてそふる水飲も名所とす○音羽里の大和なり其上方の山を音羽山といふ山中に瀧もありて十市郡に屬す、
たごひ 日本紀人の名に弟日あり萬葉集に弟日娘あり日本紀に兄といへる語も見えたり、

たごひめ 弟姫なるへしたごめと異れりたごぢすめ也、
たごや 矢にいふに弟矢なるへし鳥にもいふにやうつほ物語に 大鳥の羽やかたはに成ぬらん今たごに霜のふるらん 秋の水の敷をからせんまきのの今たごのかたにはせん、

たごめま 六月被詞に高山の末短山の末と見ゆ短山たごめままよてにや古事記に正鹿山つみの神の次に淡騰山つみあり此義にて有へし一説にひもままよめり末山、上也山本にむかへりたごめと貫之大井川行幸和歌の序にもみしかき山このもかのもど見ゆ
たごよめ 姉妹をよめり和名抄にみゆ弟の妻なり、
たごりばら 源氏にみゆ姜腹の子をく入り落胤腹に同じ、
たごる 佛足石の替にたごると見ゆ劣をよめりたごるを通入り竟寧の歌にたごりしとも見ゆらじ、反り也

たごろ 棘をよめり鶯の義にも 靈異記新撰字鏡に敷をよめり敷澤の意也堀川百首に 春くれと折人もなきわらひのつくかたごらにたごらにたごらんかたご何にててもいふなきにも今石見のあたりに敷をたごらに華嚴音義に荆棘草穢、通語也と見ゆ 後鳥羽院御製たご山のたごらか下もみ分て道ある代を人にあらせん

たごろく 鶯の意也源氏にみゆ又今西國にてたごろしなたごろしとていへる其義なるとも、
たごろく 鶯をよめり大勢ける意にやける、反く也萬葉集に覺新撰字鏡に懺もよめり為遠卿 未たたごひし契をさすかのたごらかしてを神に

云フ鬼、京中ニ充滿テ、十歳以前ノ小者、十カ
八九ハ取り失シケレハ、上下男女家々ノナケキ、
親々ノ悲ミ、帝聞食、其春ハ子日ノ御會ヲカリケ
リ、

たにかみ 源頼朝、いさやはらかにの給ひて、鬼神
もあらたしき御けはひなれり、
たにのまこくさ 萬葉四、菅草(カササギ)わがまたひ
もにつけたれと鬼乃志許草ことしありけり、仙
覺註釋、たにのまこくさ云なり、まこくさは凶
と云詞なり、奥儀抄、たにのまこく草ハ紫苑なり、
これをみれば、物忘をせずと入り、俊頼體腦、たに
のまこ草といふ、むかし人のたを、子をたたりもち
たりけり、たをうせにけるのち、こひかなしむ事とし
をたれども、わする事なし、むかしはうせたる人を
は、つがたれまめけれり、こひしきたびに、あにたご
うかかして、かのつかにゆきむかひて、なみたをなが
して、わか身に有るつれなもなげきなも、くきたる
たをなごむかひて、はたをひひつり、か入りけ
り、あにたごうう〜とて月しもりて、たほやけ
にしか入、わたんをがりのみ、たかたきこた
もあつて、たもひひるを、たごてたもひひるを
むきななし、萱草をそのつかのほらにうて、そ
らすなれとて、菅草をそのつかのほらにうて、そ
のいちつにたご、たごのまががまらるるこ、まを
ひけれと、まはるかたにたごて、くせすのみならにけ

り、このたごの男とて心うしてたもひて、ひのこ
日をたご、こひまうのたご、かゝりて日をくらし夜
をあかして、たごをわすれむ事なし、紫苑と
くふ草こそ、心にたほゆる事なりわすれなすなれとて、
紫苑をつかのほらにうてみけれり、いよ〜わ
する事なして、日をうてしあるまはるをみて、つか
のつかごを有て、我いそのたごのかはなまほ
る鬼也、わかばく、たごる、事なかれ、君をまもら
ると思ふとひけれり、たごりながら、まをりけれ
り、君にたごに孝ある事年月をくれと、かはる事
なし、あにのたご、たごなごこひかなしみてみえしか
と、たもひわすれくさなうて、そのまらしたえたり、
そこの紫苑をうて、またそのまらしたえたり、心
さしねたごにして、あはれたごるすくならん、
云云これをきけり、紫苑はうれしきことあらん人
なり、うて見、なげくことあらん人なり、うふかから
る草なり、たごの志許草は、心さしものまらした
とて書なり、○詞林探葉、九條關白殿ハ紫苑ヲ
思草ト云也ト被仰ケルト、○わすれ草 言塵
集、わすれ草、一には菅草也、住吉のまのわすれ
草の是也、伊勢物語忘草を忍ぶ草とてくさ
あるも是也、和歌深秘抄、忘草の事、慈照院
殿すみよしの神主津守に御尋の時、まけたる桶
に入て、はりて封して進上あり、神秘のよし申上、
公方様御候ひつにて御覽ありと、もこのこま

た

ふ事戸次道雪か書簡に見えたり是乃鬼のこく楯籠るといふ意にや○
修鬼氣ノ祭といふ事清和實錄に見えたり

たにかいけ 丹波國大江山にあり此池にこけう又せうとていふ魚あり
山椒魚の如し、

たにがしま 鎮西八郎爲朝始の鬼か島に渡るといふ琉球を指ていふ鬼
界か島より起たる名なるいし、

たにがたのはた 延喜式に羅幡をよめり鬼形のはた也○釋名に羅、導也
所以導、操髮也とも見ゆ

たにきり 鬼斬の劍は新田義貞軍勝を祈りて日吉の社に獻せし處也或
乃義貞死に至るまで佩刀とすよそ足利高經獲たりともいへり○鬼丸も義

貞死せし時ともにはけりといふ鬼斬と同じく源氏嫡傳實とする處なり、
たにぐひ 鬼喰の義成へし伊勢物語に鬼一口に喰てけりといへりより先
一口喰をめていふ成へし○瓜に喰とす、禮、王藻に瓜祭上環といへり
是也注に上環、横、切之圓如環也とみゆ

たにくびり 光孝實錄に夜有長人見紫宸殿前左近衛陣有聲如
絞聲世謂之鬼絞と見えたり、

たにこぶこえ 伊賀の道にいへり鬼瘦越とかけり伊勢の界布引山の峠な
り、

たにしき 源氏にみゆ鬼らしきの義也、

たにどり 鬼取の義鬼喰に同じ泰、時尚食を置て膳を進るに先嘗る事を
嘗ると見ゆ本朝の内膳の職是也といへり鬼といふ浮屠家の生飯より出

たる詞にまさはの下考ふし

たにのま 鬼、間也清涼殿にあり南の壁に白澤王鬼を斬の繪あるかゆゑ
にいふと禁秘抄に見え間の良の方に三面三日赤色の鬼形を畫くよし眞
俗交談記に見えたり鬼門の意成へし○鬼門ハ西土の書に出て實ハ子丑
の間也我方にて丑寅の間を恐れ懼む事ハ日輪の始て地下を離る方角
にして始をなし終をなす日之女宮の所なるをもて成へし

たにば、 俗に奸惡の婆子を稱せり吳淑か誰名錄に鬼婆則天武后と見
えたり、

たにび 倭名抄に文字集略を引て燐鬼火也と見え鬼燐ともいふによれり
國々所々に多し本草綱目に人及牛馬兵死者血入土年久所化皆精
靈之極也といへりされど血にあらす膏油也と吾師の説也俗にいふ三昧
の火なども同じされど是ハ燐火にて鬼火ハ杜詩に陰房鬼火青と見えて

天狗火也三州遠州に多し山より出る時ハ挑燈ほどの火にして後數百
に分れて飛行すま、水邊に來るを天狗の魚獵といふとそ火中に鬼形を
現はすをたご火といひ神樂を奏するを神樂火といひ音楽を奏するを音樂
火といふ富士淺間立山白山叡山などにま、ありとそ野火の下と合考ふ

へし又痘神痘使の往來するも火をあく是も鬼火といふへし○燐火を避る
にハ馬鏡を相受し聲をなせば滅す是張華に金葉一振遊光飲尤といふ
者也

たにびし 寛文蝦夷亂の時敵せし蝦夷の將なりこなたの將ハ松前某也、
たにほし 鬼宿をいふ梵に布瀝星といふとぞ、

上封して、返しつかはされける。
 かにひ 漢名燐火、續紀、延暦八年秋七月丁巳、勅云云、海浦窟宅非須、人烟山谷巢穴唯見鬼火、著聞集、西京邊に住者あり云云、たひより出て内野通をゆきけるに、夜うち更て云云、應天門と曾昌門との間を通るに、應天門の上を見上たれば、層の上に真青に光る物ありて、から〜と笑ふ聲しけり、身の毛よたたりけれども、狐にこそ有らぬと思ひて西の方にゆくに、豐樂院の北の野に圓なる光ありて、男が前にてひびき來りしを、箭をばなすたりけるに、射をすを見ればとも、いひち行けん失にけり、○塵添塔囊鈔、狐火云燐火事、此燐ノ字三馬ノ血ノ心アリ、此ヲ以テ世俗ニ狐火トハ、馬ノ骨ヲ燃ナシト申シヤ、

かにむけのまつり 筑前那珂郡住吉の社に正月七日鬼平の祭として人を捕へ鬼とし追打ち終には石の柱に縛り置き又香椎の宮も同月同日鬼と稱しもてやし終には率ひて武内大臣の社の前にかめ置侍りぬ異域降伏のまほひといふ或は追催の遺法なりといふ、
 かにむしや 鬼武者の義今もいふ辭なり○頼朝卿の小字鬼武者といひし也、
 かにやらひ 雛を訓せり鬼を逐ふ也東京賦に卒歲大儺毆除群魔と見え乞食のた歳末とてする事も熙朝樂事に巧者塗抹變形裝成鬼判叫跳驅雛索乞利物といふ又ついなの下に見えたり、
 かによけ 三講一統に酒の事にいへり問答といふと見えたり、
 ○たの〜 各をよめり己々の義成へし續日本紀の宣命にたのもたものと見えたり
 たのがおし 物語に多く見えたり河海に日本紀を引て各競をよめりたを所見なし萬葉集には各寺師と見えたり各自の二字に當る己か自恣の義也といへり 自恣ハ韓愈詩に蟋蟀鳴、自恣と見えたり又佛家に七月十五日を自恣日といへり名義集に十四五六の三日とす于蘭盆經の疏に自恣者自己之過恣他所舉とすといふをよめりて言も我國の言なるいけりといへり貫之家集に たく霜の心ちわかる菊の花つらら色たたのかさこさる
 たのかせき〜 大殿祝詞に己乖不令在と見えゆきりともさきの略也相和せぬといふ

さま〜なる人行ちかた、たのかさ〜と思ふことこそありあめと見ゆ、自恣のいひからほしくまゝなりと訓なれり、音語なり、たのがさ〜といふも、己同士の音語歟、又同知歟、友とあはれんる同士の音語にありとす、さちも共においひ意同しければ、たぞら〜といへり音語にあらざるべし、たれども、今音語の出で〜といふ下にならず、淮南子主述訓、古之遺有司也、所以禁民使不得自恣也、注、恣放恣也、前漢書晁錯傳、獄官主斷生殺自恣、上下瓦解、各自爲制、類名
 たのがあり〜 各々散分の意なり、凡河内朝恒集、たもにわれかゝる山路のみみ葉のたのかさ〜 わかるとらなり、
 たのかさぞたも 萬世、三島江の玉えのこもをよめりしらのたのかさたもよめりたからわら同十六、くもひのたのかさたもひ、
 たのがなをのる 己名告也、萬十、めはたまの夜わたる鷹たほつかなくへんをてかたのか名をのる、から〜のたのかさ〜と見ゆれば、かへよめり、後撰、行か入るこもかこもたひなれちいふ秋のたのかさ〜と見ゆ、同、秋のたのかさ〜が入れたのまほひをよめりたといへりたのみ馬橋、
 たのいから〜のたの 續紀、たのいから〜のたのいから〜

たのがものから 古今集に見ゆ日本紀に因己物をよめり頼阿の我物がらと見ゆ
 たのかよ〜 伊勢物語に見ゆ己か世々の義各自に世を渡るをいふこと女の夫にたのたの男の妻にたのたのといふなり、ならぬ也後撰集に 笛竹のものをる根はかたはるも己か世々にいなるすもあらぬ
 たのころおま 神代紀に磯取島と見え古事記に淡能基呂島も見えたり淡路の小島也自疑島の義と口訣にいへり今胞島と呼は以磯取島島爲胞の説に据たる也丈夫島の義といふは假字をよめり入るの説也
 ○大同類聚方に於乃古呂樂見ゆ治卒倒之奇方而大伴道仲家傳之孝靈天皇勅大伴宿禰道船製少彦名命古方也
 たのづから 自をよめり己つから也從來如是なるをいふ
 たのづからなす 日本紀に造化を訓せり自然の義也
 たのれ 己をよめり萬葉集にたのれこそと見え新撰字鏡に躬をよめり天智紀にたのかさ〜と見え源氏に己等をたのらと書き詞花集に風をいたみくはつゝなみのたのれのみよめり○今昔物語に婦の夫を呼てたのれといひし事見えぬ今とがこれ○罵辭にたのれといふ
 ○たは 祖母を訓す古事記倭名鈔に見えたり本たははなるを略せし也たほちをたはちといふもたなし新撰字鏡に阿婆もよめり大母の義也大母、祖母也漢書注に見えたり○倭名抄に曾祖母をたはは外曾母を母方のたははといふ
 たのしませす 日本紀に御、字居、字などをよめり物にたはしましませすとも見え

たひにたひなるものなり... 是也古事記の順風を訓す

たひ 佩也、萬十三、あしゆかりの翅をみるこ... 古の女の帯、今の帯の如くは、廣き物に...

たひがく 俗に遊をいへり追掻の義なり... 腰の物にいふ佩金の義成へし

たひさき 生行末をいふ也草木にも幼穉の人にもいへり源氏にいひのた... 延喜式に負幸物と見えたり出雲國造に賜ふ所也...

たひにたひなるものなり... 祝也、男女同じ、大草殿相傳書に、帯直の祝...

たひて 舟にいふ詞なり順風をいへは負風の轉せる成へし... 舟にいふ詞なり順風をいへは負風の轉せる成へし

逐出之者

たひと 雄略紀、首をオウト、オウト、神代紀に、
 オウシ、オウシト、オウトをよめり、
 たひとまか、帶解易也、萬三、まつはたのたひ
 とまか入て、同十一、いし入のまつはたのたひをむす
 ひたれたれち人も君にいまし、
 たひとりがり、追鳥狩の事、今將軍家にて行
 はる、雄子の居る野原を、馬にてはせめり、
 六尺斗の竹杖にて、馬上より打殺を、追鳥狩と
 云、此名目、古代開えず、追鳥狩の古代のあせ
 鳥の遺る物歟、古代のあせ鳥の、野中に雄子う
 つらの居るを馬上にて乗廻し射るを云也、西土
 にも是に似たる事あり、傳威歟冬賦序、曰、子
 會逐會鳥歟、登北山、于時中冬之月云云、
 追鳥の文字、此文、據歟、頁十一
 たひのほる 源蓬生、あさちの庭のたひもみへすし
 けり、蓬の軒をあらそひてたひのほる、
 たひへまよひ たひへまよひ 源若菜上、猫のたひ
 へまよひ、俄にみよのつまより走りけるは、人々たひ
 へまよひ、
 たひゆ この假名、古書に見えず、されり未徴の
 なけれど、たひゆとたひゆ等の假名、みなわらうま
 のたなれり、それになたか、またたひゆ、たひえと
 かよ入り、不に通ひざる歟、大鏡八、類名
 たひる 起也、中務日記、御ひるよりのまをたひる

たひ

たひはぎ

たひはぎ 剪淫を追禊の義也行却も同じ、
 たひはら 追腹と書り追悼して腹を刺て殉死するを云戰國の餘習なる
 し近き世に禁制あり、
 たひぶくろ 倭名抄に膝をよめり襪之可、帶也と注せり三代實錄に納
 緒、帶袋千枚可、帶士卒腰底以支、急速之備を見たり○素をもくふ
 底なき袋也俗にうかへるもくふり
 たひまくる 追捲るの義なるべし、
 たひもの 佩物也日本後紀蘭の歌にたひものども見たり○天子の玉佩
 の一流を垂たまふ臣下の一流也鏝にて調へたり宇佐宮宣命にも玉佩寶
 鏡等を見ゆ
 たひやかす 却をよめり令脅也左傳に鞞字をよめり、
 たひゆ 脅をよめり大冷の義にや今俗肝をひやすなどいへり萬葉集に協に
 作る新撰字鏡に憎に作らたひやすとよめり又愕然又忙怕をたひゆとよめ
 り○源氏にたひれ見ゆたひゆる義可成とくふり
 たひゆるむ 萬葉集に吾帶緩むと見たり戀にこころゆる也文選古詩
 にも衣帶日、緩しと見たり
 たひわけ 追分也今も國々の所の名にもいへり新六帖に 旅人の野中
 の道のたひわけの名残り多くも行われぬ
 ○たふ 古事記萬葉集等生字追、字負、字をよめて生たたるもはたら
 けり靈異記に積をよめり追に同じ負たはらのほを略せり神代紀に披をよ
 むも同じ佩を新撰字鏡にたはらとよめり義もまた相通り○倭名抄に

そまきりたれば

たひれ 濱松四、いそあては、たほとかにたひれたる
 うまながら、らう、しほまひたかかたさへたく
 れす、源朝顔、もろかにたひれたる物から、ふかう
 まし、たたる所のならひな、袂衣三上、今姫君
 前アリ、歌うまれ、思ひ出て、いたうたひれあ
 とけなき聲にて、よしの川何かつわたると、一もし
 もたかす、ひ出給へるを、同八、大將公今姫ヲ
 笑て、只たひれて打里ひれ給へるにこそ、と思
 ひつるを、いと殊の外にたはしけるかな、源若菜下、
 女御のあまりやそかにたひれ給へるこそ、たひれ
 りなまなき心也、寐たひれなまやう也、明石女御
 大とがにやいらなる人と聞たり、
 たふ 負也、萬五、わかひれりみちのまきまらまひ
 りせむ下邊のつかひたひてをほらせ、同十三、は、
 のかたみだ、わかもたる真をみかかみにあまつひれた
 ひ並もち馬か入わかせ、同廿、たひそものそよまな
 るまよひなまきりたれば、
 たふ、萬三、酒の名をひしりとたひしつてしへの
 たほきひしりのこころのまらしな、同五、まほつひと
 ましつらまよひめしま懸にひれかりしよりたたる山の
 名、同九、君かみむその日まてに山たらしの風な
 ろまよひを打越て名にたたる杜に風祭せな、
 たふ、負、大物、年月をへて、人のなげきをたつ
 らら、たふもくほし、源若菜、なまなき人をぬすみ

たふ

始を訓せりされと古本に輪と書るを正とす

始を訓せりされと古本に輪と書るを正とす古三、反とも一音合とあるにて
 も知ぬへし本朝式に白貝と書せりさて爾雅を考るに貝居陸者賦在
 水者蝸とありて音合に見ゆされり蝸も蛤も通する成へし攝州にて大貝
 とひ紀州にて真貝とくふり式によれば白貝の尾張國の貢也新撰字
 鏡にの蛤また蝸又蛤を訓せり
 たふし 神代紀に殖をよめり生と義同じ歌にたはしたくふりかゝる生殖の
 義也殖をたつるよめりて人を養育る事にもいへり○倭名抄に瘡瘡をよ
 めり新撰字鏡に今たはしたくふり蝸子の音なるは羽州の俗にたはしたく
 へり○嘔子の夢の論に洞山初録に問不犯一切請師提綱師云嘔子
 得夢○たはしたくふりて其聲をくふ成へり
 たふしあま 倭名抄に凡海をよめり日本紀にたはしたくふりてあ、反も
 也
 たふす 倭名抄に拍浮を訓せり日本紀に全飽をたはしたくふりてあ、反も
 義也遊に飽を用る事詩經に見えたり淮南子に浮とくふり注に飽也と見え
 たりたはしたくふりて命をたはしたくふりて書る事續紀宣命祝詞萬葉
 集にも見たりたはしたくふり
 たふち 倭名抄讀岐の郡名に大内をよめりなり反も也○播磨備中の名
 に大市をよめりほり反ひなるをたはしたくふりてあ、反も也○通入りの略す、
 たふて 城の表をくふり追手とかけり搦手に對しつて古人の男軍なり、
 たふと 神代紀に首をよめり姓にこへり私記及倭名抄にたはしたくふりて見えたり
 の大人の義成へし○阿闍陀人も長上の事をたはしたくふりてあ、反も也○神代紀

出たりとぞきたひけん、横松三すくならぬれ入
 たをひ給ひて、つくしに流され給ひけるに、類名
 たふか 謳歌、世にいひふらすといふ事を、中比
 の人のかく書り、明月記、嘉祿元年十月十九
 日未時許、中將來、除目其日未聞、推之關
 東使和待歟、相國而逢、執柄給、今度所望人
 殊不聞、可承山答給、但範輔一定補由、謳
 歌云々、

たふくろ 康富記、享祿四正九、今曉室町殿
 姫君誕生也、御袋、大館兵庫頭妹也、
 たふごに 逐毎也、萬十七ゆかりにちどりふ
 みたてたふごに、同八、ほら、ききすなきしすなほち
 君か家にゆけとたひしつたりてむかも、同、ちほ
 と、きす、隨のうら悲しまたたへん、なほもきき
 きて云々、格
 たふしたて 源夕顔、御あたりさらにはたふしたて給
 ひした、

たふす 負、たほす、躬恒集、なげきのみたほえの
 山乃ちかけれと今ひと坂をこそかかつる、素性
 法師集、木つたへたのか羽風にある花を誰に
 たほせてこらなむら、
 たふな 知照抄、あふな、とら名のあひ
 あふ意也、源竹川、なほか、たふな、開い
 れんと思ひて(弄念比也)同宿木、いとほし、
 かたふな、思ひ、心きして、年経給ひぬるを、

に首をたがしとすめり姓にいふ名也
 たふな 伊勢物語の歌に見ゆあふな、とある、然るへし眞名本に
 随分と書たれのほに隨ふ意重荷を負にたとへたる詞なれたあな
 るへし又源氏にたほな、とも見えあふたがと例あれ、一、義なるにち
 又源氏などにたふな、のたまふて語あるも皆身の分を盡していふ意也
 本續日本紀の宣命に書たる辭にして物を負よりいへる語也此歌六帖に
 になきたもひの部に入たりされ、隨分の字よく聞ゆ白氏文集になつ、
 と點し朗詠になつ、と點せる、皆謬なる、

○たへる 生も追も負も同しへる、反ふ也
 ○たほ 古事記日本紀等に大をよめり類聚國史の歌に御物をたほもの
 とよませたるによれ、御も同し、○凡をよめるも大の義也萬葉集にほたに見
 しかつとよめるたほよとに見るをいへり、○姓にたほの朝臣あり太また多と
 書り後世の姓に飯富ありていひとよめりされと飯の飯、字の誤寫飯富
 たほとよみて大和十市、郡の郷名なるを和名抄に誤り記せり十市、郡
 多坐彌志理都比古神社二座多村にありて是飯富也、○日本紀人の
 名に般をよめり、○邑をたほとよむ、日本紀人の名に邑治を或祖父に作る
 倭名抄石見の郡名邑知もたほとよめる是也、○碩もよめり大學に其苗
 之碩なるあり

たほあらき 萬葉集に大荒城の時と見ゆ壘送の時をいふ成へし、○大荒
 木の社、京より鞍馬に行路也能因か歌枕にも見ゆ新古今野州抄に、
 淀の近所と有り水垂村淀姫大明神の社也

朗詠、管絃、隨分、(う)管絃還自足、等閑篇
 詠被入知源少女、右大將民部卿などのたふな
 かなはらけの給へるを、林葉

たほあき 今ながにしと云、翠山云、古書に、にし
 と云、長にし也、本草和名曰、辛麻子、似申
 螺而口有蓋、蓋似甲香、和名於保阿岐とみ
 ゆれり、於保阿岐のふたりのふたに似たる證と
 すべし、和名抄及本草和名に大辛螺を阿岐と
 す、本草和名に甲香阿岐布多と見ゆれり、阿
 岐の香螺、(う)なること明なり、又和名抄に小辛
 螺を仁之と云、出雲國風土記に、鹽橋島有、
 蓼螺子と云者にして即寸に満たぬ岩にして、
 長にしを指して仁之と云るに非ず、散木集、あふあ
 まのくちあし、もの、くはれぬ、にし、くちあ
 のこそ、思ひ出らるれど、ひけるを聞ても、あて
 はせけるに、からみといへる所り、からしとて、は
 りけれり云、大草和傳之聞書に、しつほり
 の事、下にひばを鋪、其上にゆかい敷を敷、其上
 にしなもる也、高さ三寸たるべし、其上にたなを
 ひ候、にしつほり、わきのかつらを取て、ま
 かりを切はなし、堅にうすいし、にし、の料
 理、けし、か、な、よ、く、す、て、酒、に、て、す、り、た、て、
 能、こ、し、て、た、な、を、少、く、は、し、し、な、よ、き、か、け、ん、に、
 は、せ、る、時、り、す、こ、し、せ、う、の、こ、を、ひ、わ、り、か、け、て、か、き
 あ、へ、る、也、○赤にし 大和本草、赤螺三寸短シ

たほあらめ 保元物語に黒唐綾をふとく疊て威したる大荒目の鏡と見え
 たり、
 たほいき 類書纂要に大聲、嘆、曰、大息と見えたり、
 たほいこ 大和物語にみゆ大子の義姉を稱せりたほいきと見えたる、同
 意也、○たほいこ、近江高島郡の大力の女也、宮著開集にみゆ、
 たほいし 文徳實錄に置大石龍華二關と見えたり大石、近江栗太郡
 さくら谷の地なり龍華、滋賀郡三井寺のあたり山城愛宕郡小出石村の
 北也、是山城近江の界にて康富記に龍華界といへり、○大石内蔵介、先
 祖出し處也、

たほいさらすつかさ 和名抄に大外記をよめり、○内記うちをさすつか
 ざし、
 たほいた 豊後の郡名大分をかひり、い、と、通、す、
 たほいまらちぎみ 倭名抄に大臣をよめり日本紀に大連をよめりたほま
 ちぎみとみひ、萬葉集にたほま、ちぎみと見えたり、○清朝に内大臣の官あ
 り
 たほいまつりごとのつかさ 和名抄大政官をよめり
 たほいみまつり 祝詞に廣瀬大忌祭見ゆ式に廣瀬、郡廣瀬、坐和加
 宇加、賣、神社とあり文徳實錄同し天武紀四年四月よりを舉る持統
 紀に毎年四月七月御使あり、○祝詞に廣瀬の川合とあり、今も此所を川
 合村といふ、初瀬川の末、東方より佐保川の末、西北より流れ来てこ、
 に合て大和川へ入なり、廣瀬の名も此義也、○四時祭式の此大忌祭の

肉赤シ、味美アリ、介品、紅螺俗ニ赤螺ト云、大小二種アリ、

たほあらしきるとき 天皇のみことかしくみ大荒城の時にあらねど雲かくれます、顯昭云、萬葉云、神龜六年己巳、左大臣長屋王賜死之後、倉橋部女王作歌也云云、大あらしき云事、森ならねど、人のあめる事にも云入まにや、はるをいふにや、奥城と書て、たつつかともよみたきつきともよめり、奥城ともかける奥城所ともよめり、されど大荒城と云はるにあらまじつかともいひつへし、あらかきなど云同心也、補中

たほあらしきるとき 次嶺繼ハ大荒木たあらしきとよむ習ひこそ、死期をたほあらしきとよむとて入る故によりてなり、今案に、たほあらしきとよむ大嶺時也、嶺をあらまじと訓り、かりもがらともいふ、嶺とてかばねを楯にをさめて、かりにうづめ道をつか、嶺宮をば、もがらのみちとも、又あらしきのみちとも訓はなり、類名

たほいこ 大鏡四、故みやすん所の御姉たほいこにあたり給ひけるなん、いとらうし、注、たほいこハ一の姉也、男にてハ大郎と云、又、かの舟あひのあつちのままのたほいこ、都ちかく成ぬといふをよるこひて、

たほえ 和名於保江、朝野群載、山城國四境大枝界西界也、園大曆、觀應二年正月、或

條に是日以御縣六座山口十四座合祭といへり

たほうた 大歌なり五節に大歌小歌あり大歌所など稱せり大歌生を見えたり内裡式踏歌に大歌立歌とみゆ、
たほうたごころ 職原抄に別當知大歌事納言以上補之と見え建武年中行事大歌所に別當大うたもよほして舞めのほると見ゆ
たほうち 大内をいふ持統紀に内裏も訓せり南北十町自一條到二條東西八町自東大宮到西大宮○大うち山も同じ源氏に諸共到大内山の出つれとよめり左大將の直廬中の重にありといへり兼輔のうたに白雲の九重にたつ宿なれば大うち山といふにそありける又仁和寺の山をもいへり亭子院のたつしませし所也よて御室ともいふなり衣笠内府遙かなる都のいぬわか宿は大内山のもとなりけり

たほえ 日本紀に大兄をよめり皇子にのみ稱すあがみ辭と見えたり姓に大江あり大枝あり○たほえ山といふ野とよめり山丹の界にして和名抄山城乙訓郡に大江郷見ゆ今たの坂又たなげ坂といふ園大曆に於伊山に作れり源忠顯の西山峰堂に陣せしといふ所も同じ○大江廣元ハ匡房の曾孫也○大江定基ハ江納言維時の孫也出家す寂眼とていへり

たほえがき 覺書に義籍記也といへり、
たほえぐさ 應詞に鳥のあつちのたつたるとたもふ所をいへり、
たほえごの 齋宮歸京の旅館にて大和路をへて掛津に趣き難波にて祓ありて大江の儲所へ着たまふといへり、
たほえび 論語注に紳大帶也とみゆ和名抄に博帶も同じといへり、

たほかよび 和名抄に掛をよめり今いふ大ゆひなり又たゆひといふ、
たほが 和名抄に轡車をよめり轡を表て糸をさる具也又くるとも訓せり
たほ車も同じ○今俗大録をいへり袖に用る器なり○姓に大神をよめり三輪明神の後なり又鉦鹿をよめり魏氏なりといへり、

たほからぬし 神宮に大神主ありし事見ゆ今いなし、
たほがさ 和名抄に篋をよめり史音義に篋有柄也とみゆ、
たほかしわてのつかさ 和名抄に大膳職をよめり、
たほかた 大方と書て十に七八といふ意なるをもて俗に多分ともいへり大抵を譯せり○たほかたはとよめりつよく思かへして看れりの意也

たほかたびら 大帷なり東帯色目に冬ハ白夏の紅染老者の香染此を單の下にかさぬ夏の汗とりとなるといへり装束略抄に古ハ汗取の帷と名け夏はかりなりし近代ハ夏冬ともて用ひらるは衣文のため也とみゆ、
たほがね 和名抄に洪鐘をよめり明徳四年に明よりわたせしハ相國寺に附せり、

たほかのへ 萬葉集に大川淀ともよめり大川邊なり又萬葉集度會大河邊若歷木とみゆこの今の宮川をいふ成へし、
たほかふち 大河内と書り凡河内の轉せる成へし日本紀に大河内とみゆ伊勢飯高郡の郷名にはたかかちと呼氏姓にたほことと唱ふ多氣の分れの壘あり系圖には源三位頼政を祖とす又姓氏錄に凡部氏ありされは凡河内も復姓にて凡氏の河内にち、
たほかる 多く有なりとあ反かなり、

たほ 人云、北ノ手、自於伊ノ山入來、又南方合戰以ノ外也、京方、勢引退鳥羽邊諸陵式、大枝陵、贈大皇太后高野氏、在山城國乙訓郡、兆域東一町一段西九段南二町北三町守戸五畑、續紀、延曆八年十二月、葬於大枝山陵、上諡曰天高知日子姬尊、皇太后始和氏諱漸笠、贈正一位乙繼之女也云云、生今上早良親王能登内親王、寶龜中、改姓爲高野朝臣、名勝志、按大江の山越は、丹波國龜山の通路にして、山城國七道の一也、此山に登る坂路あり、大江の坂と云、時に地藏堂あり、大江の地藏といふ、それより西に下ると一町餘にして、山城丹波兩國の境あり、然れば大江山の山城の内なるべし、されども三十八帖歌枕、其外名所集等、みな丹波の國に入たり、和名抄、大江卿山城國乙訓郡に入れり、後人これを詳らかにし、今按、今大江の郷はなし、大江の坂の麓にある沖掛村塚原村など、此郷の内なるべし、岡田耕筆、山城丹波の堺、檜原の西に、俗老の坂と稱ふるものあり、大江山の坂を誤るなり、和名抄、乙訓郡大江とあり、慈鎮和尚の歌にも、(大江山かたかち月のかけさえて鳥羽山の面に落ちるかりかねとあるは是なり云云、又丹波の堺なるもの、酒天童子といふ賊のこもりし所にて、今千丈、嶽といふ、大江山といふ、み

物なならししたりしものを、けふ思ひ出れり、むかしも心のゆるふやうにもなりしかり、我心の花ほけなきにこそありけれ、大鏡八、世継かか、いかばかり御心に入て、いごみさせ給へりしかり、それ女房の御心の花ほけなきなり、さばかりの事を、すたれにちしてわたり給ひにしつとも、あましましかりし、そかしな、○花をかきき意にち、たけなきごの異なり、類名

花ほさう 源氏書本、せちにかくし給ふべきごの、かちうに花ほさうなる、みづしなごにうちたきあらし給ふべくもあらず、岷江入楚、大總なり、大やうなるなどいふ様の心歎、大方の心なり、今思ふに、大總の音訓相交れり、音語にのあらず、方言なるべし、孟津抄、大總大郡をなまむきなることなり、花ほし 生也、萬三、わかやごにからあつみたふしかれぬれごりすて又あまかちごたも、同廿、まひしつゝきみかたほせるなごしこか花のみごはむ君ならなくに、同三、つゝまのにたふるご紫さぬにそめいまたきすしてゐるに、いごにけり、

花ほし 本草大黃、延喜典藥式、元日御藥大黃一兩二分、明月記、嘉祿三年二月十五日未時、請招心寂房令見病者云云、付大黃可試由前之、古入遣唐使往來ありて、眞の大黃を傳へありし也、典藥式に見ゆる大黃の御藥園に作りしもの也、

大黃あり○凡字をよめり凡海凡河内などは是也續日本紀に改大押、字仍註凡直と見たり

花ほしあま 凡海をよめり姓なり和名抄に郷名にたふしあまと見たり、花ほしめす 續日本紀の宣命に所念行とかけり萬葉集には御食とあり、花ほしま 大島とかけり萬葉集によめるの周防の國也、

花ほちやうらふ 海人藻芥に大上臈と申の攝家の御女也と見ゆ、花ほす 神代紀新撰字鏡に債をよめり○課又科をよむも同し○倭名抄に負をたほせとよめり覆也

花ほす 日本紀に欲、字思欲、字意望、字などをよめりたほすの略也○同書に謂をたほさくとよめりさ、反す也

花ほすみ 大隅の國の字の如く南海へさし出たる國にて種か島やく島なども此國に屬せり○相摸國の郡名に大住と書り

花ほせ 倭名抄に負をよめり今負の義也○科課をよむも義同し相をたほみごといふ事源氏又徒然草に見たり字書に課の試也とみゆ課命士などいり○日本紀に命、字をよめり續紀萬葉集にも見ゆ仰と書り異體也今仰字を用う北齊の比より用來れりと群碎録に見たり○俗に事を終るをたほせるといふもせる、反すたふすの義也

花ほせがき 朝野群載に仰書とみゆ枕草紙に心にくき人の所へつかりすへきたほせ書と見たり撰集抄に上東門院へかくと申させ給ふに中務と聞へし歌よみの女房のたてまつりの御返事に見えたるも同意成へし遊學往來に仰書者現入水向御前摺墨染筆後可申案内と見たり

花ほせぶみ 仰文とかけり朝野群載に見たり、花ほせりうたふ うたいものゝ名なり大芹の芹の大なるをいふなるへし、

花ほそ 御帶をいふ女中詞也、

花ほそら 日本紀に大虛又虛天又虛空をよめり○俗に親切ならぬ意にいふも紫式部日記に見たり虛空より出たる詞なるへし

花ほた 太田と書り元弘東官歟兵に太田守延あり、花ほたしく 樽悞をよめりたほつかなき意なるへし

花ほたか 大高と書り紙の名即檀紙也、

花ほたけ 倭名抄に淡竹をよめり今いふ葉竹也といり○今の口語に大竹といふは淡竹に限らず、

花ほたぢ 大館氏明太平記にみゆ世田城主將たり○武烈紀の歌にみゆ大太刀の義なり、

花ほたに 大谷なり洛東にあり扶桑略記に承保元年上東門院崩八十

六葬于大谷相摸家集に あはれ君雲のうへにも大谷の煙とならんかけとやの見し其塔智恩院の正堂の西にあり、

花ほたふ 大塔也叡山にあり護良親王始め延曆寺の座主となり大塔にましませるをもて大塔宮と稱せり其始め十津川に置れし元從の臣赤松律師則祐村上義光平賀三郎を三架と稱す後に鎌倉に流さる足利家土牢を鑿ち幽す其弑せらるゝに及んで年二十八といふ五寶山理致光寺に石塔あり又牌あり没故兵部卿親王尊靈背に建武二年七月二十三日と見たり寺は土牢の東南也高野山舊翰の中元弘三年の下に尊那

花ほしき 欲、たほしきなり、たほしきごもいふごもに同し事なり、萬葉集にも欲を訓り、蜻蛉上猶あましく例の心ちたかひて、たほゆるけしきも見ゆへけれり、ちんごなき僧などよひたごせなごしつゝ、心みるにならぬにかにもあらわり、かうしつゝ死もこそすれ、にはかたつたほしきごもいはいはれぬものにごそ、あはれかごはごなる、いごをたしかるへし、類名

花ほせたまふか 仰賜也、萬廿、しほ舟のへこそちらなみにほしくもたふせたまほかたものすへなみ、花ほせり 本草當歸、催馬樂、たほせりいごのたもの、こそごそ、ゆでともむまし云々、延喜典藥式、元日御藥當歸一兩、花ほせる 拾玉集、あはれなるみ山の春のあけほのになきたほせたる鶯の聲、

花ほそら 源少女、たほそらのみちつかへりり、たほそらつてまじ、同關屋、たほそらにてかひなし、たほそらなほのこに近し、空穂藤原君、大空にて皆をこし給ふなるに、同春日詣、よ一よ大般若花ほ空によみつゝ、林葉、大空のたほそらに同し意なり、類名

花ほたかひ 本草蚌、今ごぶかひといふ、大和本草、蚌カラスカヒ、下分ち、江州ノ方言ナリ、琵琶湖ニテリ、長七八寸アリ、他州ニ池壘處々ニテリ、海ニハナシ、食スシ、本草啓蒙、蚌、湖中ノ産ハ大

ニシテ、或ハ一尺ニ過ク、形状狹長ニシテ、一頭廣シ、殼外ノ薄皮色黒シ、故ニカラエカト云、樹南嶺が東遊記に、越後新瀉邊の江中に大なる蚌住み、明珠を含めるとしを記せり、

花はたくみ 大工也、古下、花はたくみをなみなこそすみかたふけれ、日雄也、あたらしきるなへのたくみかけしすみなりあかなけたれかかむよあたらし墨繩、

花はたら 本草食菜菓、今からすのさんせうと云、本草啓蒙、食菜菓、木ノ高サ二三丈、枝條繁茂ス、木ニ尖刺多クシテ摠ニ木ニ似タリ、春新葉ヲ生ス、山胡桃^{カニコ}葉ニ似テ狹長鋸齒アリテ

刺多シ、凡ソ一葉三十餘ノ小葉排生ス、夏梢ニ花ヲ開ク、數百篠リテ崖椒ノ如シ、實モ亦相似タリ、内ニ圓子アリ、椒目ノ如シ、

花はち 大路也、萬十九、春の口にはれる柳などりもあてみれのみやこの大路花もほゆ同十五、あをによしならの花はちのゆきよけこのやまみちのゆきあしかりけり、

花はつかなし 堀首首、春霞まかまの海をこめつれの花はつかなしあまのつり舟、信云、俗言に云ふに近し、

花はつかなし 無覺東、花はつかなしの志をみどくさうかしの例なり、拾玉集、まゐりつるをどめの姿ほのかたて花はつかなしの夜はのあかりや、

花はてら 大寺也、萬四あひたのぬ人をたもふハ大寺の猿鬼のあへにぬかひかひ、

花はつき 源若菜上、さあまら花はつき給入、けにしそのあやし、花はつきかりけるなりや、同帶木、文をけと花はつきに事えりせし、同、かたぢかしく打たはつきをわかかたてまきかし事をなほ、

同前木、花はつきつしけなれり、狹衣一、年の廿にそがりたまひけれり、くた、花はつきすき、あまのいはけなものはかなきまは、

花はどの 大殿也、萬十九、大どのこのもどほりの雪なみそね々々、同十三、花はどののみみりあみ、ついでたて云々、

花はどの油 貞觀儀式三、踐祚大嘗祭儀中、悠紀主基兩國進、御殿油二斗、延喜式大嘗祭式、悠紀主基二國進、大殿油二斗、空藏明、

花はどのの桃 みたかしの濱、萬一、大伴乃美津能濱爾有とあり、神武紀に、瀬都瀬都志俱梅能固遷餓、

と書し花押あり是大塔宮也といへり○信濃戸隠山、西南に鬼無野村ありきなきの南に大塔といふ處あり大塔記といふものに應永七年小笠原長秀信濃守にて下向の時國人と不快の事出来て云々頼阿信濃の名所見んとて長秀に伴なひ下る思の外に事起りて籠城の内において究詎言語に絶たり よしさらになくまめかめる身のうさを姥捨山の月にかたん草庵集に見えたり長秀の三讀一統の作者とす

花はちから 日本紀に大税と見え或はちからと云む延喜式に以五把爲東といへり又斤税ありよと大税を儀式帳に大半斤とも見えたり令義解に凡官稻之源出自山租即分爲三二曰大税二曰粉穀三曰郡稻也とあり或説に此税の一國ノ一に貯置也たとへり十五萬束の稻を民に割つて貸其元を大税といひ此數の毎年毎に動かさず置て其貸たる利を取て京に上る是を粉穀といふ粉にて上るゆへなりといふ

花はつち 萬葉集に大土も採られたれと見ゆ古事記に大土神亦名土之御神とみゆ倭姫世記に土の御祖神みゆ、

花はつみ 和名抄に大鼓をよめり今音を呼へるものとば異れり、

花はつゝ 大筒の義也銃也鉄砲より後に渡り堺の道逸始て張れりといふ、

花はつふね 後撰集に見ゆ在原棟梁の女也といへり大津舟のやうに聞ゆるを大和物語に花はつほねと見えて大局の義也といへり

花はつほ 倭名抄に虎子を訓せり延喜式に大帯とみゆ厠、具也源氏に花はつほつほと見えたり大御虎子執の義成へし

花はてら 大宮大寺と號し又大安寺と名く萬葉集に相たもはぬ人を花もあハ大寺の餓鬼のあへに額衝か如是也、

花はたれ 鹿をいふたれと同じきにも覆ひ垂の義成へし、

花はち 大内をよめり元弘建武の時に大内義弘あり初め王を勤め後足利家に降る大内の邑名もど々々良氏也神器の京に入しも義弘か和を講せしにより周防の山口に居れり○大内義隆渡紙于明朝而書籍をす是を山口本とも大内本ともいふ朝鮮の金安國が慕齋詩集に大内氏遠价を遺し朱氏新注五經を求む韓人慕學の厚を嘉尚して送り程傳、易朱傳、詩胡傳、春秋蔡傳書鄭註、禮記也

花はち 祖父をよめり倭名抄にみゆ大父の義也大父ハ漢、張良傳に見えたり神代紀に祖神もよめり○曾祖父をたほく、お外祖父を母方のたほちとよめり爾雅に父之考爲王父父之妣爲王母と見ゆ東王父西王母の稱も是より出たりけん○大路をもいへり○伊勢物語のたはつちがたなるに眞名本外舅と書り行平卿の女更衣文字清和の皇子を生まつれりよと業平をたはつちがたといふ

花はつ 六月祓に大津邊にる大船とみゆ船の泊る處を云なり○所の名に呼も是也、

花はつか 建武年中行事に紙ひねりめして大つかにゆひてとみゆ大束に結ての義なり雲圖抄叙位の條に若有難之中文並无持事之中文密々置閑下謂大未是也と見えたり、

をほめていふ也、もと大久米部も大伴宿禰の
ほつたや道臣命のつかせられる所なれば、上の神
武紀の歌も只一義也、同四に、みつといはじ
共つてよめる、又同一、大伴乃高帥能濱と
あるは、談士(一)連(二)の或の高志ともあり、姓氏
録にみゆ大伴よりわかれたる氏なれば、かくつてけ
たり、こゝに高志氏の、此たかしの濱のわたりに
住たるより、そこを名につけたるよしなれば、いよ
こゝに此義に隨ふべし、

ねほどり 大鳥、和名於保止利、神名式大鳥
神社、三代實録、貞觀元年九月、和泉大鳥
神、姓氏録、大鳥連大中臣朝臣同祖、天兒
屋根命之後也、和泉志、大鳥神社、慶長中
罹兵火、元祿中僧快圓、興建神鳳寺於域内
寺隅、僅存小祠、一宮記、大鳥神社、日本武
尊也、和泉大鳥郡、逍遙院内府高野參詣日
記、廿二日高野に參詣のこと思ひたてて云々、
云々、
ねほどりの此詞 はかへの山、萬葉二、大鳥の羽
易(三)の山に卷十、春日なる羽がへの山ゆ云云、
はかへの山よめと、卷一に鳴之羽がひに霜ふりて
よめる如く、左右の翅をかはす意にて、事もなく
ついでつらんといふ人もあれと、穩にも聞えず、大
うち過て云々、

ねほどりもちのみ 和州吉野郡大臺山玉置
山釋迦嶽嶽山上嶽及北山十津川天、川
紀州熊野山中ニ多シ、土人山中ニ入テ、皮ヲ剥
テ、池澤ニ埋メ後搗テ繭ト成シ、其木高サ二三
丈葉一處ニ叢附四時不凋、形状女貞(四)葉
ニ似テ厚ク、末尖リ葉長ク鋸齒アリ、初夏花ヲ開
キ實ヲ結フ、豆ノ大サノ如シ、木ニ雌雄アリ、雄木
ハ實ヲ不結、繭ヲ製スニ良也、新修應經曰、凡
剪葉者方一寸繭者一寸五分、用大綱樹葉
煮而陰乾、古

ねほとれる 劣也、萬十六、ふちのきにはひたほと
れる、をかつらたゆるいごなみやつかへせむ、源手
習、髪(五)のすみの俄にたほられたるやうに、しごけなく
さへ、そかれたるをむつかしき事ともいひて、注、髪
ノウミタリカハシラカレタル云、源東屋、大路ち
かき所にたほされたる聲して、いかにかきしもど
つかぬのりせしと、打むれてゆなぞを聞ゆ、枕四、
ス、キノ所ニ冬の末まで、かしらとくしむたほとれ
たるもあらで、昔思出顔になひきて、手ひるきたて
るに、人にこそいみしくにためれ、

ねほな 源氏物語、たほな、たほしいたつ
く、秘抄、懇切成也、

ねほ

書り或の客字をよめる穴倉を二合したる倭の俗字也

ねほと 日本紀に幕下又臥内或の側をよめり御所の義なるへし皆天皇
に就ていふなり
ねほと 令義解、序に穩をよめり又汪洋を訓すとへり榮花物語にか
ぎりなくあてにたほとかにたほとするなめり見えたり大解の義なるへしたほと
けとも枕草紙に見えたほとまともいへり紹巴の書に令穩二字をよめり
ねほと 倭名抄に榎をよめり大床にも榎を覆ふものにて榎榎ともに入角
にすといへりされと大和阿倍の文珠のあたりに上代の貴き人をはふりたる
墓とたもりの、岩屋ありて屋の形したる大石あり其構いと大きな石を方
に作り内を多りぬきて棺を収めて上に覆へる石を室の如く作り是古へ
の大床成へしといへり西土にも无底曰榎といへり

ねほとし 周禮疏に大蔵在地與天上歳星相應而行と見えたり古事記
に大年神ましませり、
ねほとし 日本紀に夫人をよめり大刀自也萬葉集にみゆ萬葉集に藤
原、夫人の注に字曰大原、大刀自とみゆ大原即藤原也
ねほとち 和名抄に茶をよめり新撰字鏡同し又藤をよめり袖中抄にま
つていふとみゆいへりをみゆ入しに似て花の白きを今もまがいへり、
ねほとねり 和名抄に大舟人をよめり日本紀に帳内をよめり又抄に
寮をつかまざむ、
ねほとの 日本紀に正寝内寝正殿などをよめり大殿の義即寢殿也○
親殿といふ意にもいへり埃菴抄に攝政關白を御子にもちたまふ大殿

と稱すと見えたり海人藻芥に關白の息を殿、大將殿、大納言殿、僧正
殿、法印と申へき也といへりも同意也源氏に大殿の宣旨などいふ是也
ねほとのごもり 伊勢物語源氏に見ゆ大殿隱の義御寢をいふ也洵會
に婦人稱寢曰宮々者隱蔽之言也といふに同し萬葉集に大殿をつか
まつて殿ごもり隠いませいと見ゆ
ねほとのがひ 延喜式に大殿祭此云於保登能保加比と見ゆがひ、
反ぎ也壽に同し祝詞も式に見えたり其殿に英なからんため祭也○儀式
に神今食大嘗祭前後必有此祭とみゆ月次祭と同日に行へり、也四
時祭式に神今食明日平旦と見ゆ古語拾遺に天富、命率諸、齋部
捧持天璽鏡、奉安正殿、并懸瓊玉、陳其幣物、殿祭祝詞其祝詞
在於別、卷と見ゆ別卷の延喜式の大殿祭祝詞をいふにや

ねほとも 大伴と書り大伴氏の道臣命より始て代々に武功を立てたり○
大伴のみつとつとけよめるのみつとくしめをよめるに同し久米部の
大伴氏の帥ある者なるをもて也高師ともつとける、姓氏録に高志壬生、
連日臣七世、孫と見えたるによれり○大友氏の頼朝の時其母寵を得
て有身す藤原能親に嫁して能直を生む能直母、姓を冒す豊前豊後の
守護たり世々を歴て元弘に及び帝舟上に移り給ふ時貞宗義に起り後
終に尊氏に臣たり

ねほともひ 倭名抄に辨をよめり大にたほひといひ中になかのといひ少にす
ないといへり天武紀にも大辨官をたほともひのつかさどよめり西宮記に大
朝火の官政とも大朝火の大夫ともみゆ大給ひの義辨給の意なるへし節

記、或時幽齋紹巴德永法印桑山法印清洲法印善淨房などを始として、各御伽申さるゝ折節、夏菜種のおくれて見事なるを、御菓子に出さるゝ、秀吉公被仰ける、草木心なく、いかてか、種をばらむべきと仰られて、打わらはせ給ふ、各承て尤の御不審にて候と返答申されける、
 たほねむし 漢名蝗、爾雅曰、食苗心螟、食葉蝻、食節賊、食根蝻、疏舊説云、螟蝻蝻蝻一種也、螟ハ葉ハシ、綠色蝻ニ似テ小也、蝻ハ葉ハシ、葉ヲ食ラシ、蝻形ナル三種多シ、一種草木ノ新芽ヲ食テ綠色羽アリテ、蜻蛉ニ似テ、小ナルサネキリ虫ト云、大小數種アリ、イナモト此ニ屬スレトモ、稻葉ヲ食ラシニシテ、稻ヲ害スル少シ、賊ハ節ハシ、草木ノ節ヲ食ラシ也、蝻形ニシテ白色或ハ黄ヲ帶、禍黒ノ牙アルアリ、蝻ハ葉ハシ、根切蝻也、蝻形ニシテ白色、黄ヲ帶、地中ニ居、大小品數多シ、續紀文武紀、大寶元年八月辛酉參河云云、十七國蝗、以下類聚國史等にも蝗の事見ゆる多し、古語拾遺、昔在神代、大地主神營田之日、以牛穴食田人、于時御歲神之子、至於其田、唾糞而還、以狀告父、御歲神發怒以蝗放其田、苗葉忽枯損似篠竹、於是大地主神令片巫眩巫占、求其山、御歲神爲祟、宜獻白猪白馬白鷄、以解其怒、依教奉謝、御歲神答曰實吾意也、宜

賴之徒あり誤て鳥銃を發す於是藤堂高虎の前將支耆男女數千人屠戮して子遺なし
 たほね 舊事記に大禰の官號見たりす、ねの如し大禰ハ大兄の義宿禰ハ少兄の義也、和名抄に菑根をよめり大根の義大根ハ爾雅の注にみゆ今昔をよめり菑菑菑菑も同じ出羽にてたかたといひ紅毛語をうらていすといふ土たほねも同じ尾州の宮崎關東のねりま共に地名なり波多野ハ相州也自然生の物を賞す、江戸にはたなといふ京になかねとし大坂にほそねとす膽吹より出る鼠大根ハ薄菘野大根ハ天巧菜也伊吹山高島郡にあり唐大根ハ屬菘菘菘ほし大根ハ仙人骨也といへり、○俗に根草とよび又たいこなといふ物狼芽なり大葉の物ハ天芥菜也痘瘡に用うるハ此物也花肆に云物は水楊梅なりといへり、
 たほねむし 和名抄に蝗をよめり大稻虫の義成へし今いなむしといふ總稱也、○三代實錄に弘道王爲蝗災祈請宗庶幣使す蝗忽蜂蝶と成て飛去とみゆ東觀漢記に馬援武陵の太守たる時蝗皆飛て海に入化して魚蝦と見えたり、
 たほのか 八雲御抄にゆたかにいかなる意也と宣へりたほかと同義にや、
 たほのかはら 萬葉集に真こもかる大野かはらとみゆ大野ハ日本紀に大和高市郡にあり、
 たほのさ 俗語なり緩急の意にいへり大麻より轉したる詞なるへし古今集にもいへり心は大ぬきにしていへり六帖にみな月の夏をの山の呼子鳥大ぬきののみ聲の聞ゆる住吉の東北に夏越の岡あり、
 たほば 大庭と書り姓にいへり實は玄關前白洲などいふ是なり或ハ内庭をよめりされは場もにの略なるへし、○大庭の社は出雲意宇郡にあり殿制大社も同じ伊弉册伊弉諾兩社八重垣社之神ハ伊弉册尊也此波山といふ是也、
 たほばかり 神代紀劔の名に大葉刈と見ゆ葉ハ刃の義成へし刈此云我里と見えたれのかを測りてよむへし又古事記に大量に作るに据ハ古語拾遺に以天御量伐大峽小峽之材といへるは同じ材の大小によりて伐の器も異なるにより量るともいへるにや、
 たほはし 海東諸國記に肥後州大將軍大橋朝臣政重と云人漂流の人を送るよしみゆ肥後守平貞能肥後國大橋の城に住してより子孫大橋をもて稱號とす並合記にくわし、○大橋和泉守信重ハ宗良親王の曾孫也尾州津島神主の初ハ良新の弟母ハ大橋定省の女也、
 たほはら 山城乙訓郡、郡也大原名所記に西爲小鹽山東爲北野山、以川流爲界、○大原野神社ハ文德實錄に仁壽元年別制大原野、祭儀一准梅宮祭とあれハ其近きほどに春日皇神を移されしなるへし或説に嘉祥三年閑院左大臣初て此に移し玉ふといふ誤也此公ハそれより前天長三年に薨し玉へり江次第に大原野行啓起五條、后順子以藤氏勸學院衆爲車副二條、后高子以姪乘車、後在後中將書和歌與二條后歌略之人疑先是若有密事歎歌ハ伊勢物語の、大原や小鹽の山もけこそは神代の事もたもひ出らめなり三代實錄に真觀

以麻柄作持、乃以其葉掃之、以天押草押之、以鳥扇扇之、若如此不出去者、宜以牛穴置溝口、作男、莖形以加之、以慈子之蜀椒吳桃葉及鹽班、置其畔、仍從其教、苗葉復茂、年穀豐稔、是今神祇官以白猪白馬白鷄祭御歲神之緣也、釋日本紀、昆蟲之災異、近則蝗虫害田之類也、蝗虫の形狀を云へるハ、三代實錄、貞觀十六年八月丁巳、是日伊勢國上言、有蝗虫食稼、其赤如丹、背青黑、腹班駁、大者一寸五分、小者一寸、種類繁聚、一口所食四五許町、其所一過、無有遺穗、十三日己巳遣從五位下守玄蕃頭弘道王於伊勢大神宮奉幣禱去災蝗、從此以後蝗虫或化蝶飛去、或爲小蜂所刺殺、一時消盡矣、西土にも同じやうなる事あり、雲南通志に見ゆ、雍正九年六月、詔通田生赤蟲長寸許、食稻葉旋有群鴉數千下啄蟲俱盡、禾無傷、
 たほの 大野也、萬七、冬こもり春の大野をよめりひんちや、たほかもわかこころも、
 たほのひ はしきや、しきあかきことハ君みんとたほのひにかも月のてしたる、顯昭云、たほのひはたほのひんちや、詞歟、又只のひんちや、詞も有、されたほのひんちや、字を略歟、又たほのひんちや、たほのひんちや、同音也、古今云、

たほ 頼之徒あり誤て鳥銃を發す於是藤堂高虎の前將支耆男女數千人屠戮して子遺なし
 たほね 舊事記に大禰の官號見たりす、ねの如し大禰ハ大兄の義宿禰ハ少兄の義也、和名抄に菑根をよめり大根の義大根ハ爾雅の注にみゆ今昔をよめり菑菑菑菑も同じ出羽にてたかたといひ紅毛語をうらていすといふ土たほねも同じ尾州の宮崎關東のねりま共に地名なり波多野ハ相州也自然生の物を賞す、江戸にはたなといふ京になかねとし大坂にほそねとす膽吹より出る鼠大根ハ薄菘野大根ハ天巧菜也伊吹山高島郡にあり唐大根ハ屬菘菘菘ほし大根ハ仙人骨也といへり、○俗に根草とよび又たいこなといふ物狼芽なり大葉の物ハ天芥菜也痘瘡に用うるハ此物也花肆に云物は水楊梅なりといへり、
 たほねむし 和名抄に蝗をよめり大稻虫の義成へし今いなむしといふ總稱也、○三代實錄に弘道王爲蝗災祈請宗庶幣使す蝗忽蜂蝶と成て飛去とみゆ東觀漢記に馬援武陵の太守たる時蝗皆飛て海に入化して魚蝦と見えたり、
 たほのか 八雲御抄にゆたかにいかなる意也と宣へりたほかと同義にや、
 たほのかはら 萬葉集に真こもかる大野かはらとみゆ大野ハ日本紀に大和高市郡にあり、
 たほのさ 俗語なり緩急の意にいへり大麻より轉したる詞なるへし古今集にもいへり心は大ぬきにしていへり六帖にみな月の夏をの山の呼子鳥大ぬきののみ聲の聞ゆる住吉の東北に夏越の岡あり、
 たほば 大庭と書り姓にいへり實は玄關前白洲などいふ是なり或ハ内庭をよめりされは場もにの略なるへし、○大庭の社は出雲意宇郡にあり殿制大社も同じ伊弉册伊弉諾兩社八重垣社之神ハ伊弉册尊也此波山といふ是也、
 たほばかり 神代紀劔の名に大葉刈と見ゆ葉ハ刃の義成へし刈此云我里と見えたれのかを測りてよむへし又古事記に大量に作るに据ハ古語拾遺に以天御量伐大峽小峽之材といへるは同じ材の大小によりて伐の器も異なるにより量るともいへるにや、
 たほはし 海東諸國記に肥後州大將軍大橋朝臣政重と云人漂流の人を送るよしみゆ肥後守平貞能肥後國大橋の城に住してより子孫大橋をもて稱號とす並合記にくわし、○大橋和泉守信重ハ宗良親王の曾孫也尾州津島神主の初ハ良新の弟母ハ大橋定省の女也、
 たほはら 山城乙訓郡、郡也大原名所記に西爲小鹽山東爲北野山、以川流爲界、○大原野神社ハ文德實錄に仁壽元年別制大原野、祭儀一准梅宮祭とあれハ其近きほどに春日皇神を移されしなるへし或説に嘉祥三年閑院左大臣初て此に移し玉ふといふ誤也此公ハそれより前天長三年に薨し玉へり江次第に大原野行啓起五條、后順子以藤氏勸學院衆爲車副二條、后高子以姪乘車、後在後中將書和歌與二條后歌略之人疑先是若有密事歎歌ハ伊勢物語の、大原や小鹽の山もけこそは神代の事もたもひ出らめなり三代實錄に真觀

たほゆきのひく手あまたに成ぬれたえぬ物からう
れしけもなし、是の被のたほゆきにそへて、たほのさ
と云詞をたほへる也、或昔云、たほのひにた、ゆ
たかにまじりかたなりと云也、神中

たほはこ 本草車前、延喜典藥式、諸國進年
料雜藥、大和國車前子二斗八升、明月記、建
久七年五月十四日有小瀧云云、基能夜見
云、无別事、於今者可押、付車前子、仍用其
儀、蜻蛉日記、山こもりののち、あまかへるとい
ふなをひけられたりけれ、かこものしけり、云々、
たほはここの神のたすけやなりけんちきりしことな
たもひかへる、

たほひは 覆羽也、萬十、天飛やかりのつはさ
のたほひはのつこもりてかしもたくらん、
たほふ 覆也、萬十、よなはりの野木にふりたほ
ふら雪のつこもりしこもひむわれかも、同、うめ
の花ふりたほふ雪をつみもて、同、鷹のつはのた
ほひはの、同、玉くしけたほふをすみあけていな
り、

たほぶね 大舟也、萬十、たほぶねのみこかし
こみ大舟のゆきのまに、くもりのすま、同、
大船にまかちあらぬつなをなをこまて、わたる
月人をこ、同九、まらぬつなをこまてありまて大
ねにまかちあらぬつなをなをこまて、

三年皇后向、大原野神社奉幣御牛車以藤氏、六位以下爲車
從者、さあり六位以下、即勸學院の衆をいふ、○大原に臣(巨敷)墳あり
土人傳へいふ墳上石塔ありある時塔崩る土人其下をあはきて石櫃を得
たり十襲して銀器あり中に一卷の書あり惟高親王の一代の事歴也とぞ
○愛宕郡の大原三寂といふ三人にて皇太后宮大進爲業法名寂念
其弟伊岐、守頼業法名寂然其弟長門守爲隆法名寂超此三人有智の
殿人なりし寂念大鏡作者又世繼物語といふ、○天台山乾方有、大原山
ひえたのらら模之也、○大和高市郡大原村あり大原一名、藤原、又名、
藤井原也多武峰寺記に見ゆ萬葉集に魚妙の藤井か原に大御門始賜
て云云あり

たほぶねの祝詞 たのむ思ひたのむおもたゆたふゆ

たのたゆたにともゆくら、かこりのうみつもり
か占、わたりの山、萬十三、大船之憑有、神時爾
大きな舟の、のりたる心も、みるにもゆたかにてた
のもしげなれり也、又同、大船、猶豫不定、カク
見者、カクとある、大舟の、くもりのすま、まの物
なれり、かこつ、けたり、たゆたふなり、す、みもら
ぬ心也、萬一懸、大ぶねのゆたのたゆたにともゆくら、
猶上と同しき、かこり、少しつよたゆたふ心也、
又萬十三、大舟乃往良行羅二、カクとある、
ゆら、く、とた、よひ行心につ、けたり、大雲のゆ
くら、く、とた、よひ行心につ、けたり、く、とた、
にくもしをほまめる也、大ぶねのまを思ひて辨ふ
へし、又同、大船、香取、海と有、舟の帆をこ
るの心につ、けたり、かちをかこつ、八、十、握懸
とよめる類也、これら大の字に心なき也、又
同、大船之津守之占、爾とある、占、浦の假
字に、あらず、元正紀に、津守、連といふ人、陰陽
の道をまじりあきらめたりし、よひゆ、これ、舟の
よる所を津といふ故に、まかつ、けたり、又同、大
舟之渡乃山之とある、舟のわたるとつ、けたる
にて、心の明らか也、歌

たほはらひ 古事神功皇后記日本天武紀に見えて大祓とも大解除と
もかけり天武大寶元年に至て六月十二月晦日の大祓の事令條に舉ら
れたり○大祓と解除とを別にいへる事もあり大寶二年十二月紀に太上天
皇崩下に廢大祓 但東 西文部解除如常とみゆ此大祓の祝詞式に
出たる六月晦、大祓十二月准之とあるものにて解除とあるの次に東
文忌寸部獻横刀時咒文西文部准之と見えたり漢音をもて唱ふるをい
ふ神事ならねの如常といへる也○神祇令に百官男女集祓所 中臣宣
祓詞 卜部爲 解除と見ゆこの令の比の定なるへし○天野氏曰大祓祝
詞の策祝也周禮に大祝掌六祝之辭 云云其六曰策祝 鄭司農曰策
祝遠罪戾也と見ゆ

たほはらひた 康富記に伊勢神宮の事に千木敷と見えたり、

たほはらひ 鳥に云雨たひの羽也萬葉集に鷹の翅の覆羽と見ゆ、
たほひら 姓にいふ大平とかけり太平記にみゆ、
たほひれ 大比禮とみゆらたひ物也、
たほひれがへし 東遊の曲の名也片たろし又大廣歌といひ、
たほふ 覆をよめり大より出たるにや古事記にたへりとも見ゆたほへの略
也へり、反ひ也○物のたひり延喜式に肥、字をよめり○新撰字鏡に掩を
かへしたほふとよめり○うき世のたひにたほふかなとよめる、後漢書に女工
之業覆衣天下といふか如し
たほぶく 元旦に茶湯梅干を入て先これを飲を大福と稱して祝賀すも
と大服の義なるを通音をもて大福の義とするなり今王公より士庶に至り
佳例とせり、
たほふね 萬葉集に大船のたもひ懸みてとよめる歌多し今の俗も大船にの
りし心ちなとていへり○つもりか占とつ、く、る、津といひかけて津守、連通を
いふ陰陽の術に達せし人也
たほほし 神武天皇崇日德運神策、於沖杵治平天下其法納于
朝廷秘府、爲世代之軍傳、敏達天皇、御宇愛神傳之陵夷、所附屬
其法、於難波皇子、日神之尊稱を恐怖して大星と號せらる大と、尊大
にして星、日之分身金氣軍旅の道也王子五世諸兄公四字の注脚を
附て楠家の傳統とす二十九世從三位橋、長者以量備の前州に移り遂
に三去す其子以重薄田左馬助松平武藏守に據後尾州に移住す其子
重信號壇照靈社雜兵家に馳求人倫實立集を編己か偽作に附會して

てなほしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 しつたほしつて同五音也、和申
 たほしつ、樽也、萬四、春日山をらぬ山路を
 たほしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 たほしつ、伊勢集、あすきなんじつひもなつ、いほ
 ませつわねも涙にたほしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 歌、かこしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 こたつたつ波の老のまほしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 たほしつ、後撰離別、あすきなんじつひもなつ、いほ
 はませつわねも涙にたほしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 よしつ、わらは入の戀てなくちうに、心せきめん方な
 くたほしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 息にも入りてたほしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 はひなごの、只それかこしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 たりつる、古の御事をあすきなんじつひもなつ、いほ
 ん方もなくたほしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 たほみかこ、大御門也、萬一、日のたて大御門
 に云々、日のぬきの大御門に云々、そまものたほ
 みかこに云々、影まもの大みかこに云々、
 たほみかはりの裕、大身かはりの裕の事、貞
 孝答書、曰、大身かはりの裕の、晴の時の着まじ
 き也とあり、大身かはりの裕、かた身かはりの裕、片
 くを別の色に片身片袖をかへたる也、土佐
 光茂か繪がきし犬追物の繪にも介添の人の素
 袍に、片方淺黄にて、片方紫なるを着たる物見

八重垣八咫九重中星小星龍雷陣玉方陣説等あり其子信秀薄田内
 膳と號す其子以貞與三兵衛と稱す軍傳の門人馬場治平太昌章に授
 く昌章近松茂矩に授く其間吉田家大星の軍傳に擬して日本武命の
 東征の事跡に据て大星中星小星黒星船籠等の擬説あり
 たほしつ、源氏にたほしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 式部日記に朝きりにたほしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 時にいませつわねも涙にたほしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 をたほしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 へし
 たほま、大間の義間廣き所をいへり○外記の關官帳に大間を取といふこ
 とあり間を廣く書をもていふなり、
 たほまあらこ、神代記に大目能籠と見えたり今俗めかこしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 古事記に八月之荒籠見えたり、
 たほまつりこことびと、和名抄に參議をよめり、
 たほまへ、祈年祭祝詞に天照大御神の御前に白久とみゆ雄略の大御
 歌にたほまへにまをすと見えたり、
 たほみ、大忌と書り神今食新嘗の時の稱也小忌をさるる人の束帯した
 るをその夜の大忌の公卿といふ○最初にめさせらるるを大忌、御湯といふ
 も小忌の御湯に對しつていへり○たほみつたたほみよなごの大御の義也或ハ音
 便にてたほんどいふ古事記に大御神大御食など見えたりあかめ辭也○大
 三の屋かきうたさる儀いとたほろしと思の儘の日記に見えたり

えたり、是大身かはりなるべし、若き人の着する
 物と見ゆ、貞三
 たほみかみ、大御神也、萬十九、すみのえのわか
 たほみかみ舟のへに、
 たほみや、大宮也、萬一、天皇の神のみことの大
 宮にこしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 々、同六、かはるこころす大みやをいふ、
 たほみやびと、大宮人也、萬一、さゝ浪のまか
 のからあすきなんじつひもなつ、いほ
 つ、同十、もしきの大みやひとつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 をかきしてこしつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 みやひとつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 さす竹の大みやひとつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 たほみるくさ、本草葺葺、今はしりところと云、
 延喜典藥式、諸國進年料雜藥、伊豆國葺葺
 子一斗、本草類篇、五月採實、四月開花、紫
 色苗莖有白毛、有殼如石榴、觀之則眞葺
 葺、漢種本邦二渡りテ諸國藥園ニ作テ、其子ヲ
 貢上セシモ也、和産六和州吉野郡天川船川庄
 釋迦織紀州高野山中ニ多シ、多ク大樹ノ陰ニ生
 ス、古
 たほん、御、御つすて歌詩にかきつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 所作にも云也、もとの天皇の御身のつてあすきなんじつひもなつ、いほ
 かきつる事なるを、中昔より轉して高貴のかた
 にたほしつてあすきなんじつひもなつ、いほ

たほみ、日本紀に望をよめり思見にや、
 たほみあかし、孝徳紀に燈和名抄に燈明をよめり俗にたほみあかしといふ
 たほみあそび、源氏にみゆ御遊の義也、
 たほみあへ、大饗をよめり○二宮の大饗といふは正月二日に群臣后宮
 及東宮を賀し食をたまふ儀也といふ、
 たほみかんど、祈年祭祝詞に大御巫と書りかんど神、子也といふ物語
 に御かうの子とも見ゆ聖武紀に大宮主、御巫坐摩御巫生島御巫と見え
 たれの大宮主御巫の宮主を著し也
 たほみき、古今集に見ゆ大御酒ハ古事記に見えたり天武紀に置酒をた
 ほみきめすと訓し上壽をたほみきたてまつるといふ
 たほみけつがみ、祈年祭祝詞に大御膳都、神と見ゆ古事記に粟國を
 大宜都比賣といひ又二神の生給ふよし見えたり且此神の身に五の穀其
 外のものを生始し事見えたり大膳職にも齋き奉るなるこ
 たほみこもち、孝徳紀に太宰をよめり又都督府をたほみこもちといふ
 さよめり倭名抄に太宰府をよめり
 たほみた、大御田なり神田にいへり新古今集にみゆ、
 たほみたから、公民をよめり萬葉集に御民と書てたほたからといふ、
 たほみち、和名抄に大路をよめり四聲字苑に路阡陌總名也といふ、
 たほみね、大和國吉野郡に大峰と稱するは前鬼山後鬼山なり、
 たほみねいり、大峰入ハ世繼物語に熊野の發心門より入を順といふ役

薰物也、同、たいのうへの御は(同上)同花宴源氏
氏の君の御を(御侍也)同少女、たごの御をば
さう也、(源の詩也)空穂後陸、野山をわけても御
なり、(つかまつらん)これの俊藤女の子もむへき
所也、(娘が)いふ詞にて、御産のこをな(云なり)
榮花若枝、たほんのつ、いかし給へる、まろかも
のけんをもて(わく)これの同輩にて、いひあふ
り、(蘇葉)

たほむた 仲哀紀、車駕(オホホ)スル、又ミキスルと
めり、

たほんたから 仁徳紀に、億兆また黔首、仁賢
紀に戸口、繼體紀に萬族、安閑紀に、元々、蒼
生、業々をよめり、

たほむもの 仁徳紀に温飯をよめり、

たほむるや 大室屋也、日神武紀、たごかのたほ
むるにひびく、に(つ)をりともひらばはにさいり
をりとも、みつ(つ)しめぬのひらか(つ)つ(つ)石つ
つ(つ)持(つ)ちてし(つ)ま(つ)せ、

たほむわ 大神也、和名於保無知、今按、知の
和の誤、即オホミツの轉音にて、大三輪の義也、
いま三輪町と(つ)所、奈良より行程五里、神名
式、大神大物主神社、一宮記、三輪大明神、
大和城上郡、東大寺、天平二年大稅帳、大神
々戸敷、貳佰壹拾陸斗肆升貳合、舊事紀、
大物主神、密通玉依姫時、人無知者、姫懷

姪、父母怪疑問云、誰人來到乎、姫答云、頃
者人自屋上潛來、于吾所、共同寝也、父母
欲知之、探針與糸、授姫曰、令彼神人、
以此針可着其衣襟、此夜神人來臥、姫如
父母教、朝見彼糸、自輪穴出、認跡尋過節
度山吉野山、留三諸山、其糸纏綿有、三輪
故名三輪、

たほめく 拾遺集、いかにかと思ふ心のある時
たほめく(つ)そ(つ)れ(つ)かり(つ)ける、十訓抄一、此男
何と(つ)い(つ)ふ(つ)しも(つ)な(つ)から(つ)ん(つ)が、本意なく(つ)ね(つ)ず(つ)鳴
を(つ)し(つ)出(つ)たり(つ)けれ(つ)ば、尤なる女房物を(つ)そ(つ)し(つ)や、螢
にも(つ)聲(つ)の有(つ)ける(つ)よ(つ)と(つ)て、つ(つ)や(つ)く(つ)さ(つ)わ(つ)きた(つ)る(つ)け(つ)し(つ)き
も(つ)なく(つ)つ(つ)ち(つ)ち(つ)め(つ)か(つ)たる(つ)そ(つ)ら(つ)た(つ)ほ(つ)め(つ)き(つ)の(つ)ほ(つ)と(つ)あ(つ)まり(つ)に
色(つ)深(つ)く(つ)か(つ)な(つ)し(つ)う(つ)せ(つ)入(つ)ける(つ)に(つ)云(つ)々、徒然草、世に(つ)か
たり(つ)傳(つ)ふる(つ)こと(つ)も、誠(つ)の(つ)あ(つ)い(つ)な(つ)言(つ)に(つ)や、た(つ)ほ(つ)く(つ)の(つ)み(つ)な
そ(つ)ら(つ)こ(つ)と(つ)也(つ)云(つ)々、又我も(つ)ま(つ)こ(つ)と(つ)し(つ)から(つ)す(つ)の(つ)思(つ)ひ(つ)な
から、人(つ)の(つ)い(つ)ひ(つ)し(つ)ま(つ)に(つ)鼻(つ)の(つ)ほ(つ)と(つ)た(つ)こ(つ)め(つ)き(つ)て(つ)い(つ)ふ(つ)つ、
その(つ)人(つ)の(つ)そ(つ)ら(つ)こ(つ)と(つ)に(つ)あ(つ)ら(つ)す、け(つ)に(つ)く(つ)し(つ)く(つ)所(つ)々
う(つ)ち(つ)た(つ)ほ(つ)め(つ)き、よ(つ)う(つ)ま(つ)ら(つ)め(つ)し(つ)て、さ(つ)り(つ)な(つ)から(つ)つ(つ)ま
く(つ)あ(つ)は(つ)せて(つ)語(つ)る(つ)そ(つ)ら(つ)言(つ)つ、た(つ)そ(つ)ろ(つ)し(つ)き(つ)事(つ)なり、類
名

たほもの 御物也、日本後紀、みなひとのそ
か(つ)に(つ)め(つ)つ(つ)る(つ)お(つ)ほ(つ)か(つ)ま(つ)君(つ)か(つ)た(つ)ほ(つ)もの(つ)た(つ)を(つ)り(つ)たる(つ)け
か(つ)ぶ、

たほやか 宇治十四、まけきをせせて、一をしき

小角より分初しなり其後山に大蛇すみて入る事なりかたきを醍醐の聖賢
吉野より登初しなり是を逆といふ四月峰に入る花供といふ、

たほみは、續日本紀に大夫人をたほみはと唱へよとの詔見たり、

たほみま 御體をよよし延喜式に見えたり身をむともよめりまみ通ふみ
まの御馬の義車駕といふか如くなるにや式に御體ト者神祇官中臣率ト
部等六月十二日一日始齋九日ト竟十日奏す江次第に神祇官人自
朔日就本宮迎太詔神と見ゆ

たほみや 大宮也神宮禁中などを尊稱していへり○大宮の詞の京大宮
通の北栢の森也新六帖に あめのゆき紫野なる栢のもり葉かへぬながら
埋もれにけり、

たほみやつかさ 大宮司也今音にて呼り伊勢の其はしめ神序司といひ
し事儀式帳に見ゆ熱田宇佐又阿蘇などにいへり朝野群載に筑前國
宗像社大宮司香椎社、大宮司など見たり

たほみやびと 大宮人也雲の上人などいふかごとし西土にも同し、

たほみやり 大身槍の義長鋒をいふ也、

たほみゆき 伊勢物語にみゆけ行幸をいふ○三條のたほ行幸の右大臣良
相の百花亭にみゆき有し事三代實錄にみゆけ百花亭の三條北朱雀の西
にありと拾芥抄にみゆ、

たほん 御字大、字をよめり○大和物語に内の御とのみあるの御製御
歌などを略したる也季鷹の説に歌學者流に源氏よみとて必たほん何々ど
よむの誤也天子の御うへにかきる也其故は大御の音便なる事天照大御

神と古事記にちるされしに同しなほ大御歌の條可並見、
たほんがみ 古事記延喜式に大御神と書る本義成へし此義によりて神
代記に大神をも訓せるなるへけれと祝詞式に天皇皇祖の外の大御との
言の春日祭にも大神とみえられたほがみとむへしといへと春日祭に
皇大御神とも見えたれ大神も同義成へし後にも此大神を皇大神宮と
申させ給ふ事あり古言の例にあらず萬葉集にも大御神とみし例多し大
神の字の左傳に見えたり物語類に御の一字をもたほんとよめり
たほむし 大虫峰の愛宕郡靜原村にあり釋峰延か巨蟒をみしより名く
たほむし 續日本紀に大虫皮とあるの虎也、
たほむた 仲哀紀に車駕萬葉集に御駕をよめり大共の義師衆をいふ成
へし天武紀にたほむまとも見えたり○新撰字鏡に馳をたほみゆきと見ゆ
たほんたから 神代紀に百姓をよみ繼體紀に黎庶をよみ推古紀に公民
又兆民をよみ天武紀に人夫をよめり大實の義也書經に所寶 惟賢とい
へるか如し
たほんため 日本紀に奉爲をよめり又ためともみゆ義訓なり字ハ梵書に
多し、
たほんど 追儼の大人なりよて文選に方相をよめり、
たほんへ 孝徳紀に大嘗をよめり古今集に承和の御へ元慶の御へと見え
たる是也大嘗と義通へる成へし日本紀にたほへともたほへとも訓せり今
にたほなめともよめり古への大嘗新嘗分たすよ令に大嘗とありて式に
新嘗と見えたり續紀の宣命に大新嘗ともあり北山抄にの踐祚、大嘗祭

とらせたれば、紙を二枚引かかへてつゝみたれり、大やかなるをこしつゝはまみたれば、
 たほやけ 源桐並 たほやけのかためとなりて、伊物、
 翁きひ云云、たほやけの御けしきあしかりけり、源
 椿木、たほやけの御けしきあしかりけり、
 き世のかためとなるべき、伊物、たほやけの宮つか
 へしければ、常にえまうす。○たほやけ所
 源椿木、故朱雀院の御領にて、宇治の院といひし
 ころ云々、たほやけの宮なれど、人も折く
 心やすきをぞ、見せにやりましたまふ。○たほやけわ
 くし 源椿木、たほやけわたくしの人のたすまひ
 云々、同蒲雲、たほやけわたくしのをなみしけき身
 ぞと、○たほやけひび 同横柱、たほやけ人をたのみ
 たる人になくやうあると思ひかへして、○たほやけ
 つかひ 更級、このみこたほやけつかひをめして、帝
 の使をいふ。○たほやけかた 築花月の宴、七段の
 御修法長日御修法、たほやけ方宮方とたほやけ
 せ給ふ、源若菜下、大將のたほやけ方やうく
 たほやけけり。○たほやけさま 同須磨、限ある
 女御御息所もたほやけせす、たほやけさまの宮つか
 と思入る。○たほやけひび 同桐並、唯たほやけ事
 につかひつゝある云々、たほやけなる事のみとりわ
 き仰事ありて、同花宴、只たほやけ事にそしたなる
 物の師ともを、こしかしこ尋は入りし、同椿木、た
 ほやけ事をもいひあひせ。○たほやけしう 狭衣一

毎季大嘗祭とみゆ禮祭統に内祭、則大嘗掃是也。○大嘗會の歌の後
 冷泉院の時を始とす。○平城天皇勅に如聞、大嘗雜樂伎人濫乖朝憲
 唐物爲、飭宜、申加禁斷、とみゆ
 たほんます 祝詞に聞食の悦大坐頂とみゆ、
 たほむね 率また大率をよめり大旨の義なるへし漢書師古か注に率、者
 總計之言也といへり又大略也とも注せり率音類とて類、字をも用ゐたり
 又概もよめり集韻に大概の率也と見えたり史、伯夷傳に、少概とも
 見えたり倭注切韻に大分をもよめり或ハ約又大約もよめり大歸大要大
 較等係、意同し
 たほむわ 大和城、上の郡大神を倭名抄によめり印本和を知に誤れりた
 ほむわの轉也又たほむわとも見ゆたほむも同し○延喜神名式大神大物主
 神社日本紀に大己貴神の幸魂奇魂日本國の三諸山に住んと欲す此
 大三輪之神也と見ゆ
 たほめく 物のさたかならぬにへは望めくの義成へし恍惚をよめり伊勢
 郭公はつかなる音をききそめてあらぬもそれとたほめかれつゝ後拾遺集にた
 ほめくたれともなきてよひくゝに夢に見えけん我そ其人たほめかせのほ
 かにらせの意也たほめかせたまふらつちつけにそれとならていひよる意なりと
 いらり
 たほもの 宣命に酒幣乃大物賜久止宣と見えたるハ御物ともありて同
 し大己貴命を大物主神と申奉るも神代紀に日隅、宮已下の賜物多く
 優待たまへるをもて成へし○材の大物をよみたててもいへり○大物主大

上、中宮出させ給ひければ、御子さへ打くし奉ら
 せ給ひて、同六、此御方の御手水番のうねめ、青
 すまこの云々たほやけし、からめいてなかし、源
 夕霧、たほやけしききほはかりの事をけりし
 給ひし。○たほやけしき 源浮舟、さへなごも
 たほやけしきき方々、たほやけすそたほやけすへき、積
 松四、人間に云々、たほやけしう仰られて、御こ
 うのうちたほ、源椿木、もしあやなきたほやけはら
 たし、心ひびつゝ思ひある事なごたほやけを、
 なにかはきかせんたほへは、打そむかれて、人ま
 め思ひ出わらひもせられ、哀れも打ひたつた
 じし、
 たほやけはら 玉小櫛、たのが身にたつ、あつから
 め人のうへの事を、かたはらよ見聞て、はらた
 しく思ふこと也、此たほやけり、俗のいひしき言に、
 身にあつからぬ人の上の事に妬するを、法界りん
 きと云、法界の意にあたり、源椿木、もしつあや
 なく、たほやけはらたし、心ひびつゝ思ひあること
 なごたほやけを、枕草紙、たのもしき物、あやま
 うたほやけはらたし、けんそくこのいひも、心ひび
 みゆへければ、身の上にてつゝ、心くるしきを思
 ひまらぬよ、紫式部日記、すゝたに心をましう、た
 ほやけはらたか、よからぬ人のいふやうに、にくこ
 そ思ひたまへられしか、築花見はてぬ夢、けにた
 ほやけはらたれける、林葉

神の五名を擧たる所にも見えす神名式に大和國城上郡大神大物主
 神社と見えたり○大物浦の攝州尼崎近邊濱の總名也
 たほや 本屋の俗稱なり○大谷川の歌によみて三河國なり今大平川とい
 ふ是なり大や村大や坂の名遺れり○長谷部信連か領せし能登の大屋
 莊なり、
 たほやけ 公、字をよめり大官の義官家をみやけとよめり日本紀に司もよ
 めり又直に天子の事を申奉るも物語の文類朝公の書簡に見えたり○日
 本紀に軍國をもよめり蔡氏曰軍國猶言千乘之國以軍計也古所謂
 軍國是也戰國以來以兵爭無息亦謂之軍國秦漢以來往々稱軍
 國是也一説に軍と國と二項政事と兵革とを併せしむ也
 たほやけごと 公事をいへり凡て禁中の政事節會などいふ也
 たほやけばら 紫式部日記にみゆ公腹の義に也、
 たほやしま 神代紀に大八洲と見えたり神代のはしめ諸冊二尊のあれま
 したまふ國體八洲に分てり○三代實錄に大八島寇神入前と見ゆ
 たほやすとの 天武紀に大安殿をよめり大安殿事林廣記に見えたり太
 極殿をたほあんとのことよむも安の音を用ゐたるにや内、安殿外、安殿も見
 ゆ江次第に小安殿、大極殿後房也是皆便殿をいふ也
 たほやひこのかみ 古事記に大屋比古神と見ゆこの五十猛神なるへし
 神代紀に大屋津姫神とあれり也舊事紀に五十猛神亦名大屋彦神と
 あり
 たほやまと 懿德紀に大日本を訓し倭名抄に大和をも訓せり大和の郷

たほやけみちかへ 榮花さまの権、先帝の御時、たほやけみちかへに、いたしたたりければ、女なれば、まなこをく背ければ、なつにせきせ給ひて、高内侍とぞいひける、后にみちかへするにあらば、帝につかふる女官を、たほやけみちかへといふに、傍例可考、源浮舟、たほやけしきかとも云云、林葉

たほやけもの 狭衣二上、たほやけものになしたてまつり給はんするよ、濱松四、たほやけしう仰られなして、

たほゆき 大雪也、萬二、吾里にたほゆきふれり、たほはらのふりにしき波にのらまへ、同十九、大宮の内にも外にもめつらしくふれる大ゆきなふみそねをし、

たほよきみ 大羅、和名於保與佐美、神名式、大依羅神社四座、今按、三代實錄、貞觀元年九月大依羅神とあり、是ハ例の二字に定まりしより、大羅となりたることいひゆるし、節用集にも大羅あり、鹽尻、引蘇陽群談云、依羅住吉郡庭井村、大依羅、神式内四座、名神大の社也、大己貴命の孫天八現津彦命を祀る、吾孫氏の社也、仁徳紀に依網氏倉阿弭（古云云、是神功皇后紀に所謂依網吾彦と同一、今吾孫子村あり、或ハ阿孫子とも書り、拾遺樹草、住吉并依羅社に、求子の歌よみてたてまつ

を城下郡に入しのか、式に山邊郡大和に坐大國魂神社とあれ石上に坐同事にて山邊郡の郷名なるへし新泉村にませり六月被神賀辭に大倭に作りむかへし凡て大和の國を指り

たほゆき 擬なり玉篇に大指也とみゆ、
たほゆみ 日本紀倭名抄に督を訓せり三代實錄に手督あり全漸兵制に督を半与と譯せるハ此をいふにや本朝の督ハ神功皇后の功思より出て大に西土の器にまされりといふ事善相公の意見封事に見えたりと今ハ其制きハ惜むへし仁明紀に島木史真製新督獻之とも見えたり○倭名抄に督師をたほゆみのしとみゆり

たほゆる 覺をよめり所思の義成へしたほゆるハ俚言也
たほよそ 大凡をよめり又大と凡とを通し書事もあり凡河内大河内と書るか如し大都大概大底等同し○神代紀に大造をよめり義同し

たほよところも 古語拾遺及伊勢内宮祭大和舞の歌に見えたり裝大
衣成へし
たほよそびと 大凡なる人也とそくしき心をいへり後撰集に 君か名のたつにどかなき身なりせりたほよそ人になして見まし

たほよと 伊勢國多氣郡也神名式に伊勢國多氣郡竹大與村神社と見ゆ拾遺集新古今などにも大淀の祓の事見えたりしほ大よとみよとをみしよりの名也大淀と書り尾張とむかへり今たよとといふ伊勢物語の松つらくもの歌ハ古今集 あふこのなきにしよる浪なれつら見てもそ立かへりけるをもて記者のよめる也大淀の神社ハ其浦にあり倭姫世記

たほよめ 和名抄に娘婦を訓せり兄の妻也あによめといふ嫂をよめり、
たほれ 打たほれ空たほれ耳もたほれてなごいり覆の義也といり源氏に耳もたほれくしともあり
たほれる 溺字をよめり大にほれる也たほるともいふ遠江人ハたほるともいへり重き意也といり神代紀に没溺をたほらすともよめり人につふ詞也○諏訪の湖に沈溺の人あれハ春に家鶏を入れて水の上をひく鶏の鳴聲にて果て口を得るよしとふ

たほろ 朦朧をよめり月色不明也と注せりたほろ月夜たほろの清水などいふ是也又霧をよめりいりたほろと義通へり○續千載集に大原にまかりてたほろの清水を見てと見えたり後拾遺集に 程へても月も浮まん大原も朧の清水すむ名ばかりに

たほろか 日本紀の歌に見えたりたほよそと同じきにも萬葉集に凡可と書り
たほろけ 朦朧氣の義成へし神宮の書に多く少縁をよめり少縁の字ハ法華經に出たり白氏文集にハ無明を訓せり○源氏にたほろけならでとありる語にたほろけならぬ事ならでとの語意あり

たほろふね たほろに見ゆる舟をいふにや一説に竹たる船をいふといり藻鹽草にハ人ののらめ舟也といり なほりかた蓋間の月のたほろ舟霞みて見ゆる春の明ほの

たほわ 倭名抄に朝をよめり車輪郭曲木也と注せり大輪成へし○大神

たほよところも みる人のたほよところもひささほしゆきのよろしもたほよところも、顯昭云、是ハ神主の宮人の歌也、考古語拾遺云云、今俗歌として此歌を出さ、今按云、我良許呂同音也、伊佐と比佐と同しひさき也、たほよすたほよそ同音也、袖中

たほらか 多、たほくといふに同し、らハ休字にて多かるの意なり、らかに意なし、大鏡五、大將(閑院左大將ありきて歸り給ふなり)、冬ハ火たほらかに埋みて、薫物たほほつくりて、あせつちたきて、藝にき給ふ御ぞを、あたかにてそませ奉り給ふ、類名

と夕けりたほろにひく山寺のかね、自住方干
詩に、寒城雨騎鐘、

花ほれする 日神代、夜潮、萬七、白玉を手には

花かすはこのみにけりし人そたまはれする、

花ほろが 疎也、日仁徳紀、つゆははるはひのひめ

かたほろかにまひぬらふらみはのきまきしきはの

くま〜よほひひくかちうらへはのき飲朋呂伽

云々と有、花ほろけとふ辭も、同しかるへし、萬

六、ますいたのゆへに言道をたほろかにたもひてゆ

くなますらたのちも、同ハ、この花の一よのちた

百くちのちたもれるたほろかにまな、同十九、た

ほろかにこころつしてたもちらんそのこなれやも

云云、同十三、たつなみも疎(ハ)にたつ、格

花ほろげ 盛衰記、雲井よりのたもり来る月な

れりたほろげにてつはじとそたも、異本枕、梨

花一枝春帯雨をひたたる、たほろけならし、信

云、たほろげ、たほろか同言也、たほろたほろ〜し

きなどのたほ也、古事記、游煩鈎、榮花浦々別、

花ほろげの鳥はたものならず、て給はんこが

なし、

花ほわた 大山也、萬一、さなみのまかの大わ

たよむともむかしの人に又もあはむ也、

花ほの 漢名莞、今ふとある云、蜻蛉がへりこと

するを、たほはらからせしむるて、まごこすけに

なして、うちはみまみひり見よまごこすけまら

ハ人すけなしといふなり、枕草紙、まごこすけ皆こ

のものといふ、萬葉十四、かみつけのなるのまの

大るくまよそに見しよいしきまよそまよれ、

花ほろみ 本草黄精、今云三ノリト云、延喜典藥

式、諸國進年料雜藥、下總國黄精二斤、殿中

申次記、三月黄精一箇例年進上之、仍御太

刀被下之、八瀬童子、義經記、大まみにまみ

たるつらなみれば、あまりにうごましくそありける、

花ほな 大丘也、古下、こもりのはつせの山のた

をよむたほわの略也年中行事歌合に大神宮祭 わか君の御代やまか
えんいのる日もたほわの神の祭なりけり

花ほの 和名抄に大炊をよめり大井と義通ふにや宮内省の被官なり○

萬葉集新撰字鏡和名抄に莞をよめり大蘭の義俗にふとるといふ是なり

日本紀には莞子をかまごよめり○大井川は嵯峨にあり又駿河にあり大

炊渡の尾張なり東鑑に大井戸と作る○大井實春の東鑑にみゆ大井太

郎朝光の小笠原長清の七男信濃佐久郡大井に住す○管領記に足利

持氏の季子信濃國大井に竄る後鎌倉に還る左馬頭成氏はなり世々

古河の公方と稱すとぞ、

花ほろま 大江山と書り金葉集に和泉式部保昌に具して丹後の國に

侍りける比都に歌合せの有けるに小式部内侍歌よみにとられてありけるを

中納言定頼局のかたにまうて来て歌のいかせさせたまふ丹後への人遣し

けんやいかにもとなくたほすらんなどたむれて立けるを引とめてよめると

あり或の大なる山越或のいくはくの野を過て遙なる丹後の國に侍れりまた

文の便りもなしといふ意を大江山幾野天のはし立の三の地名に寄てみ

も見すと橋の縁語までますらかに即時にいへる名所ともとりなし様もあや

しまてかなひて侍り萬葉集に丹波路の大江山元真集にいふ野といふ所

より人をかへして 別にし程に消にしましひのまほし生野の北にやとれり

といへり○小式部の母の和泉式部なれば母の召名の次て小式部といふ

にや内侍の掌侍也且内侍小式部と書へき也古今集に典侍よるか朝

臣千載集に内侍周防など書り

花ほな 和名抄に條をよめり大緒の義應の具也晋書に條に作り○山大

緒の竹にて管を入るといへり、

花ほなそと 萬葉集にみゆ鳥をいへり大虚言鳥の義、

花ほなよし 古事記にみゆ斯昆とつづけり大魚よの義しの助辭也今も鮪

も大魚といへり、

○花ま 御座をいへり神代紀に座前をみましのまをよめり○草の花まし

了俊殿鳥、詣記に見えたり○花まし所の御座所也

花まなほあめ 天子の御學文始をいへり、

花まへ 後漢書の注に御前天子之所居也と見えたり字彙に天子所止

謂之御前書曰御書服曰御服皆取統御四海之義と見え孝徳

紀に神、名王、名逐、自心之所歸安付、前々處々本注に前々、猶謂

人々、也と見えたり○うまひていふも紫式部日記にたまへりかたのすれ

は御さひはひはすくなき也と見え枕草紙に例のはひがしにならひたまへるた

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

ひるのたまし 同補、ひるのたましはひるの出てたは

たまし 續千、今上位につかたまし

て云々、千載裏かさまし 千載春上、

白川院花御覽したたまし 同春下、み

たまし 御前人にむかひて、まてていふ例、濱松一、

河陽縣后御子の三の御子にむかひてのたまし

詞に、たましのいふまゝ、ものたほし、たまし

たまし、林葉

たまし、源桐葉あなちたまし

たまし、宇治十四ひる七八分ばかりの算

の有けるを、一取出て、手にさして、御前たち

さういたく笑ひ給ひて、わひ給ふなよ、源夕顔、たま

し、蜻蛉九、たまし、ちかひ給ひ

し御てうとも、たまし、御あたまをさくら

たまし、臣之娘子也、日七細見、みなそこ

たみま 禁中にあり御見間と書り、
○たみ 御字をよめりたほんの略也尊稱の辭也
たむかしみ 竟宴の歌に見ゆ日本紀に徳字欣感、字靈異記に喜、字よ
めり續日本紀にうむかしみと入りみむかしみとも見えたり、通す面の向
かしき義也新撰字鏡に傳慶をたむかしとよめるに同じ
たみき 恩義なり榮枯物語に心は恩のためにつかれ命の義によりて輕し
と見えたり、
たみさ 大體にあり穩座と書りまきけ裝束抄に事はて、たほゆかにたり
て折敷にたたるかなたもの又いもがゆなまらると見えたり江次第に
釋奠に王卿移着穩座と見え抄に穩座者非威儀嚴格座自他舒懷故
曰穩ざりり○今の俗説にたみはつ物とく、此より出たるにや或遠
殘の音也たみ
たみざりし 御曹司也御の尊んていふ曹司といほね也今の部屋住のこと
し堂上諸家中の息を稱す近代の御方とく
たみちや 恩赦と書り年中行事歌合に、みこのりくたしをあ入すゆるす
なり非あるたにすてぬ恵に判にたしもお入すゆるす心非常の赦の義にか
なひてことと興あり詞に御祈又佛事などにつけて俄に行るれり詔書の
施行をまたすてかつ、ゆるさるゝを此歌にいつくゝるにぞ見えたり
たみぞ 御衣也伊勢物語源氏に見えたり○伊勢にて皇大神宮の祭に
入る式にふ神衣祭也四月朔日より十五日までをいふ今も内宮に朔
日を芋桶洗とし八日を芋續初とし十五日に御帳を置易といへり中世

ふたみのをどめをたれやしなほむ、萬、たみのめのく

しけにのするか、みなす、

たみあひ たりかへばや三(古文記)人をほこめ

は、心恩愛につかはる、

たみかた 御方、源松風、あかしのかたを、地の詞

たみじき 空後隆、百味をそなへたる飲食になり

たみこと 新後撰雜下、後嵯峨院御事の後云

云、法皇御製 大井川ゆく瀬の浪もたなし、

昔にかへれ、君がかげみん、玉葉雜四、同じ院(白

河)の御事に、世をさきてよめる從三位藤原豊

子、○とりかへ、内侍大將わか君かゝる事なの

給ひを云云、殿上のたはせん限りの、我も世をな

ん思ひ限るまじき、御事に、殿のむけにふか

くにたり給ひしを、源之女、大宮夕キリ三向ヒテ

御事により、内のたごのゑんじて、物し給ひにし

かは、同揚卷、御事をのみこそ、あたらしく心くるし

うかなしき物に思聞ゆるを、同、あけくれのほかめ

にもた、御事をのみなん、心くるし思聞ゆるに、

たみこん 恩言、明月記、文曆二年十月二日、

此事自始无殊被申旨歟、只不思放由之恩

言許歟、度々之使者甚以無詮、

たむな 姫也、和名、姫於無奈、老女之稱也、日

敏達紀、春日臣仲君女曰、老女君夫人萬二、ふ

廢せしを元祿十二年に再興すむかし、九月にも此祭ありしとて民家にも

此日機を織麻を紡事を忌む故實と墨莊漫錄に唐宋社日婦人不用

針線謂之忌作といへり似たる風俗なるし○細衣と書るる束帶色目

に上の奥著也下衣の裏ある者也表の賤き物と見えたり

たみだけ 俗に木曾の御嶽をかくへり富士淺間にならふ高山なり、

たみでん 庭訓往來に隱田と見ゆ田島を隠し置をいふ又容隠之輩とい

へるこそを役人の見ゆるし置をいふ

たんど 音頭の義なり續紀歌垣の所に爲頭といふ語みえたり○たごのせ

と安藝の海にあり昔平相國堀通らせられたる所也瀧のこゝに潮はやく

狭き所也と嚴島詣記にみえたり、

たむな 日本紀に老婆又老姫をよめり倭名鈔に姫と見えたりたむなの轉

萬葉集靈異記に姫をたむなとよめり老女の義也少女をなむなといふに混

すへからす新撰字鏡に娘をたむなとよめるも同義成へし和字にや近江にて

の老姫をたむなといへり○續日本紀に家原、音那紀、朝臣音那といふ婦

人見ゆ是も老女の意なるへし

たんの 書經にて呼をよみ來れりあゝとくか如し新撰字鏡にたののよめ

り疑怪之辭と見えたり凡意所否者發聲多呼といへり

たんへか、伊勢鈴鹿郡小岐須小社のあたりより流る、川にて關川と

落合て高岡川となり海に流れり御贄川の義毎年六月十七日より廿一

日まで小岐須小社伊丹川崎原村名越の村々より此河に出て御贄の年

魚をさる其年魚のあまき也そのま、川原にて白干にし秋に至り太神宮に

清慎公集、かきわけてわれをなすしそつししも
たもて〜にかつひつひつ、頼實集、たいせいじと
たもて〜にのこりもあつた、けりまら菊の
花類葉

たもてかた 著聞十二、たもてかたひつ有ける
り、そのふるまひをして、顔をかきよま〜強盜
をしける也、

たもてにまくる たもてまけらぬいふまか、氣を
のまれたる也、無名下、名あらはれたるも、は、か
うばしく、たもてにまくる事たほかり、林葉

たもておせ 古今、かきわけても老もかかぬ此奉
り花のたもてもおせつらなり、

たもてはつかし 空國謡中、あな物くるつこや、人
聞こそおせしけれ、御方のたもてかかちの事聞
給ららぬ、たもてかかちもはつかしけれ、

たもてあらかめ 榮花委珠、ものばつかし、たも
てをあらかめ、

たもてとじ 空穂春日語、かのたもてとじなも、たもて
とじ母をもとじり、

たもなみ 面無也、もなみをいふ、萬一、よひに

とよめり○正侍従出侍從地侍從酒飯、侍從などの名別あり○薫香に侍
從ありて拾遺補闕の唐名を呼て小異ある方もある、實は同方なる意類
聚雜用に見えたり○北山抄に以兼明朝臣補次侍從上卿仰云源、
兼明朝臣たもてまうち君にまめ給と見えたり○武家を侍從に任するの
豊臣家よの事也といふ

たもなみ 萬葉集に面無美隱に又面差隱野のつある、面弱く耻るを
つふ○伊勢物語に面無つゝ入る源氏に色めくをたもなみと書る、面は
ちすきを猶はあめ意にといふ

たもなれ 面馴るの義也といふ○源氏玉葛にたもなれといふ、巴抄に面
字を填たるも此義にも但面無にて無面目也

たもに 重荷也續日本紀の語に此座坐り重荷力弱して不堪、重荷と
見え萬葉集重馬荷は表荷打といふ事のことく見えたり今の詞と同じ後
撰集に年のかすつまつたつする重荷にといふに付をこりも添な

たもにくま 面悪の義也、

たもねる 神代紀に佞又順をよみ又阿をよめり、而練の義、合色の意成へ
し諂諛も同じ○雷同をたもねりといふ

たもの 珮をよめり佩物の義なり、

たものかき 御物書の義、女中の筆役なり、

たものき 日本紀に母樹と書して人ありて大木にかくれて災を免れしかめ
くみ母のことくなれば名くるよし見えたり、萬葉集にいふ臣木にといふ、今
もたもの木と稱するあり、葉の栗に似て小也、大木もありたもての木といふ
雲巴樹なりといふ、

たものし 御物師と書り禁裡にも呼り縫物師也、

たものさる 傳教大師天台の不見不聞不言の三諦を表して三猿の形
を作るよて是を庚申堂に安置せり、无住法師の歌 見す聞す言する三の
猿よりも思ふまじき事ある成けり、

たものせ 思の儘の日記に中務の親王營代の宮にて世のたものせ人のも
てなし給ふ事かきりなし、

たもはて 意、字の義也、は、反ら思ふに同じ又たもへらくに同じへら反は
也○たもはへの橋の陸奥に在るといふ、

たもひ たもを体にくへらへゆるたもひ消るたもひ胸のたもひなど、皆火にく
ひかけたる也、俗諺に世話をよく業をくるなるといふも同じ、孟子に不得于君
則熱中といふか如し○古事記延喜式御水を訓せりもひの水をくへら、
馬樂にひもひを見えたり

たもひが 思の深きを川に推らへら也又筑前の名所にもくへら、
たもひま 垂仁紀に豈期をよめり歌によめる意是也○古今集にたもひ
かきわけて結語にたもひ見えたり二首あり、たもひ思ひはらるる思ひはらるる

あひてあしたたもなみ、伊物、たもなみていへるな
るし、源、たもなみていへるな、かき
合せたるなむよし、今俗に面目なしといふに同
し、

たもなる 面馴、蜻蛉日記、あはた山より、駒ひ
くそのわたりなる人の家に引入て、見る所あり、
あまた年こゆる山へに家居してつな引駒もたも
なれにけり、

たもにたふ 後漢書史弼傳、乃大怒曰、太守
忝荷重任、當選士報國爾、何人而偽詐無
狀、命左右引出、楚極數百云云、

たもにこつけ 重荷小付、これり物の有がう
へに、又事のかまなりそはなをくふなり、これり古き
諺なり、古今集のそへにこつけの歌をも、この
事なりらるるこつけあり、よ、あはれたるもたもは
れず、その事うちもに考を出しめ、へら見せし、
後撰集賀、こつけのかすつまつたつする重荷にとい
ふ、小付をいふもそへら、古今集、そへらに
こつけのかすつまつたつする重荷にといふ、
たもに、類名

たもの たものつなをいふ、略して、たものつなをい
ふ、源紅葉、たものつなをいふ、たもつなをい
ふ、宇治二、白米十石をたものつな、三代實錄四
十五、老人爾陽、御物、拾遺神樂、とこいへる
時もあつて近江なるたものつな、たものつなをいふ

たもの 水飯續紀廿、御物給渡久止宣、宇治七、水飯を引よせて、二たひ斗はしをまりし給ふこと、ふるほにたものみならず、夫木十、たほみ田のことのわさのほしたも神のちこにけふそなをなり、落すホ、たもあつてけつ、みへし所にきて、和泉式部集あつたもこのものをひびりのをばにいて、大鏡八、かな入をたて、湯をたきらかしつ、たものをいれていみしうあつて、まらせいたしたるを、枕草子三、みつし所のたものたなの、同十二、あつそをみなくひつれて、たものたよりのめり、延喜式大食三、延喜内匠寮式、御飯宣二、續後紀一、給御物、

たものたな 林子秘抄、御給柵二、同、膳柵二、仁徳記、温飯二、

たものちどり 狭衣六、たものちどりのにすか、楚王秘抄御給宿置二、榮花根合二、にしひろき殿内のひきなく、女房の局にをわした、たものちどり、源橋柱、そこほる時もあるしなあみなるたもの、はまのあまのかつ、江次第七、御給宿、中務日記、二位入道か御ものちどりのにすか、たものちどりのにすか、

たもはぬ 不思議、萬四、たもはぬをたもあつては、源夢浮橋、のりしたつる道なきるにたもはぬ山におみまよふ哉、小侍從集、たもはぬ

しとくこの反語の辭也。伊勢物語に、忘れての夢かぞと思ふたもひを雪みわけて君を見たる此返し古今集にも贈答を主としたり此書にもなきを新古今集に入し心得かたし。

たもひくまなき 思の隈もなく周々至るをたもひの元々限々まで心の至らぬ意にて俗に思のなまじく意に用たりるを近代の歌にかゝる意にもみしひかこひなるといふ。

たもひぐさ 歌林良材に「一草に限らざるよし也唯愛する草をくへん能因の櫻をも思草とよめり齋院前栽草盡に女郎花とせり通具の説に龍膽又露草と入る萬葉集に尾花か本のたもひ草とくたよれりそれより尾花か本のくさとのみもよめる也。

たもひこ 愛子をいへりある人の歌 たもいたつかおも人のたもひ子よ我たもひ子にたもひくへて陶淵明か子に訓し意也定家卿鷹の歌 親をさる意のつらにこころあらし鷹をさまし鳥のたもひ子親鷹か子をかなしみて子のあたりを立さらぬを驚かす親をさるものなきとく。

たもひある 行成大納言の許へよみてたぐられける公任卿 たもひある人もありける世の中にいつくして過すなるらん昭中將致平親王の息光少將堀河大臣顯光公の息長保三年二月二日中將少將三井寺に出家とも慶祚開梨の室に入れり左中將成信三十三少將重家二十五聞えし是をよみてよめる歌なり。

たもひたえなん 今いたし思ひ絶なんをばかりをの歌後拾遺集に伊勢の齋宮たりよりほりて侍りけるに人に忍て通けるをたほちけも聞しめてま

里、〇千載雜、たもはぬ磯、

たもは入て 無名抄下、物語に源氏物語にすきたるものなし、みまこれらたもは入てかへんきなき。

たもはんこと 古今、何をして身のいたつらに老ぬらん年のたもはんこともあつて帖、つかでなほあつたせし高砂の松の思はんことあつつかし、〇林葉、君こそし闌入もくらしはらつる床の思はんことあつつかし、拾遺愚草、山の思はんこともあつつかし、月よりほかの秋のなまめし、林葉。

たもひあま 思除也、萬七、たもひあまりきたもすくなたまたまきつわひの山にわれそまゆゆあ、

たもひぐさ 萬十、みちの尾花か下のたもひぐさ、たもはぬたものかたもはぬ、八雲御抄云、思草の三の露草也、通具卿説也、萬葉目安の、あか也云々、詞林采葉抄、思草或云催麥を申す云々、然而家にいりんを思草と云仰の上、可用之、不可付餘義又九條前關白殿、紫遠を思草と言也と被仰けるぞ云々、今案萬十一、わかせにわかひなれつたがさのへいほりたもひづらかれにけりと有り、

此歌の心なきこと、

たもひくまなき 後撰戀、いつ方たかかくれつ見かたか思ひくまなき人のなるる、〇菅

もりめなど付せ給ひて忍にも通らずなりにつれ、よみ侍りけると見ゆ此前の齋宮に通ひし事榮花物語に委し此に定かにかゝぬほなき世の撰なれつて齋宮たりなき書をなすし後撰集に、つかたしてかく思ふて事なだて人傳ならて君にたたらんとて詞を用られたれと本歌よりも切にあはれに侍り實事にいさる事かして嫌ふ事に侍らすとく、〇榮花物語に此歌の所に三位中將と見ゆ道雅卿の父伊周公也。

たもひで 思出の義先によき事のありし後にたもひ出て身のむかしなたもひなきとあつた、今の俗の心もこのあつたもひでいふ。

たもひの心あらかしめく意也。

たもひつめる 伊勢物語にみ思詰の義なり眞名本に思短有言かけり、

たもひのいへ 火宅の義拾遺集に、世の中に牛の車のなからせばたもひの家をくかて出まじ。

たもひのいろ 紅の色をいふたも火の色とく意也とく。

たもひのきつな 思いつなかる意なり思のつなとも見えたし思緒をいふにかたし。

たもひのけふり 思を火にして煙をいふ也文集に悲火焼心曲と見えた。

たもひのつ 五節野曲の名思之津也。

たもひのつな 定家卿の説に心緒愁緒などの意か見えたり。

たもひば 思羽の義孔雀鴛鴦鴨雉などつら共鏡の家に入る也。

たもひまつつす 源氏に見ゆ萬葉集に思纏と見えたつひまつつす意

萬葉、鶯のわけては、つとむら花思ひすくなくとくもあるか、○濱松四、こころのあいな思ふあうに有なん、たもひくま有て、心くるしものせむせ給へんき也とて、

たもひまに 大和物語、これをたもひしと、かたはらにせむし、あにけり、

たもひなし、うたね、思ひなしにち、こもかして、あれまらたのこいさして、源、こころふ、かた入の思ひなしかりかかたほして、月詠集、神無月たもひなしにちすみよしの松あふ風もけさるひしき、林葉

たもひば 後伏見院御製、こころちになくつるのたもひはのたいていさすまふみ哉、

たもひみたれ 思亂也、萬九、あしかまのたもひみたれて、同十三、あしかまのたもひみたれて、同十一、山すけのみたれこひのみ、同十二、山すけのたもひみたれて、

たもひちる 道悶也、萬一、たひにであれ、たもひちるたつまをあら、同、たもひちるす入のたもひちるまなし、想像の意とたかり、梅

たもふかたのかせ みつね集、波たは沖の玉もいありへ、たもふ方よ風もあかなん、源松風、たもふかたの風、たもふける日たかへにあり給ひぬ、濱松中納言、あしき波風にもあつとと思ふみの、云云、

同じ

たもひもの 妻をいり中世よりの詞なるし京にて手かぎを呼東國にてめかけといひ西國尾州伊勢にていひくく、

たもひちる 萬葉集に思遣を書て思ひをり過す意にいりて遺悶と書し西土にも遺情遺懷遺慮など見たり神名式但馬國氣多郡に思往神社ありたもひちるをよめり○文選に想像をよめり義通入れば是れよその事をよめりと思ひゆる意にて萬葉集に一首も此意なしといひ

たもふ 思をよめり重と義通入り神代紀に思欲、二字又慮又憶又懐もよみたり○願、字意、字訓、字などをたもふにせむりたもひまらして看の意なりといひ禮記の抑、字を石經に皆意に作れり抑而之強與の類も抑をたもふにせむりといひ又意通して憶に作る史記にみゆ又意者とも用う意、度、也と注す又想をよめり想像とも見ゆ

たもふく 趣をよめり面向の義背向の反對也○日本紀に教化ををしたもふくをよめり續日本紀に教賜ひたもふけ賜ひと見えたり又撥をよめり

たもぶくら 左傳に云豐下なりといひ、

たもふさち 萬葉集に思共を書り思ひ合たる友共也今たもふさち友といひく

たもふる 神代紀に従容をよめり面振の義成へし

たもへとも 身をわけねはの伊勢物語の古今集の歌、思へとも身をわけねは目に見えぬ心を君にたくべとせもるの下句をかへて記者の者の歌と見えたり、

たもほしき 思欲也、萬十三、たもほしきこころつてむち、今俗云、たもほしきとく、梅

たもほゆ 所念也、萬集中たほし、

たもふこころあり 金葉集、かしまし山の下行さ、れ水あなまわれれたもふこころあり、

たもふさち 思共也、萬五、うめの花くまからなりたもふさちかこころつてなつたもふさちなり、同八、もみさちのすまへんをこころたもふさちとこひりあけすもあらぬか、

たもふへきひと 源夕陽、めいさちのたもふへき人は、同、いはけなかりけほほほ、たもふへき人の折す、

たもへりし 思在也、萬四、ものかなしにたもへりし、同、たもへりしを、

たもへし 源花の宴、たもへし、うらあらね、たしなへてのわかしてはあり、同、夢浮橋、たもへし、たをわすれぬのいかにわをたねのしたる、うもつらなく開へ給、同、宿り木、猶こころたもへし、う思ひをられ給、

たもちう 源朝顔かんざしたもちうの直開ゆる人の面かけにちと覺へて、めたけれり、枕十一、額髪のかなるかた、たもちうよき人の、源手習、こまかなうつてきたもちうの、けあをきみしたたらちちうたてにほひ、

たもち 竹取、たもちの内た、女も番をたて

たもへり 應神紀に色を訓せり思在、内色見、外の意也續日本紀に面へりに作れり説文に色、顔氣也と見えたり又たもへらひともよめりひ、反り也○たもひたもへらひとくもひの反ひ也

たもへらへ 意謂などをよめりらへ、反る也以爲二字をよめり二字の中間に字あるをも何くすよめりも意の同じといひり又以一字もよめり謂に通す又所以を所爲に作り所謂を所爲に作るも多し

たもほえず 日本紀に不覺をよめり

たもほえて 覺えがなくての義也古今集に、いたづらに過る月日のたもほえて花見てくらす春そそくなき貫之集に、行月はたもほえねども藤の花咲く春をあらる、

たもほしたまひす 祝詞に思志行波須とみゆ續日本紀に所思行佐久止所念行久止など書たる同意也、

たもほす 思欲をよめり日本紀に見えたり續紀に思ほすに見ゆたもほふを延てほすといひ聞をきこす知をさすといひ同格也この延詞たのつから崇め詞なる也

たもほでり 神代紀に作色又慍色をよめり面火光の義也といひり新撰字鏡に咄然をよめり五車韻瑞、注に顔類の怒色紅也と見ゆ

たもほゆ 萬葉集に見ゆ所思をよめり同集に所思食をたもほしめすといひ

守らず、
たもちせて 源桐壺、ついでにほひやかほ、ついでに
なる人の、いづれたらたもせ、ついでにほひやかほの
たもひしみながら、同、ついでにたもせにけり、
同、ついでにたもせにけり、
たもちてつらし 而希也、萬十八、この秋相
みしまはまけふみれたたもちつらしきみもこかたひ
と、

たもらか 重きにらかをそへていふなり、延語也、
十訓抄二、すて人のあまひに、たもらかに詞す
くなにて、人をもならさず、人にもならさず、戯好
ます、たもらしてさしあまひて居たれり、心の中
あらす、たもらのかなを見て、

たもわ 而也、萬十九、桃花紅色に、ほひたるた
もわのち青柳のほろ眉根云云、同、見かほ
し、たもわ(自注御面謂之美於毛和)同九、も
ち月のみてもたもわ、又たもらたもちも、萬十
一、たもらたもわのちあまひを、同十四、あ
かたもわすれむしたるは、たもらたもわをみ
ついでにほひ、同十二、水くきのをかのすは吹
かしたる、たもらたもわのち、同十八、な
らまのちのちかほのたもらたもわにかかへにも
おちたもわのち、

たもわすれ 面忘也、萬十一、たもわすれいかな
るもの、たもわすれいかなつらしきみもこかたひ
もこすつひのち、

たもら 親々也、萬十三、親々のしか家すらな
同八、詞書、但親々一二飲樂聽許者云云、日
允齋紀、親々相軒歎、

たもらま 隆信集哀傷、たもらま、ひとへにかの
かほのち、たもらまはたもら、源、ついでにほひ
たもらま、たもらま、ついでにほひ、

たもらね 後拾遺賀、かた、たもらねのち、
ちかほ也、このちかほを思ひ、中務日
記、宮内、たもらね、たもらね、ひめ、

たもらな 萬十八、たもらの子ともを大伴と
作伯のち、たもらな、たもらな、たもらな、
云云、

たもらな 同上、親名不絶也、
たもらま 壬生集、たもらな、たもらま、
のち、守なりける人のち、物いひけるを、
くみ、か、か、か、か、か、
しける、實方朝臣、か、か、か、
のち、たもらま、か、か、
はらし、林葉

たの

たもんみる 以字をよめり字書に意也と注せりたもひみるの義也惟も同し
神代紀に慮もよめり願をよめりたもひみるして、意也以外と書て思ひの
外と、たもひみるもついでの外と、ついでに誤成入して、季鷹のついでに

たもち 源氏に見ゆ面持の義も、ちかほのち、かか、かか、かか、
たもち 竹取物語にみゆ母屋の義も、ちかほのち、かか、かか、
たもよし 新撰字鏡に、たもよし、たもよし、たもよし、

たもゆ 今稀粥をいふ、重陽の義にして、たもひ、たもひ、
たもり 重なる體にいふ也、鍾は、たもり、たもり、たもり、
墜石な、たもり、

たもりか 源氏に見ゆ重りの義也
たもるな、たも 伊勢物語に、たもるな、たもるな、
かける、たもは、たもは、たもは、
たもむる 舒、字餘、字をよめりたもむる、
たもわ 萬葉集に、たもわ、たもわ、たもわ、
たもわすれ 面をわする也、

たもわびし 面作し義也、
たもわ 日本紀續紀宣命などに見ゆ祖、字をよめり、
又親、字をよめり老の義也、源氏に、たもわ、
の義也、古事記に、たもわ、たもわ、
たり阿翁の字、神代紀に見えたり伊勢物語、
は、たもわ、たもわ、

たも 多く母に就く親をよめり也
たもこ 親家をいふ、唐書に見えたり婚姻相謂曰親とみゆ、
たもこさ 祖子草の義、たもこ、たもこ、
たもち 親父の義也、

たもに 孝徳紀に、孝、字をよめり、
善之首なれ、儒典に、孝、
神不知、孝、其親を見えたり、
事を聞て、いふか、神武天皇以來三年の喪多し
たもりのち、たもりのち、
予か事の如し、定家卿の歌に、
花をよめり、意雨に題する詩に、
たもらね、祖父をいふ、

たもらね 祖父をいふ、
たもらね、祖父をいふ、
子に以詩禮發家と、
たもらま 賣女をいふ、
のち、近江に、
たもらま、
たもらま、

たもらま 大指をいふ、
たもらま、
たもらま、

たもらま 日本紀に老字をよめり、
たもらま、
たもらま、

たもらま 日本紀に老字をよめり、
たもらま、
たもらま、

たもらま 日本紀に老字をよめり、
たもらま、
たもらま、

にひびきたるなり云々

たよすけ たよひすがの略語にて、生そはるは... ありてたよ入り、松など竹の並ひて、生そけるを... 万葉集第四長歌にも、意余斯遠波迦久能尾... 奈良志(オホナカシ)と有も、老したはといふ意に... ちと見ゆれり、その詞相似たり、余と伊つねにか... たりて成人の意なきといひ、河海抄にもたよひたる... ならはあも、その意わかたらず、されども詞の譯の... なけれり、今くはあのみ、又生れ合なかりかりそ... めに書へきたる、又ハ助及を訓るも、たよひする... の訓を假て書たる也、正字にハあらず、まからハ及... 助と書んに、また妨なきに似たり、然れども及助... と書よしのつがし、殊に日本紀に有よし、河海... にまゐられたるも、見及ハ助事なり、源氏桐葉、... このみこのたよすけも、たよはする御かたぢ心ばえ... 有りたつめつらさきで見え給ふを、えそねみあ... 給ハす云々、月日過てわか宮参り給ひぬい、... この世の物ならず、まよりにたよすけ給へり、... へゆかしうたほしたり、大鏡七、太政大臣道長の... ねと云々、内大臣攝政にならせ給ひけん、帝た... よすけはせ給ひにしかり、寛仁三年十二月廿二

にひびて子の老を負の意といへり負より轉せる語にも元輔集にたよる菊とよめるも老たるなり也

たよとの 一書に御湯殿の御茶の湯など常にあけてあるかけの御膳など調る所也主上の御行水所の御遊殿と書といへり三箇重事抄にも御遊の舟と書り

○たよの 游をいふ泳、字もよりの新撰字鏡にハ瀬もよりの押よる義にも列子林注に游ハ拍浮、者也といへばたよと義かよと成ハし俗にたひかくともいへり○游又旋と同じ

たよし 萬葉集に見ゆ老の義也

たよそ 凡をよめりたよそその略也總括りていふ意也といへり凡民凡夫凡庸などいふも意同じ詩の百爾の百も猶凡也と注す

たよつけ 物語に多したとなくなる意也といへり及ひ着の義なるに源氏の抄に萬葉集を引て助及と書りといへり見あたらず及次の義也といへり徒然草に事そきたよすけたるすかたに見えたり又名の假名にてたよ發語世つて成ハしと季鷹のつへり或説老附といふ非也

たよつれこと 續日本紀に見え萬葉集にたよつれことのみにつれを略せるも見ゆ日本紀に妖偽又妖言をも訓せり

たよび 倭名抄に指をよりの源氏にも見えたり錢に小指とするハ非也今のたよびといへり○拇はたよひ食指ひといへり中指なかのたよび無名指なしたよび季指たよびたよひのまた倭名抄に見えたり

たよびぬき 和名抄に踏をよりの指貫の義也今ゆひぬきといふ

たよぶ 及、字をよりの兼與之辭と注す連ハ連及也通して追に作る體ハ再貫に見ゆ泊ハ應劭及也と注す越も秦誓の注に及と訓すたよぶといへりほす反ぶ也追呼の義成ハし神代紀に臨もよめり○伊勢物語に及を指にかよひし用り○日本紀に及、字をよきと訓せり又及様二字をたよぶとも訓せり○遍照集道に女郎花の見えしを及ひして折しほは馬よりたよびといひ徒然草にまあしつもとたよびかゝらすと見ゆ今も及びこし又及ひ着といへり俗にまゐるつなまをたよびといへり古事記に死及兵と見ゆまゐるそのまゐるつなまをたよびといへり○戀の歌に及ひなき及はぬ枝及はぬ身たよはぬ戀たよはぬ中なまよめるハ皆高貴をいふ也

たよる 著聞集に月をも御覽せ御よるなれりといへり寝をいふ今も西邊にたよるといふもなれり○義也御日なるといふに對せり

○たよ 口語下輩に對し自己を稱す神代紀に你等をよみ他を指りたれり○略己等の義也たよるもつへり又轉してたよるといひ近江につへり云々

たよぶ 神代紀に叫又哭をよめり萬葉集に叫哭をよびたよびといへり西偏に今も高聲に物くをよぶといふ也

○たよ 半をいふ下の義成ハし日本紀に楹をよめり押も圈も同じ宇治拾遺にくまのたよりの細き木をいへり打たてといふも○殘油をくも同義也瀧白(タカシロ)といへりたより也藍澱をよるたよるといふ爾雅に澱謂之近(タカシロ)見ゆ

たよあを 織襖と書き襖の織ものを用たるなりをも狩衣二重也綾あを云々

日攝政の表奉らせ給ひて、同じき日關白の宣旨下りて、關白にてたよはします、類名

たよそひと 後撰戀、君が名のたつにたよそひ身なりせばたよそ人になしてまします、

たよつれ 妖也、萬三たよつれのわかまといへるまがこと、同十七、たよつれのたよひか、

たよつれこと 妖言紀妖偽同、これつれに日本紀天智紀に禁、斷詛妄妖偽、また天武紀に、妖言をもたよつれこととよみ、また續紀光仁紀に、永手公の號られし時、詔に、於與豆禮加母多波許止加毛、二卷にも挽歌、於餘豆禮能多波許登等可毛とあれば、右の訓まか也、然れハ其文字にて意なきをいへ、摘ては、性しく賢ならぬ事なり、犯言をもまたよびし、類名

たよはぬこひ 不及戀、雲に梯してたよはぬこひたよはぬこひ、伊勢集、音にきく天の橋立はしたて、たよはぬ戀も我りする哉、

たよび 異本枕、まくらがみなる扇をたよびて云々、かきよするほを云々、たよひこしなるを云、

たよびたるこころ 源若紫、御けりそ、例の條をたよび、たよびたる心地して、榮花整玉夢、御たひくらははからとの給へり、四尺の御几帳に、今すこしたよはせ給はぬぞ、みよせ給ふ、

たよる 中務日記、御よるの後も、つみにわられ

す、増鏡けふのひかけ、みかどついでにたよるそと
 たらひて 日神代、哭聲ウケナヒ、萬九、さけひたらひ
 あしすのしきかみたけひて云々、
 たりすち 宗吾記、たりすちなど申物の、慈照院
 殿御時までいめされ候はぬ由に候、云云、又女
 中衆も、中膳のかうしの織物うまかせて、得め
 し候はず候、すちみすなごをめし候、御免にてか
 しなはめし候きほにて候、云々、島織物の事地下
 人のさる物にて候、さしたる人、下著にも不
 用候、信按、たり筋の織布にて、今云、島なるべ
 し、かうしの格子にて、今も云ふ稱也、すぢみす、
 今云千筋萬筋の類なるべし、島織物の今云ふ
 八丈島織にて、所謂これも織筋なれ共、昔のい
 しめたるし也、この島織の稱の方ひのりて、織
 筋をも島と云事となりたるなるべし、
 たりたち 身にきて物こをすをさるにひり、
 濱松、たのたぢ、みしう心にて候、経海をひのか
 きり、よのつねなるまじうたほしうたなみ、林葉
 たりしかむ 織繼也、萬七、かにかく人ひくふ
 らもたのしかむわがなはたものまゝある衣、
 たりな 下名也、江次第四、下名書様あり、紀略、
 寛弘元正廿五、下名、同萬壽三年十月廿六
 日除目終、即有下名事、江次第三、下名抄
 云、昔叙人姓名下賜二省丞、故曰下名、是

たりかく 錦又雲にへり織懸の義也、
 たりこ 織子の義今もいふ詞也神名秘書に舊記云神衣祭者皇大神宮
 御坐高天原之昔人面等之遠祖天八千々姫殖桑葉於天香山以
 所織之糸供進御衣於大神云云天降御坐之以降人面職掌人等
 爲末葉以女子者號織子以男子者稱人面職掌不違天宮例
 と見えたり伊勢多氣郡に服部伊刀麻神社ありて八千々姫命を祭れり
 其近邊に天香山神社あるも所以ある事成へし
 たりこけ 欽明紀に王を訓す韓語也、
 たりたす 菅家萬葉集に白露のたり足す芽さみゆ新勅撰にたりいたすとあ
 りされと夫木集にも虫のたりたす衣とあり、
 たりたつ 田子などに屬けり下立の義也、
 たりな 下名と書り叙位の人敷を書て二省の丞に給ふ也○公卿の不入
 下名とみゆ、
 たりへのきぬ 平家物語に北國の織述絹と見えたり○六丈織絹百練
 抄にみゆ、
 たりは 雙陸にいふり下端の義也、
 たりはへて 織延の義成へし唐錦たはへ水のあはたりはへなとく入り龍
 田の山にたりはへてななと下の義をかたし
 たりひめ 織女の事也なはたに同じ古事記に天衣織女とみゆ、
 たりへ 織部司あり和名抄にたりへつかみゆ○今のたのへつかみゆ古田
 織部に起れり俗に蓋と稱する此類をへるより略してたのへつかみゆと

白馬節會日、叙列二省丞、以此下名引四
 位以下也、二位以上不書下名、故二省不
 引、思儘日記、南殿にて、たり名くたされんなど
 有しが、それとてまゝの、林葉
 たりのはり 土佐、みな人の舟のまゝの所に子を
 いたまじ、たりのはり、後撰一、藤原のまゝの
 藏人よりかうむり給て、あふ殿上まかりたりなど
 しける夜云々、
 たりもの 舊記に、たの織物とある、練貫の
 かうしからしなとの類を云、ねらぬの事、前に
 記、唐の織物に對して、たの織物と云、用書
 記、云、たのたり物の事、御免なごの、ゆめゆ
 め着候はず候、又すぢみすなごをめし候、かうし
 なの、是も御ゆるし候にて、女中めめし候はず
 候、
 たるはたのへ 織機上也、萬七、なごめらかた
 るはたの上をまぐしもか、けたくしなみまより
 みゆ、
 たれ 巴々の略なり、金槐集、二所下向の
 後朝に侍ども見へさし、かひよめる、旅を行し
 跡のまもりたれ、にわたしあれも今朝のま
 たらぬ、
 たれ 源御幸、あちうしたれ、しき本
 性、そちものうたはたはひり入る、同初音、も
 たらたれ、したる心のをたらたれ、

り程らゝを替ふる時などいふ也、
 たりとの 日本紀に織をよみ倭名鈔に綺をよみ織の織金今いふ金襴也
 綺の似錦而薄也と注せり庭訓に綺子織物とみゆ今いふからまの類也
 又浮織物固織物唐織物などいふ
 たりのみかど 寶位をたりのみかたまゝを申奉れり
 たりむむかふすかきり 祈年祭祝詞に白雲の墜坐向伏限とみゆ遊に
 向ひ見を墜伏とある雲の限をいへり萬葉集に天雲の向伏國神功記に
 天疎向津媛など見えたり、
 たりある 敏達記に下をよみ降居の義伊勢物語にたりあてかれいひく
 けり馬より下居也○東鑑に惟鳥のたりのるに集、字を書り○式に下居
 の神社大和十市、郡に見ゆ文徳實錄に檜橋下居神と見えたる倉梯近
 きあたりに下居村あり
 ○たる 下をよみ○織をよみ
 ○たれ 神代紀に你、字神武紀に爾、字をよみ爾、尔に同じ古事記に
 意禮とみゆ枕草紙にほとすすたれかやつとみひ著聞集にも見えたり
 十訓抄にたれとあるもやうよふ聲成へし鎌倉右大臣集にたれ、にど
 よませるも同じ今俗下まの、人に對し自らたれと稱し又彼を指てわれと
 つへは互に相通成へしわたり同音也
 たれもの 源氏にみゆ愚者の義とをれと同音也抄にも愚かなる人をいふ
 らく
 ○たろ 於呂呂呂氏東鑑に見えたり式陸奥國膽澤郡有於呂閉志神

たれこたれ盛衰ニ、うれしや水なる川流
 の水もたれひて、たれこたれ一時計す事あた
 りける、宇治拾、多むこたれたるもの、
 たれまどひ、源夕霧、かく翁のなにかしきものけん
 むら、たれまどひたればくち口をしき、
 たれもの、源給合、たれものも、あもものにて、同少
 女、人のたれど、たのしかられたることをいふ、
 めれ、子をしていふ、いふ、いふ、いふ、
 たるか、愚也、もど疎と同意か可考、萬十八、た
 るかにそれたれたもひしをののののののののののの
 みれどあかすけり、
 たろし、饒、たろし、饒宗をよみて、周禮儀禮等
 への微膳をよみ、下の意なり、すべからずとも
 ふ、伊勢集、もどすみ給ひし所に、御門たはしまし
 て、御文きこしめす、いかにまじりし人なごめして、
 御たろし給ふ、更級日記、衛門の命をいふ、
 らひける、尋ねて文もりたれり、めいりからり、よ
 る御前のを、たろしたる、わ、わ、わ、わ、
 とも、硯の蓋に入てたせたり、類名
 たろす、源順集、男のひの國にまかるほど、子
 をたろしける女の、たろし、たろし、たろし、
 もまらすしていかす、いかにのひの子ぞ、
 たろす、今俗、人なひたれどす意に、是也、源
 少女、あままし、いかに出つたろす、同、こ、にて
 又たろし、いかにものもあつて、林葉

社○齊明紀に後方羊蹄ありしと訓ず今蝦夷の尻別なるし
 たろし、たろたなるに今鏡にたろし、年のつもりに申侍らる宇治拾
 遣に翁の髪もはけて白きてもたろし、ある頭を袋の鳥帽子引入て見え
 えたり安藝のあたりに微雨をたろし、いふも是成入し壹岐島にたろし
 といふ所もあつたり、
 たるか、愚をよみ、獣も同じ雄略紀に不覺をたろかと訓し失意をたろかと
 訓す義通も成入し一説に梵語の阿羅伽也といふ、奥州にたたま豊州にた
 らかまがしい尾州にたろし、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、
 といふ、童蒙頌約に意をたろし、いかに、いかに、いかに、いかに、
 といふ、肉翅ありて飛躍する物也○中山宮古鳥の間切の名にも呼入る
 たろかたひ、和名抄に稽をよみ、字にたろたなる訓成入し、いかに、
 たろしがね、馬の事にいふ、大雙紙にみゆ、
 たろし、墮胎をいふ、埃糞抄に下子を書り、
 たろしもの、いかに、持統紀に監物をよみ、續日本紀に下物、職と見
 えたり六位、侍任すといふ、
 たろす、神代紀に下を訓せり、いかに、いかに、○藥物を研子にかけ鐵器を鑑
 にかけるをたろすといふ、萬葉集にたろたなる、いかに、いかに、
 帖に見ゆ今も木竹の枝にたろたなる、いかに、いかに、○萬葉集にあまのえたきり
 るし、いかに、又下風をよめる山、出風也といふ、いかに、いかに、
 二合の俗字也御舟たろたなる、いかに、いかに、○御をよみ、いかに、
 集に見ゆ馬鞍にいかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

たろす、下居也、萬廿、なほはつにみかねたろす
 たろす、千載卷上、中院にあらはる紅梅のたろ
 し、枝つかはさんなど申けるを、頼政集、實莊殿
 院に、なごならぬ梅有と訓て、桃行靜賢に、た
 るし、枝をいかに、いかに、いかに、いかに、
 明春たはんと申たる返事に、いかに、
 たろそか、鹿略、物のあらまして、細密からぬを
 いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、
 鈍なごいかに、いかに、いかに、いかに、
 たり、俗にたろたなる、いかに、いかに、
 奥ての稻を云、晚稻をよみ、徒然草、諒闇の年
 ばかりあはれる事、いかに、倚廬の御所のま
 など、板敷をよみ、あしの御簾をよみ、布のもか
 うあら、いかに、御調度とたろそか、いかに、
 ち、いかに、太刀平終ま、いかに、いかに、
 類名

か、日をよむ二日三日の類也日本紀古今集に、いかに、日を書し、いかに、
 辭也、いかに、明らかなるをいかに、詞也、いかに、春日と書も亦同し、○歟乎夫耶與
 諸なごをよみ、疑辭也、論語に、耶字なし史記に、未審之辭と注せり、○
 君か代富士が根なごの、いかに、いかに、いかに、いかに、
 の、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、
 造りて、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、
 略して、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、
 あり、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、
 れの略也、○香をよむ、音の約りて、訓となれる成入し、萬葉集に、芳もよみ、
 日本紀に多く氣をよみ、いかに、いかに、いかに、いかに、
 なる、いかに、又、いかに、いかに、いかに、いかに、
 煙出たるといかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

たろ

也、劍聖をたかむ故に、いつも燈火をけき、これをかきとり申にも、大かた夜のたごひ内侍などの外の、いたくならぬこと侍るかや、
 かすみの 信云、白氏長恨歌、攬衣、攬をカイドリとあり、徒然、ものも着あはず、いたくもあ、ひきしひて、にんかきりすかたのうしろ、
 かいばく 開白、靈異記下、受遺言、遺彼十、一面觀音像、因開白供養已訖、今居能應寺之塔本也、
 かいびやく 開闢也、後漢書應劭傳、逆臣董卓、虜獲王靈、典憲焚燒、靡有孑遺、開闢以來、莫或茲醜、
 かいぶん 涯分、今思ふにこの詞、中古より見ゆ、身の分限をいふ也、俗によこままりて、外間をたなしままにふとつ同しからず、明月記、嘉祿元年十一月廿三日云々、答云、本自存此由不願身涯分可、申合由云々、類名
 かいほう 戒保、萬代雜、僧都遍披戒保をまつらへて侍けるを、返しかはすとて、前大僧正明尊、家のかせ吹たえにを、かたのいかさまにかりかきもいへき、
 かいほそる 搔細、源之女、忍びて人に物の給ふぞて立給入りけるを、をならかきほそりて、
 かう 鳥聲、袖中人、鳥のかう、歎々をいふ、こる、かきほそる也、林葉

字書に饅を飯餅也と注せり○一縉紳の戯談に牡丹餅の春の名也夜船の夏の名也秋の巻の秋の名也北窓の冬の名也夜船の著ををらる北窓の月入らすと賤者の隣不知といふ
 かいもとのあるじ 源氏にみゆ垣下の饅の義垣下といふ事の後撰集に齋院の夕暮の垣下に殿上の人、まかりてと見ゆ賀茂入幡の臨時の祭又賭弓のかへりあるしにもある事也といへり○相伴を垣下と稱するも此義也弄花抄に人数の外の人の交り垣下の君達といふ也と見えたり
 ○かうあはせ 香合の延喜天曆の御時より其品、定れる事侍ると後普光園殿の書きたまへりこれか内にもたき物あはせの猶世のあかりける時よりそ玩ひ侍る成へしと五月雨の記に見えたり、
 かうい 源氏にみゆ仁明天皇の時より始るといへり漢書に更衣とあり師古注に爲休息易衣之處亦置宮人と見えたり隋書の承衣も同し
 かういれ 類聚雜要東三條殿室禮に香納懸天井と見えたり、
 かうく 伊勢物語に見ゆか、の義也、
 かうかつもの 棠陰比事に交制常住の物とみえたり寺僧の什物をいふなり明律にみえたる引わたす意也といふ
 かうがい 髮搔の義也倭名抄に撰髮椒かみかきとみえてかうがいの其音便也本草に搔頭尖ともみえたり○刀に割るかうがいの同物なるへし寢覺記に守刀よりかうがひ扱て髪つらひと見えたり古入髪を括り上てかうがいて留たり兜蓋なせる時髪を亂し其かうがひを太刀にすす也といふ
 かうくし 物語に多く見えたり神々しき也、

かうか 合歡、夫木廿九、山ふかみいつよりねぶと名をかへてかうかの木に人まごふらん、十六帖、ひるの咲よるのひゆるかうかの木君のみみんやわけるに見よねの花、
 かうかつもの 交制物、睡餘操筆、寺の什物を交制とて、唐に寺を番々にかはりて住持せしに、代りまに各あつたり、竹の制符をあはせて器財を、先住より後住にわたすゆゑに、制符を交ゆるとて、義にも、林春齋の説なり、或人の語には、
 かうけ 蒙家、落々ホ、くたうはる難しきかな、かうけたるわが殿も中納言にたはしますなり、一條の大路も皆領に給ふべきか、山家集、通る船の其繩にあたりぬるを、かこあかりてかうけがまし、
 かうけつ 額額、額を云ひ、くし染の事也、今時大ぼり染といふ物也、大まぼりを云なるへし、額額の二字をまぼりといふもあまの也、くしそめ、くしそめ、
 かうこじ 高巾子、河海、高巾子、巾子ヲ高クシ白キキミテハル、六位、舞人ノ中ヨラ着ス、源朝音、かうこの世はなれたるま、
 かうじ 勘事、勘事の音語也、人の犯有る時に律令にあて、その罪の名を勘へ當るをいふなり、勘當といふもこの事なり、今俗に義絶を勘

かうがへる 日本紀に考をよめり源氏も同し古事記日本紀の歌にか、なへてとへる是也或り考勘の音成へし又扱勘とも見えたり今かんがふといふわかん音便へる、反ふ也或り勘扱とある、更也又扱をよめり郷校と見えたり又效と同し、
 かうけち 倭名抄に交額をよめり字音也、令、義解に五色交綵以爲額文也と見えたり、
 かうこじ 高巾子と書り年中行事歌合にたかこしと見えたり河海に踏歌の人綿をもて花を造り冠、額につく是を高巾子と號すとひ或説に狂言烏帽子是也といへり東坡詩に公貴幹蠶高巾子冠とみえたり、
 かうこのはこ 源氏に見ゆ河海に香壺、匣とありたき物の壺を納むる匣にして厨子に置もの也、
 かうさく 耕作の字戰國策に見えたり安藝宰相輝元朝鮮に檄する文に農者勤耕索と見えたり詩經に本ける成へし○庭訓往來に東作業之事とみゆ史正義に耕作、在、春故、言、東作とみえたり、
 かうし 倭名抄に簡子をかくしと見ゆ格子も同し鎌倉右大臣集に格子なあけそとめり狐かうし釣かうし臺かうし組入かうしなとみえり○源氏にみかうしまるるといへる、皆あはたらし事也○驛馬に二人騎を二本かうじ三人のるを二本かうじといふ、其左右格子あれり也其格子をやぐらとみゆとみえたり、
 かうじ 柑子也續日本紀に甘子と見えたり性靈集に大柑子小柑子あり大柑子の今の蜜柑也三代實錄に大宰府の例貢といへり○春盤に用う

當心を得る、ひが事なり、勘事もその違犯の事を勘へあつるなり、また困を音語にかうしにたりなるといふ、困窮せしむるに、これと同一しからず。

榮花^{ツバキ}、や^{ハナ}、藤^{フジ}、はかなき^{ハナ}、あつらひ、かんたうありぬき御けしきにこそ、拾遺雜戀ひさしくかんして云々、袂衣^{タビ}、こゝろかんたうにこそは入りけれ、源真木柱、まはしかうま給ふべきにあらん、同柏木、此かうしゆるされたらん、山家下、かんたう竹取、かんたうあらじとまほしき申す、枕冊子、かうしゆるされたり。

かうし かつしと云ふ、格子と書て、碁盤の目のごとくたて横に筋をたると、是乃古の位高き人ならでり着せりしなり、條々聞書云、女中衆もかうしの織物、うちまかせてうめし候はず候云云、また云ふ、御座にてかうしはめし候はず云云、貞三。

かうじり 青き袖を小くけつりて、香に人るを古の^{カウジ}と云ふ、鴨頭^{カモガシ}と書なり、青袖の皮の汁之中に浮たる體、鴨の水に入て青き頭を出して、浮たるに似たる故なり、今乃す口と云ふ、太平記^{廿五}、湯川の庄司が宿の前に、作者いもせの庄司と書て、宮方の鴨頭になりしゆの川の都に入て何の香もせず、右落首の湯の川を袖の皮に取なしてよめり、貞六。

かうふりやなき 拾遺雜、かうふり柳をみて、かはるなき糸のみとりにあるものなけれかあけのころもなるらん、空穂^{ウツク}、難波のはらへに、かうぶり柳にたり給ひて、大宮、名にたは、あけの衣のときめはてみどりの糸をよれる青柳、同物語に、かうぶり柳につけて、ながすなには水なごめり、(かうぶり柳の攝津國也)萬十、此頃のわか戀刀をるしあつらへに申さる五位の冠、季吟云、一説河柳、一説津國冠里にある柳なり、林葉

うかふりたまはるべきひと 持統紀に滿選者なごめり、
かうふり 冠事本朝事始云、天武天皇十一年六月丁卯、男夫始結髮仍着漆紗冠、かうはしきあぢひ、皇極紀に氣味なごめり、かうわか 幸若^{シヤク}と云ふ音曲をする者也、扇びやうしなごりて、古の軍物語なごめりたふ者也、今もめり、應仁別記云、三條殿幸若、舞アリシ、貞二

かうめい 高名也、なたかまか、こゝろふなきを、わびなごかひしと思はる、後漢書韋彪傳、兄順字叙文、平輿令有高名、
かうめう 信云、なごなるものなご、かうめうのいりこ山、近江にての事也、そのあらざる云々、(更級日記、名たか^{ナカ}を、かうめう^{カウメウ}と云ふ入る、この外中昔の文に多し、

かう

るの好事の音をかえり、○好事不出門、惡事傳千里の語の事文類聚に見ゆ、○後撰集に父母侍りける人のむすめにのひてかよひ侍りけるを、かつてかうせられ侍りけるなご見えたるの、勘事の音にや拾遺集にかんじと見えたり

かうぢやう 倭名抄に唐函海合を引て行障六具と見えたり、
かうし 郷司と書り庄司の如し、熱田社田島家に久明親王郷司職賜り古き御教書あり郷司大庄屋の類也、○今郷士の稱あり郷ぢやうひともいふ

かうず 物ずなきいふ孟子に好事者爲之と見えたりかうずの人なごり、
かうせん 清尊錄に富人以錢委人取其子、半曰行錢と見えたり、○香煎の茶にかへて用うる物なり

かうぞめ 香染の義也三條裝束抄に香色の下播薄紅にして黄をませて織ぞり或説に香のたきまめたる色にのりたる名なり玉麝に以て丁子染なる香、帷著之と見え東鑑に香、狩衣見えたり、○焚香七要に倭香盒と見え、
かうた 伊勢の村名に神田と書てかく唱ふ大神宮の神田也神風抄に委し、○筑紫の豪族にも神田氏あり太平記にみゆ、
かうたふみ 香盤の義香つ、み香番銀ばらみなどを入る堅三寸横二寸なるよ五月雨の記に見えたり、
かうぢやう 定考と書てかへる^{カウヂヤウ}にかうぢやうと唱へ来るを故實とす十六位

巴上の加階にある事にて撰叙令に、十一月十一日に諸司の輩、能あるを撰み出すを定考とし式部兵部の兩省諸司の定日撰成するを列見としを書集めて奏するを擬階の奏といふ

かうつけ 上野をいふ上津毛野の略也、
かうつふみ 香囊の字大藏一覽に見ゆ、
かうて 顯昭説に綱引にかうてと云ふとあり左の大綱を上手とし右の手綱を下手としとあり、○紙手と云ふは俗に狀してとくふ類なりかうてとくふ人もはる

かうてん 香典也典いたきのるとよむ物の代りとする意也香奠と書り非也とぞ

かうぬし 神功紀に皇后親^{カミ}爲神主とみゆ是始也日本後紀に神祇伯者是天照大神、神主と見えたり西域記に宜戮^{カミ}神主、珍滅靈廟、於是殺神主除神像、投縛獨河、とくふもの此邦に稱する所の者と、同じ今諸社の祠官の通稱たり、○儒家にくふ所の神主の神體の稱とみゆし、されど上古の氏神の社ありて嫡家其祭祀を奉し支庶相扶けて崇め祭れり今家々祖考の神靈を祀るに至れり是も祠堂の制、儒家の法也位牌の儒の木主より出る也我邦の古式相傳あるに、其人に逢て尋求むし

かうのかみ 源氏に空の色したるかうの紙とみゆ紙屋紙をいふ也
かうのこし 倭名抄に裏附圖を引て香、興をよめり
かうのこの 四等の長官をすてかみとくふをこれを音便にしかうのこのとす

かう

かうらう 荒涼也、わらうやう、もろ物のあれすまみ、とり所もなきをいふより轉りて、此方の俗語に荒言はなごいふ如き、身のほどもあらで出るにまかせて、のゝちりちりすなり、白氏文集、梁園修竹舊傳名、久廢年深竹不生、千畝荒涼尋來得、百竿青翠種漸成、中古の記録等に、此詞多く見ゆ、俗に云はつゝをたるといふ意にて、あれすまみ、とり所なき辭につかふ也、無量壽經の科注などに、荒量と書り、意ひひろき方にかよふなり、類名

かうりよく 合力也、これの戮力と同しく、あからあはするなり、まがるに今俗にの音語にていふり、金錢をたくりて、人の困窮を救ふ事をいふなり、その意のたなしけれども、事つたのつから異なり、この類なる事、俗にの多し、後漢書詠超傳、令司道使招慰、與共合力、類名

かうろのはひ 和漢香之記、四季灰の圖の事、春の灰のすかた、梅をたす事、夏にあふ草、秋の灰のすかた、菊を置事、香をきと云、冬の灰、松のすがたをたす事、ふりつむ雪のたにても、かはらぬものすかたをあらはし、こら松のけりなたるをたすに、灰の雲をたさる香の火をたして、さやうをたし、こらひひし、又山風にはらるゝ松の露の落る音も、ひひしからんか、
うなかく 香を嗅ぐ事を、香を聞くと云、是

のの殿也源氏にかのの意同し
かうはこ 香合也香をたすこと
かうはさみ 髮鉄と書り今俗かはさみといふ也
かうはし 鬘をよめりかゝりの轉語也とくし全浙兵制に香をかはしと譯せり○俗にいふ香箸の義あり

かうふり 冠をいふ幘頭もよめりかうむりと書も又通ず蒙るものなれり名目にいふ也今讀書にかんふりといふ常の口語にかんふり頭巾もよめり○寺冠社冠といふ事今昔物語にみえたり神社の位階を進めらるゝを神冠をまらせらるゝ也續紀に奉錦冠千八幡宮といふ類也○此邦の上代も冠なし推古紀に始行冠位とあるを始めたるを北史にも頭亦無冠但垂髮於兩耳、上至隋其王始制冠とみえたりと古事記に諸會の事に於投棄御冠所成神と見え出雲風土記にも大神之御冠とみえり○首飾の玉をいふにやとくし○應神天皇玉冠の事○故事談に見ゆ○厚額薄額半額透額等の別あり額きりを儀といひ横に兩方へ出たる細がねを角とくしとくし○日本紀に爵もよめり始て五位になるを叙爵とす榮爵を買と今昔物語にみえたり日本後紀に禁斷民蓄錢貨以求爵位と見え○かちかうふりの福冠也官奴なとる也○冠の城の備中にありかうふり山石見邑智郡にあり

かうふる 蒙、字被字なをよめり首へに觸るゝ意成し○萬葉集にのみこたがかり麻被引かゝりといふ

かうぶつ 漢書に得美食好物をみえたり○大將あるしにかうぶつといふ

常のなりしなり、かたといふも腹しき詞にありし、源氏物語梅がえの巻たきもの合せの條云、ほろこころしくにもちりつひろへるハツンめれ、人々の心々に合せ給ひし、かたあつたをかあわせ給ひし、けつあるもたほかり云々、香をかたといひたればとて、笑へからず、貞十五

かうありすぢ 貞助雜記云、腹帯二一尺計のたんだ、あまひわたのたんに、かうありすぢを染めせられ候とあり、かうありすぢと、紅にて細く横にすぢまけく染たる也、地を紅に染るにあらす、筋を紅にて染る故、紅寄筋と云なり、古のよめと云事を、あつと言ひしなり、取染の内なり、貞三

かうをつにん 甲乙人也、重き人も輕き人もと云事也、貴賤上下をたしなべていふ詞なり、貞二

かゝげ 播上也、萬七、をよめりかたはたの上をまへしめてかゝげたてしませよめり、類名

かゝげのはこ 源末つむ、ちりなくあつたを鏡臺の、かゝげかゝげの箱なとり出たり、同わ、なゆするつぎかゝげの箱なとる物、新勅物名、かゝげのはこ、髪あけの具也、

かゝせる 所繫也、萬二、みなにかゝせるあすか川、神名帳、紀伊國懸、神社とくあり、

かゝつらひ 源常木、ひびのの事にかゝつらひ、文、鞅堂、かゝつらひなる義歟、

の有物の音也
かうぶん 告文と書り其旨趣を文に遊りされて神祇に告させ給ふをいふ後醍醐帝の東土の憤を休めせられたため御告文を下されたり神文とくふ如し

かうへ 日本紀倭名抄に首をよめり上方の義なるし一説に髮邊とすかうへをかく 詩經に搔首踟躕と見えたりあたまかくとくし、かうへをめぐらす 旅頭歌を赤人家集躬恒集にかくよめり濱成式に、かゝらにかゝるはしめにかゝる兩點なり入雲御抄に普通の歌の五句是の六句也初五七五のなへての歌のまはて其後七字の句或は五字の句をそへたるもあつたり六句の歌といふも是也萬葉集數百首の皆五七七を上句とし五七七を下、句をよめり頭をめぐらさるゝとくし、類名

かうり 行李の音也旅に持行ものを行李といふ事西土の書に見えたり俗にJUSKUSUSにも柑果の語あり

かうらう 柑類也とくし源氏物語にかゝらうの物といふる是也西土にも柑果の語あり

○かゝ 卑俗に母をいふがらば韻通ず通鑑胡注に齊諸王皆呼母為家々ともいふ○田舎に妻をいふかゝり見に据ていふ也西土に母を媽々といひ郷談に妻を媽々といふに同じ○衆妙集に出雲國仁保の浦ちかかといふ所漁人の家にとまると、あはれにもくまたをのむあまの子のかゝのあたりをはなれとらんとかゝのへけ戸をて海中に小山ありて岩窟

かゝみつくり 和名、鏡作、加々美豆久里、伊豆國の郷名なり、志稿、式内玉造楊原大朝の三神社を香貫村に得たり、その伊豆山より出る伊豆山伏と云者、先達一人山伏三人、毎歳季冬十五日より正月廿八日迄、伊豆海濱の古祠舊刹に納符すること、今千三百有餘年、その詣つる所々を録して、伊豆峰記と云、凡この記に所載の祠寺ハ、伊豆納符の四所を附す、これその古蹟たるを考めずかため也、已に香貫に至り、上の三神祠に納符す、納符此村に終るをもて、始て帯を石上に解行装をゆるへ、衣を披て虱を捫す、是の始て出るより、四十餘日、またかつて帯を解ざるを以て也、故に其石を號して、解帶石と云り、されこれ迄伊豆の境たること考めぬへし、京本平治物語に、男子ハ駿河國かつらと云所にありけるを、母方の舅木工頭ともたると云もの、捕得て平家ハ獻す、是かつらの地名にして、即香貫なり、その頃ハ駿河に屬せしことまた考めぬへし、今本にハ駿河國香貫と云もの擧め出して、平家ハ獻す、香貫を人名とせるハ誤也、因てたもふにかつらハ鏡作の省語ならんか、耶

かゝみはこ 鏡箱、俗に云かゝみの室也、後撰集卷九雜別、遠き國にまかりける人に旅の具つかはしける鏡箱のうらに、かまつけてつかはしける、たほくほのりよし、身をわくることのかたさになすかかみかけはかりこそ君にそへける、○鏡の裏横鏡、伊勢集云、鏡のうらにのりのかたなるにつけては、つらけれ、なせむらななほのりなな浦にすむたしつらへをを見るかかりけり、源信明集云、鏡かりてかへすて、まのまたにかきつ、たごこあふまのわかれつをしのかゝみかも面かけのみの人の見ゆらん、なせむらななほのりなな浦にすむたしつらへをを見るかかりけり、源信明集云、鏡かりてかへすて、まのまたにかきつ、たごこあふまのわかれつをしのかゝみかも面かけのみの人の見ゆらん、

かゝみもち 正月鏡餅を鑑に備ふる事、軍神を祭る也、京都將軍家にハ、正月廿日に御具足の餅の御祝ありし由、正月祝儀飾の繪に見えたり、今世上にハ正月十一日に此祝する也、貞一

かゝみめ 加賀女と云も遊女なり、加賀國より出るなるへし、殿中申次記云、白拍子御禮申上歟之事、貞仍(伊勢下總守)從、殿中、貞宗え(伊勢守)破尋申處に、御禮申上事、先規無之、自然御陣中をハの致參上候歟、殿中ハ祇候の事、努々不可在之、加賀女の殿中ハも參事、自然可、在之歟之由、御返事在之云云、條々開書、加賀女しなほ、今ハ聞たる人もまれに候へしとあるハ、加賀女のうたひたる歌のふしを云ふへし、殿中日々記に、六月十四日祇園會か、車、公方ハ參とあるも、加賀女の事にて、車と云ふ女の名なるへし、年中定例記六

はまゆふを敷と見ゆ
かゝる 拘、字をよめり懸り遇の意にちるハ助語也、兼蒙頌約に勾をかゝるよめり同し
かゝはゆし 赫映しの義なるへしかゝるを目に受る味也と云へり
かゝみ 萬葉集に耀歌をよめり或ハ耀合に作り又加賀布耀歌と見えたりかけあふの義けあ反か也、字文選に出たり玉篇に耀、往來貌と見ゆ仙覺抄に坂より東の諸國の男女春花開時秋葉黃む節飲食を相たして遊ひ樂むなりと云、常陸風土記に筑波山の祭日に男女集會し和歌を贈答し婚をなす是耀歌と云、朴素の風俗なりと云へり歌垣と同事なるよし攝津、國風土記に見えたり
かゝほり 新撰字鏡に豐博雅に假借謂之誓とみえたり誓の誤字なるへしと云ふ通すかうりの本語なるへし
かゝみ 鏡をいふ赫見の義也又影見也又神と義通す鏡ハ神明の體也古鏡皆柄なしと云裡面に鼻紐ありますすけに鏡もとらへる緒を附たりと云えたり又鏡枕といふ物もあり○信長公鏡背天下第一の字を禁せし事有○紅毛の硝子鏡ハまびますと○五月五日に鏡をよめりハ百練鏡の故事也よて鏡をねるもつらり○日本紀に白鏡を訓し古事記に豐摩を訓せり倭名鈔に白鏡もまかゝみとみえたり○俗に羅摩をかゝらひともかゝらひともへり又鈔に白前のかゝみと見えたり○俗に羅摩をかゝらひともかゝらひともへり後拾遺集に人の草合せしけるに朝かほかゝみ草などおはせけるにかゝみ草かちけれり 明かたハ耻かしける朝かほを鏡とみえりとみせてけるかな共

月の條に祇園會にかゝり申白拍子殿中へ參折紙被下候云々、貞二

かゝめく 今昔集、山近き嶺なるに、猿海邊にかゝめむたり、萬十四、つははむにかゝる猿のの

かゝめく 猿の聲なるを、
かゝめく 離結也、日武烈、大君のやゝのいみ

かゝめく 燿也、萬六、くさかくれかゝる玉を

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かゝりて 如此在而也、萬五、まなか目回ひに

かき、ませのませの略語か、今俗にませかきと

かき 信云、太平記、たふさぎをかきて云々、今ふ

かき 播也、日應神、からぬを鹽にまきしかあまのこ

かき 牡蠣也、日九蒸、かきかひに足ふまじむな、

かき 本草、三代實錄、貞觀元年秋七月十

かき 園地二十九町五段二百歩、雜菓樹四百

かき 七十引、てんてん物の葉をくみだして

かき 言定頼卿集、あひしかき 水あはしかき

かき 保元二年八月云云、次折敷菓千四種、梨十、

云云、青柿將黃時、采得抹石灰、或浸蕎麥
楷灰汁、二三日取出曝乾、青變作淡黃、滋味
變微甘可食、雍州府志、酥柿、安居院人
家、自洛北郊外賣來、澁柿買之、以新芻
湯煮一二沸、新芻湯之煎汁謂灰、然則苦
澁忽去變甘味、是謂酥柿、以新芻之煎
汁煮之、故外皮壞爛、依之謂之爛柿、京極
眞如堂、每年十月十夜法事之間爲節物、故
堂前賣之、又販市中、或謂十夜柿、○熟柿
延喜式七、踐祚大嘗祭、凡供神御雜物者、熟
柿筥三合別納一斗、著聞集十二、或所に強
盗入たるに、弓を以て法師をたたりけるが、
秋の末つかたの事にて侍りけるに、門のほとに柿
木の有けるに、此法師がたて矢はけて立たる上より、
うみ柿の落けるが、この弓を以て法師がた
きにたて、つひにたて、此柿のひ
や、としてあたるをかくるに、何ぞなれぬ
れと有けるを云云、○ききわし、下學集、木練、
木淡、○まねり、下學集、漢名方柿、今こ
しよかき云、著聞集十八木ねりの柿をよみ侍り
ける、霜をけるこねりのかきはをのつからふは
ゆる物にぞ有ける、殿中申次記、八月朔日本練
一籠、例年進上西林院云云、○みのかき、朝
倉亭御成記、一名はちや、又八王子、柿本氏系
圖に見ゆ、○西條柿、室町殿日記、○ままかき

かき

又紅葉す伊勢家集に柿の紅葉に歌をなん書たりけるに、
落葉肥大可、以臨書とみえたり花鏡に此を自然箋といひ、
の菓なし西陽雜俎七絶の一也、○鷹に柿をよめる歌鷹三百首に、
る柿のもとなるまのふ水こりて赤ふの鷹にかあらん、
鷹の萩にそへても田鳥をこらんと、○牡蠣をいふ石に
て取ものなれり名付るなるし延喜式に蠣儀、
今の沖蠣也本草に海牡蠣とみえたり此種に南産志に、
日荒蠣の御贄といふ事あり新かきの義にち一種、
海中に生し石に着ぬをもて名づくといひ南産志に、
か詩に蟹戸齊分牡蠣田とみえたりと化生するものなり
かき 御所柿を第一とす大和葛、上郡御所村より出す似たり有根太あり
八王子と稱する八稜也又繪がきあり伽羅柿あり圓座柿あり甲州丸あり
り江戸御所あり小澁柿あり種類甚多し其筆柿猿柿及こねかきはし柿の
如き別に出すかきかき漆柿也きききき上とす、○雀漬にたたるを亞答
子といふ、○葉も又紅葉す伊勢家集に柿の紅葉に歌をなん書たりけるに、
へり爾雅翼に柿、落葉肥大可、以臨書と見えたり花鏡に此を自然箋と
いひ、○柿の樹に鳥の巢なし西陽雜俎七絶の一也、○遠江國に蓮養坊
といふ山寺法師あり柿の木を植て年ころ甚愛しける死後弟子の僧其木
を伐て湯木にせんとわりて見るに蓮養房といふ三字あらわれたりと云り、○

鷹に柿をよめる歌三百首に、もみちる柿のもとなるまのふ水こりて赤ふの
鷹にこららん、故卿のかきのもとの葉わが鷹の萩にそへても田鳥をこらんと
かき 鍵輪をよめる鎌の字を用ふる非ざるよし倭名抄にみえたり屈曲の形
なれりかきの義なるにしがみ反き也倭名抄に鑰匙の門のかき鑰匙は月の
かき鎖子の蔵のかきといひ、○日本紀に鰐角申の鉤をかくと訓せり
是に二代實錄に鉄鉤五十五柄といふ物にて兵器也その形の似たるを
もて倭漢とも名を同じくす今もかき鎖といふ物あり
かきあけ、陸を堀て土堰を築たるのみの城をいふ障微也といひ、
めり、○靈異記に蓑をよめる衣裳を挿上る也、○類聚雜要に挿上宮あり
かきあし、播足、臺盤類聚雜要に見ゆ、
かきあはす、徒然草に袖かきあはせとて、かきあはす文選に挿をよめる
かきいた、枕草紙にみゆ書板の義今のめりたなをいふ也、○裁縫の具に
かき板の義也といふ、
かきがね、枕草紙にかけかねとも見ゆ懸金の義成入し字彙に鑰、門鉤也
と見えたり信實の歌に、世をそむく柴のあみ戸のかき金も思ひはつせ、
かきかり、古事記にかき柿と見ゆかき柿の義にち竹にこら、
かきくし、菅家萬葉に櫻扇と見ゆ古今集のかきくしを顯照本にはか
きくしと見えて人のいたく物いふなもかきくしといふ、
かきくらす、古今集に三首初五文字によりうちむれてうちむひてなど
かきくらすか如し、

本草栲栳、今もまじぶと云、雍州府志、澁栲所々有之、宇治山科七郷特多矣、土人初秋未熟時採之盛籠賣京師、買之者去其帶香杵之、以布囊攪取其油、是謂一番澁、倭俗每物第一謂一番、第二謂之二番、又不雜他物、隨其自然之體者、謂木、言木訥質撲之謂、而其美亦相當、然後以其所搾之渣滓盛壺或桶、入水經二三日後、再杵之取其油、是謂二番澁、凡澁油之爲用也、染衣服、又塗強紙張篋篋云、〇くろかき 延喜部式、紫宸殿設黒栲木倚子、大鏡、くろかきのほねのこゝのあきなきかして、
 かき 餓鬼也、萬四、あひたむぬ人をたもふり大寺のあきのあひにめかしくかこ、
 かきあはせ 筆、調子ヲ合ふ也、源少女、かきあはせなど引すまひ給ひて、林業
 かきこむる かき籠むるに同じ、かきかき其に詞也、夫木抄 春霞うあかきこむる絶間より夕浪さし志賀の花山、類名
 かきさぐりなす 神代紀に、畫成をも探をもよめり、
 かきあへまたす 奉鑑也、萬九、こはなくにかきあへまたす人みなのかくまへるも、栲
 かきたれ 畫垂也、古中、眉かき濃丹かきたれ、萬七、さぬにかきつけさせむ見もかも、栲

かきけす 掻消の義かきけすもうにせにけりなり、
 かきこもる 萬葉集に掻隠とみゆ引籠る意也新古今集に いかたせん 賤かその奥の竹かきこもるも世中ぞかし、
 かきさぐる 神代紀に畫成また探成をかきさぐるなり、
 かきすつ 新撰字鏡に件をよめり又たすつともよめり、
 かきたつ 舟にけり垣立の義天工開物に欄板といふ是也、
 かきたつる 提撕の意にけり掻起る義也燈搦をかきたつるといふもすけにかきあけさみたり〇泥水をけりとも同じ
 かきたれて 雨雪などにより打ちもたらるをけり源氏に小雪かきたれてみじう降けるを見ゆ、
 かきて 俗に能書ものをけり西宮記に書手を見え西土にもかきけり日本紀に書生を見えたり
 かきながす 源氏に筆とけりほりなく書ながし西土にも筆翰如流とみえたり
 かきなげ 萬葉集に見ゆ掻投也汗の事にけり、
 かきなす 神代紀に畫をよみ古事記に畫鳴と書て鳴を訓て那志と云ふ見えたり〇古今集にかきなすこといふも撫鳴琴の義也大神宮年中行事に琴をかき掻に見えたり
 かきぬく 抄略をけり書抜の義也、
 かきね 垣を歌に多く垣根とよめり、
 かきのたみ 皇極紀に部曲をよめり民部をかきねとよめる意藩屏となるを

かきつくろふ 尙書會記、つるのはわかきつくろひし婦しきつろふありけりなまかの苑に也、
 かきつに 本草扁青、今いほこせと云、延喜式四、伊勢太神宮總所用金青一兩、類聚雜要抄、又以金精畫文、同、四尺屏風云云紺精三兩、同、紺精泥畫云云、榮花物語、からあやなでいこんじあうして、もんをまめて、同いこんじあうていこんじあうして、あがきたり、蜻蛉日記、いほ山なながめれば、いこんじあうたりと云、いふうづにて、常陸國風土記、久慈郡云云、東山名鏡、昔有越魅萃集、龍見鏡則自云、所有去色如青紺用、畫麗之、俗云阿乎爾、或云、加支川爾、〇扁青の内に水を合むものを空青と云、延喜齋院司式、衣裳料空青二斤二兩二分、
 かきつのに 垣内の谷也、家のほりの谷をいふ、萬十九、わかせこかかきつの谷に朝されり漆かき枝に、栲
 かきのたみ 皇極紀に、部曲をよめり、
 かきつばた 和名抄、枕草紙に云、すべて紫なるつばたもくめでたきそあれ、花もいともかきも、ちちらも花の中に、かきつばたぞ、すこしにくき、つらめだし、東關紀行、みかほの國八はしりくさひななれば、こも昔のつらめなりぬるに、あしもたひつらめぬるかきつばたはかき所を聞しかども、あたりの草もみなかきたるいふが

かきのめぐり 新撰字鏡に栲をよめり、
 かきはん 押字とも花押ともけり或ハ花字花書と稱す歐陽氏も俗以草書、名爲押字といへり堂上にて判ばかりにて名乗を書さるあり是花押なり也よ名乗を草名といへり又名乗を書へき所に二合と書ハ父より子にあたり家僕にけりす文ばかりにある事也といへり一説に草名ハ一字を文字に下一字を花押にする也二合ハ二字を合せ一字の様花押にするなりともけり判ハ奉行役などの裁判書也其判に花押たるを五花判なりと云ふ故事ありて譲て押を判といふなるいへり康富記に鹿苑殿普廣院殿兩代ハ義の字也勝定院御判ハ慈の字也と見えたり判行とも判印ともみえたりと云〇花押ハ皆自名を破るよて古代官人簽署の文字に官姓を題して名を書き今自名を書てまた花押を下すハ誤也群談探除に國朝押字之製上下多用一畫蓋取地平天成之意とみえたり〇押を署してその上に印を下すも西土に其法ありと云〇判署ハ日を判し名を書也といへり可削
 かきひく 古事記の歌に見ゆ琴の事にいへれば掻鼓の義也といへり、
 かきほ 萬葉集に垣穂と見えたり穂ハ先のあらわれしをいふ成ハし首家萬葉に垣廬と見ゆ、
 かきませる 攪、字をかきけり掻交る也〇かきませるも同じ、
 かきも 垣面と書りたを略したる也、
 かきも 神代紀に城闕をよめり、

か

ふたつにすまむすたり給りて、牛のかきりひき出でしめる。拾玉集 懸衣ぬるたもとをたもひかへす。かきりひき出でしめる。類名

かゝ かなは 倭名抄に結菓をかゝのあむと訓せりからんたもの、あぶら物也といふ。香菓の味とくち義に江次第に加久繩と書り古今集にもかゝなつにたもひみたれてとありのあ反な也はわ相通せり其形のわちたもひの繩ともいふへしとれと萬葉集倭名抄なと認ら

かゝなみ 漢南也。漢南とていへり。朝鮮の役に行長平壤に在し時明將李如松五萬の兵を督し朝鮮の兵を合せて廿萬に及ぶ俗に是を漢南の軍と云ひ百萬の兵と云ふ。

かゝのこき 若而人をかゝのこきとていふ。左傳より見ゆ注に如常人。不取譽と云りされ是この人と擧ていふ辭なるべし。○書經に若茲もよあり

かゝのみ 崇神紀に香菓をよめり今の橘也とみえたり古事記にかゝの木の實と見ゆかゝの香の音香山をかゝもまよむの類也

かゝのし 馨の義萬葉集に香細と書り今、俗かゝはと云ふ

かゝふ 神代口訣に朝字をよめり屈の義也。篇海に朝の背也といひり今西偏に此語遺れり

かゝ 〇 匿字をよめりま反也。

かゝみ 萬葉集に如是をよめり。○日本紀の歌に園をかゝみとよめり。

かゝやま 古事記に阿米能迦具夜麻と見え日本紀に天香山と見え萬葉集に天降付天之芳來山人天降就神之香山などみえたり大和十市、

かゝてしも しの助語にかゝるもの義也かゝの如くにてと云ふ意なりと云ふ。

かゝなは 倭名抄に結菓をかゝのあむと訓せりからんたもの、あぶら物也といふ。香菓の味とくち義に江次第に加久繩と書り古今集にもかゝなつにたもひみたれてとありのあ反な也はわ相通せり其形のわちたもひの繩ともいふへしとれと萬葉集倭名抄なと認ら

かゝなみ 漢南也。漢南とていへり。朝鮮の役に行長平壤に在し時明將李如松五萬の兵を督し朝鮮の兵を合せて廿萬に及ぶ俗に是を漢南の軍と云ひ百萬の兵と云ふ。

かゝのこき 若而人をかゝのこきとていふ。左傳より見ゆ注に如常人。不取譽と云りされ是この人と擧ていふ辭なるべし。○書經に若茲もよあり

かゝのみ 崇神紀に香菓をよめり今の橘也とみえたり古事記にかゝの木の實と見ゆかゝの香の音香山をかゝもまよむの類也

かゝのし 馨の義萬葉集に香細と書り今、俗かゝはと云ふ

かゝふ 神代口訣に朝字をよめり屈の義也。篇海に朝の背也といひり今西偏に此語遺れり

かゝ 〇 匿字をよめりま反也。

かゝみ 萬葉集に如是をよめり。○日本紀の歌に園をかゝみとよめり。

かゝやま 古事記に阿米能迦具夜麻と見え日本紀に天香山と見え萬葉集に天降付天之芳來山人天降就神之香山などみえたり大和十市、

かゝさばぬ 隠さぬ也、萬廿、かゝさりのあかき心を、楢

かゝるま 如此様也、萬十八、よのこしらひのかゝるまひひけるもの、楢

かゝしこそ 萬代神祇、かゝしこそかものやしろのゆふかつら上をまれば下もみだれず。

かゝしてや 如此爲而哉也、萬七、かゝしてやなほや老なむみゆさる大あらし野のさゝにあらなく、楢

かゝちゆつ 新撰字鏡、醜の字をよめり、合錢

かゝるなり、錢を出しあふて、酒飲むなり、

かゝる 樂所、源ラト、がとを遠くて、同藤ラ、ラハ、くれかゝるほどにがくその人めす、榮花音樂、がくその物の音とも吹たてたる云々、樂所亂聲

えもいはず、たゞろくしにた、

かゝるふ 隠す也、萬一、三輪山をかゝるふかゝるかゝるなりあむかゝるふし、楢

かゝてあまた 引手あまたとくち同し、手前ノ物を引よるなむ、かゝてあまたとくち同し、蜻蛉日記下、さゝかたのくちのさゝかた吹風はかゝてあまたにたりとすらしも、類名

かゝなは 信云、色葉字類、結果形如結緒歌、林檎拾遺に、順和名に、結果と云もこれ也、油あけの菓子の名也、其姿の似たるより付たるに、舞なごに駒手掛繩と云も、此事なり、山崎

郡にあり此香具山と火山と耳成(無歎)山との三山の國中に離れ出て相向ひたりしれもと山とてかすてかゝ山短しとて此三の山妻あそひとて畝火と耳成の男山にて香山の女山なるをよはひあそひたる事萬葉集にみえたり今見るにも二の山の雄々しくかゝ山の女らしき山のすがたなりけり三山の内香山のみ天とていひ又ありつゝの詞のある故有べきこそ又金剛山をいへる説の甚あし

かゝよひて 枕草紙にた一人かゝよひてと見ゆ赫耀の音轉なりといひりかゝる同し也

かゝら 神樂をよめりかゝらとていふを音便にてかゝるなるべし、樂の音をよめり。○樂をよめり。○音によぶ。○太平樂五常樂の類是也通鑑梁武紀の奏回波の下胡注に音洛とみゆといへり。○凡そ神樂の始め天照大神磐窟に入らせたまひし時猿女、君の祖天、鈿女、命の俳優より事起りよて古語拾遺にも命猿女、君氏、供神樂矣と見えたりさればかゝらも岩戸がくれを略したる辭にともいへり。○内侍所の御神樂の長久の頃内裡焼亡より始ると體源抄にみえたり。○伊勢の大神樂の足利の頃より見えたり。○神樂魚あり。○かゝら鈴とていふ草あり。○諸國に出て戯曲とする大神樂は三重郡阿倉川の土民也神風抄に、飽良川、御厨とあり。○神樂、岡の洛東吉田にあり又奥州にあり田村將軍逆賊高丸と戦ひし所也

かゝらく 新拾遺に泊瀬といひり隠口をよみそとていふと云ふ、かゝらのなか 東山吉田の山也類聚國史に康樂野と見え。○八神殿の

か

の油賣、今も拵て持来る菓子也、
 かくにん 樂人、上古よりあり、樂の道の人王五十一代平城天皇の御時、大同四年三月廿二日、高麗人十人來朝して傳へけるを、樂人の家六家あり、大和國奈良の樂人の狛氏也、春日の社へ番をつとむ、山城國京都の樂人の大田氏也、氏豊原氏王氏山井氏也、四家何れも賀茂の社へ番をつとむ、攝津國天王寺の樂人の太秦氏也、貞二
 かくのこのみ 香菓也、櫛をいふ、日垂仁、九十年春二月、天皇命田道間守、遣常世國、令求非時香菓、今謂櫛花也、たぢはなの名の始成へし、櫛
 かくのみに 如此耳也、萬十六、かくのみに有けるものをあな川のたぢはなをかくも入りける、櫛かくばかり 如此許也、萬三、かくはかり(さ)とあらす、高山のいはれしまほてまほすしものを、櫛かくのし 香細也、細くほむる辭也、日應神、かくのし花たちはな、萬十、香くのし花たちはなを玉にぬき、今俗、かりはしとて音便也、櫛かくまる 爲園、園繞、このこめらるゝ意にて、かくまるゝに同じ、久と古と通入る也、惠慶集、山櫻ちかく見ん心の心にてけけり霞にかへまゝかかみ類名
 かくみ 園也、日仁德、かくみ備人(み)のあによく

もどりの神祇官にあるものにて神祇官絶て後も残りしを天正十八年四月十八日卜部、兼右卿今の所に遷せりよて今神祇官代に用ゐらる也とぞかくる 隠、字をよめり日暮るの義也又かけると通せり祝詞に日隠處と見えたり靈異記に鬚をよめり又潜とも見ゆ○繫をもよめりたもひをかくるの繫念也○隠れの山及野池岡など伊勢神宮邊の兩宮の間にて今あひの山といふ也倭姫、命の石隠ませし處とて常明寺内の岩窟を指とも微おべき事なしといへり神代紀に死、字もよめり
 かくれ 神代紀に死をよめり隠處の義也、
 かくれが 古今集に見ゆ隠處をいふすみかありかの如し、
 かくれがさ 世俗に隠笠隠簀などいへり神武紀に義笠を着て正身をかぐし大功を遂たりし事見えたり拾遺集に かくれ笠かくれ笠をも得てしかなきたり人にならざるべき○かくれみのといふ草花の花實ともよみれなりよて大すみれともより木にけふ物りけふほゝに似たり
 かくれぬ 隠沼也まを略す音家萬葉集にみゆ、
 かくれみち 私記に日本紀の間道をよめり、
 かくろふ 延喜式に見ゆ隠る也ろ反る也萬葉集に隠比と追儼咒文に隠良比牟とも見ゆり
 かくろし 萬葉集に香黒と書たれどかの發語た、黒き也、
 ○かけ 萬葉集に鶏をよめり日本紀に庭津鳥かけの鳴なりと見え催馬樂にもかけの鳴ぬ也といへり鳴聲をもよめる名也家鶏の音といふり僻事也といへり枕詞に鶏聲を究々羅と見えたり○物をかけにするといふり賭字

もあらす、萬五、あとのへにかくみめてうれへ、櫛かくみたゝかふ 天智紀に、繞戰によめり、
 かくら 色葉字類、閑樂(カク)とあり、信按に、説文、閑、事已、閉門也、増韻、閑を樂終也と注せり、まがれば原文に閑樂(カク)とありしが、字の脱たる也、○かか(カカ)といふは、山家集、名残りかにかかすゝもをしからんそのまはたつ神樂(カカ)なり、
 かくらふ 隠る也、萬十、五月山花たちはなにほ(カカ)すかゝる時にお(カカ)すみから、櫛かくり 隠也、日顯宗、みまかくりてみえずかもあらむ、萬十五、ゆふまれのちもあかりぬ、櫛かくるゝたみ 崇神紀に、逸民をよめり、
 かくれこ 隠言、あつこ(カカ)に同じ、今云かけぐち也、無名抄上、一日の歌なんし給ひしを、かくれ言なし心えず思ふたま(カカ)しを、林葉
 かくれたるこに 秘區也、日垂仁、常世國則神仙秘區俗非所、櫛
 かくれたるつばもの 雄略紀に、奇兵をよめり、
 かくれぬの梳調 みた、そい、萬一櫛、かくれぬの下にかかひてあり、かくれぬの、木草などに隠れたる沼を云、をれの下をいつけたり、又三、かくれぬのその心そであるり、かかかくれたる沼水の底といふ也、をれの下をいつけるより、今一きは

の義也商物にいふも義同じ源氏物語の基の所に菊をかきものにしてと見えたり○器物のかけといふは郷談正音に缺と見えたり
 かけ 影をよめり日氣の義なるべしひかけといふ景もど日より出て日景ともいふが如し○陰をよめり一向日のあたらし所に就ていへり影の日光に就ていふ也○かけにかかるといふはひたのむかけなといふり日本後紀に道邊之木原垂蔭爲休息處とて意にて陰庇也よて古事記に庇もよめり軍防令の義解に庇、如謂方と見えればかたよむしとも陰親の律語より出たる成べし父祖の傳によりて位に叙する事を得るを陰子孫といふも同じ日本紀に頼天皇之靈の靈をみかけとよめり晋書に莫不陰其德字と見えたり○俗に人の瘦弱なるをかけのなまといふり風俗通に老人子無影と見えたり夫木集に 日にそへて姿をかげに成にけるもその里なるいもをこふて○倭名鈔に駒又騾をよめり鹿毛の義也騾をあらかけ赤騾をあかけ鳥騾をあらかけとよめり又黄鹿毛花鹿毛鹿毛はしとてなぐら鹿毛またら鹿毛の品あり○源、頼政の子孫の鹿毛の馬を忌といふり仲綱が木下と名けし鹿毛の蔭を寄たり平宗盛のぞみかけしより終にこれ源平亂の基となりしをもて也○信濃望月並に御牧七郷の内、鹿毛の馬を置す他より來るも一宿を許さずといふ是望月の神のまらと傳入り
 かけ 崖をいふ懸崖ともいへり懸の義なるべし俗に谷をよめり谷と意同じ或の磯をよめり坂也と注せり
 かけあひ 歌にいふり彼に掛て此に合の義西土の昔に何、字係何、字看なといふ意也○相槌をいふも彼此互に擊をもて也かけあひともいへり

の懸かたき心ある入し歌
 かくれのみや 神代紀に、幽宮をよめる、
 かぐるき かり發語にたせし助辭なり、たぐり
 かけつゝに同じ、青きを、かきをもくふが如し、
 かくるひ 隠しの詞延約にたせしなるなり、
 もつゝまる所、隠の意なり、呂比の約り利なれ
 り、加久利なり、利と隠とに通入り、かくれといふ
 なり、草がへるも、草隠れもくさひも、つゝの習ひ
 なり、またいかに入るもかきもくさひも、互に
 延約めてくさひなり、光明寺入道攝政家百
 首、今も猶草のま袖にかくりて現はに見えぬ
 野入の姫百合、明玉集、こたかみ谷のこめれに
 かへりて風のよきたる花を見る哉、類名
 かけ 懸也、心にかけ言にかけ也、萬二、かけまく
 もゆしきかも、古今、千はゆる加茂のやしろ
 のゆたすき一日も君をかけぬひりなし、橋
 かけ 鷄也、古上、野鳥をくしんをまもはつと
 りかけりなへ、萬七、にはり鳥かけのたし尾のみたし
 なの、催馬、庭鳥のかけるとなきめ、たきよ〜わ
 かひたす、いま人もこそ見れ、橋
 かけ 竹取に御門なぞか、ちあらん、猶めてたはし
 まるもて、御輿をよせ給ふた、此かくも姫きとか
 けになりぬ、はかなへ口をしつたほして、けたた人
 たりあらしのけりたほして、見ただたかへり
 なんと仰らるれば、かくも姫もとのかたすなりぬ

かけうた 懸歌の義をなしたよりかけたる歌なれの贈答の事に入り
 かけたひ 掛帯と書り古へ女の装也玉たすきの類也からきめと同一地に
 て纏ありから衣着て次に裳のかけ帯を頸にかくる也と入り〇土佛伊勢
 參詣記に木綿邊の白きをもて男の冠を結び掛帯の赤をもて女の身を妝
 る是則陽の水をもて身を潔め陰の火をもて身を清むる姿也と見ゆるれり
 陽神小戸のみそきり祓除の始也陰神泉津へひの穢火の縁也
 かけがう 釋氏要覽に比丘房内具、佛言應四角懸香と見えたり是よ
 り出たる名也と入り、
 かけがみ 懸紙とかけり禮紙をいふ也、
 かけくま 倭姫世記に稻の事に懸久真にかけ奉ると入りくまり日本紀
 に賀をよめ祝詞に懸税と見えたり穂なから青竹にかけて奉るをいふ今も
 神宮に其式あり
 かけこ 源氏にみそびつあまたかけこに入て類聚雜要に懸子と見ゆ西土の
 書にも替箱と入り 玉くしげかけこにありもすもさるたたちながらなき
 身をなれ
 かけとも 成務紀に山陽を影而といふ見えたり萬葉集に影友と云りか
 げつたもの義つた反と也北山抄に山陽道なかけとも道と入り
 かけこ 掛字の義西土の書に見ゆ又名字なとも入り又かけ物とも入り
 掛軸幘軸など見ゆ幘の廣韻に開張畫、繪也と見ゆ〇繪のかけものを畫
 軸又懸畫といふ横批といふものなり〇利休の子道安の茶の會五六年の
 間花入に花をいけて一度も掛物かへりたる事なかりきとある書に見えたり、

かけのさ 影草也、萬十、かけのさの生たるもの
 ゆふかけに、同、吾等のゆふかけのさの露に
 云々、山陰岩陰水陰等の草なり、橋
 かけこ 懸籠、源小幸、ふたかたにひもてゆけり
 玉くしげわが身はなれぬかけこ也けり、枕冊千九、
 ぶたじかけの視、
 かけさへみゆる 影前所見也、萬十六、淺か山か
 けさへ見ゆる山のの淺き心なわかもなくた、橋
 かけしこるま 懸車、尙齒會記、くまのたかけ
 し車を引つて七のたつこへつゝをさる、
 かけす 俗にたまふとくつに同じ、口のはにもか
 けすして、云たなるゝなりの類ひをいふ、所により
 て、かしく異なる意あれども、なほしめせよ、物のも
 るまにたつてくつ詞也、又物のかゝるまはりもな
 きを云か、俗に云なんの事なくとくつに似たり、
 抄物にかけす、度重ならぬ意也と入り、却
 て心得がたし、徒然草、をなかつたこそ、生れしき
 たらぬ、心なごかかしてきよの賢きにもつゝつ
 うつららん、かたぢ心なまき人も、ええなくなり
 めれり、をなかつたり、顔にえけなる人にも、立交り
 てかけかけをさるゝこそ、ほくなきわなれ、類名
 かけたるこへ 垂仁紀に、不及てよめる、
 かけしこり 崖造、野守鏡序、山高へかけしこり
 かき入、中務内侍日記、かけしこりなるた、ちほか
 きり、水なごはかなきものから、林葉

かけず 徒然草にかけすけなるゝと書るのかけ合の義なる入し
 かけすどり 懸巢鳥の義今榎鳥とく果を一枝にかけて垂下すと名く
 る也、
 かけたひ 門松に干鯛雙尾をかくる懸鯛といふ祝賀の物とせしより凡て
 の賀儀に生鯛を纏めて雙尾を結ふをも稱せり〇干鯛の延喜式内膳式に
 見ゆ内膳にまた甘鹽あり大膳式に鯛鹽作及白干春酸あり主計式に鯛
 膳あり是干鯛に近し又枚乾あり古へ神職祭供なり、
 かけち 倭名鈔に磯道やまのかけちと見えたり歌に岩のかけちとのかけち
 なごもより石をわたし掛たる道をいふ也或ハ缺路の義とす
 かけちから 祝詞に懸税と見ゆ大神宮神嘗祭に新稻の類をつかぬて竹
 に着てあまた進るを古き物語文などにも此類の事あり
 かけしめ 鳥にくふ距也常にけしめと入り〇ひばりの料理にかけしめを
 残すと入り、
 かけて 懸ての意にて兼ての意にも入り眞字伊勢物語に、直に兼而を
 書てかけてとよめり俗にかけがとくふ詞も西土にて兼とくふの同意成入
 し拾遺集に源頼光 中々にいひもはなたてまなのなるまの橋のかけた
 るまを頼光美濃、守たる事今昔物語に見えたり〇かけてもいひしなごの
 懸牙齒の義の如しわたの原八十鳥かけてのみかり懸んと思ひしなごの懸
 隔の意あり〇春かけて夏かけてなごの冬より春へ向て春より夏へ向ての意
 也又豫、字の意もあり行末をかけて契りしなごいふ是也定家卿千五百
 番の判にも春の始秋の始にいふへし春の末秋の末にいふへしからざる見え

かげとたのむ 蔭となし頼みにするかたなり、比蔭爲頼の意あり、伊勢集 我宿のかげそとたのむ藤の花立よりくとも波にをらるな、紀貫之集 我のみやかけたのまん白波もたへす立よるましのひめ松、

かげとも 山陽也、日成務、山陽曰影面、萬一、名くし吉野山のかげとも、槍

かげのうま 爾雅、駟、和名抄、駟馬鹿毛馬也、續紀、寶龜元年八月庚寅朔、奉鹿毛馬於若狹彦神八幡神宮各一匹、人車記、保元二年八月、大饗雜事、龍蹄十疋、皆鹿毛、明月記、元久元年十一月十三日賀茂御幸云云、御馬鹿毛、義經記、よのともが鹿毛の馬にのりてゆき、同御祈りの布施とて、鹿毛なる馬にくろくらをきて參らせける、花營三代記、應安七年十二月廿五日、貢馬内覽、三番鹿毛、四番鹿毛、七番鹿毛、八番鹿毛、○明月記、建仁二年三月廿九日賀茂御幸、競馬二番、上總鹿毛、高倉大納言白鹿毛海道記、かくて本野か原を過れば懶かりし鹿の春の心を生替りて、秋の色うとげれども分行駒の鹿の毛に見ゆ、

かげはきのなたち 懸佩之小太刀也、萬九かかげはきのなたちとらばき、槍

かげばん 懸盤、源宗業、院の御まへに、淺香の

たり○源氏に昔の御けはひにも掛ても觸たらんと見えたり陳孔璋か檄文に擧、手挂網羅動、足觸機陌といふか如し

かげなは 倭名鈔に絹索をよめり取馬繩也と注せりかけの繫の義也後世懸綱といふ

かげなびくほし 影摩星の義内大臣をへり三公を三台星にたとふ内大臣の三公の員外なれどもがて三公に轉任すべき官なればかげなびくといふとへり阿佛の記に爲家卿の事をつかさづかけなびく同しにかづきと見えたり大納言にて身まかりたまへり也夫木集に内大臣百首祝 世をてらすかけなびく星の位山なほさかゆかんすまらばるかた、

かげぬま 常陸國にて偶地に人物の往來する影のうつり見ゆる是を影沼と稱せる也西土の書にふ地鏡なるといふ○三州川路山にて人の長九尺ばかりに見ゆる所あり、

かげのたれを 雞の垂尾の義長き夜とつけよみたり、

かげのみみ 陰の舞也又様、下の舞どもつふはせぬ事といふ、

かげはし 景行紀に燈をよめり懸階の義即棧道也一書に吉蘇殘長八十二丈と見ゆ鹽尻に伊奈川の橋二十三間余木製第一の長橋也柱なく三重のはね木を兩岸より出し中の水尾桁九間持はなし懸れり水際に至り五間三四尺ありといへり又昔の萩原澤といふ谷あひに大木を鎖にてほり渡したり八九十年前まで其鉄鎖され残りてありと古き者語りし今のかけ橋にあらざるもいへり元明紀に昔信濃美濃二國の間嶮岨にして通路なかりしかばかけ橋をかけて通路ありし事見ゆ一書にいふ岩井野村のかけ

かげばん、枕冊子、人の家につきしき物、かかげばん、

かげふむ 影踏、後撰集、寛平のみかと御くしたるをせ給ひてのころ、御帳のめりしにのみ人かみふららせ給ひて、ちかともめしよせられりければ、かきて御帳にむすひつける、小八條御臺所、立よらわかけふむばかり近ければ誰かなその關をすゑけん、影踏のちかき事にいへり、萬葉集にも、橘のかげふむ道とらふ、

かけみち 和泉式部集、をしへる人もあらなんたつねみんよしの山の君のかげ道、源惟ガ本、君なきて岩のかげみちたしより松の雪をも何とかが見る、夫木十二、ふりまざる谷のかげ道こけたへてかよふ男鹿のあざあれにけり、

かけむしろ 舊記にあり、三好亭へ御成記、又東山殿年中行事に有、東山殿年中行事に云、上の御末の三間梁に九間造、間の遣戸高闕也、真中に柱あり、其際の戸兩方へ一本宛開く、此口に掛席あり、但一枚の筵四ツに切、縁をさしめひ合するあり、是疊の表に、入りを付て暖簾の如く下る也、貞十四

かけもえぎ 染色舊記にあり、今どき色なほ云類なるし、宗五一册抜書にかけもえぎと申て、こんやにてそめ候、色々もなをつけて、もえぎくろみて染たる小袖にて候とあり、もえぎに黒みあ

橋長さ七十五間欄干つきし所五十一間石垣十四間は慶安中造る所也と見え宇治物語に守の乗たる馬あもの橋の鉸の木あどあしめて踏折てと見えたる昔の藤原をもて板を縛し大鉄鎖もて桁とす近世の尋常の橋の如くして橋杭なきのたつとらふ

かけはなれ 羅離の義成へし歌に多く懸る意に寄たりあやめ草ゆたさき若はしの類にゆるる是也、

かけひ 算字をよめり以竹通水也と注せり又規とも見ゆ懸繩の義也活法に連筒とあるも同じ姓氏にも見ゆ

かけひき 軍の進退をいふ驅引の義也、

かけぼうし 職人歌合に見えたり影法師也西土に影戲といへり明宗吉詠物新題にも影戲の詩あり影まといともいふ、

かけほし 陰乾也又正字通に曝の置物、風日、内二合乾と見えたり又幽殺も同じ、

かけまくも 祝詞ことば也よ歌にも神祇に多くよめりかけまくもかしこきとていふ言の葉に掛んも畏れ多きといふ義也まく反む也元明紀に開母威岐と書て開關の誤也古書關とてかけまくもかしこきとていふありあか同韻なればあかよめりとも萬葉集にこらが名に開の宜き朝妻のと見えたり開をつけ又あけなぞといふあり山所の字をよめる心得がたし

かけみち 岩陰の道也いはのかげ道と見えたり、
かける 驅をつかつかくるの俗語也○算にかけるといふも乗也○祝詞式に翔もよめり靈異記同し又翁をかけるといふとらふ、

らるる、色々の類なり、其三
 かげめ 陰妻、袂衣一、あまのほをきんだちのか
 げめに、たはさんよりの、林葉
 かげめらかす 祭花煙の後、からあまのこも
 んのかへしうきなごかかめらからかきせ給へり、
 かげらふ この事にいさゝかのわかち有ども、たほ
 よる四種なり、まづ蜻蛉、玉蜻、珠蜻、蜻蛉、蠅
 蛤、烟蟻、蚊蟻の類ひの虫にて、俗に云ふんぼり
 にて、あまの虫を訓り、虫部に委し、又同じ虫
 ならども、蜻蛉を訓り、是のひを虫にて、夕に軒
 にうすつゝ小虫にて、有か無かといひ、朝に生て暮
 に死する、はかなきたぐひによき物なり、又陽
 炎、野馬、遊絲をも訓り、是の春の發陽の氣の、
 曠野などにて見れり、焰のもゆる如くなる物にて、
 糸ゆふといふ物はなり、萬葉集に香切火ともか
 りて書れり、本訓にかきつひなるを、言使によりて
 かけるふと云、是の又一種也、このみなのけて、一
 轉て只訓とのみなりて、かき事のはかなく、有か
 なきかの意に似て、假初なる事にとりたる有、是
 の上の三種より出しものにて、三意をふくめり、
 是をもてよゝゝ思ひ考ふべし、日の陰合を云
 り又是也、金槐集 月影のそれかあらぬかかへり
 ふのほのかに見えて雲隠れにき、後撰集戀 かへ
 るおに見しかりにや濱千鳥ゆへもあらぬ戀に
 まよはん、類名

かけるひ かきつひとも見ゆ陽儀をいふ影る日の義也野馬も遊絲も同じ
 萬葉集に炎字をもよめり火影也かけるひとほたらかしても入り○古事
 記にかきつひのもゆる家むらとよまにまふ人家の火炎をいふ也萬葉集にか
 けるひのもゆる荒野をいふの荒野によれの葬、火也
 かけるら 中比よしかけるひを轉したる詞也かけるらのもゆる春日などいふ
 の楞伽經にへる春時、儀也○雲にかけるらなといふ陰する意也るら反
 るかけると同じ古事記の歌に夕日のひかけるらと見えたり祝詞に夕日の
 日隱處とあり○菅家萬葉集に遊絲をよめりかけるらそのそれかあらぬかよ
 める是也詩にも天外遊絲或、有無と見えたり○かけるらのあるかなきかな
 といふの蜻蛉をいふ倭名鈔日本紀に見ゆ童蒙抄に黒きとらうのちひさき
 やうなる物をいへり今も蜻蛉の一種極めて細小なる物をいへり本草にも
 蜻蛉、言其狀恰竹也と見えたり水邊の木陰にすみてその飛貌の蚊々
 水に點し閃々と電のごとくふれり陽炎に比していへるなり萬葉集に蜻火と
 も玉蜻とも書てかけるひとよめる也かけるひの磐垣淵とつづけたるも此義な
 るべし玉蜻ハ蜻蛉か目を土に埋たけり青珠となるよし博物志に見えたりと
 ぞ又燈火の一名蜻蛉眼といへる事家瑞記に見えたり○蜻蛉をいふの蜻
 蛉より轉したる也かけるら夕へをまたぬり文選に薺菜不終朝蜻蛉
 見夕と見えたりよまた今の俗蜻蛉を朝顔ともいふり○烟煙をよめるら
 一説也心得がたし○目にかけるらとつづきり紺色也人の爪の状たり○か
 けるら小野ハ吉野の奥にありといへりよまきつ野をよめりかひたるものにて
 此わたりにあらす

かこ 水手也、萬四、朝なきにかこのこもよひ、日懸
 神、天皇幸、淡路島、而遊獵之、於是天皇西
 望之、數十麋鹿浮海來之、便入于播磨鹿
 子水門、天皇謂、左右曰、其何、麋鹿也、泛巨
 海多來、中界對曰、諸縣君牛、是年耆之雖、致
 仕、不得忘朝、故以己女髮長媛、而貢上矣、
 天皇悅之、即喚令從、御船是、以時人號、其
 落岸之處、曰、鹿子水門也、凡水手曰、鹿子、
 盖始起、于是時也、
 かこ 今川貞世が嚴島詣記に、御社ふしをかま
 せ給ひて云云、かこにて御舟にうつらせ給へり、
 かこて 桑家漢語抄、加古手、櫓字園云加古
 手者、舟師號加古、其加古相携之義也、手
 與太音通、故用此訓、近代多以櫓之音、相
 呼爲呂、不可然事也、
 かこちよする 後撰集 夏の夜の月の程なく
 明ぬれ朝のまをそかこちよせしめ、
 かこつ 古今序、秋の夜のながきをかこれば、色
 葉字類、詛認をかこつていふなり、
 かこつ かのつはかこつに同じ、懸著といふ意にて
 その事にせかこつて、事をなしむを云也、嬌
 なつてを訓も、物をまけてあらめ事に云、かこつ
 るよりの也、白氏文集に、嫌をよか訓し義
 訓也、古今集序、それまらこはら、春の花の
 にほひすなくして、むなしき名のみ、秋の夜のな

かかけを 古へ冠に懸緒なし古記に御狩の時の琵琶琴等の緒を用うといへ
 りよて後世用るも紙捻也今の組懸ハ承久年中織鞆の時に起るよし雲
 井、春に見えたり束帶の時の公卿殿上人なへて紙捻を用ふる、
 ○かこ 水手をいふの鹿子の義にて播磨の鹿子、水門も同義なるよし詳に
 應神紀に見えたり萬葉集に、なこの海に朝こき來れり海中に鹿をなぐな
 るあはれそのかこちよめり應神紀の故事によりたるなり
 かこ 籠をよむかこちよの義なる入しめのみきたるを目籠といふ籠をよめり○
 駕も籠に同じ常に肩輿を呼りも籠輿より起りて投ひの後に出來たり○
 鹿ノ字をよむ鹿兒の義也萬葉集にかこちよの獨子をいひけたるの鹿の子
 をいひ、つづつもの也といへり○倭名鈔腰帶の具に鉸具をよめり即帶
 鉤なればかぎの義也歌にひたち帯のかこちよはかりなをそへたり○鞍具にも
 へる今の鉸具頭又ハ鉤頭をいへるもの也といへり○材木にかこちよ
 木あり樹葉機樟に似たり小赤實を結へり又美濃にて紙草をかこちよ
 かこちよし 楊升巷外集曰、瓊廓者即今之雙鉤と見えたりふたがきと
 もく、
 かこか 源氏にみゆ密かなる意也といへり今俗かこちよとていふも是
 也なり、
 かこら 假言の意といへるかこちよ意にも少の意にも用ゐたり○伊勢物語の
 歌のわかせしかこちよを眞字本に神言と填たり誓約をいふ成し神をらして
 弓ならす事あるより上へ句に弓をいひ我せし神言の驗を見せ給へり神に訴

きながてれつ、かつ人のみ、にたそり云云、惠
慶集、あら雪のふるさとしながら庭の梅の花をかこ
ちてほひちりせん、類名

かこい 懸託の意にて、かけつけるを縮めてい
也、俗にかこつけるとも云、古今集の序に、むな
しき名のみ秋の夜のながきをかこつれと見ゆ、ま
たかこいといふも同じ詞也、白氏文集に即ち託
をかこつと訓り、山家集、なげとて月や物を
思ひするをかこひはなる我なみたかな、後撰集、
下紐のさるしとすも解なへにかこひにかけ
すもあらなん、類名

かこひ かこひけ詞也、そとより轉してすこひばか
らりそめなほくも意にも通ふとあらば、よ
思ひまはせ、そめもどつかけつひとすの出たる
こと也、たつた源氏にまひたつものかこひはか
り引かけと有を、抄にか事也かたなりなる云云心
也、あつち、くはれたら、あつちを詞を釋る云云
くからず、いかにけりまなたり、引いていかにい
なげれたら、まひらめく物をなたりとくさつひの、か
こひけ詞の如くはつと意也、つまる所、かこひ
もかたはからつとが當る也、河海抄にかこひ、
所てその意かほへし、誓、少事、諸を見
えたるも、あつちといはれたら思はれず、紀貫之
集、山田のくまこつちをなする花のかこひ風
にたふせさらなん、續後撰秋、心していたくな鳴

る也巫の如し

かこぎ 小兒を怖すに面を怒らしてかくいふは元興寺の訛言也大和の元
興寺に鬼の住居し事本朝文粹に見えたりと梅村載筆にいへりその惡奴
の靈鬼にて道場法師の童子たりし時捕たり今に其鬼の髪ハ元興寺に収
て寶とするよし靈異記に見えたり韻瑞に郝批守原州虜不救過婦道
其名以怖兒、啼とみゆ、

かこい 白氏文集に託字をよめり借言するの義とす反つ也今宣をのりこ
ひといふか如しかこつける也○かこひがほり西行の歌によめりかこつけまし
き也○かこひ山ハ伊勢鈴鹿郡の原村にあり後花園、院の皇女住せたま
事山かこひの記に見えたり

かこひける かこひけるの義嬌、字の意にいふあり或ハ談、字をよめり日
本紀に託をいひていふ言附の義也

かこひがまし かこひがましといふ見たり止の聲などによめりをもて秋聲、
賦の唧々をよめりハ聖一國師の點なりとくハ千載集に、み山ハの時雨
つわたる數こひかこひかこひ玉柏かよ、

かこひ 倭名鈔に柿をかこひとよめり廣韻に圍也説文に以柴壘之と見
えたり又楚をよめり詩經に見ゆ今のかこひと稱するもの是也金葉集に山
田にかこひ垣柴夫木集にかこひなき柴のいほりともよめり隠るゝをかくら
とも又ハその義なるハし○物を蓄るをかこひとも同義なるにも童蒙頌
韻に拘をかこひとよめり○世に茶寮をかこひと稱するハ殊光慈照寺の界
内東求堂の東北に一室を設け同仁齋と名け四席半方丈の室になせり

かこい 屏障是を圍めりよ此稱あり四疊半もまた此にたこいといふ

かこい 圓をよめりかこいとの義成ハし古語にかこいとも見ゆ、

かこい 香るるめとくふ義也後撰集に、けふ櫻しつゝに我身くさめれんかこ
いめとを風といふまじ、

かこい 蓋笠をよめりハ重なるの義なるハし綱かを膚かを膏かを市女かを局
かをいほひかをまからまを笠つづれば笠平かを田笠墨笠あり後世墨笠宇都宮
笠小田笠あり又天利の比ハつづら笠元祿のころハわり笠はやれり寛文の
比ハ江戸にて女の編笠を用たる事あり○かこい幾かといふハ蓋の音な
るべし○海東諸國記に若道過、尊長ハ脱、鞋笠、而過とくハハ實を得た
り○倭名鈔に笠を俗に大笠といふと注せり今たかくさたてがとくハハ物
ハ大の字音をよびたてハ大傘地に立べきをいふなるべし西土にも堅笠の名
あり○瘡も重ね出るもの也全浙兵制の歌に、むら雨ハたかりその物を
かこいその身のかさをそこねむたけ笠笠を身の瘡に寄たる也倭名鈔に跡を
かこふた瘡をかこいと訓せり新撰字鏡に澗をかこはたとよめり牛祭文に
あかみがさ見えたり○かこいの高き早きなどいふハ物の頂上をいふ詞なれハ笠
より出たるなるハし○藤原頼通公關白たる時婦女笠を戴き襪を着を禁
す○かこいにかこい水かこいなどいふも同じ倭名鈔に暈を日月のかこいともよめり蓋
の義夫木集に、旅人のたなし道にや出ぬらん笠うちきたる有明の月

かこい 口語にいふハ氣さす意にも西土の書に吹滅燈燭氣硫磺柴烟、氣
葱蒜醇酒、氣溝渠汗濁氣なとくハし

かこい 中右記に仰可射笠掛之由を見えたり寛治年間の事也

かこい 林葉集、鶯や木こにまじつゝぬひぬらんか
こいとも咲る梅のはなかな、カサ笠ニカサトイフ方

ねして日高き夏のかげをくさん、夫井一、衣笠内大臣夜をこめて秋たつ也わがせごねものかさを今来たまじ、

かさながれ 風流、清輔集、たか山にはなれし鷹のかさながれゆくへもあらぬ戀もする哉、散木中、みかり野にかさながれせしはし鷹の聲にもつかぬうらみぞする、

かさね 俊成卿女集、紐にあしほをそめし山姫のもみちかさねのころも手の森、○志のひね上、松かさね、○挾衣三、あふひかさねの組、○同二、御文、こほりかさねのかみのうすうにて、水重、表白盤、裏白無文、○狭衣三、齋院のかれのかさねたてまつりし、御ねたれすかた、源若菜すはうからね、○今昔三、聖夢重、薄物、袖、林業

かさねことば 清少集、わするなまよひといひしこれ竹のかしをへたつるかすにぞありける、新勅懸、くれついかにかにたしてかみ大井川ぬせきの川(水か)もりぬへし、林冊子、草のいほりちあそび、○たかふく、○いほり、○莊子、因是已、○已而、○不、知其然、謂之道、林注云、以下句已字粘、上句已字、此是筆端遊戯作之處、林業

かさばや 萬二、加麻儲夜(ハヤシ)のみほのうらわのちらつ、じみれどもさびしなき人思へば、倭姫世記、風早乃伊勢乃海、萬七、風早之三穂乃浦

乎こく舟の舟人とも浪たつらしも、

かさほろし 和名抄、風癡疹和名加佐保路之、人皮膚虚、爲風寒、所折則起也、

かさまつり 風祭也、日神代、級長戸邊命、亦曰級長津彦命是風神也、式祝詞、龍田風神祭、風神を祭を云、檜

かさめ 本草、蟪蛄、延喜宮内式、諸國例、貢御費、攝津、攝津、同内膳式、年料、攝津、國、攝津、四條流、庖丁書、カサメノ事、可盛カサメ、流ニ餘多有哉、雖、然、常流ノハ格別也、是毛龜足ナクシテハ、假初ニ玉御前ハ不可、參甲ニ盛ベシ、若ガサメノ甲チハ、土器ニ可盛也、大草相傳聞書、かめめ、のせい、かつ、み、の、こ、く、は、ま、み、あ、し、を、前、に、二、た、て、其、外、の、あ、し、を、も、た、り、に、た、て、其、中、に、か、ひ、敷、は、ひ、は、た、る、べ、し、其、上、に、身、を、高、さ、五、寸、ば、か、り、に、も、り、其、上、に、か、う、な、か、お、せ、入、し、う、ら、の、羽、ふ、し、も、り、し、ま、の、こ、ほ、り、か、さ、み、の、こ、う、も、り、ま、び、の、舟、つ、み、り、か、た、其、外、の、手、の、物、ハ、金、銀、に、み、が、き、用、る、也、其、の、物、の、い、ろ、に、て、出、す、事、わ、つ、し、ま、び、か、さ、み、の、料、理、の、事、ま、じ、ゆ、で、身、を、ど、り、能、酒、を、す、た、て、を、等、分、に、合、し、ひ、た、し、て、も、也、

かあり 飾也、萬二、こ子のみかさを神みちにかさめ、ついで、續後十九、萬二のふる、い、ち、を、こ、に、か、さ、め、て、檜

かざり 飾、延喜彈正式、凡金銀薄泥、不得

にいへる盛旗なるべしとく入りされと盛衰記に袋の事に非分の難をのがるべきかざるしなれと見えたり飾標の義にも同書にかさざるしを左右の袖にそつけけるとも見えたり東鑑にも冑後付笠標仰、曰此簡付袖爲尋常儀敷と見えたり今川範國赤鳥を笠標とせしを婦女の装具といふ、垢探の義、帙巾の類也

かさしぐさ あふひをいふ夫木集に 神まつるけふのあれのかさし草長き世かけてわれ頼まん、

かさしたな 後宮名目に簪棚長二尺横一尺四方柱草手形の蒔繪を用ゐ柱の伊勢梨地なりと見えたり

かさしのうてな 源氏に御かさしの臺のちんまたんをつくりと見ゆ又冠の臺也といへり○延長御賀、記に立挿頭机一脚有銀山銀水金銀花樹等と見ゆ

かさしのもみち 冠の角指也といへり、

かさしのわた 踏歌に用らる、挿頭の綿也、

かさしなる 新古今集にかさしなる三物のまげ山とよめる、本歌萬葉集に、いしにしへに有けん人も我こそ三輪のひらにかさし折けんと見えたりよ、枕詞のことよめる也、

かさす 韓文に髻、長袖を見ゆかさしと休用の辭今も扇をかさすといへり凡て物のかげを求むる意あり

かさたち 筋太刀と書り法の如く玉など居たるをいふと見ゆ節會大嘗會などに用ゐらる、太刀也といへり傍抄に古物飾劔大略木地と見えたり後

かさをもて當時の飾劔を用うとぞ

かさなみ 神代紀に風濤をよめり風波も同じ今言もていへり、

かさなる 重をよめりかさなるともいふなる、反ぬ也文にかさねてとよむ所もあり、

かさぬひ 神代紀に作笠者をよめり舊事紀に笠縫等、祖見えたり倭、笠縫、邑崇神紀に見え十市郡に在といへり攝津、國笠縫氏延喜齋宮式に見ゆ古歌に有馬菅笠三鳥菅笠といふ是にや笠縫の鳥ハ萬葉集にみゆ是も津、國にも笠ぬひの里ハ十六夜、記にみゆ美濃、國也○かさゆひの鳥新

後撰集にみゆ豊後大方郡也といへり、

かさね 服にいふ製をよめり倭名抄にみゆ爾雅注に製、猶重也とあり袍の下衣也女中のかさねわねらきぬにて色紅梅也といへり○衣の色にも櫻かさね松かさねなど見えたり、

かさねがらけ 石清水臨時、祭にあり、江次第に、給重益五重許と見えたり、

かさのかりて 笠の假手也緒を付る所をいふ也といへり萬葉堀川百首かさに見ゆ、

かさのつな 天皇の御かさに菅笠絹蓋ともに綱あり大嘗祭式に車持朝臣執菅蓋子部、宿禰笠取、直並、執蓋、綱と見えたり、又萬葉集に久かたの天ゆく月を綱にさし我たほきみはきぬかさにせり大王の御笠の山

爲服用并雜器飾、但五月五日諸術府甲冑之飾、不在製限、源常木、まことどうりしき人の、どうりのかざりとする、同あけまき、紅葉をふきたる丹のかざりの錦と見ゆるに、同句み、世中にもてなされて、まはゆき迄花をかざる御身のかざりも心につかずのみ思ひしつゝ、同まき、佛の御かざり花づくゑの花はひなを造り、まことの極樂思ひやらる、夫、四、いろ／＼の雲のはたてをかざりにて入日やみだの光りなるらん、源常木、佛のみぞ花のかざりたどるへず、行ひ給ひけるごみゆる、孟津、瓔珞下ノ事也、又花笠なり、

かざりこまは 言塵集序、萬葉のかざりこまは、たゞ言葉もまじはり、古今の時代にもかざりたるも、ありのまゝなる姿もまじはりてよめる、枕詞をくらし、林葉

かし 信云、櫛の種類には、かしこまがあり、羽束師の森も此木によれるに也、

かじき 山家集、あらか山かかして下る谷もなぐかじきの道をつくる白雪、

かし 炊也、萬五、こしきにて蜘蛛の巣かきて飯かしく、可恐也、日七、かしこまもあはれしなほむ、古下、あはれかしてたかひかひのひのひ、萬一、すめらみのみこまかこしこま、櫛

かしこまひと 賢人也、萬三、いしへのなへのかかしこまひとらも、

かしこまころ 温明殿也、内侍所ごも申す禁秘抄上、垂仁天皇御宇、始爲別殿、御温明殿、白河院御宇仰曰、内侍所神鏡飛出欲上天、而女官懸唐衣袖奉引留、依此因縁、女官奉守護云云、賢所御衣上古被奉、自中古絶、周防内侍曰、女御裝束也、夏生衣、冬練絹被奉也、

かしこまる ねざる事也、貴人主人の威勢をたざる心也、畏の字をかこまるも、たざるごもよむ也、畏入候など云文言、古き状にあるも此心也、今時ひまじし事をかこまるごも、貴人をたそれつしみて坐する心也、心得たるごいふ事をも、かしこまるごも、是も貴人の仰をたそれ謹みて、心を承知するご也、今世ひまを折りて、正しく座するを、かしこまるごも、かしこまるの坐するご心也、貴人をうもまひたされ座する也、正座の事をかしこまるごも、非なり、

かしこみ かしこまる也、畏の意也、金槐集、たほ君のみごころごみ父母に心つわごも人にいはれも、

かじこく 源氏桐壺、御子ごもあまたはら／＼にものし給ふ、みちの御腹の、藏人の少將にていざわかつたかじこくごも、たどらすごもかじこくごも、

どつげしも是也、

かさはや 風速の義伊勢物語に我る山の風はちみなり伊豫國に風早郡あり伊賀風土記に伊勢加佐波夜之國ごみ神風伊勢の詞より出たり一志郡に風早、池風早、社あり又風早、浦の駿河原郡にあり

かざはな 風花也初冬の比風たちて細雨するをいへり揚用備か諺語にも蒸雲散亂作風花と見えたり、

かさほこ 羽葆蓋をいふ傘才の義祭祀などに用るより此名ありける也

かさみ 倭名鈔に擁劍をかざめごめり新撰字鏡に蓋を訓するもたなし蓋也ごもいへり蟹に似てはみみあれば名くる成べしはさみハ蓋也一ハ大に一ハ小也倭名鈔にたほしごめり○汗衫をよむ音也ごも汗取の服なりしか後に女童のうはまのうへにさるごも成しごも新葉集に もろ人のあそなる哉を女ごかかみみすそのななき世ぞかし清少納言にもかさみなかくさひびあてごもいへり○藏玉集にかかみ草ハ二月中旬の梅也ご見えたり又風見草ハ柳也ごいへり風な草も同し

かざりこま 源氏にみゆ人家又ハ木陰なごに雨ごりするごも笠宿りの義也、

かざりこま 日本紀に莊馬飾馬なごをよめり其具甚多しそれか中に腹鈴をいへり馬鈴をいへり別なるごも薬袋をいへり馬薬なるごも

かざりこま 皇極紀に蟬をよめり冠に附る物なれり飾串の義也草庵集連歌にその位高き玉のからにこまごまに梢の蟬を露に鳴らごしひたごも此義を取れり靈異記に蟬冠ごもみ

かざる 文傍をいふ風流の意にち靈異記に檀をよみ童蒙頌讀に貴をよめり○かざりたごるすの落傍の義也天子に御傍ごいふハ髪ごの事なり

かざなき 神代紀に風招ご書き嘯也ご見えたり嘯て風を招きよする意也

かざなり 風折ごし鳥帽子の名にいへり文獻通考に朝鮮國ハ人戴折風之巾ご見えたりは此によれるに也或書に定家卿より始るよいへりハ林宗巾の故事を摸せる成し○鳥帽子に左折右折ごいふハ前の方のへらにさめたる目の事也片まゆ跡まゆの品ありすて折ごいふハ製造するの詞也今俗に風折鳥帽子を謬りて左折右折ご沙汰するハ大に非也ご

かし 日本紀に櫛又櫛をよめり壁の義也堅木なれば名ごせり歌に壁ごしごもよめりよて後人櫛、字を造れる也中山傳信録にハ羅漢松即櫛木ご見えたり苦楡を訓すハ赤がしハ血楡也白がしハ木の部に見ゆるごめかしありごごあり又小がしあり大がしあり又新撰字鏡に核を水かしの木ごよめり又甜白櫛熊かし古事記に見ゆる○上古ハ櫛をもて賀をなすに也古事記の歌に其意見えたり今松を用らるご如し○萬葉集にかしの實の獨りごつひたるハ椎の實ハ聚りて結ひ栗なごハ穂の内にくつもあごに對しご成し○蝦夷に異魚あり其鬚極て長く形江豚の如し鯨も觸れハ死す其名をかごいへり魚の類ごいへり○ごごかしあれかしの類ハ糞ご辭にいへり伊勢物語にあらごも見ゆる後拾遺集にハはめ間ごまたごらごしハ大和物語にあらごも忘れけるごの類ハ事を決する詞也ごいへりゆかごしなご

かし 日本紀に櫛又櫛をよめり壁の義也堅木なれば名ごせり歌に壁ごしごもよめりよて後人櫛、字を造れる也中山傳信録にハ羅漢松即櫛木ご見えたり苦楡を訓すハ赤がしハ血楡也白がしハ木の部に見ゆるごめかしありごごあり又小がしあり大がしあり又新撰字鏡に核を水かしの木ごよめり又甜白櫛熊かし古事記に見ゆる○上古ハ櫛をもて賀をなすに也古事記の歌に其意見えたり今松を用らるご如し○萬葉集にかしの實の獨りごつひたるハ椎の實ハ聚りて結ひ栗なごハ穂の内にくつもあごに對しご成し○蝦夷に異魚あり其鬚極て長く形江豚の如し鯨も觸れハ死す其名をかごいへり魚の類ごいへり○ごごかしあれかしの類ハ糞ご辭にいへり伊勢物語にあらごも見ゆる後拾遺集にハはめ間ごまたごらごしハ大和物語にあらごも忘れけるごの類ハ事を決する詞也ごいへりゆかごしなご

の規式をせむ書に、嘉祥の祝儀の事見え
ず、其始たしかならず、東山殿より始ると云説信
したがし、世諺問答に、嘉定の事見えれば、京
都將軍の時代にもありし事なれども、殿中にて
此事なかりしなるべし、○六月嘉祥の祝儀、平城
天皇の御時、大同年中より始て、少彥名命園
韓神に酒餅を備へ奉りて、疫病を祓ふ御祈なり
しが、仁明天皇の御時、承和十四年の比、二神
の御告有て、十六日の數にまゝ入つてもある、この
み十六の數、神に備へ祭り給ひ、年號も嘉祥と
改元ありし由、鴨長明が四季物語に見えられ
ども、右の事日本紀續日本紀を初め、延喜式
江家次第、其外正しき書に見えず、信用すべか
らず、四季物語の長明が實作にのりたること説
有、さもあるべし、○嘉祥の祝の事、すてに前に
記す如し、又一條攝政兼冬公(兼良公の御子)
のかへ給ひし世諺問答に、問嘉定と申事何
の故にも、答、此事のまに本説ありがたきこと
にや、(本説なしと也)たがの錢の銘に、嘉定通
寶と侍れり、勝と云みやうせん(名詮を、賞斷す
るよし)を承及侍りしとあり、是を以て考ふれば、
京都將軍時代にもありし事也、され共將軍家
殿中の記録に見えず、將軍家には此事なかり
しなるべし、世諺問答に、義晴將軍の御代、天文
十三年に出來し書也、嘉定を今嘉祥と書

うちの主膳監みこのみとの見えたり、
かしほどの 貞觀式に見ゆ膳所也兼邦神道百首に米かしく所かしほど
の見えたりかしはるまじくや、
かしひながし 風日祈、祭にみつな柏を流して吉凶を占問事あり此を柏
流と云ふ、
かしひばさみ 禁秘抄に柏夾と見え冠の體也内裡焼亡などの凶事に用
るものなれば白木也白木を柏とめて書しよしかしひばさみと云ひませりよ
て白木夾と書るもまたありたりと云へり巻綴の事とす、非也
かしは 西宮の神事に鹿の鹽漬を供す其出ず村を鹿鹽といふ我邦も
獸を食せし事神代より見えたり今も春日諏訪阿蘇などに神供とす、
かしまたち 鹿島發の義首途をかくは鹿島香取の明神の天孫降臨
の時にまつ往て葦原の中國を平けたまふ故事による詞成へし萬葉集に
あらはらしかしみの神を祈つすめらみくを我のきにした又北山抄に二月
上申、日春日祭事同日鹿島使立事と見えたり春日、祭の比鹿島の
遠國にて使もまつはるゝ發遣するをといひ出したる諺にや春日社も鹿島
の神を第一とす、
かしまね 萬葉集に所聞多禰と書り今本にそなたねとあるは通せずこの
かかまき意にて所聞多をよめり能登國の地名にて和名抄に見ゆ禰の
根也かしまねの机、鳥と云ふ、
かぢやう 六月十六日の儀式也仁明帝の時より事起りて年號の嘉祥も
同じきよし鴨、長明が四季物語に見えたり後嵯峨帝の時嘉定通寶の錢

かしの、真一
かしら 盛主、つものかしらをのり出てもかす。(燒
こがしものほろろく、あら然と乳のあはれ
をあらわす、人の子にこそ、くせと云ひて、
けしめすれの二三、
かしらあち、頭洗、枕、わらひのひのひのひ
かあちあち、同二、心、あちあち、あちあち
物、頭あちあち、あちあち、あちあち、あちあち
同七、たちあち、あちあち、あちあち、あちあち
ひてほす程に、源東、御方をかしらあちあち、
りつてひて見ゆる、
かしらか、頭カ、源玉、法師のせめてこ
く、あちあち、あちあち、あちあち、あちあち、
其矢鹿にのりあちあち、あちあち、あちあち、
つらにあちあち、あちあち、あちあち、あちあち、
かしのにけりて行にけり、此男かしらあちあち、
更に益なし、
かしらあちあち、土佐日記、海賊と云いせん、
く、あちあち、あちあち、あちあち、あちあち、
頭もあちあち、あちあち、あちあち、あちあち、
かしらたにたか、丈夫ナラ、あちあち、あちあち、
、あちあち、あちあち、あちあち、あちあち、
一天の君にこそはしめすめ、今もまきメキガカタ
、あちあち、あちあち、あちあち、あちあち、
かしらあちあち、狭、髪、短く、あちあち、あちあち、

の事いへる説も侍りされと嘉祥の米、寧宗の年號後嵯峨帝の踐祚より
わが二十年前の事也といへり禁中にたかしく、あちあち、あちあち、あちあち、
り實の納涼會成へ、
かしよね 倭名鈔に粟米を訓せり祭祀、具に見えたり又浙をよめり炊米
の義也、
かしら 倭名鈔に頭をよめり上に在て著き義也といへり○人の異体をよ
めりあちあち、あちあち、あちあち、あちあち、あちあち、あちあち、
ふ事西土の書に見えたり夷人魁帥の稱也
かしらか、源氏にみゆかぬ時のわも也詩にも播首と云ふ、
かしらか、史記に蓬萊、而行をかしらと云ふ、あちあち、
かしらけつ、飲明紀に櫛、字をよめり新撰字鏡に、櫛、字をよめりけ
つ、あちあち、あちあち、あちあち、あちあち、あちあち、あちあち、
ん、神名秘書に詳に見えたり續古今集に、たもひあちあち、あちあち、
あちあち、あちあち、あちあち、あちあち、あちあち、あちあち、
かしらのゆき 白髪を雪に比していへり高蟻か詩に人生莫遣頭如雪
縱得春風亦不消古今集に、春の日のひかりにあたる我なれと頭の雪と
なるを佳し、
かしり 日本紀に呪詛をよめり○鼠の物をあちあち、あちあち、あちあち、
あちあち、
○かす 假借をいへる人にいふ辭也○糟粕をいへる澆の義酒をしたあ
ちあち、あちあち、あちあち、あちあち、あちあち、あちあち、

すらんとの給へは、頭打ふらして、いな、あなをぞれり、よきぞとの給ふ、枕四、歌うかたも舞などするかの、問ひは、はつめ、よるわたわね、常陸介のわた、ねたるは、たまよし、云云、か、し、の、ま、ま、が、こ、の、み、じ、く、に、く、け、れ、ば、笑、ひ、に、な、り、て、い、ね、い、ら、ぶ、も、く、た、か、し、

かしり 信云、神武紀咒詛により、同紀有、所咒著、をかしり、く、る、も、よ、り、欽明紀に咒をかし、る、又、か、し、ひ、の、め、り、か、し、ひ、の、祝、人、に、よ、り、か、す、い、ら、る、齊明紀に所捉をよめり、持統紀に、の、糺、捉、を、か、す、い、ら、る、と、い、ふ、

かすが 春日神名式、春日神社、又春日祭神四坐、頭注、神護景雲二年、垂、跡、於、大、倭、國、添、上、郡、三、笠、山、古、事、記、傳、開、化、紀、元、年、冬、十、月、遷、都、于、春、日、春、日、此、云、簡、酒、鵝、繼、體、卷、勾、大、兄、皇、子、御、歌、に、播、磨、比、能、可、須、我、能、俱、爾、な、と、あ、り、と、此、地、名、の、起、の、事、姓、氏、錄、大、春、日、朝、臣、の、條、に、見、え、た、れ、ど、う、た、か、し、其、詞、に、彼、氏、の、先、祖、大、天、皇、の、御、代、に、精、を、以、て、垣、に、せ、し、に、因、て、糟、垣、臣、と、號、た、ま、へ、る、後、に、春、日、臣、と、あ、ら、た、む、と、あ、る、此、說、に、よ、る、と、い、ふ、本、糟、垣、の、し、か、後、に、省、り、て、加、須、賀、と、な、れ、る、と、い、ふ、又、二、糟、垣、の、も、と、陽、り、し、姓、な、れ、ば、地、名、に、な、れ、る、と、い、ふ、後、の、こ、と、の、開、ゆ、然、れ、ど、も、此、說、の、疑、か、し、し、ま、し、は、先、書、紀、の、後、靖、卷、に、既、に、春、日、縣、主、と、い、ふ、こ、と、見、え、

り○米をかすの漸、字也かしくは同し、く反す也○糟漬の古く見たり式

かす 數をよめり日添の義にやかぞふとらふとらふ反す也かそへるとらふらふ反す也○かすのり記數也詩經に麗蒙童頌韻に籥をかすの

かすが 幽をよめり春日と清濁の異のあれと同意成へし、かすが 春日をよむのかすむ日の義よて日本紀萬葉集にはるのひのかすがとつ、けたり○地名のもとも糟垣より起れるよし、姓氏錄に見えたり○佛工に春日と稱するの河内春日部の人なり元正帝の時の稽文主稽主勳也○姓に、い、ら、る、承、久、の、東、兵、に、あ、り、

かすがひ 延喜式に鏡、字を用たり功程式に舉鏡とも見えたり韻書に考へ得ずかかすの義なるへし新撰字鏡に録をよめり下學集に鏡をよみ今の録を用う俗の造り字也、舜水談綺に、螞蟻絆とも見えたり○催馬樂にかすがひめ、い、ら、る、と、い、ふ、今、の、か、け、が、ね、成、へ、し、い、ら、る、梁、塵、抄、に、か、す、が、ひ、戸、を、し、持、の、金、也、と、見、え、た、り、かすこめ 倭名鈔に醋をよめり俗云糟交とも注せりこめり、る、め、の、義、也、かすさし 亭子、院歌合日記に歌讀かすさしのわらひと見えたり花鳥に歌合に員指とある也天徳の歌合に、金銀の藤の枝を洲濱にすまてかすさしの所にたぐ花の枝にて數をさる也と見え殿上賭射にも籌指に見えたり相撲、節にも籌判の府生あり、かすへ 主計をよめり數ふる義也倭名抄に主計察かすさるつかさどりの

り活板にみゆ、かすまふ 源氏にみゆ無名抄にみてくらなと得てかすまらるるは、の神にてたのす見ゆ數へらるるこふ義也すも反すも轉してまをさる也、かすみ 霞をよめり赤染の義也唐韻に日邊、赤雲也と見えたりあかねさす日とくへるも此義也と入り烟も同じすがすみを薄烟とくへる全漸兵制に霞をよけと譯せしも亦此義也俗に朝やけ夕やけなどくへる○秋に霞を詠する事萬葉集に見え文選の詩に輕霞冠秋日とも見えたり○歌に多く春霞などくへる霞にあらす露、字を用へし○霞をくへる辭の喜撰式に春をくへる見えぬれと萬葉集にも見え中比より人の好みむ言葉となり○歌に霞の衣霞の袖霞の窓霞の沖霞の網霞の波霞の水尾などよめるの皆見たり詞也曹文姬詩に霞衣會、惹、御、爐、香、と見えたり○霞の關の武藏也霞の浦の常陸也霞か洞の津の國水無瀬の北にあり

また此段にも、如此春日之云云とある、正しく地名なるに、彼糟垣のことは遙に後、大雀天皇の御世とあれりなり、されば地名を本にて、彼姓の其地によれるにこそありけり、然れども若彼説をたすけて云々の、糟垣のこを、く、と、上、つ、代、の、こ、と、な、り、け、ん、を、誤、り、て、大、雀、の、御、世、と、傳、へ、た、る、に、も、そ、は、も、し、く、の、糟、垣、に、因、て、其、地、名、は、加、須、賀、と、云、來、つ、る、を、後、に、姓、に、賜、ひ、し、か、大、雀、の、御、世、な、り、し、の、も、あ、ら、む、と、い、ふ、糟、を、以、て、垣、と、す、と、云、ふ、こ、と、は、な、ら、ぬ、と、い、ふ、古、に、は、川、の、堤、の、こ、と、を、廣、く、い、は、さ、る、垣、も、あ、り、と、い、は、し、け、れ、ば、云、云、東、大、寺、古、文、書、春、日、村、名、跡、幽、考、今、世、添、上、郡、春、日、の、界、地、に、か、き、り、て、奈、良、と、い、り、古、入、の、添、上、添、下、の、郡、と、も、に、奈、良、に、こ、を、侍、ら、め、先、の、平、城、宮、又、古、歌、に、な、ら、の、菅、原、元、亨、釋、書、奈、良、之、古、京、殖、槻、こ、れ、ら、の、所、と、も、添、下、郡、に、あ、り、那、か、す、か、く、書、數、古、今、集、行、水、に、か、す、か、く、よ、り、も、は、か、な、き、思、は、ぬ、人、を、た、も、あ、ら、り、拾、遺、集、人、あ、れ、た、り、と、い、ふ、涙、の、も、ら、い、か、す、か、く、い、ら、る、に、け、る、か、な、

かすか、く、こ、を、ま、萬、十、一、み、つ、の、う、へ、に、數、書、こ、と、い、ふ、か、す、か、く、の、か、か、す、し、る、ひ、と、算、者、也、日、孝、德、紀、か、す、か、く、の、こ、を、ま、空、懸、藤、原、君、よ、わ、ま、ひ、こ、と、い、ふ、に、は、い、ひ、か、す、か、く、の、こ、を、ま、濱、松、物、語、ま、ま、ら、か、し、

かすむ 日本紀に掠略なるといふ續日本紀にかそひ番ひとくへるも同義

かせ

給へり、愚管抄三、ひしとあらはにされたるにて侍る也、今昔廿、此加持シ現バカタル人々ヲリ、世ノ人皆貴キケリ、小右記云、大夫名隆家、訓讀云伊部平佐加也加寸、本居氏云、俗ニキヨコサヤカスト云ヘキ也、ヒトツ助辭ナシ、シキヌヲ、モカスオヤヌヲ、オヤカス、チラスヲ、チラカス、猶多シ、山家集、山家道の心のゆめにまどひなれば吹ちらまかすかせのたがかな、林葉

かすむる 今云かすむるの意也、多々、意にカスル、壬生集、ゆるしのたがはのな入里（き千代の數はみよの民かな、林葉）

かすにたる 物を數ふる時に、數取して、申なごを置て、心覺へたることなり、念珠ハすなほお珠數をもひて、これたた數をいなり、あるの數よむなごもくあり、平兼輔集春、ちかちりのかふ花を數にてもさうあへぬものな分たなりけり、拾玉集、身のうらをかすにこそこれ五月雨の軒のあめにつたふ雪を、類名

かすにもあらぬ 不有數也、萬十五、ちひちの數にもあらぬわねにたむらむらむいもかかなし、梅

かすみ 信云、桑氏漢語抄云、霞加須美、字園云、霞霧之氣者、春來上陽之氣集爲之、亦夏秋冬之三時、陽氣上進之時、爲近見、則無所見、遠見則爲彩色、懸嶺上、染山眉、故

なる入しかすめるといふる反む也、赤染右衛門集に、使あらは來ても見よとるかすめりしけさ春めける梅の立枝を

かすも 倭名鈔に側面をよめり、津面の義也、

かすや 式伊勢多氣郡加須夜神社見ゆ神風抄に糟屋御園とあり、今齋宮舊蹟の邊柏村に社地存せり、〇姓に糟谷をよめり、元曆の戰に義經の属兵に糟谷有季あり、

かすゆさけ 萬葉集に糟湯酒を見たり、うちすよひてんあふ、

かする 霞より出たる詞成入し、或は假借とも書り、染摸様にかするといひかするといふ是也、

かすむる 繼體紀に捉、字をよめり、又求捉をかすむるといふ、〇偽字をもよむとす、〇俗語も是にや、

かすを 顔白をいふ盛衰記に見たり、かす毛と意同し、多識篇に糟尾と見え、又霞字など云り、

〇かせ 倭名鈔に甲麻をよめり、催馬樂の歌に見たり、今肉音をいふとひ設をかせといふ、佐渡にてせをいふ、勢州にてかかといふ、貝といふ、物也、實ハ海膽也、〇元正紀延喜式に、杖をよめり、俗に荷にもかせといふ、〇り糸にかせといふも、此義なるべし、文永遷宮記に糸一、杖卷、糸器也、〇山城、國鹿背山をも類聚國史に、特山と云り、砂石集に木をかせのやうにたると見たり、〇特阿を今かせといふ、又短木を岸にうつた地がせといふ、政爲の歌にもかせといふ、〇杖をもいふ、説文に木囚也と見えたり、かしともし、〇痘家の收貯をかせといひ、痘及小瘡にかせるといふ、枯る義の轉

取加々利染流之義歟、

かすめく 繼體紀に略をよめり、

かすゆさけ 糟湯酒也、萬五、かすゆさけつちす、ろひてあかかひ、糟を湯に立て酒にして呑し成へし、梅

かすよむ 後撰集戀、住の江の目にちかちり、岸に居て浪の數をもよむき物を、

かすをよむ 數讀、數をよむをよむといふなり、よむのよむなり、伊勢集、住吉のめにちかちり、岸に居て浪の數をもよむきものを、平兼輔集春、ちかちりか、花をかすにてもさうあへぬものな分たなりけり、

かせ 特也、萬六、なごらからかみをかごとくかせの山式、太神宮神寶廿一種、金銅たより二基、同、加世比二枚、同、麻笥二合、女の紡績の具なり、梅

かせ 風也、萬葉、明日香風、佐保風、泊瀬風、伊香保風、あゆの風等有り、

かせ 山家下、風わつらひひける人を、同、さためなし、風わつらひひたりたに、又こころを頼む入きよにか歟、榮花月鏡、御かせなごひて、竹取、風くこたもき人にて、はるのくくれ、こなたかなたの目にたすも、なごたつひたなるも、大和物、風になんあひ給ひて、わつらひける、青柳のくくならぬとも、春風のふけはかたよるわが身也、林葉

せしにや、〇鹿背山の木津の東一里餘也

かせ 風をよめり、かせ反け氣の義なるべし、又生ずの義也、物風を得て生化す、よて風、字出に从入り、神代紀にも朝霧を吹捲の氣風神とあり、〇風に陰陽ある、神代紀に見えて、春夏の風ハ物を吹あげ、秋冬の風ハ物を吹たすも、理の自然なるべし、蓋海集に、春の風ハ下より、升り、夏の風ハ空中に横行すともいふ、〇倭名鈔に微風をかせといふ、〇風はよみ、疾風をいふ也、〇風の姿ハ物によせていふ也、〇風ひるか、冷なる也、字書に、風を風涼と注せり、〇風ほめくハ新撰字鏡に、風をよめり、〇風をいたみ、い吹をいふ、〇風のたより、いそごな、傳へるをいふ詞也、今も風便を音にいり、河圖帝通記に、風、天地、使也と見えたり、〇風ハ風の目に見ぬ人と古今集によめる、人不見風といふ本文によれり、伊勢物語に、吹風に我身をなき、玉をたれひまもとめつ、入ましものを、曹子建か詩に、願爲西南風、長逝入唐、懷と見えたり、〇吹風や、春立來ぬと告つらんと、後撰によめる、先遣和風、報消息といふ詩の意也、〇風をまよめるハ吹とくとも同しく頻りに吹也

かせき 推古紀に鹿をよめり、角の體特に似たるよりの名也とて、これと鹿柵を直に其物に呼たるなるべし、玉葉集に、山深なる、かせきのけちか、世に遠なる、伊豆風土記に、鹿柵の射手といふ事見たり、かかせきの訓なる、著聞集に、大猿を木に追のほせて射たり、ほかせにかせきといふ、〇唐書に、鹿頭柵と見えたり、〇古語拾遺に、作特、特之を見たり、今も繼體の具にかせといふ、〇あし祝詞式に、金の特

かせ

かせ 信云、病に風と云り、唐人の云風と異也、築花に長徳元年、關白殿御ことあしく、御風にもちたほして、根なきまらすれど、たたらせ給はず、加茂保憲女集、足引の病もむて、あむむの治止なり、ほの木の皮吹よる風、あらしをたもふあり、これ朴の木の皮を用ひて愈る病あり、これ風也。

かせぎ 宇拾七、天竺に身の色の五色にて、角の色の白き者が一あり云々、其山に大なるかせぎあり、身の色の五しきにて角白し云々、又鳥あり、此かせぎを友として過す、赤染集、朝ぼらけをみをあくと見えつるかせぎを近く立てるなりけり、又持、政事要略廿六、新嘗祭、以白黒酒賜群臣、持手受當云云、信按、手を持きてあるを思へり、左の掌を立て、右の手を受け、かせぎの頭の如くして、酒を受けるなるへし、故にかせぎ云、又按に、江次第に、此事を給、黒白酒、各一度稱名給、拍手飲之とあれり、持の拍の誤か、可再考。

かせのこの枕詞 万葉十四、東歌、かせのこのほろもがせしめたるのくだりまよひたけり、この本の古事記に下照比賣之哭聲與風響、到天ておに依て、風の音の遠きほつけたる歎、かせのはふり 十訓抄、(かせのはふりの事能と

と見えたるをかせひとよめり大神宮式に金銅の賀世比と見えたり○世わたらひのわざを俗にかせぎといへり撰集抄にも見えたり職人歌合のかせぎが辻といへる所の名も此義にや持の弄の俗字よ聖武紀にもあそぶと訓せり眞字伊勢物語にけりかへしを持返と云り○かせぎむらひとよめりかせぎ意にや

かせぎのその 鹿野苑の義也といふ、かせつる 倭名鈔に横首杖麈杖をよめり鹿杖のかせぎつるの訓也一説に持の形に似たるをいふなるべしといへり一説に梵語の刺羯節也といひ或の柄杖也といへり平家物語に老僧かせつるのふたまなるにすがつて出来りたまへりといふ見えたり

かせとつき 詩歌の人を風月の才といへり草庵集に北野社 松かえの木の間に見ゆる神垣や風と月とのあるしなるらん陸務観か詩に囊中略有七千首不負百年風月身と見えたり

かせのはふりこ 風祭の祝子也夫木集に 志の道や風のはふりこ心せよさらゆふ花のほろ神垣伊勢津彦神國をさりし時大風起し去て後信濃、國に住るよし伊勢風土記に見えたり又式信濃國に風間神社あり水内郡風間村也信濃の風雪の國なるにより風、神を祭る故に風、祝部の名ありと俊賴雜談抄に見えたり袋草紙に諏訪明神の社に風の祝といふ者を置て春の始深く籠居て百日の間尊重すされ風静かにして農業のために吉也すき間もあり日の光も見えぬれ風をまらすと俊賴朝臣信濃なる木曾路の櫻咲にけり風のはふりにすき間あらすな

大夫資基といふ人聞て、かこのごとく承る、これを歌によまんと思ふ、俊賴にかりければ、俊賴答て云、無下に俗に近しかるの事更に思ひよるべからず、不便しといひければ、其由を存する所に、俊賴後に此事をよめる信濃なる云云、尤腹なる事なり、五品後悔しけり、かせふきとくな 風吹解勿也、萬十二、妹かかこ行すきかねて草むすふ風ふきとくな又かへりみむ、格

かせまもり 風守也、風間を待まもる也、萬七、島つたあしはる小舟かせまもりといはるゝなむあかひのなして、格

かせもの 悴者と書へ、一向いやしき難役の人夫也、貞二

かせもふかめか 風も不吹歎也、風吹をわがふ心也、萬七、わたのそこ奥こ舟を邊によせむ風もふかめり波たすして、格

かせもふきあへぬ 風吹不敗、人の心のかはりやすきつらふ事、風吹れて散行花より、猶もすみちかして、その花の風の吹ぬほろ、さながらあひせせられたる、人の心の花のつらふ事、風も吹あへぬ、すみちかたをいふこと、はんとて、まうけていへり、風吹をまめをいふ、あへぬの不敢の意なり、またの不合にて、風の吹來るに、間にもあはぬをもいふべし、古今集、さくら花

かせん 歌仙の歌をよむに妙なるを稱する也三十六歌仙といふ藤原の公任卿の作也神代卷のあなうれしにまらましましをどめにあひぬの十八字と同一詞のなごの十八字を合せて三十六とすよ十八人つゝ左右を分ち唱和になすといふことあり○あなうれしにまらましまし一訓也○かせん草あり歌仙草の義にも○六歌仙と稱する、遍昭康秀業平喜撰小町黒主也古今集の序に据たり朝鮮開城の音をもかせんとよめり、

○かぞ 神代紀に父をよめり世次を數ふる父をもすればあかひとくといへり一説に子生れてまづ物を數ふる事を教ふるより名くともいへり又父子とぞこぞよめり顯宗紀、注に俗呼、父爲柯會と見ゆ又家尊の音にて古訓なからんといふ

かそひき 萬葉集にみゆ幽かなる意也といふ、かそひ 續日本紀に加藤毗垂將盜と見ゆ掠める義也○俗にかそひのあふあはぬといふ別義成入し、

かそふ 數をよめりかそはたらかしたる詞也ぞと反す也古事記に讀度二字をよめり

かそへうた 古今集の序に見ゆ賦の体也といへり物をかそへくばる意あり、

○かた 形象をよみ日本紀に圖もよめりよて古き詞に繪かく事をかたかくといふ像の義也○文をかたといふも形の義菱形、錦車形、錦など見えたり○ト兆占象をかたといへり萬葉集にのらぬいもが名かたに出んかとも見えたり○形象あれば方位ありよて方をもよめり○貴き人に幾方といふり古入に

どくちのぬきもほへす人の心も風も吹あへぬ、
 同六 いる見えてうつろふもの世のなかの人の
 心の花にぞ有ける、徒然草、風も吹あへずうつろ
 ぶ人の心の花になれにし年月を思入は、あはれに
 聞しことのはちすれぬものから、類名
 かぞ 袖中五、かぞはるはの下、かぞはるはのくに云
 々、顯昭云、かぞはる父を云、いさむ母を云、口
 本紀處々かく云り、古語拾遺これに同じ、綺語
 抄奥義抄童蒙抄みなく云入り、俊賴朝臣の
 歌に、時鳥ながかぞはるの鶯に云々、或人難云、
 父をばかぞはる云ひ、母をばいさむ云と知歟、いさむ
 と云入き也、云々、信按、天慶日本紀竟宴の歌、
 賀曾伊呂波あはれとみずも云云、釋語にかぞは
 るの、ちいといふなる入しとあり、これもかぞはる云
 意にとけり、歌にかぞはるはの意ならんか、日本紀
 には父母をカソイ共、カソイ共あり、字鏡集、身
 「カソ」父「カソ」母「カソ」あり、父の訓の誤り也、
 かぞけき 夫木十六、光俊 浪の花のなほはの蘆
 の霜かれに音のかそけき浦風そよぐ、判者行家
 云、たこのかそけき一かぞはりて聞入侍れど、い
 たく耳遠きかたぞすき侍らん、萬十九、ゆふ月夜
 可蘇氣伎野邊遙々爾喧雀公鳥、カスカカ意
 トイヘリ、
 かた 片也、片波、片淵、片設、片就、片去、片々、
 片線、片待、片念、片生、片開、片糸、片山、片持

幾柱といふがごとし、○方位有て相交るべしよと交をもよめり、○方によれり
 偏也よと偏をもよめり、○片をよむも偏の意也源氏に山にたかたかたけたる家と
 みゆ、○物事の半にたまは調らぬ意にもつりかたたまけかたかたかたの類
 也、○肩の堅き所なれりいふにや釋名にも堅也と注せり、○瀉をよむも倭名
 鈔に見ゆ干瀉の類也潮の引たる跡の形あれりいふなるべし萬葉集に瀉も
 よみ新撰字鏡に瀉もよめり、○人の名に賢をよめり堅と意通入り、
 かたあらし 田島の年交に荒るゝたふとつり新六帖によめり、
 かたあて 大神宮諸雜事記に禰宜等肩當の錦綾と見えたり、
 かたあと 像跡の義雪によめり六百番歌合に、さかの山はしる雉子のか
 た跡にけふの御幸にかくれささす、
 かたうた 古事記に片歌と見ゆ旋頭歌のかたへとつり二句三句にて
 つひはてたり、
 かたうと 方人と書り東鑑に見ゆ歌合などにもつり或は荷擔人と書り、
 かたえ 草木の片枝也、○かたえの梨の志摩、國にあり古今集にたふの浦に
 かたえさしたほひなる梨のなりもなすもてかたらん、
 かたたひ 源氏に見ゆ萬葉集に片生と書りかたなりも同じ女のまた重に
 てよも生立ぬほとてくふ也
 かたたもひ 萬葉集に獨念をかたもひとよめりかたなきなどいふも獨の意也
 ○延喜式に片梳をかたもひとよめり萬葉集に片梳に作りかたたもひに寄た
 り、
 かたたるし 花鳥餘情に東遊、譜云先一一、歌次、駿河舞次、求子次

等萬にたほし、兼盛集、足引の山かたつける住
 居にの先人さきたわかなをそむ、源わつな、くつか
 たもじなだの御かけにはかたれり、はしかたれり、
 て、日顯宗、足日本此傍山爾、繪
 かた 方也、萬十八、面もつらしみもこ方人、
 かたあらし 片荒、拾玉集、早苗とる野洲の
 わたりのかたあらしこそその新田の淋かりけり、片荒
 とつ、一年休めに作る田を云、是を易田といふ
 也、類名
 かたあらし 易田(カマツ)拾玉集、さなへとるも
 すのかはらのかたあらし 去年のかうたつたむびしかり
 けり、林葉
 かたたち 片落、新六二、三尾山も袖のわれ木
 のかたたにすてられなからふしつわすれず、
 かたたひ 片生、伊勢集、かたときの人を見たら
 による物いた、かたたひにならそわひし、
 かたたもむき 山家集、岩のねにかたたもむきも
 波うきてあはびなかつくあまのむらさみ、
 かたたるし 夫卅二、小夜深きさねの奥の松
 風にきねがつよみのかたたるしなる、花鳥、東遊譜
 云、先一、歌次、駿河舞、次、求子、次、加太於
 呂之、調子高麗雙調也、かためきて舞ふをいふ
 ぞぞ、
 かたかきかはす 保憲女集、春の日に木のめ
 もみえやうちむれてかたかきかはし人のゆくらむ、

加太於呂之と見えたりかためきてといへるに同じ、
 かたかき 偏鈔の義まよひに五節の物記をいふ事につりもつらむに對
 してふ文にもつらむ、
 かたかけて 源氏にかの殿の御かけにかたかけてと見えたり庇蔭の義ひさし
 をもて書り、
 かたかこ 萬葉集に攀折堅香子、草花と見えて古抄に香子の猪、舌と
 もいふ春紫色の花さつとつり紀氏六帖にかたかことよみて木、部に入
 れり一説に今いふかたこ也とつらむ、
 かたかしきのいひ 倭名鈔に饗饋をよめり半熟飯也と注せり饗或は饗
 に作るもたなし
 かた〜 遊仙窟に一邊をよめりかたつかたも同じつり休字也、
 かたかな うつほ狭衣などに見ゆ世繼物語にかたかなとありかたの偏旁
 の義也海東諸國記に國字號加多干那凡四十七字とつらむ
 かたがへり 倭名鈔に撫應をよめり二歳の名也應の一鳥屋をたるをかた
 かへりといひ二歳をたるをよめりかたがへり撫應青應をもて分てり
 かたかほなし 盛衰記に入道のさる片顔なしの人にて更に用ゐたまひさり
 けりとい見えたり、
 かたき 敵をいふ難んするの義なるべし日本紀に無前をかたきなしとよむも
 此義也○相手にするなをかたきとつらむ源氏に御基のかたきめしよと見え
 續古今集にかたきとつらむ削花をける事侍るにかたきの方にとつらむ情人を
 冤家といひ敵をいふも西土の書に見ゆ新撰字鏡に智をかたきと訓するも

かたかくれ 方隠の意也、續後撰戀、谷ふかみ
 岩かたかくれ行水のかげり見て袖ぬらせとや
 かたかこのはな 萬十九、ものゝふの八十のいも
 らかくみまか寺井の上のかたかこの花、仙覺抄、
 かたかこ又井のまらさといふ、春花の咲草也花の
 色、紫なり、或説云、このいもは、かたかこの
 みちのたぐひかたかこのいも、根はゆるのいも、
 葉はたぐひ葉さし出て、花も一もさ立り、すみの
 如くうす紫也云云、梅
 かたかしきのいひ 和名抄十六、餐饋、四聲字
 苑云、加大加之木乃以比、半熟飯也、
 かたかひ 片側、拾遺戀、あふこのかたかひし
 たるみちのこのこまほしくのみたもほゆる哉、新六、
 たくのまの野の馬のかたかひとすすれり
 又ある、君哉、林葉
 かたきなく 無敵の意にて、ならひなきと云が如
 し、遊ひがたきも、遊仇の意なり、馬の逸物の無
 隻にたぐり、源信明集、かたきなく思入る駒に
 くらふれり身にそふかけりたぐりけり、類名
 かたきぬ 肩衣也、萬五、ぬのかたきぬありのこと
 ぬきぬとも、同十六、はふ子か身に賜ふかたき
 ぬひつらに縫き、今昔物語本、淺きのかたきぬ
 來る翁と有、梅
 かたきぬ 松永彈正少弼久秀、すあふの袖を取
 て捨、かたきぬと云物を始ける由申傳るにあま

同意なる入し
 かたき 印板をいふ東鑑に形木とみゆ延喜式倭名抄に模靈異記に楷模
 をよめり歌集にからかみのかたき摺木のかたきなど見えたり北史に明堂木
 様とも見ゆ〇櫃をもいへり堅木の義なるをもて又櫃とも書り二合字也物
 につきものかたきのもんをたるなと見えたり〇人の生質をもいへり偏氣の
 義にや、
 かたきぬ 萬葉集に布加多衣見ゆ今武家の肩衣袴の細川頼之製せり
 もとひたなし信長公の畫像もあかり泰、元親伏見の邸にて秀吉公を招請
 せられしに結、番の土皆三幅の袴を着すといへる是也といへりされと鎌倉年
 中行事に鎌倉殿に金欄の肩衣に小袴をぬきしとも見えたり
 かたきけ 倭名抄に醇酒をよめりかたの堅の義厚き意今のねりけの類を
 云々云々云々云々
 かたぐつ 童蒙頌韻に破庵をかたぐつ也とよめり今俗語にかたぐつ情と云
 たり、
 かたくなし 頭をよめり因塞の義なしのなす也日本紀に癡又愚癡をよめ
 新撰字鏡に燈又眩をよめり靈異記に陋をかたくなとよめりななく倒置なる
 にか
 かたけ 延喜齋宮忌詞に齋を片膳とよめり見えたり俗朝食又の暮食の
 みをかたけとよめり是也或の片膳をかたそなとよめり、
 かたころ 一片心をいふ成入し源氏にもかたころかして見えたり俗に
 もかたころとよめり云々云々、

り也、肩衣の松永よりはるか昔よりある也、鎌
 倉年中行事に、鎌倉殿出陣の立立を記して、
 金欄の肩衣に、小袴をぬきし山見たり、鎌倉
 殿より足利成氏の事也、松永より昔の事也、松
 永の永祿年中の人也、又走衆故實に云、惠林
 院殿御代の事を記して、走衆廿人かたきぬはん
 ばかまにて、小太刀をばか候と有、是又松永よ
 り以前の事也、宗五一冊に云、條々問書の事
 なりかたきぬに、いにして我が紋を必付候と有、
 當時の一向かり候、さりながら小袴もかたきぬ
 も、目にたぐひ候が能候云々、又うちかけ
 肩衣の、狼藉の山、同書にみえたり、宗五一冊
 の、宗五入道(伊勢下總守貞頼の法名也)大
 永八年に記したる書にて、松永よりはるか前の
 事也、又御供古實に云、かたみかりのかたきぬ
 袴の事、十四五まで着用あるべく候云々、又も
 ちのかたきぬ、殿中へ着すまじき由、同書にみえ
 たり、御供古實の書に、文明十四年、伊勢備中
 守貞藤(法名常喜)の記したる書にて、松永より以
 前の事也、貞五
 かたきみかき 禁門也、萬十一、たほすにわれ
 したる、かたきみかきかたきみかきと云くとも
 も、出かたき御門をくかき、梅
 かたくな 頑かたかたくな、いもななく調ひ
 和らざるものなせ也、源氏物語、世にいかにか

かたこと 片言と書り小見などの詞のまたよくも調ならぬをいふめり源
 氏物語蜻蛉日記に見えたり、
 かたこひ 萬葉集に片戀と見ゆ相たもいぬ人を戀る也もろこひにむかへて
 云々、
 かたさり 源氏にみゆ萬葉集にまくら片去夢の見えことと見えたり、
 かたし 堅をよむの形する意成へし氣にむかへて看へしかたむかたまるもたな
 し〇古事記に作堅此國文徳實録に奉造固と見ゆ後京極攝政殿
 敷島や日本島根も神代より君かためとよめりかためけん萬創難をよむも堅
 と意通すと神代紀に天地の体を説て精、妙之令搏易、重濁之礙場難
 と見えたり形氣の別也〇靈異記に誠をかためてとよめり今もいふ詞也古
 姓に堅部氏あり〇日本紀に鍛、字鍛作、字などをよめり堅める義にや今
 かたといふたし反ち也古事記に鍛人舊事記に鍛師と見えたりも同じ〇類
 聚國史に造錢型師と見えたり範をさる也〇何にても一對なるもの、離
 れたるをかたしと入り偏の義なり〇伊勢物語のかたいたきをなを真名本に
 難更人と書りされり孟子の固哉高更之爲詩也とあるの義今、俗もいふ
 辭也かたの義とするならし硬漢の字拍案驚奇に見えたり韻會に固、堅
 也と見ゆ
 かたしき 衣かたしきかたしき衣かたしきの袖などいへり偏の袖を寄てぬる
 也、
 かたしり 雄略紀に堅磐をよめり出雲風土記に滑磐石哉勅故云南佐
 と見え後滑狭を改めよしも見ゆと云々也いばをよむを轉するの程をよむ

かたすみ 今物語、東山のかたすみは、あはれた人もかたすみあはらぬ。

かたがへ 方違、此槐記一今夜爲方違向楊梅源兼木、いづくにかたがへん云云、同、あひの御かたがへ所は、あまたありぬへけれど、ひまじくはせ入てたり給へるに、方たけて引たかへ、外まきへたほきつひほしきなるへし、貫之集、あかとなりなる所にかたかへに、ある女のわたれるを聞て、古今雜上、かたがへに人の家にまかりける時に、枕二、ままじき物、方たかへにゆきたるに、あるしせぬ所、イセ集、方たかへて、京極なる人の家にいきて云云、大和物語かたのふたかれり、こよひのえなんまかてめとのたまへりければ、あふ事のかたりのみそたからん一よめくりの君となれ、は新六、けふそあるあらぬ所にあしめて、我をあきたつたかたがへと、○かたがへ天一神のある方に向ひてゆくことを思て、方なたかふる也、江次第抄一、天一、己酉、至甲寅、六日在良方、乙卯、至己未、五日在卯方、庚申、至乙丑、六日在異方、丙寅、至庚午、五日在午方、辛未、至丙子、六日在坤方、丁丑、至辛巳、五日在亥方、壬午、至丁亥、六日在乾方、戊子、至壬辰、五日在子方、癸巳、至戊申、十六日在天上、天一在天上之時、向乾拜之爲秘事、

かたき 僧清琪か詩に不放心身静、片時を見たり今片時を音にもしり半時をいふ也。

かたき 僧清琪か詩に不放心身静、片時を見たり今片時を音にもしり半時をいふ也。かたき 神代紀に象をよめり西土の書に取象をいへるより訓する成入しかたなる 刀をいふ全浙兵制に腰刀を譯せり片刃の義はとを韻通せり或ハ偏雍の義をいへり亦鍛名の義鍛工の名を題せる事令に見えて萬葉集にもつるた名のをしけともよめり其銘に來某とあるハ來目部より起りけん日本紀倭名鈔にハ小刀をもよめり太刀に對せる名也近き世に出來にしかたなる武備志にいふ佩刀也といへり大諸禮にいふさし刀も是成入し又かちて御供の事遠くハ太刀をはき近くハ刀ばかりたるへしとも見たり鞘の尻を方にするも太刀を摸せりとぞ ○陣刀といふ物の後世の物也 ○王制にハ禁兵とて私に兵器を畜るを許さず應仁乱の後妄になりたる也海東諸國記に室町家の時の風俗を述て人戴烏帽各佩一刀と見え職人歌合に圖する所も亦同し今狂言師主人ハ一刀を佩ひ從者長刀を奉て隨入りされハ當時の武人兩刀を狭む者ハ或ハ跟從なく或ハ應急のためにして干戈の世の習ハしなるべけれ ○天和二年の法令に農工商の輩に二刀を佩を禁す隋文帝の時勅使工商不得仕朝進官とあるに其旨同し ○上臈の名に方名といふ事あり

かたなか 郷談正音に刀架と見えたり、

かたなし 江次第に結政所をよめりかたね成の義なるへし延喜式に於辨官、結政所捺印と見え除目などの數通の文を一に束ねて結固むるをか

かた、かへ 方違、たとへば明日東の方へ行かんことも、東の方其年の金神に當る敷、又ハ臨時に天一神太白神などに當り、其方へ行凶しと云時ハ、前日の宵に出て、人の方へ行て一夜をまきて、明日其所より行けば、方角凶しからず、扱たる方へ行也、方角を引たがへて行く故、方違と云也、(物くまひにてする事也)貞十六かたたより 山家集、山かつの荒野をよめて住そむるかた便なる戀のするかな、

かたにみゆゆ 貌に所見哉也、萬十六、否も許もたはむまにゆるすし、かたにみゆゆわれもよるなむ、我心のかたにみゆゆをいふ、
かたぢはひ 考徳紀に阿蘇をよめり、同紀に比周をかたはひとよめり、

かたて 欽明紀に崇をカタテタマヒキをよめり、神代紀に崇養をカタテタマヒキ、崇神紀に崇重をカタテタマヒキをよめり、此カタテのチハ、テの誤なり、

信按、若狹にて兒を太切にするを、カタテと云、俗言に兒をあまりカタテにして云々など云り、字書に、崇ハ重也尊也なある義によつて、用るし字なるへし、按に親しむ重するもの意をカタテと云る也、曾テ育ツルなど、語格にてカタテ、カタツルと活く語を通ず、

かたなき 保壽女集、きりりすかた鳴すれり、くもかきつてしちちを聲とよめり也、

かたぬくか 神世に鹿の肩骨を扱て占をせし古事記舊事記に見ゆ堀川百首に、かく山のは、か、下、に、うち、は、けて、肩、ぬ、く、鹿、ハ、妻、戀、な、せ、と、
かたね 江次第に結を訓せり萬葉集にかたねとくへるも、かハ發語かたねハ結の義なるへし ○倭名鈔に簡をよめり結の義也血結聚所生也と見えたり新撰字鏡も同し

かたのほね 倭名鈔に簡をよめり神代にハ鹿の肩骨をよめりトをせる也、かたは 片羽の義、つは物語の歌にも矢にも鳥にもつけたりハ源氏物語伊勢物語に、かたのつちも是なるへしハ眞名本に醜、字をよめり ○枕草紙に、かたのつちも見えたりハ絹を織に片ハ諸のありかたハ薄しとくへりハ羽の義なるへし

かたはら 神代紀に脇をよめり傍腹の義也 ○傍字をよめり同し紀に邊も

かたなし 續詞連歌、大内のたほがきのちおれたるをみて、淋賢法師のいへりける末をうけける、心已法師、大かきつるねはかりこそ残りけれかたなしとてもへはあらしな、萬代雜、外記、藤結政座に、古宮のほしら一本今に残れるを、まつりこの次にてよめる、中原師光、いしへのならの都の宮はしらのかたなしになほのころ哉、江次第十八、官結政結請印下云アリ、辨官少納言下寄テ、官符申文下詔書取傳へ、内覽下催處也、かたなり 榮花、藤實、たなしみか、申なからもいかにぞや、かたなりにあかめ所もたはしますものな、林葉

かたね 結也、萬十八、いしへのうちのかたねもち江次第元日かたね、七日奏之、又結政所、かたのまよひ 肩の紺也、萬七、麻衣肩のまよひつたれかとりみむ、和名、紺萬與不、一云、與流紺欲壞也、問のよるを云か、格

かたは この假名、世にわかたわと覺入し、沙石集に、車の片輪にたし事故故、かへと思ひ、ともすれり、時にあらたはふれに、實にあらざる、うつほ物語に、箭の片羽によせてよめる歌たしかに有り、加大波なる事、たかひなし、事、下にいふ、し、蜻蛉上、まほしとて在ほに、あからなれり、をのまをよみて、藤あひせて見つ見給入り、なちもいしうまたあらて見出したるに、いんかたは

かたはらいたき 傍痛、あしむけたるその常人に、あらの傍に有人たに、たがたいたくしきをいふ、今昔物語の古本に、傍痛と書そ、よくあたれる、痛、萬葉にも、いたくもいも訓り、是を俗説に、片腹痛と云ふ僻事なり、源氏物語の抄物に、たかしき事にも、笑止なる事にも、詞なり、所によつて意かたれりといへり、源氏桐葉弘徽殿に、久しう上の御局にもまづのほり給はず、月のたもし、夜あふく、あそびをせし給ふなる、いさむまじりもの、いさむしめす、この比の御氣色を見奉る、人、女房など、かたなら

かたひく 方引、榮花歌合、うれしきものもやのみかは梓弓きもかたひくころ有けり、枕草子、はしたなき物、男も女も口ちかき人、かたひき思ふ人の云云、林葉

かたひらのわかきたる あわせの脇かきたるを云事、古記にあり、曾我物語(卷九兄弟出立

よめり俗に、かたはらいたきの詠言なり、

かたはらいたし 蜻蛉日記又源氏に見えたり、偏腹痛の義也、大に笑への必ず脇痛むもの也、かたひら 孝徳紀、倭名鈔に、帷をよめり、傍平の義ひらばりなり、あが如し、古今集に、帳のかたひらとも見えたり、源氏巴抄に、夏つすし、冬わねり也、いへり新撰字鏡に、鋪をもよめり、香壺のはくすりの箱にもかたひらといふ物あり、ますけに見えたり、○布衫の事をもいふ、帷に用る布もて衣にきたる也、物語にも見えたり、五月五日より八月晦日まで、かたひらを本とするよし、大諸禮に見えたり、新六帖にかたひら布とも見えたり、○大帷子あり、布にて作る於の部に、いし、○經かたひら、甚謂れなき事也

かたぶく 傾をよめりかたむくともいふ、偏向の義也、俗にかたぶくといひ、新撰字鏡に、款をもよめり、○物に難して、いふをかたぶけ申すなり、見えたり、○古事記に、相似不傾とある、上文に等、天皇之鹵簿とあれば、かたぶく、ゆ意成へし

かたふたがり 方塞の義、北山抄に、方、忌とも今もあまがりの方なり、いふ、り後撰集に、逢ふ事の方ふたがりて、君こそすれ、たも、いふ、たか、あはかり、そ、かたふち 神代紀に、みゆ川の流の中に、偏かた淵なる也、かたへ 傍をよめり、偏方の義也、萬葉集に、片方と書文集にて、諸をよめり、眞名伊勢物語にも、諸之人とみゆかたはしといふ如し、かたへのひと 眞名伊勢物語に、諸之人をよむ、傍なる諸人の意也、古事記には、八百萬、神諸、咲又后等及御子等、諸下、到孝謙紀に、汝多知、諸者

稱徳紀に、人民諸乎と見えたり、かたほ 源氏物語に見ゆ人の親體にいへり、又物など習ふに、また能も調らぬやうの事に、いへり、萬葉集に、左右或、全手をまてとよめるも、かた手に對したる詞なれ、まほの詞とむかへて、偏秀の義に、や、又、偏帆の義に、追手に帆をかくるを、眞帆といひ、風に、かた、帆をかくるを、偏帆といふなり、いへり、かたかけの帆も、同じ、河海に、日本紀の、個、字を引たれと、釋に、個、字、たか、ほ、訓せり、義も又違入り

かたほね 新撰字鏡に、勝又、標とみ、博をかたの大骨と訓せり、かたま 神代紀に、籠をよめり、一書に、堅間に作る其義なる、し、無目籠なども見えたり、○粟、國人の、櫛、骨をかたへといふ、阿波風土記に見えたり

かたまし 姿をよめりかたがまし、の義とが、反た也、推古紀に、伎もよめり、靈異記に、好をかたみとよむ、まし、反み也、新撰字鏡に、伎をかたむとよむ、まむ、反む也

かたまち 萬葉集に、片待と見ゆかた、心にかけて待を、いふ、かたまひ 古記に、片舞と見えたり、諸社の御幸に、ある事也、いへり、東遊に、求子は、かた舞を、いふ、

かたみ 倭名鈔に、釣竿をよめり、漁具也、いへり、かたまを、同じ、○古今集の花かたみ、なごに、後人、篋をよめり、○互に、いふ、歌にかたみ、いふ、偏身の義、各自の意也、○長恨歌の、信、字、遊、仙窟の、記念、字、をよめる、今時の、俗も、いふ、辭也、舊事記に、吾形見物と見えたり、遺物も、いへり、○かたみの、雲かたみの、雨、いへり、山、神女、の、故事也、○形見の、山、石見、安濃郡、に、あり、形見の、浦

まかねしてかたみをする旅衣かな。
 かたみこころ 欽明紀に好心をよめり、
 かたみせん 互先、續世繼ありす。は、この歌の
 圓基ならん、かたみせんててもよ侍らん、
 かたみとなしの かたみなりなしの意なり、續
 後撰集 古入のかたみとなしの月の色もみそとく
 れめる秋そかなしき、
 かためしことを 萬九、このはこをひらなゆめ
 うららかに堅めしことを、
 かたらか 江次第平野祭條、辨の宣の詞に、御
 飯堅樂かたか給三三、
 かたらむこころしきめちも 萬廿、にほりのた
 きなが川のたえぬも君にわたらむしきめちも
 かたりぐさ 話種、話柄、談資、今俗にはなしの
 たねとくはに同し、祭葬水文、孫朱施仁、使世
 々子孫、以謂吾祖有、超逸之風、受、上國之
 榮、作千秋之話柄、得、萬古之稱揚、
 かたりさけ 語放也、ものかたりして、我心の間
 をさけゆるをくふ、萬十九、かたりさけ見さくる人め
 ともしきとたひしきけし、
 かたりちらす ものつゝみもせで、みたりかりしく
 いひちらす意なり、散木奔歌集、神無月の十日
 比、田上より都へのぼるて、紅葉のめてたがらし
 ぶ、都の人に語り散らしたるを申ければ、嵐を
 都の人の思ふもみちのいろをかたりちらるる、

かたりつき 萬十八、大宮人にかたりつきとて、
 同三、かたりつき言つきゆかむ不二の、
 かたりにすれば 萬八、見る人のかたりにすれば、
 みる人の見まはさして、
 かたやき 肩焼也、日神代、内、抜天香山之眞
 男鹿之肩、抜云々、卜法に、鹿の肩骨をゆきて
 うらなふ事、古の法、ゆめ、今たえたり、萬十
 四、むし野にいらんかたもむし野にものらむ君
 か名にらに出でける、
 かたるあり 片居行、拾遺集、あまごゝか
 たるありするみより子たらん月にもあはしむす
 る、林葉、
 かたをならぶる 長明無名上、いまかたをなら
 ぶる人すくならまし、濱松四つひにかたをならぶ
 る人いできぬめり、今昔一、古三不耻、今毛肩
 ヲ並アル者无シ、
 かち 歩行也、萬十三、人つまの馬よりゆくにたの
 つかのかちゆけは、
 かち 新續古今戀、たのますいさかまのかちの色
 をみよあひそめてこそ深くなりぬれ、信云、これにあ
 るあひかな違ひたれど、藍染の深き證とすべし、
 かちえ 襦衣とて隨身の着る服也、鬨服の袍
 の如くして、兩の腋を縫ひあはしたる物也、紋を
 めひ付る蠻繪とて、丸く獅子孔雀鴛鴦などの類
 を付る也、一體狩衣の兩腋をめひあはしたるを

かたを 萬葉集に玉の緒を片緒に搓て緒を弱みと見えたり又片糸と見
 ゆ、
 かたをか 片岡とかけり偏高。曰阿丘とみゆ前高後下。曰施丘と見
 たる是也、
 かたをなみ 萬葉集に函を無みと見えたり潮みちくれの斤しん函のなき義也、
 かたをり 神樂歌に片折と見ゆ歌曲の節の名也歌の第二句を重てうた
 へたる、
 かたをりと 平家物語にみゆ片折門の義成へし宇治拾遺にもるなりと見
 たり、
 ○かち 日本紀に歩をよめり又徒行をかちゆとてめり今もかちばたし
 なる、○歩をよめりも同じかちたなる、○顯昭説に陸をみちも
 かちとてよめりし、これと外に例も見す、○服にきふの裾の字音也、○物の多
 かたをかちといふ倭名鈔に多心をなかがちとてめり、○染色のかちの節用
 集に紺地とかけり藍染の布也あなかちにみたる、詞花集より見えたり
 又祝賀の事に此色を用る、勝の義にさる也、今かちとてふ大諸禮に大將
 出陣の時、かつ色の手綱を用う勝色の黒き色也と見ゆも播州節磨郡
 印南の里より染出しぬれ、新勅撰集にも琴の、事をかちして、狩衣をかま
 のかちと染てん野この露にかちらまをし、○内裡女房の辭に餅をかちん
 とてふ事、かちの帽子をかちたる女房の持來れる故也と梅村載筆に
 見えたり、○歌の義に、かちとてめり、或、五條天神の勝の膳より起り
 て家鎮の義なりとてめり、

かち 日本紀倭名鈔に楯をよめり、續日本紀文徳實錄に楯をよめり、舊事記
 に、楯をよめり、萬葉集に、眞楯とてめり、古、舟の楯の類、海川にいはず
 皆かちといふ見えたり、今いふもの、柁也、日本紀にかちとてめり、又舵に作
 る全漸兵制録も同じ、或、楯を訓せり、○たもかちの面かち也、右にもるを
 かちりかちの操かち也、左にもるをいふ也、道達院の歌に、くる馬や水のため
 かちりかちにてこもすがたも沖のこもね、○わくかちの脇かちの義也、腰柁を
 訓す、○新撰字鏡に、穀をた楯をかちと訓せり、日本紀に擬もよめり、七々に歌
 かち、此木の葉也、後拾遺集に、天河をわたる舟のかちの葉にたもふ事を
 も書ける、かち、神世に穀を種て、木綿を造り、天棚機姫神に神衣を織まめ
 させられたる事、舊事記に見えたり、よめり織女の故事をもて、此木の葉を用る
 也、一條禪閣の息竹内良鎮の歌に、昔誰き、あちまりて星のためかちの七
 葉をとりそなへけんとよめる、神世の故事を究められざる、○かちの衣の
 たもてうらもいふ也、○鍛工をかちとてめり、かちの反語またかちの
 略語也、靈異記に鍛をかちとてめり、鍛治と書り、説也、倭名鈔にいふ
 の鍛治の文字に就ての説也、新六帖にかちなる、太刀のちをばかちとてめり、○
 佛家にいふ、加持の音也、瑜祇經に三密加持速疾顯と見ゆ、三密の身口
 意也、加持の空海の釋に、往來所入、爲、加攝而不散、爲持と見えたり、○
 中古の姓に加地あり、○梶島の丹後にあり、
 かちいさ 日本紀に歩兵をよめり、○口語にいふ、多く勝軍の義也、
 かちかち 若聞集にみゆ楯冠と嘉曆勅使記に見ゆ細纏に老懸して馬
 副隨身の装也とてめり、

とし、又古書に褐冠と云事あり、是ハ褐衣に袴
 「袴」付たる冠を着する事、(倭ハ馬尾ニテ扇ヲ開
 タル形ノ如ク作タル物、冠ノ兩方ヲキテテリ)頁五
 かちくり かた栗といふ事也ほしかたれたるゆゑ
 かたくり云々、たゞ五音通する故、かたくりな
 かちくり云也、かちりのかちの字に、搗の字を
 書ならしたれども、悪し、搗乃つゝと云ふことよ
 む字也、かちりの搗たる物にあらず、頁六
 かちり 機師也、今の櫓也、今櫓といふハ古
 たきしといふ、古中、吾足不得歩、成當蘇斯
 形云々、唐韻施正船木也、漢語抄云、或作
 柁、多伊之云々、萬々、浪高しいかにかちり水
 さらのさるゑもす入云々櫓

かちのみ 救荒本草穀樹、今かうそと云、延喜
 圖書式、凡造紙者穀皮云々、凡造紙云々、
 長功日養穀皮三斤五兩、著聞集廿、五六日
 を入て、數百の猿あつまり、かちの皮をたきて來
 りて、僧の前にならしたきたり、この僧これを取て、
 料紙にすかせて、もがて紙を書奉る。○梶カキ歌林
 四季物語、六日といふ夕に、あすのためとて、そ
 れかしなにかしの山々峰々、ものして梶の葉と
 になり、年中定例記、七月七日、梶の七葉に御
 詠あそはされ候也、鹽藻草、かちの七葉なりと
 といはず、なほと也、○かちの木、古語拾遺、天
 富命求、沃壤、率往東土播、殖麻穀、好麻所

かちから 萬葉集に見ゆ柁柄也明律考に柁牙を譯せり柁の取木也堀
 川百首にいかちばしらとよめり柄をもて柱とする也
 かちさび 古事記に勝佐備と見ゆ勝心の進みたるをいへりさびに同じ
 かちさき 凱歌をいふ勝て時の聲をあぐる也
 かちり 景行紀に挾抄者と書り倭名鈔に機師をよみて楫取の義也西
 士の書に梢工梢人などいひ梶も木杪也と注せられ相通りして書る也實
 今いふかひ也よ新撰六帖に うきねして枕さたむ船はたに置ならん
 たるかちもあけり物語にかんざりとも見えたり今いふ所のものハ柁工也
 かちのたまつき 穀の玉梓也、
 かちのは 八雲御抄に見ゆ船にいふハ今羽板といふ明律考に柁門をかち
 わきいたと訓する是也家隆卿とわたる船のかちのこよめりハ穀の葉によせ
 てよめる也よ今も少しはき付る板を若葉といへり

かちびと 伊勢物語に見ゆ歩人也、
 かちゆき 神武紀に歩敷をよめり風俗通に解履謂之歩と見え于寶が
 説に今謂之歩又と見えたり
 かちゆみ 源氏に見ゆ倭名鈔に歩射をよめり
 かちわたり 涉カキ字をよめり歩渡の字も西士の書に見えたり、
 ○かひ 勝をよめり上カキの轉せる詞なるべし○名乗に一をよむハ無敵の義
 なるべしといへり○和をよめりかちの義なるべし○助語のかひハ且、字を
 よめり字書に不定之辭とも又姑且也とも見ゆ又此也是也とも見えられ
 ばかくといふにも詞かよへり大かたハ苟且の義也歌に此意を用ゐたるハ伊

生、故謂之總國、穀木所生、故謂之結城郡、
 古語麻謂之總カキ也、今爲上總下總二國、
 ○ゆふ 漢名栲樹皮、今この皮又白木綿皇
 極紀、三年夏六月、是月國內巫覡等折取枝
 葉、懸掛木綿云々、釋紀、木綿者麻剝所成
 也、自有木綿之樹、其皮爲之、寶基本記、木
 綿謂以穀木作白和幣名號、木綿、鹿添カキ
 糞抄、木綿ト書テ、ヲト讀、歌三ハ、シテ、心ニテ云
 云々、今ハ木綿ニテラヘテ、白紙シテニ切り、糊ニ
 付ル下ラ、ヲカクルト云ヒ習ハセルニヤ、紙毛木ノ皮ニ
 テ多物ナレ、通テ用生非、熊由、延喜式一、四
 時祭、上社一百九十八所、座別木綿二兩、麻
 五兩、○たぐ 古事記、多久夫須麻カキ同、栲
 繩カキ之千尋、繩打延、釋日本紀、栲衾新羅
 國、私記、栲木色白、故喻而言之、萬葉十三、
 さらたへの袖ふるみゆつ、豊後國風土記、速見
 郡袖富カキ、此郷之中、栲樹多生、常取栲
 皮以造木綿、因曰袖富郷、
 かちめ 和名抄、末滑海藻、加知女、俗用搗
 布、搗者搗末之義也、賦役令、若輪雜物者、
 末滑海藻一石義經記、くはのくはのくはの所
 につきて、くはのくはのくはの宿をかりて、夜ふくはの御も
 のかたり有けり、浦のくはのくはのくはのくはの
 かちめを給ひ、見給ひ、ニシキ、
 かちかは 七夕に梶の葉を用ゐ、信按、舟の梶

勢物語にかつ根つ、猶も戀しきハ且歌且舞などいふ意にて彼是相共に
 交り至るなり後撰集に 戀のことわりなき物ハなかりけりかつむつれつ、かつ
 ぞ戀しき多くすなりちといふ意により日本紀に且、字をすなりちと云みかつ
 ぞといふより眞字伊勢物語にハ豫、字もよめり○名乗に雄をよむハ上にあ
 る時也下にあればなとよむならひなり○搗をもよめり搗栗などいへり麥をか
 つ稻をかつなど撰も譯せり○勝山の美作越前安房にあり
 かつかう 大和小學に人の言に物ことにかつかうありといふ恰好と書てあ
 たかもよとよむ朱子常に恰好の二字を愛せられしげに物のかつかうと云る
 いたすらりやとすからに何事もなうてあたかもよと云へり
 かつく 古事記の歌に見ゆまつくといふか如し又少の意也といへり
 俗の口語にいふも同じとの意新古今集に くは井くむあたりのなと玉
 こえてかつく、むす秋の夕つゆ、
 かつがふ 庭訓往來に園岡と書り奉行人の下役にて科人を搦捕者をい
 ふとて、
 かつぎ 勝木の義又かちのきといふ鹽麩子也勝木の勝軍木によれり其名
 聖徳太子の事に起る日本紀にハ白膠木をぬりてと訓せり白膠ハ楓香な
 るハし今ぬるてもふしのきともくふぬの部にハし幕にも勝木のちを視に
 入て字を書こと及勝木にて小刀を造り裁こと見えたり○如にもくへり鎌
 倉の時勝木則宗あり、
 かつくひ 川杭の義切杭といふか如し又杭の杭といふ義なるハし、榎杭枯
 枿など見えて字書に伐木面根復生也といへり、

きぬ云也、今の色々に染てうら付たるも有、もやうなも染たるも有、昔の兩袖を頭の上に重ねて、針にて縫ひ置たり云説あれども、古も袖をさげてかつきたり、古き繪に見えたり、今も兩袖をさげてかつく也、かつきのたぢぬひ、常の小袖に替事なし、悉り形を前へ下けて裁也、是のひたぬへふかくなり顔をかくす爲也、江戸にては今のかつきする事なし、是の昔若間八三郎と云浪人十八歳なりしか、松平伊豆守を恨る事ありて、ねらひしか、かつきを着して近付き、女のまねして伊豆守を討んとせし事ありし故、關東にひかつきを禁られし也、依之ほうしなど云物を用ひ、若、女などゝあみ笠をかぶりたりし由、ある老人の物語しける也、貞三

かづきびぬ 夫三三、夕されの梶音なりかづきびぬ奥なき歎つもかりに出るなる入し、かづく 潜也、額突ツツの上略なる入し、日神功、にほひのかづきせな、古中、かづきくつき、同、鶴かつくとふ人名有、萬四、にほ鳥のかづ池水云々、和名、本朝式云、伊勢國等潜女、加豆岐米、かつきのあまの也、樽

かづく 潜、藤原元真集、すまのあまのつゝみてそこをかづかねのふかき玉もみ入ぬなりけり、古事記上、於是詔云、上瀬者瀬速、下瀬者瀬弱而初於中瀬、隨迦豆技カハチ而濤時、云々、

かづけわた 江次第十二、五位藏人率六位藏人云々、就内侍藤下取綿二篋、令持於六位、自庇北一間登、先到禮盤下、被導師厚次到僧座後、次第被之畢、新六帖、霜こほる宵の野ぶしのかづけわた今ぞもむもわすればつらん、夫十八、かづけわたひきかけよ小夜過てむろへかへらんせなかくれた、

かづきありが 上總國より出る名物也、庭訓往來に上總鞆とあり、其外舊記に此名あり、鎌倉將軍宗尊親王の御時、鎌倉にて内記兵庫元染鞆の故實を注進す、彼家代々上總國にたると、此事を奉行すと東鑑に見たり、平家五云、忠清の馬にぞ乗てける上總ありがいかけてかひなし、貞十三

かづてん 合點と云の、人の方より箇條を以て、相談する事あるに、我心に合て、尤同心をたる、ケ條に、點を合て道を合點と云也、廻状など點をかくるも合點也、常の詞に、心得たる事、合點たる事、是より出たる詞

をかせられたるよりの事也といへり○後撰の作者藤原かつみの命婦也、かつら 神代紀に杜、字をよめり古事記に楓樹とも香木とも書り新撰字鏡も楮、字をよめるも是に據たるに倭名鈔に楓をかつら桂をめかつらとありて杜を桂の誤とあり、今もなかつらめかつらと稱して材用となす物ありなかつら、葉の色赤みを帯たりされと楓にも桂にもあてかたし又木犀樹を巖桂ともいへばめかつらといへる物是にともいへれど今昔物語に天曆の時震旦より渡りたる僧桂の宮の桂の木を試て唐の桂心に勝れりといひしよし書せられたる指せるかつら、今の齒桂なるべし古へより我邦處々に多し古事記に香木をよめるも据あり神社に必ず此木を植たりと見ゆればたもくすたもまてをたて指たる物ならしとそたもる材用のかつら、香氣なし○賀茂松尾などの祭に用る材用の木なり續拾遺集に 誰しかも松尾山のあふ草かつらにちかく、契そめけん久かたの中にてたひたるをよめるかつらの里かつら門も松尾のあたりなれば故あるにも新後撰集に、くかなれた日かほにむかあふ草月のかつらの枝をそらん月讀の社もほと近し○玉かつらともよめり玉玉玉と別也今も江戸にて玉かつらと叫り、あはゆる加茂の祭の玉かつらたえぬれもひあふひ也けり賀茂明神の大和葛城よりのしたまひしよし四季物語にいへりかつらさる桂木にかよへる義もはるなるべし○かつらみよる三五のくれと三井寺の謠にいへるよ李崎一夜百詠の月詩に桂、生三五、夕奠、開二八、時と見ゆとといへり○かつらなる晋の鄒説か故事より儒家の及第にいふ事なり拾遺集に菅原、大臣の御母、久かたの月のかつらも折はかり家の風をも吹

せしかな○月の桂の事は西陽雜俎に、いし○筑前國宗像、郡桂瀧のものと異國退治の時勝浦と號す遠千瀧也、秋の夜のほほひの月のかつらかた山までいへる海の中道○阿波にも勝浦あり

かつら 松浦肉桂と稱するもの筒桂也といへり和の古方書に肉桂と桂心をなら入用るもの多し本草にもまた條を分てり、

かつら 鬘をよめる花鬘也真柄のかつら日影のかつら花かつら菖蒲のかつら柳のかつら木綿かつらなどといへり又宋志日本傳に髮鬘とも見たり髮連の義なるべし鬘の異体也○麻に幾鬘といふ事式に出て圍二尺、爲鬘と見たり○今女の髮の具にいふもの倭名抄に髮をよめり俗にかもといふ是也釋名に髮少者所以被助其髮也と見ゆ○鬘をよめり鬘に同したかつらの類也○葛も鬘の義なすかつらさかづら同し十訓抄にあるかつらにたはふれしてといふ事見たり○新撰字鏡に通草を神かつらと訓せり○桶にいふの籠也たがともいへり盆石を載るかつら盆ありも能の鬘を置の器也○鬘、宮の宇多帝の女依子内親王也

かつらきのかみ 葛城の神也歌に多くよめる、一言主の神をまつせり

也、良九
 かづら 日神代、湯津杜樹、和名、楓平加夏良桂
 女加夏良、萬四、めじり見て手にのせむ兼名苑云、月
 ちのかづらのこまきもなにかにせむ兼名苑云、月
 中有河、桂樹高五百丈、枕草紙、木のかづら、
 同、見るものは、雲林院ちみんなどのもにた
 てる車ども、葵かづらもうちなへて見ゆ、四季物
 語、かづらのえたり、松の尾のみやしろの御たぐか
 はして、けふにさしそへ給ひぬ、月詣集、俊綱朝
 臣ふし見の家に入んて、かづらをこひて侍りけ
 れ、つかはすとて、よみて侍りける、賀茂成助、
 瑞籬のかづらをつつ宿なれ、月みんことそ久し
 かるべき、大和本草、ヲガツラ、ソノ葉マコトニ白楊
 ニ似テ兩々相對ス、賀茂ノ祭ニ用ルカツラ、是ナ
 リ、
 かづら 鬘也、頭のかざりにかざるもの也、和名、
 釋名云鬘加都長髮少者所、以破、助其髮也、
 俗用鬘字、非也云々、花かづら、菖蒲かづら、柳か
 つら木綿かづら等有、萬十、たまきなみよせくる
 玉もかたよりにかづらにつくり、同ハ、わかまけるわ
 さ田の穂立つりたるかづらを見つゝまめはせわ
 かせ、詞書、秋稻漫贈、大伴宿禰家持、云々、
 夕べほろひみちもいふよし、方丈記に、すそわの田
 井にたりにて、落穂をひろひて、ほろひみちをつくる云
 々、萬葉、から人もふねをうかへてあそぶとてけふそ

撰集に見えたり、
 かづらひげ 源氏に見ゆ鬘鬚の義也細流にたもつらひげ也といひり、
 かづらめ 祝詞に葛目を見ゆ引結入る葛目の緩びといひり、葛藤をもて
 繩を結入るをもてゆひめの事成つて、
 かづらめ 桂女を昔り神功皇后の時の臣の末孫也といふ東照宮の時よ
 り御代かはりにかならず出府す貴人の婚禮に此者をめざる事あり山城、
 國桂の里より出といふ大諸禮にも輿の先をかづら大口にてねると見ゆ又
 蹴鞠の場用ゐる事も見えたり、かづらめや新枕する夜なぐらわれし結の
 こまひならぬ細女、命の故事にて目勝の義によれるはや職人歌合異本
 の圖をみれば頭を包みて高く纏揚たる異形の女、飾を賣の体也飾ハ所謂
 かづらめ也
 かづらゆふ 鬘木綿也延喜宮寮式に見ゆ次に鬘とばかり見えたり
 され木綿も鬘とすなるへし薩戒記鎮魂祭の條にも見えたり與義抄
 に神樂するにたまき木のかづらにて頭を結也額より後に引通す此をかづら
 ゆふといひ見えたり今猿樂の女の形に金襴などにて額をゆふ此意風成
 べんざんす
 かづらまき 堅魚木也古事雄略記に始て見え天子の宮殿ならび平人の家
 に用まじき事も此記に見えたり堅魚節の形なれたれの名とせる也堅魚の
 水物にこれり山城國愛宕郡小野郷雲が畑といふ邑の家々の棟にわかづ
 ら木とて皆あはれ入り風をさきのため也又田舎の草書にたんとすといふ物
 も是也

わかせるはなかつらせよ、或ハ口かけかつらとも、指
 かつら といふ遊女なり、山城國桂の里の遊女
 なるべし、永祿四年三月晦日、三好筑前守亭
 御成記云、桂兩人御縁、祇候種々申事
 在之云々、年中恒例記、正月五日の條云、
 地藏千百參、御服被下、上様よりも御服被下
 之、千百の日野殿桂也云々、三儀一統云、
 猿樂への禮の事、馬上の時々の禮也、かちの
 時の詞の禮たるへし、但人により猿樂によるへし、
 白拍子かつらなど、何も猿樂と同前也、又云、
 かづらに門送りなし、ちらびやうしに扇の禮と
 てあきば迄有へし、傾城に少座を立様にして
 禮あり云々、○島山記云、此間公方の御慰
 參り舞歌ナドシケル桂ノ遊女、裝束ヲキキイラセ
 若君ヲ桂ニ作り、彼遊女ノ中ニ入レ、己ハ桂ガ男、
 風情ニテテ、鼓裝束ナドヲ裝ニ入レ、島山重代ノ
 長刀ヲ、竹筒ニテテ擔ヒ、敵陣ノ前ヲ通りケル、敵
 ノ方ニ桂遊女ヲ見知タル人多クシバ、無左右是
 ヲ通シケル云々、(公方ハ義澄公也、若君ハ島山
 政長ノ若君御兒九十三歳也、己トハ政長ノ家
 臣平三郎左衛門也、)今世桂ノ里ニ桂女ト云
 者アリ、是ハ古ノ遊女ノ桂女トハ別ノ者也、其家ニ
 神功皇后ノ御腹帶ヲ持傳タリトテ、將軍家ノ御
 臺所御妊娠ノ時ハ、御安産ノ御守トナル由ニテ、右
 ノ皇后ノ御腹帶ヲ借シ上ル也、登城ヲマシ也、其

○かて 糶をいふ日本紀に稟もよめりかての略也かての略也かての略也かての略也かての略也
 反りなり萬葉集にかりていふなほかてを「に」かてひんないに見えたりて
 の香直酒直なといふての如し○琉球にて食をかてといふも此邦より傳へた
 る詞なるべし
 かて 勘解由をよむ勘解由小路などの時也、
 がて 萬葉集に難をよめり過かたげを過かてといふたげ反て也消かて得かて
 寝かてけがて歸かてなを皆同じ○萬葉集に勝字をよむ古今集にわ雪の
 たまればかてにたけつといふある、萬葉集にわがてにを宿不勝と書るつら
 わわぬ意なれば同義也不知をたらに不飽をわがてといふの例也といふ
 かてどころ 古事記に糧地を見ゆ領地をいふ成つて
 がてら 日本紀に歸筆をたらむらひかてらといふ琵琶行に長閑なをたら
 がてらといふ萬葉集に山邊の御井を見かてり吾妹子が形見かてらといひ
 古今集に心みかてら好忠集にすいみかてらなど見えたり皆兼てするの意今
 の俗語も同じ
 かてら 日本紀に交、字文選に雜、字様、字などよめり萬葉集に醬酢に
 ひるつみかてら見え令、字をよめり俗にかてらといふも是也
 ○かて 門をいふ金の義也門ハ鉄をもてかたむる故に萬葉集にも金門
 とも小金門といひり今、俗門外をかてらといふも門より出たる詞なるべし萬
 葉集にもかた田など見えたり○物の角をかてらいり萬葉集に焼太刀
 之加度打放を見ゆ稜をいふ廉をよむも同義也○才をよむハ日本紀に見
 えたり人にかたあるかたのなまといふも是也○魚のかてら口の角立しより

先祖ノ桂女、神功皇后新羅御征伐ノ時、祝儀ヲ申シ奉リシ例アリトテ、其吉例トテ、東照宮御出陣ノ節モ召シ申由也、シカレ此桂女カ事ハ古キ書ニ見テ、日本紀ノ神功皇后紀ニ見テ、イナカシキ者也、殊ニ皇后ノ御腹帯ト云フ物ノ事、甚オボツカキ物也、信シガタシ、古桂女ト云シ者トハ別ナリ、貞二

かつらめ 山城桂村に住、世々女主となりて、其家定りて、所司代ノ桂節を上る、本文に云、職人歌合なるハ、これ也、

かつを 堅魚也、萬カ、うら島か子かかつをつりたひつつかねて、和名、鯉加豆乎、或、堅魚加豆乎、

かて 萬葉集に、多く勝字またハ難字を書リ、佛本人麻呂集、夕されハ若きまさんと待し夜のなこりぞ今もいねかてにする、凡河内躬恒集、はかなくて春ひと月の過にけり花のさかりつすまがてにせよ、

かて 難也、萬六、あらたハのめをたにたにさせかてに、同六、往ましを待かてに、

かてめ 萬二、梓弓ひからまじ〜よらめんも後の心をあらかてめかも、難ハめかも也、梅かてましを 萬七、吾こころゆたのたゆたにうきめなは遊にもたきにもよしがてましを、

かてむか 日崇神、たほゆかかてむかのほむらつしむらなたこしにこまのこしかてむかも、かてむかかたしとせむか、かた〜あるまじと也、梅

かてら 紀貫之集、源公忠朝臣の子の、装させ給ふ所にてよめる、君をのみいはひかてらに百とせまためハなぐもまたんぞたも、伊勢集故郷のあれはてわたる秋の夜に花見かてらにくる人もかな、

かてり 交也、合也、萬一、山の遊のみ井を見かてり神風のいせのをとらあひみつるかも、同十六、ひるつきかて、同三、君まぢかてり、日推古二年夏四月島人不知沈水、以交「カテ」新羅於菟文選、鸞良、雜苦「カテ」古今、わかやどの花見かてらに〜くる人ハ、梅

かてぢか 門近、源氏花散里、かてぢかなる所なれ

かて〜し 廉々、河海抄、才智有人ハ、そのものいも圭角ありて、人になはる事有て、まづらかならぬ故に、才を日本紀の古点により、人の名に麻呂といふも、謙退の意にて、その才智なきをみつからふなり、源氏物語、いそたしたちかて〜し所ものし給ふ御かたにて、いそたあらすたほしひあて、もてなし給ふなるをいし、

かてまつ 門松の始詳ならず、堀川院百首に顯季の歌に、門松をいそたなきたてする程に春あけかたに夜も成めらしと見えたり、堀川院御代

いそたや能野京都にていそたより東都にていそたまひり西國にてい高麗いわしといふを正月の祝儀に用る事四季物語に見えたり青魚の類也といふ

かてまつ 正月門に松竹など立て祝ふを門松と稱せり門、神の祀なるし徒然草に大路に松立わたしと見えたり全浙兵制我邦正月の事に以松柏挿門乃取長春之好といり爲尹歌に 今朝はまた都の手ふり引かへて千色の始めまつか門松歳華紀麗に元日、松標高戸とも董助、問禮に紫松枝千戸とも風俗記に正旦楚人上松柏、頌ともいり其意近し今福圓の間正月門戸に松竹を飾り立るハ國姓爺より始るとし西川氏の書に見えたり○禁中并に堂上は門松をかざる事なし諸家中に注連をひく事あり

かてもと 敏達紀に門底をよめり、

かてや 倭名抄に門舎をよめり俗にいかり角屋の義也、

かてよつま 神樂歌に見えたり萬葉集に 吾門に千島をばなぐ起よ我一夜つま人にあらざる

かてり 日本紀倭名抄に練をよめり堅織の義なるべしたた反と也今云もこも是也○一段といふ事を西土の書に羅一練布一練をいり○縵もよめり縵頭巾義解に縵、無文縹也と見ゆ○下總の香取の社にも縵取の義也神代紀に見えたり又近江伊勢もよめりかてりの浦あり

かてりのきぬ 練の衣也生衣をいり又水色のすし也と云ふ新千載集に 立かざるかてりの白かたねかたねも猶うすき袖かな○兔

梅をもちりり兔毛をもて織するもの也○にはひを留る時に伏香の上に一重た〜衣をいりる香取の義也○糞臭な〜るに羅摩を陰干して名をかてりこよめ義かよりり取除く意也

かてる 日本紀に檢校字按制字なるをよめり、

かてう 歌頭也源氏に見ゆ踏歌にある事也今の音頭の如し、

かて〜し 物語に多く見えたり威稜の意也源氏の抄に日本紀を引て才、字を擧たれと記に唯かてりのみよめり

かてた 門田也門前に近き田をいり、

かてで 古今集によめり東鑑に首途と出て門出の義也、

かてのわらり 日中行事に見ゆかてりもの女孺をいふ成し、

かてのをさ 看督長と云り職原抄に見ゆ檢非違使の別當に附屬する者なり○今神社に關神とて弓箭を帯せる像を設け俗に矢大臣と呼もかての長なり

かてひ 倭名抄に門火とみゆ周禮に喪設門燎と見え顔氏家訓に喪出之日門前燃火と見えたり

かてら 新撰字鏡に該をよめり折曲也と見えたり後撰正義に勾引也といへり今人を勾引するをかてりかすと云ふ是也略人といふも同し後撰集に山風の花の香かてらと云ふる章莊が詩に勾引花枝つ〜笑凭牆とる意なるをいし○東の諺にかてり馬かてりといふ事あり

かてり 門部と書り衛門府に屬し御門を守る者也○門守ハ延喜式に見

に既に此事ありしなれば、其始の猶それよりも昔の事成へし、又つれづれに、草に、大路のさま松たてわたして、はなやかにうれしげなるこそまたあはれなれ云々、又一條兼冬公の世談問答に、門の松立る事、昔よりあり來れる事なるへし云々、貞丈云、禁裏ニ古ヨリ門松立リナシ、今モ同シ、公家衆ノ家ニモ立リナシ、京都將軍家ニテハ立リナリ、貞一

かどり 香取、風土記、楫取郡或香取東限、大鷹山西限、益草川、南限、大宜北限、國府、漢一宮記、香取神社、(齋主命也、於春日第二殿、祭之)下總香取郡、續後紀、承和三年五月奉授、下總國香取郡從三位伊波比主命正二位、

かとしわび 天武紀に才能をよめり、

かどたて、戸もどちたるを 閨門閉戸而有也、萬十二、かどたて、戸もどちたるをいついゆか妹か入來ていめに見えけむ、遊仙、今宵莫閉戸、夢裏向渠邊云々、格

かどなき 無主首、藤原長能集、ちら波のよすれ、寄るさ、れ石のかどなきものわが身成けり、かどにたち 門に立也、萬十七、たもひうらふれかどにたち、同十九、あしたにわかどにたち、日安麻、たほま入たまへす、わかかかどかけ、又門をかつる、あつるを通過してつゝ入るが、萬廿、わかかつの五

かどにちとていも 於門於屋外也、萬六、かどにちとていも玉がまを、格

かどにのわらは 信云、建武日中行事、朝きよめの下、かどにのわらはるものあり、長押の上へののほら、このわらは考なし、長押の敷居の長押也、

かどぶ 勾引をかどぶするよめり、後撰、山風の花の香かどぶふらふらに春の、そほたしなりける、白氏文集、楊柳枝詞律依々、嬾々復青々、勾引春風無限情、白雪花繁空撲地、綠絲條弱不勝驚、後撰集抄、かどぶのめすむ心なり、かどはす也、あちこち勾ひを誘ふ也、霞か無の勾ふ花のその花を知て、化の下に尋行て見るべきに、霞立こめて見わたぬ程に、霞かほたしにて有也、かどぶ 勾拘也、後撰、山風の花の香かどぶ籠に、春の霞をほたしなりける、

かな 鉈也、萬七、まかなもてゆけのかわらの、和名、鉈平、木器なり、かな、釋名云、斬有高下之跡、鉈以此平、其上也、又云、新撰萬葉集に、用鉈字、今案、鉈字所出未詳、但唐韻有鉈短矛名也、可爲工具之義、未詳云云、萬葉に、かなしみさくしるにも、鉈染を用たり、天曆帝の勅をうけて、萬葉に点をくわへられたりといふ順の、なにかがまればむ、又鉈字所出未詳といひて、

かな 神代紀に乎をよみ常に哉をよめり歎する辭にいへり書經の兪哉左傳の諸哉、口以爲然心不以爲然之意といひ禮記の祭哉、疑而量度之辭と注せり又歎夫をよめり又也歎也哉、平哉、矣哉とも用り日本紀に哉字をかねてよめり萬葉集にもかなといふべきをかねともかもともよめるもの多し後世の多くかなとよめりかな事情を商量して歎する意なる歎の聲にあらはれたる也とぞ哉留に唯てにはの哉あり又かへる哉あり○鉈をかかといふ萬葉集に眞がなとも見えたり今のかかといへり鉈の鉈今かかといふ辭にといへり全浙兵制に、椎鏢をつきがなと譯せり萬葉集にかなといふ辭に鉈字を書り昔家萬葉集に鉈字を用るも同じ鉈のやりがな也又さながんなどいへりむがしり皆鎗かんなを用るし百年前より突かんな起れりといへり薩州の鉈の兩翅あり西土に同じみぞがんなと呼り天工開物にいふ起線鉈也桶工のかなを正直といふ臥準と見ゆ又丸がんなりかんあり○歌に詞によめるかなあり或りがなを濁りてよめり萬葉集に欲得、字黨、字願字などをよめる是也がもといふ詞の轉せる成入し長へるかなともひけるかなの類の二意を分ちて看べし金葉集に 秋ならで妻を鹿を聞しが折から聲の身にのさむがなを聞いてしがなを願ふ意也といへり○猫をかかといふむがしりの金澤の文庫に韓猫ありからよ書を取よせたるに船中鼠の防ぎに猫を載來りしよりそのすぢの猫をいひ初めたる也と物に見えたり○出羽に魚のなをかなとくへり○假字をいふかりの名の義也文字の字をもなとよめる事日本紀に見えたり

かないろ 鉈をよめり金器の色をなとも名くるにも庭訓にも銚子金色提

と見えたり、かなうす 源氏にみゆ鉄曰也といへり、

かながき 倭名抄農耕の具に爪をよめり金搔の義也といへり熊手の類也、かながひ 大雙紙にみゆ金貝の義石だ、みながかひにて入を見えたり金かながひ銀かながひなともいふり貝の青貝をいふ也、

かなき 倭名抄に鉈又鉈をよめり金木の義也本邦の刑具木に鉄鏢を施せし也と後、堅木のみを用たり一説にきりくり、反にて輪の如くくるめくよりいふとぞ日本紀の歌にかなきつけあがこまきと見えたり萬葉集のふもだし也○文選、古訓に筵、字をよめり以筵、撞、鐘とあるは大小の相稱の義をいふ註に小木、枝也と見ゆ中臣祓に天津金木といへる是也中古の物に橋板のかな木とも見えたり今も奥州に此詞存せりとぞ○俗諺にもあなるかな木に目をつくなどいへり伊勢の南山濃州山家の樵夫の柴をかなきといふといへり○神代の古抄に近江國栗太、郡の上古大なる栗、樹ありて其根さしの敷里に及へり一郡の人今に掘て晨昏の薪に用う是を名けて金木といふと見えたり石炭を指していへり○薪にさく事をこまきといふも同じかか通す、

かなくそ 倭名抄に鉄落をよめり鉄のつたともよめりはたの皮甲をいふ也、かなぐさ 源氏増鏡に見えたり搔擲の義籬髪などいふり埃囊抄に綱をよみ或の撥をよめり又爬羅をよむ韓文に見ゆかなこし 東國にてまじはるの事をいふ假字腰にて眞の臨産にあらる義成入し、

た、新撰萬葉のみをひかれたる、萬葉集の点を
つけられたりして、さういふか、たほつかなし、
かな、源若菜、かなみ見給へり、目つひくまひり
て云云、眞洲云、かな文り、なだらかな、かへり
てよみがたく、又句讀も心をつけられ、わかた
き由なり、

かなぐる 射のはるきをかなぐりはなしてひ、物
を引取をひきかなぐるは俗にも、萬葉にかなる
まほつめらひひ、この事に似たり、徒然草、岡
本關白殿云云、初雪の朝枝を肩にかけて、中門
よりかまひて参る、たほみさりの石をつたひて、雪
に跡をつけず、雨はほひの毛をすくつかないりら
して、二棟の御所の高欄によせかく、類名

かなこよみ 宇拾五、或人のもとに、なま女房の
あらゆるが、人に紙をこひて、若き僧にか、こよみ
書てたひひひけれり、僧もすき串とて書たり、は
じめつかな、ひひはしくかみ佛をよ、かん日くえ
日なを書たりけり、二云、紫式部集、こよみには
雪をさし書たり日、目に近きひの、たけとくふ
山の、雪をかみ見をらるれば、あつめるかなこよみ
なるを、あつ初雪を、こよみ、小雪の節の事なる
へ、延喜式十六、凡進曆者具注御曆二卷云
云、類曆一百六十六卷云云、七曜御曆二云云、
かなしき 愛備するな、用を体を用たり、萬
十、
かなしき 愛備するな、用を体を用たり、萬
十、

かなしき 倭名抄に鉄礎をよめり今かなることあり、新撰字鏡に銚をよみ
礎をかなしきの石をよめり嘉祿年中の山口祭、記に忌鍛冶、内人云々鐵
敷、石司中、下知篠島、御厨奉送例也と見え、古事記に天安河のか
らの天、堅石を取て鏡を作ると見えたる是也、

かなしむ 悲哀をいふ神代紀に流涕をよめり金肅の義なるへし秋金肅殺
の意あり萬葉集にも鉗染を書りまむめりにはたけりされど萬葉に又
可奈之備らも書りて常にかなむと書も通せり千載集に、こゝろに
かなしかりけり昔こそ秋の心をくれとくひけれ○萬葉集にいついひ意に
かなしとあもの多し古今集の序に露をかなしむ源氏にかなむとする妻千
歌にいついひかなしむとある、淮南子、注に哀、猶愛也と書書に哀の
憐也と注せる意也とくひりされり可憐をあらはれともしるはともありつ
なてかなしむれたもしる意あるよし定家卿の説よくかなり

かなた 彼方の義也の反なり、

かなたくみ 古事記に鍛人神代紀に作金者よめり新撰六帖に、かひ
つたたくみと口にあひ心ありけるかなたくみかな

かなづち 鐵槌をいふ也倭名抄にゆの、新撰字鏡に鈍又鋌をよめり或り
鈍とも見ゆ奥にかなづちとあり

かなつなる 倭名抄に桔槔を訓せり日本紀に金綱井とあり金綱の鐵
索をいふ今、俗はわづらふとくは是也○神風抄に朝明郡金綱、御厨と見
ゆ延喜式に金綱驛といふ是也藻鹽草に哥撫村とあり今の繩生村也と
あり

かなつる 古事記に倭かなで歌にかなつるをよめり神樂舞をいふ也
文選に奏、字をよめり琴などかまよりの義なるへし

かなづる 倭名抄に鐵杖をよめり新撰字鏡に鈍をよめり二合の倭字成
へし

かなと 萬葉集に金戸とよめ同集に久留に針と堅めと見えたる戸
の、也金もて堅めたるをもて金戸といひ古事記の歌にかなとかなと
見ゆ、

かなのをる 南蠻語也阿蘭陀語なるをよめり血也す
てんの石也よく血をもむ本邦南部の産真に通るものあり、

かなばかり 武備志に度字を見ゆ世にいつい問字なり、

かなばし 倭名抄に鉄鉗をよめりかなばしと云ふ也新撰字鏡に鉗も鉗もはしと
よみ鉄をばしとあり、

かなみ 稱、字途、字譜、字同字適、字叶字副字協、字なをよめり兼合
の義なるへしねあ反な也歌に心にかなみ身にかなまをよめり適又副なる
へし口語の道にかなみ同願のかなみ途也○所名に加納といひ御厨
などの如く公役に就ての名也東鑑に美濃、國椎、加納大井戸、加納と
見えたり伊勢の村名に神納もよめり○賀名生の行宮、吉野にあり

かなへ 倭名抄に釜をよめり金釜の義也又丸かなとあり新撰字鏡に
饅もよめり又釜をよめり○鼎をよめり○鼎をよめり○鼎をよめり○鼎をよめり
足兩耳と見ゆ拾遺集物名にも見ゆ日本紀にかなとあり○かなへ石
の志摩國伊雜宮の由緒ありて近き山に正鼎石從鼎石とて一雙あり朝

かなしむ 伊物、ひつ子にやへ入れ
つりかなしむま入り、古今、みぢのつりつ
くつ有る懸がまのつり舟のつりかなしむ、
かなしむ 藤原元真集、服にて親のむかへて
かへりて河をわたる、たにきかち
井の河を立かへりかなしむをもちめり哉、
かなしくする かなし、悲歎の意のみにあらず、
可憐、またの可愛の二意あり、海人の小舟のつな
てかなしむの類ひ、あはれむべきの意なり、かなしく
する子などく入るも可愛なり、紀貫之集、をしか
らだかなしむ物り身なりけり世をむかへかた
かなしむ、類名

かなしむらに 悲也、ら、助也、萬四ものかなしむ
にたも入しむがの、古今、むひしにましまし
な、を、く、に、同、

かなせみ 漢名茅蜩、萬葉十、詠蟬、もたもあら
む時もかなせみひらひの、同、ひらひの、
けりも、同、ゆかけにきくひらひ、源若菜、日ま
のたせしむちし給て、御ものかたしなを聞へ給
海ほひてけりし、すしてたほのこもひきひら
に、日くらしのはなもかなせみ、たほみ給て、云
々、夕露に袖ぬらせむ日くらしのはなをきく
くたせ行らん、同、夕露、日入かたになり行らん、
らのけしきもあはれに霧わたたり、山のかけはをへ
らみむす、日へらしな、榮花煙の

後、みいふたをまてしたほしめればけりいひひら
 しのなつた。あすぢもあつたものなればは
 けり日くらしのこゑをなすき、六代勝事記、あひ
 ぢのうらふ所の木けしきゆ露を、日くらしの音
 にそとてきよける、赤染衛門集、こゑてかゝる
 け、空いみじきものわたるに、ひいらしのなきしに
 言塵集、秋の蟬ひいらし、

かなたぐみ 作金者、日神氏

かなつなる 桔槔也、和名、桔槔鐵索井也、加

奈豆奈爲、字書以機汲、水なり、

かなつき 山家集、宇治川を下りける舟の、かな

つき申ものなもて、鯉のくたをききけるを見て

云々、

かなと 信云、萬葉九、金門（イ）あり、かなと

かねのくまもて、かなとればくま、安康紀、訶那

杜加礙（イ）云、門を加村とくま、この略

なり、

かなはた 金機也、日仁徳、久かたのあめかなはた

はちまわりのみたまひかね、私記云、師説昔傍

機、以金鎖取鳴聲織也、機

かなふくし 錢也、和名錢加奈布久之、犁鐵

又土具也、萬一、ふくしもふくしもち、機

かなひぬ 叶也、萬一、潮もかなひぬ今つこぎてな

古今、命たに心に叶ふ物なら何の別か懸しか

らまし、機

野食載にいふ辰州の鼎足石の類也
 かなぼうし 假名法師の義もほりといふが如しよ、又少兒の事にもいふ
 也、

かなほだし 新撰字鏡に鎖をよみ倭名抄に錠をよみ足がせ也、
 かなまり 竹取物語に白金のかなまるを持て水を汲と見え枕草紙に目
 かなまりの如しと見ゆ倭名抄に金梳と見えたり又鈔鑑の下に新羅、金梳
 出新羅國後人謂之雜羅の説によればさうらと一物成へし今も朝鮮よ
 り此器を出せりといへり新撰字鏡に鈴鏡紛などをよみり〇神餘をよ
 り承久記に安房、人安西神餘と見ゆかねあまり也ねあ反る也、

かなめ 扇梢を扇眼ともいふ蟹眼に似たる故也大藏卿行宗家集にもかに
 のめとよみり源平盛衰記にかのめと見ゆされと蚊眼と心得るゝあま、〇
 延暦儀式帳に蟹眼釘あり今いふびる釘なるべし〇相馬百官に要をかな
 めとよむ扇より出たり〇樹にいふ扇梢につかふ木也といへり芽出し紅
 葉す

かならず 必をよみ紀に要をよみり假ならずの義也といへり一説に欺ならず
 の義疑なき意也といへり必矣を今の音にてよむ日本紀にかならずとよ
 むもて其義見つけし又不必の時にならずしもよみ來れり辭の緩なる
 なもて也不定の釋也要の多き要常といへり〇必也とあるは也の助也か
 ならずならは、管子に必則と見ゆ〇果決をよむ史記の注に果、猶決
 也と見えたり〇六朝以來の史に多く必、字を用うべき所へ會、字を用う
 るべし〇總要也と注す

かなり 俗にかなりかけかなりにするなといふ論語に可也簡注に僅可、
 未足之辭と見えたり、

〇かに 哉を萬葉集にかにとよみり又かに二、〇にはとて疑の辭によめ
 るも侍り顯昭の説にはかにとよみり辭也とあるといふ、〇蟹の皮丹の義な
 るし萬葉集にかねともよみたり大さ丈に及び其蟹人の首を斷ものありと
 見ゆ腹中の黄の月に應じて盈虧す〇新撰字鏡に蟹を海かにとよめれと蓋
 はさみ也倭名抄にたほつめとよみり〇近き御代の御製に、みな人のう
 へに目のつき横にゆく葦間のかにのあはれ世の中横行するをもて築歩の名
 あり今人刀劍の飾にも此物を忌り又數の蟹あつまりて蛇をきり食ふといふ
 本草に能與虎鬪虎不如也といへりも信すし〇蟹の甲に似せて穴を
 掘といふ思不出其位の意也

かに 山かに石蟹（イ）しかにと別也朝日かに紅蟹（イ）ひかにといふも同し
 まめかに金錢蟹又饅頭といふもかにに虎獅田うかにに沙狗又手長
 あり猿猴ともいふ鬼蟹ありまかにとも云扇蟹ありとも云握爪あり
 爪白あり青挾といふありまかにとも云扇蟹あり薩州にいふ藻かにに海
 藻又ひびきなどに産すまかに有りて圓也參州に岩かにあり其餘胃蟹鬼
 面かにみ篠蟹等各條に詳也、

かにかくに 日本紀に東西をよみ萬葉集に云々をよみり又かにかくにも
 と見ゆ彼に此に也といふかに同し
 かにどり 貴人の産衣にいふ蟹取の義也勘取と書ふあらず古語拾遺に
 葺不合尊の生れたまへる時に海邊なれり蟹を拂ひ除く事をいへり其義に

かなるましつみ 萬廿、あらしをの五百矢たは
 はみだかひたかなるましつみつてとあかくる、同
 十四、あしからのたもこのもにさすわなのかなる
 ましつみ子あれひもさす、或人云、犬追物にか
 れもの、役とて、かて獸のけ来る道をさす、ま
 待人をいふと入り、されり人の我通ひ路をま
 て、かて人の待さへるをまつみめて来るとい
 ふにも、機

かなむぐら 本草葎草、枕草紙あはれる物あ
 れたる家にむぐらはひかり、よもぎなどたかくたひ
 たる庭に、月のくまなくあかき、とあらふらあらぬ
 風の吹たる、源齋木、さて世にありと人にしられず、
 さびしくあれたらむぐらのかてに、同類解、けにむ
 ぐらよりほかのうしろみもなきまて、〇又やむ
 ぐらとも云、萬葉十一、たもふ人こむとりのせはち
 りむぐら云云、枕草紙、軒をあらそふ八重むぐら
 も、けに人こそみえね秋のけしきはとくしらぬんか
 りけり、太平記廿三、伏見院御忌日也しかば、
 彼御佛事殊更故院の御舊跡にて、執行はせ給
 はん爲に、持明院上皇伏見殿へ御行なる云云、
 舊去座て年久しく成ぬれば、見しにも非らず
 荒はて、一村薄野と成て、鶴の床も露滋く、八
 重葎のみ門を閉て、云云、翠山披ニ、八重タラハ、
 軒ヲアラント云、尤秋繁茂シテ秋月、ハトヲ
 云、則八重タラハ、秋月盛テ草也、然二本草啓

蒙ニ古ヨリ律ノ字ヲ多クト訓スル非ナリ、タラハ小
葉ニシテ發地ニ多ク繁延ス、故ニヤヘタラト古歌
ニメリ、是救荒野譜ノ猪殃々ナリト云ハ、杜撰
ナリ、猪殃々ハ冬苗ヲ生シ、春繁茂シ、五月苗枯
秋ハ絶テ無キ草也、高サ一二尺ニ過ス、軒ヲアラ
シムキモニ非ス、古

かなわ 信云、萬葉三、あられりきしみがたけを
さかしてみよきささりかなわもが手をさる、此かなわ
のかわらぬふに同じく、嶮しき山を登る時、とり
つゝ草など、手をかけすがるにかなわ、妹が手を
取らざるをいふ、

かに 萬十、うれたまきこほひきす今こそこの
あのかるかに來なむとまほむ、同ハ、つぎをわかみ
あそむかに、

かにかく 左右カニ又云々、又東西、萬十一、か
にかくにもつたもはすみた人のつ墨なほのた
ひとすまひ、梅

かににほふ 香句、紀貫之集 人のつ心もま
らざる郷の花をむかしのかににほひける、

かには 樺也、櫻皮也、萬六、かにはほまきつれる
舟に、古今物名、かにはほまきつ、六帖、かにはほま
一種の題に出す、或紅のうす花さくら、源氏、か
すみの間より、かはまらるのほふかこころと云々、
和名、樺加波、又云加七波木皮名所以爲、炬
者也、今ハ色々の筒に作れり、梅

かにひ 今がんびと云、枕草紙、草の花の、かにひ
の花、色つこからねど、藤の花に、よよく似て、はる
と秋とよよくたかし、明月記、寛喜三年三月、躑
躑鵠皮等開、翠山按に、花史左編曰、秋羅與
春羅相似而葉且尖深紅色、辨分、數岐爲
剪刀狀、其色勝春羅、とあり、此を觀れば、枕草
紙に春と秋とをいふ、一類別種にして、剪夏
羅カニヒと剪秋羅カニヒをいふ也、古

かにもり 掃守、河内高安郡の郷なり、古語
拾遺、天祖彦火尊饗海神之女豐玉姬命、生
彦瀲尊、誕育之日、海濱立室、于時掃守連
遠祖天忍火命供奉陪侍、作掃掃蟹、仍掌
鋪設、遂以爲職、號曰蟹守、注今俗謂之掃
守者、彼詞之轉也、

かめ 兼々也、萬十四、ねんなんにしたんを
かめ、梅

かね 豫也、日仁德、はるあつわけのみたすひかね、
伊物、きよきかねとてかめとて同じ、梅

かね 信云、異本枕、心ゆく物、きよなるかねよ
くつけたる、心ゆくらし、齒黒のかね也、○塵添搦
鏡抄、漣カネノ事、齒ニ付ルカネトハ、何ナル字、漣ノ
字ヲカネト云、順ガ和名ニ黒齒ト書テ、ハシロミト
ヨリ、雍州府志、後白川院時、甚重男色、故
堂上男子及十六七歳、剃眉毛、別以、突墨
造雙眉、以、白粉粧、而顔、鏡漿染、齒牙、騰脂

かめ

かね

よれる也、○小兒初生の時に小瘡の出るをかにといひ出生後初て下る胎
尿をかにといふも同義なる入し

かにとりぐさ 細草也、蔓草の如し其葉相對せず是を生兒の祝義に用
ゐるハ蟹探の義也又秩稻と豫知子とを産帶にもたしむこみ又産衣を贈る
にも是を添てたるを古法とすとくハ山槐記に治承二年御著帶後典
藥、頭和氣、定成朝臣持參仙沼子二七粒自臺盤所、方獻之中將
局取之縫付御帶、左方を見たり仙沼子の豫知子の一名なるよし本
草に見えたりまのばを用うるハ謬也

かにのまゝびしほ 三代實錄に攝津國蟹カニ、晉陸奥國鹿カニ、脂カニ、以贊
奉御膳と見えたり萬葉集にも爲鹿述痛作歌爲蟹述痛作歌見えた
れば古ハ蟹を専ら用るし成ハ西土にも蟹斷といふ事見えたり、

かたのさくら 倭名抄に樺をかにといふかはともあり萬葉集に櫻皮をか
かにと訓す香庭櫻の義にかはり略せるにも源氏にいふかはとも同じ古
今集物、名に かつげとも浪のなかにさくらられて風吹こころ浮沈む玉○
犬櫻祇園林に多し實を鹽藏たるをうの水とくハ近き世の勅名也とくハ
り此歌より出たる成入し

かにびのはな 拾遺集に見ゆ今がんび成入しとくハ枕草紙に色つ
こからねど藤の花に、よよく似て春と秋とをくをかしげ也と書たれり今紙く
さかすまがんびも少し異れり、

かにもる 香に漏るの義韓壽か故事也源親行歌に なき名そと人
にいふハ我袖にかくれぬものハ夜半のつりか、

○かめ 兼をよめりかねるともいふる反ぬ也又包をよめり人目をかめるなど
いふも是なり

かねち 日本紀に鍛をよめり金打の義ねち反ぬ也新撰字鏡に、鑄ノ字を
よめりニ合字成へし○世人獨眼人をかねちといふ鍛工の祖神に天ノ目
一箇、命の名あるをもて也とくハ、かねちがんとくハ、眼一の音也とく
ハ、江府にてつかんだとくハ、神田の明神より事起るとくハ、○歐邏巴の
内ニ一目國あり近頃蝦夷を攻るとくハ、也先年蝦夷のつたつもの者數
百里漂流して一島につきたり此島人男女皆一眼也とくハ、とくハ、
北にあたるなり

○かね 日本紀に鍛をかねとよめり今いふかね也古今集の人も見るかに山
かつらせよを顯昭の本にかねとありて神樂譜にハ人も見るハと有とそ○
金をくハ堅練の義なるハし金の五金の總名也口語にいふも然りされど
東國にてもくハかねものハ黄金也京師にてもくハ銀也○曲尺をいふ
も金の義也かねを略す銅鏡をもて造に朝野群載に鐵尺見えたり○足
利又太郎宇治川の先陣の時に金に渡してあるまらまらとくハ、も墨かねの
義にて眞一文字をくハ、とくハ、今もまがねとくハ、○鐘をよむハ高音の義
也とくハ、とくハ、鐘のねとくハ、歌によめりとくハ、とくハ、新續古今集雅世の歌にも
よめり俗につりがねとくハ、時の鐘あり軍、鐘あり梵鐘あり○鐘を朝につりて
訴をきし事昔馬の時に起りて我邦にも孝徳天皇の代に見え鎌倉將軍
の時に見えたり○千載集に 高砂の尾上のかねの音なり曉かけて霜や
ねらん是ハ山海經に豐山之鐘霜降而自鳴とくハ、とくハ、東方朔傳に

たなきを、ましてかの人の思ふらん心の内を、いかならんと心くるしくたほしめる、同ウツセミ、かのぬきすへしたるうす衣をとりて、出給ひぬ、

かのきし 大經上、入佛法藏究、竟彼岸、注、彰果窮極、畢竟涅槃、名爲彼岸、散木、かのきしにわたらんものあすか川さりの淵をせに成ぬらん、堀川後、かのきしにわたらんものあま小舟いかたのりえうれしかるらん、夫木卅四、成尋法師母かのきしに程なくこそゆきてこめ心にかなふのりのいかた、頼政集、かのきしをわが心もまゝからんうれしくよするのりの舟かな、

かのつづ 本草鹿角、今あかのつづと云、賦役令、其調副物、鹿角一頭、延喜式、祈年祭神云云、座別鹿角四頭、三枝祭、三座鹿角一頭、同五、齋宮齋王初入齋院、被清其院料、鹿角四頭、造野宮祓料、鹿角四頭、同民部式、交易雜物、尾張國鹿角十枚云云、同兵庫式、鹿角一隻附料長一尺鹿角本末各五十四隻伊多都伎料、常陸國風土記、角折濱、或曰倭武天皇停宿此濱、奉差御膳時無水、即執鹿角平家丸、このまたり八國に開入たるあた、かものなす、鹿のつづ、一の草からなば、たすく引さるるを聞か、

かのちかつの 漢名鹿茸、今あかのちかつのと云、萬葉四、夏野ゆくをあかの角のつづか、仙

覺註釋、夏野ゆく鹿とよめる、五月夏至日鹿角舞などいひてあり云云、あこのつづのありし角のたつて、今たつる角の手におる計たにも、たひぬるによせ、つかのまもよめるなり、延喜典藥式、諸國進年料雜藥、美濃國鹿茸七具、本草綱目、洗曰、鹿茸不可、以鼻嗅之、中有小白蟲、視之不見、入人鼻必爲蟲類、藥不及也、

かのこまたら 鹿子斑、古今集、時あらぬ山、あしのねくとしてかのこまたらに雪のふるらん、源重之集、見よ、君あかの鳥へ、くそけとも鹿子またらになかをたぢける、

かのこをとり 遊庭秘抄、鞠の足踏の條、堅固初心の人、隨身のこをとり、あつちのこ、至極あつちかめて後、あつちなる、かのにげくさ 和名抄、本草人參、いま通名とす、群芳譜、大抵人參春生、多於深山背陰椈漆樹下潤滋處、初生小者三四寸許、椈五葉、四五年後、兩椈五葉、末有花莖、十年後生三椈、年深者生四椈、各五葉、中心生一莖、俗曰百尺杵、三四月有花、細小如粟、莖如絲、紫白色、秋後結子七八枚如大豆、生青熟紅、續紀聖武紀、天平十一年十二月戊辰、渤海使已珍蒙等拜朝上、其王啓及方物、其詞曰、云云、并附人參三十斤云云、延

邪法と深く痛める事、僧史略に見ゆ、祖庭事苑にも、三戸鬼非佛經所出と見えたり、又三戸の實り上戸の色欲中戸の愛欲下戸の貪欲是を恣にせざるを守らば、あとも見ゆ源順が庚申夜奉和歌、小序にかひまもかしこき御神あはれともめみさいはひ給てん、又朝詠集にのす源順が庚申の歌に、沖中のえさるかななき釣舟のあまや先たつ魚や先たつか、れば我邦にて、猿田彦大神を祭るも、古たり、沖中の得さる方なき釣舟とは神代紀にいふ居天、八達之衢奉迎の意にして、翁庚申の名をかくせり、猿や先立魚や先立の汝將先、我行乎抑我先、汝行乎の意にて、先達指導の義を寓せるもの也、又待たば、猿田彦大神の事に出たり、又七庚申七の菓子といふ事を猿田彦神の七敷をたふとみたまふ意也、七の敷の方角にありても申の位にあり、七月も申にあたる月十二時にて、申の七、申の時とす、年中行事の歌に、いとちらて猶もすらすらふかのえさるあし分小船こさるかめらん、

かのこ 鹿の子也、染色にふり、當時來れる漢人の、赫支殼文といふ、ふり○草にいふ、排草也といふ、り又春なめしといふ、敗醬に似て春花をけるをもて也、此根を和甘松とす、真にあらす、又一種あり、夏白花を開く、葉も花も下野草に似たり、○かのこ鳥の白鷗也、

かのさ 猪鹿の類をさといふ、さか故に鹿をかのさといふ也、るのさといふ、かへていふ、倭姫の世紀には鹿肉と書せり、

かのにげくさ 新撰字鏡倭名鈔に、人參をよめり、鹿の論草の義なるよし、埃發抄に見えたり、倭名鈔藥に、鹿、曰、ほにげかむ見たり、鹿のよく良藥

を別つといふ事、あれの名つけし成へし、延喜式諸國の貢にも、多く人參を載たり、和の人參と稱する物、今十餘品に及へり、つれを指たるに、や知へからす、

かのまつげ 枕草紙に、誠に蚊の睫のたつ、ほつとも聞つけ給ひ、つと、書たる、列子の故事也、古歌に、目に見えぬ鳥も世にふる身のほつ、蚊のまつげにも巢を造る也、

かのむ 中臣祓に見えたり、嚼香の義也、といひ、伊勢度會郡にかのみ川あり、此義なり、く、一説に、か、發語かよむ、かの如しといへり、○倭姫世紀にかのみもひといふ事、見ゆもひ、八盤也、され、俗に腹八杯といふ事も、此義也、と神祇本縁の注に見ゆ、○延喜式に、可々吞に作る利を、か、とよむ吞事の速なる體をいふ、

かのわかつ 倭名抄に、鹿茸をよめり、今袋角と稱する是也、

○かは 歌の結語などいふ、か、と疑ふ、とて、つななきかへして、いふ辭、豈といふ字の意より、急なりといへり、又、か、を句調の助けに用たるあり、又如此者の意に、よめるあり、彼者を初めたるも、はる也、といへり、○河又川をよむ、り變るの義、逝水の晝夜に、と、まら、す、淵瀬の移り變るをいふ也、人の鑿開きたる、渠也、又水、字をよみ、事日本紀萬葉集に見えたり、○刀禰川吉野川、筑後川を三大河と、俗に坂東太郎四國次郎、筑紫三郎といへり、○いせ物語に、水ゆく川、くもてなれば、橋を入わたせ、と見えたるより、水行川といへば、三河、國八橋の事になり、源氏に、前ゆく川を、なん泊瀬川と見えしにより、前ゆく川といへり、泊瀬川なる也、といへり、○家居にかはといふ、東鑑に

喜典樂式、諸國進年料雜藥、伊勢國人參二斤八兩、翠山按、大和本草に、延喜式に所載人參の沙參なるべしと云の非也、人參の上古既に日本に産す、駿河國風土記、富士郡早田山貢人參、新撰字鏡、本草和名皆見ゆ、人參古に本邦に産するの證也、

かのめ 源平盛衰記、忠度扇を仕ひ給ひける、蚊の目のきり〜と、御前へ開えけり、

かは 皮也、萬九、若かりしかりもまわりの黒かりし髪もあらけり、日顯宗、いなむしろかりそひ柳水ゆけは、○皮之席也、櫛

かは かの三文字三、あり皮革草是也、皮の毛かは也、革のつりかはとて、毛を去りたるかの事、なめしかり也、草のたしかはとて、なめしかりの上、かはをつりて、もつらたしたるかはの事、もみかは也、如此差別有事なれども、舊記にハ其差別もなく、皮革の二字をたしなへて用ひたり、草の字を書たる事なし、古書は文字の吟味なく書たる事多し、心を付て讀へし、頁十四

かゝあむ 崇神紀に游泳をよめり、

かはりり 皮熬敷、今俗にすつぽん煮といふ物なるべし、常盤姫物語、あつらひのりかきまじりて、かはりりにして、へは、やな、林業

かはたろし 夫十七、ひま木たろあむのかはらの河たろしにたろふ千鳥の聲のまはけり、夫十九、

けさみれは立田川原の川たろしとて、紅葉を波をりける、新六六、月かげも清きはらの川たろしにちりてひさきのたれもくもす、

かはかみにあらふわが菜のながれ来て 萬十一、河上に洗ふわが菜のながれ来て妹かあたりの瀬にこそよらぬ、櫛

かはかり 如此許也、續後撰戀、かはかりもいかならん世の雲間にかまたり見るべき峰のよの月、

かはかりかも 萬葉、わがたゝみみへのかはらの磯のうらにはかはかりかもななくかはつとも、信云、かはかりたもしるき所かなとて、蛙も鳴くをなり、

かはぐすり 禁秘抄、早旦供御湯云云、進御湯帷、奉河藥、次典侍取川藥器抛板、傍注に、香をほりて出すとあれば、薰樂にや、侍中群要にも見えたり、建武日中行事に、御湯を供す云云、御ゆかたひらを奉る、四あしにするたる御かはぐすりを、とりてまゐらせて云云、

かはさす 不替也、萬十七、とさもかはさすなてしつが花のさかりに相みしめぞ、

かはころも 斐也、萬九、皮ころも扇はなたす山にむむ人、同十六、かはのきぬきてついついながら、源末つむ花、うは着にはくさきの皮衣くさきよらに

かはしき、櫛

かはしら 蚊柱、拾遺愚草上、草ふかきあつが

東類西類と見えたり東坡集注に類、宇内、地、常語宮室之房、曰類猶人之頤類也といへりさればかの轉語なるべし東つら西つらなどいふが如し今、人側、字を用てかるといふ桶板を桶のかりといひ舟の枋をもちると稱したるに音頭かかなといふも同義成へし○皮をよむも身の外類なれハ同義なるべし倭名抄に甲をよめるハかふの音轉也皮の訓此義なるにや○獸の皮に幾張といふ國史に見ゆ西土の書にかりの事を皮張といへり○木の粗皮を鬼皮といへり○河の江の城の伊豫にあむ

かは 倭名抄に樺を訓し今櫻皮、有とていへり玉篇に樺、木皮、名と見えたり今檢物師のつかふ櫻皮をかはといふ是也萬葉集にも櫻皮をかにはと訓しかりのまき作れる舟とよめり新撰六帖にもから竹の管にまてふかはとて又近江なみの、里のかはとてよみ職人歌合にも あふ事のそれぞとていふかはかはかきかきとていふが○今かきとていふ花のかは茶色なる櫻也黄櫻とていふ或ハ大櫻の一名とて樹の似て花の似つかす賞すハき品にあらすされハ源氏にたもしるきは櫻の咲きたれたるを見る心ちすといへるもの別種にや 淺みより野邊の霞つづめとていふはれて句あかはらふかな徹書記の説にかはといへりハ一重櫻也或ハ一重のうす紅にて艶なる花なりとていへり○古今榮雅抄に絹の色たもて蘇芳に裏薄色なるをかはといへり樹皮の色によれるにや又いひの事に思し事のまはる抄に見えたり○常にかは色を稱するハ西土にいふ醬色也○今檢物師などの専らに用る櫻皮ハ白かんばの木といふ是也花單の白色也夫木集に みそのなる白かは櫻ちりかり春のかさねに卯花を咲桃花葉葉

弓の事に用白加波其色薄紅梅也と見えたるも櫻皮の色あひをもていへる成へし後鳥羽院の仰にも年齢のきた正義にあらす何れも白樺たるべしと宣る宿老の人の白檀紙を用る壯年の人の紅梅檀紙を用るをもて也本草にも爲刀靶之類と見ゆ今かはまきといへり太神宮式に横刀に櫻柄とていへるも是にや○貝原氏の説にかはハ甲州に多し皮ハ雨の中のだまひつによろし又川獵なども用うとて明しかはともくへり本草喬木類に入し樺と合へり國史補に以樺燭擁馬謂之火城と見えたり書畫の紙をふるする是にたふすべし本草にもあかといへるはかの下合せ考ふべし五雜俎に樺皮易燃而无烟也といへり

かは がいとたふるなどいふハ其聲也今かつといへり或ハ合撲の字を用う、

かはあみ 日本紀に游泳をよみ靈異記に澡浴をよめり拾遺集の詞書に女の川水あみたる所といへり

かはいり 川入と書り儀式帳國津罪に見ゆ今いふ川ながれ也、

かゝがらす 山川に住て其大さつとみほとあり疝に用て妙也安柘鳥とていへり又翻に似たるをもて大翻ともいへり、

かはがり 神代紀に川雁と見ゆ疏に身雁之屬といへり葦田鶴とていへる如く唯鴈をいふなるべし○川鶴ハ後世の詞なるべし川漁ならん可なり

かはかり 文選に只且をよめりかはかりの意也、

かはきり 盛衰記に印鑰時の前立上鈴鹿大障子かはきり御劔以下九重の御具足とていふ、

ふせもの蚊はしるはくさふけりたてそむかき、
林葉

かひしり 仁徳紀に流末をよめり、
かはすかき 河費泉、會丹集、川すかきたた
ることもなき人のなかれての世のまろしなりけり、
藏玉集雜書合草松、川すかきたてつる宿のま
は草風もなつなきときこそあへ、林葉

かはすみ 厠也、和名厠加波夜、萬十六、香ぬ
れる塔になよりそ川すみのくそになはゆるいたきめ
ちつこ、昔ハ厠を川の邊につくるか、又川すみとも
名つけしにや、橋

かはせなふむ 川瀬を踏也、萬十、天の川去
年のわたりのうつろへハ川瀬をふむに夜を深にけ
る、橋

かはたらう 漢名水虎、大和本草、河童(カハコ)
處々大河ニテリ、又池中ニテリ、五六歳ノ小兒ノ
如ク、村民奴僕ノ獨行スル者、往々於河邊遇
之、則精神昏冒スト云、此物好シテ、人ト相抱
キテ角力、其身澁滑ニシテ捕定ガタシ、腥臭滿
鼻、短刀ニテ欲刺不中、角力人ヲ水中ニ引入
シテ殺コトアリ、人ニ勝コトアタハサレバ、没水而見
テ、其人忽恍惚トシテ如夢而歸家、病コト一
月許云云、此物人家ニ往々爲妖、種々怪異
ヲシテ人ヲ惱ス事アリ、狐妖ニ似テ其妖災猶甚
シ、○推古紀二十七年夏四月己亥朔壬寅、

近江國音、於浦生河有物、其形如人ト云ハ
此物ナリ、

かはたれどき 彼者誰時也、萬廿、あかき
かたれどきにまかひをこまにし舟のゆへんをら
すも、源初音、御前のまかひをうくひもはつて、
あかきたれどきにまかひをうくひもはつて、

かはち 河路也、萬十、なれゆまにあまのかはちを
なつみてそめる、

かはつ 萬葉入、河津鳴かむなみ河にかけ見えて、
同六、たもえすにまきまき君を佐保川の河蝦まか
すてかへしつるかも、袋草紙加久夜、長帶刀節
信ハ數奇ノ者也、始テ逢能因、相互互有、感云
云、于時節信喜悦甚クテ、又自懷中紙ニ裏、
物ヲ取出、開之見ニカレタルカヘルナリ、コハ井堤ノ
カ分ニ侍云云、古今榮雅抄、橋の諸兄、井手に
寺を立て、堤に山吹なうへ、池に蛙をはなちて、花
を見、蛙の聲をきかれし也、無名抄、井堤の蛙と
申す事こそやある事にて侍れ、云云、夜更る程
にかれがなきたるら、いみづく心すみ、物あはれなる
ことにてなん侍る、春夏のころ、かならずばして聞
給へど申侍し也、是レ河鹿(カシノ)一也、萬葉二詠
メルモ亦同シ、本草啓蒙云、カシカ形雨蛤(アマガ)
ヲ微大ニシテ、背テイホアリ、色黒シ云云、
かいつくる 掻、なく事にいへり、秋夜長物語、
天狗なにとよみたるぞと問ハ、うかりはるはつ三

かは

かひぐすり 禁秘抄に河薬と見ゆ主上御湯殿の時四あして居てまら
す川水を入たる器也といへり侍中群要に御浴殿の時に見ゆ、

かひぐち 河口也河口の關ハ伊勢一志郡也くきたの關ともいふ源氏に
見えたり風土記に岫田川といへり萬葉集に河口之野邊ともよめり○姓
にいふ盛衰記にみゆ、

かひぐま 川隈の義也萬葉集に見ゆ、
かはこ 皮籠の義西土の書にも皮箱など見えたり靈異記に漆皮宮見ゆ
後に竹などにて造る竹かはこなどいへり職人歌合に見ゆ又まぶかりこも
あり應仁紀に 組たきし竹の力のつよければ張すましたるまぶかりこ哉、

かひこころも 表をよめり新撰字鏡に既をよめり倭名抄にかりまめともいへ
り拾遺集にもあか見えたり皮衣也と注せり奈良に孝謙天皇の時の繪に
女の装束に毛衣をきたりされハ源氏の末摘花のかひきぬも亦信するに足
れり○李白詩集に身著日本裘昂藏出風塵と注に裘朝卿所贈日
本、布爲之と見えたり孔聖全書に粗布裘とも見ゆ、

かひざりつき 延喜式に埴坏をよめり字書に土器也と見えたり川尻坏
とよふに也、

かひせ 交易の意漢書にいふ飛錢是也といへり或ハ替錢と書り○日本
紀に白鷗鷗居于谷上濱因詔置川瀬、舍人と見ゆこハ魚を守る人也
かひせるえだ 長恨歌に在地願ハ爲連理、枝と見えたり女御芳子の
歌 かちちきさるこの葉たにもかひらすハ我もかひせる枝となりなん、

かはだち 俗によく水練したる者をいへり川立の義山立といふに同し○諺

に川たちの川てはとるといふハ淮南子に善游者溺善騎者墮と見えたり

かはち 倭名抄に韻をよめり新撰字鏡に頭もよめり類縁の義成へし今か
まはつふ是也、

かひす 萬葉集に交字をよめり心をかひすいひかりすなどは是也眞字伊勢
物語にハ通をよめり實ハあはす義也あはる通ハ

かはつ 孝徳紀に蝦蟇をよめり萬葉集に河津と書り居處をよめり名を得た
る也易井、卦に鮒をかりつとよめり豊後詞にうばくといへり○かひつ軍
の事續日本紀にのせ寛喜保延の事ハ百練抄古今著聞に見え豊前規矩
郡にハ年毎にありと扶桑権談に見ゆ遠州の天龍にハ毎年の彼岸中日に
此事あり慶長十九年大坂冬陣にも津、國青山の邊に此事あり漢武元
鼎五年にありし事事文類聚にのせたり今もたま〜ある事なりし一縉紳
の狂歌に ものゝふの心なくさむ歌よみのかはついかて〜とよめらん○
鳴に時ありよて夜行擊柝代更鐘曰蝦蟇更と事物紀原に見えたり○
なかねかはつハ隱岐海部郡の葛田ハ後鳥羽院の御製によれり江戶小石
河傳通院上州新田大光院出羽國落伏永泉寺高野山靈山院伊勢豊
のよるこの池などあり西土の書に出或ハ天師の符を池に投し或ハ大后
の言を諭して鳴を止めし事見えたり○古歌に 苗代にかはつのあまた鳴
田にハ水こそまされ雨ハふらねと上古よりの郷談なるへし今も雨ふらんとて
ハ蛙多く集り鳴をもて天氣をトせり○聲をはる時に喉脹起るを俗に歌袋
といへり古歌にもよめり宇の部にだせり○百練鈔に賀茂上社及海橋立、
池蝦蟇與蛇鬪敵殺蛇と見ゆ○新千載集に 苗代に心のたねを蒔添て